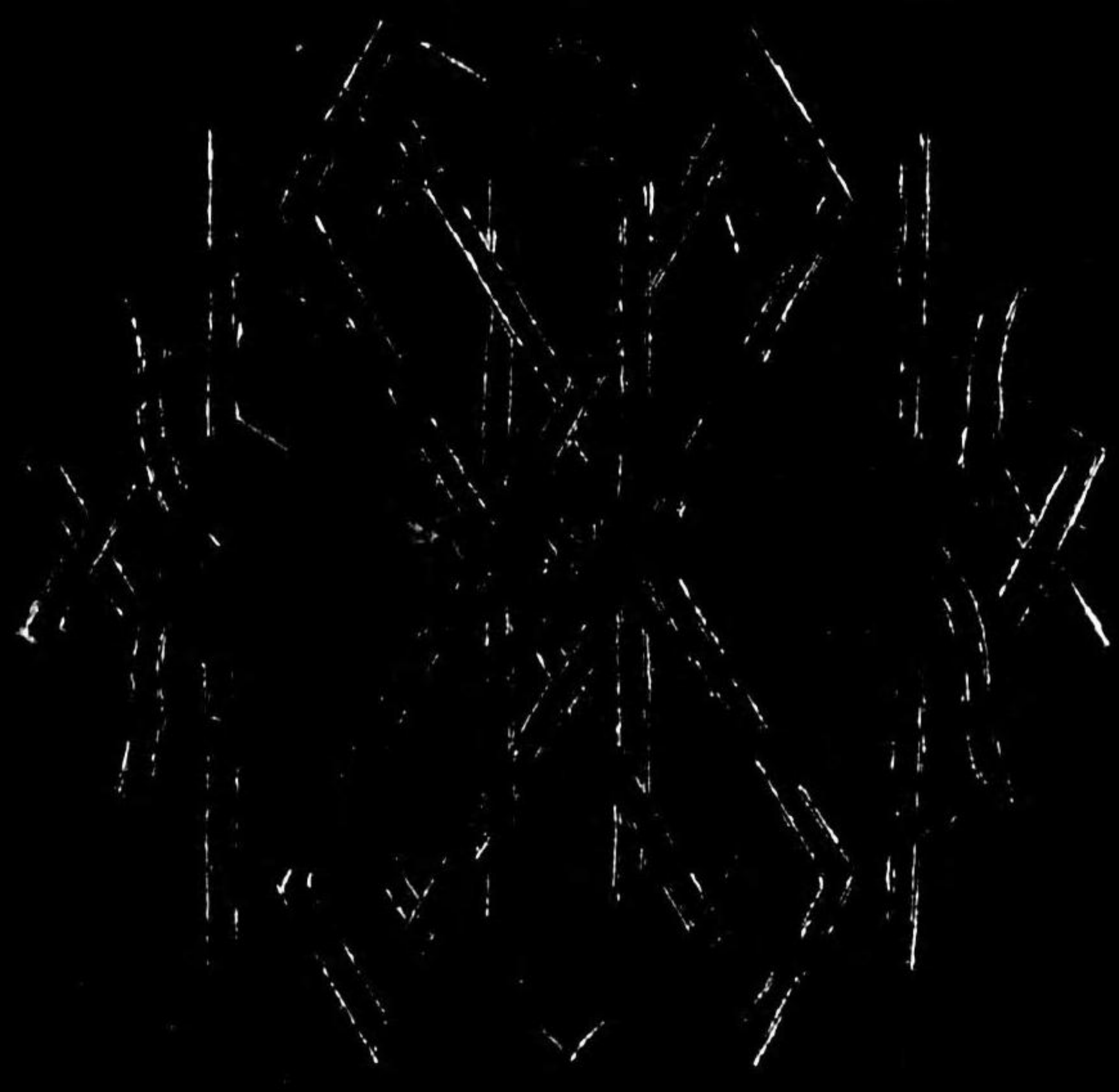


523-A43㊦

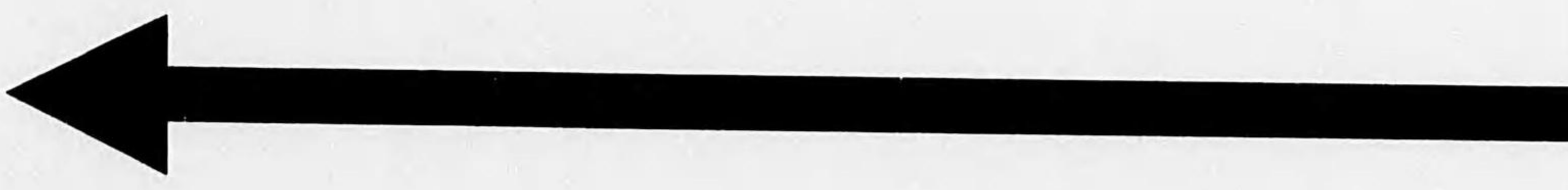


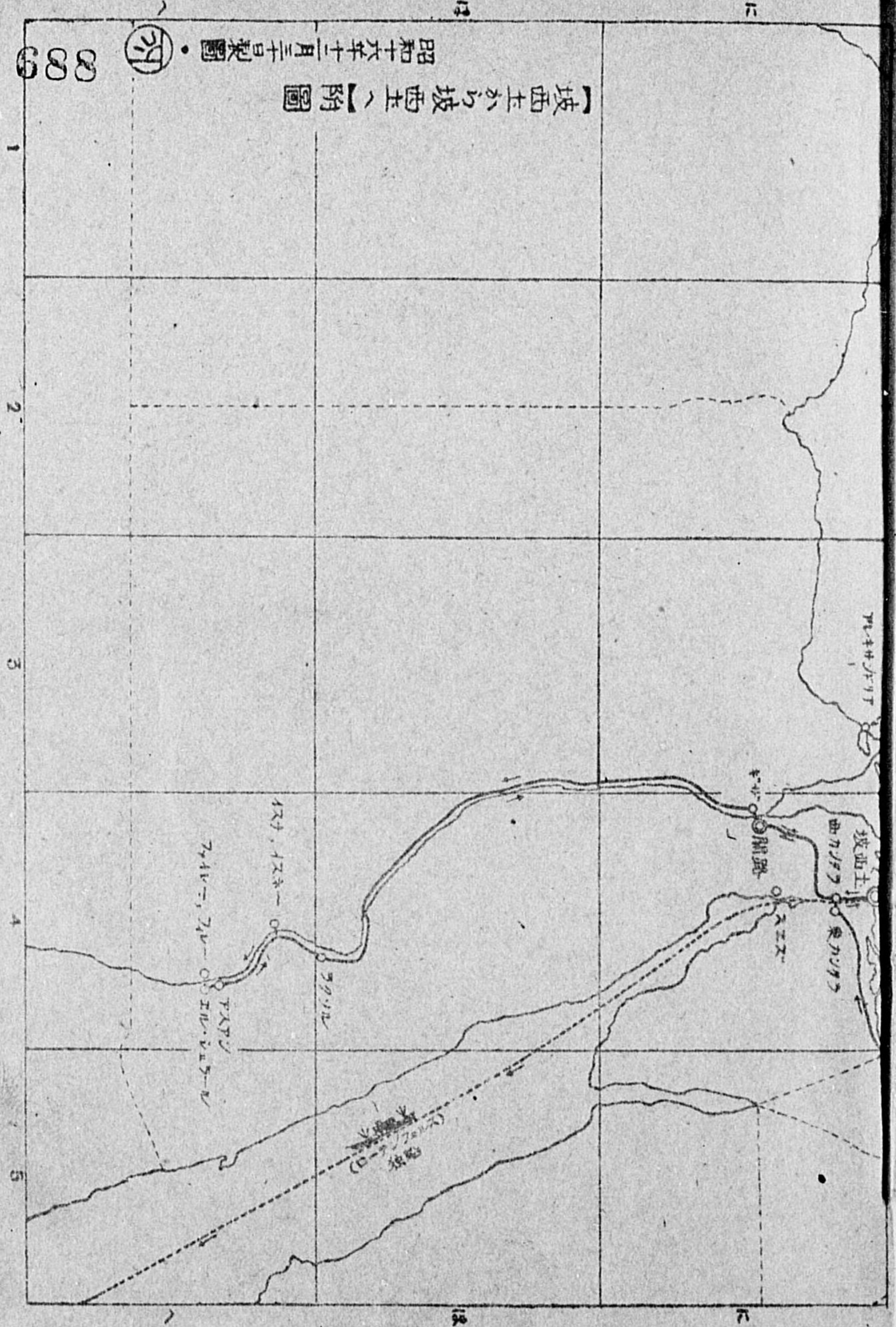
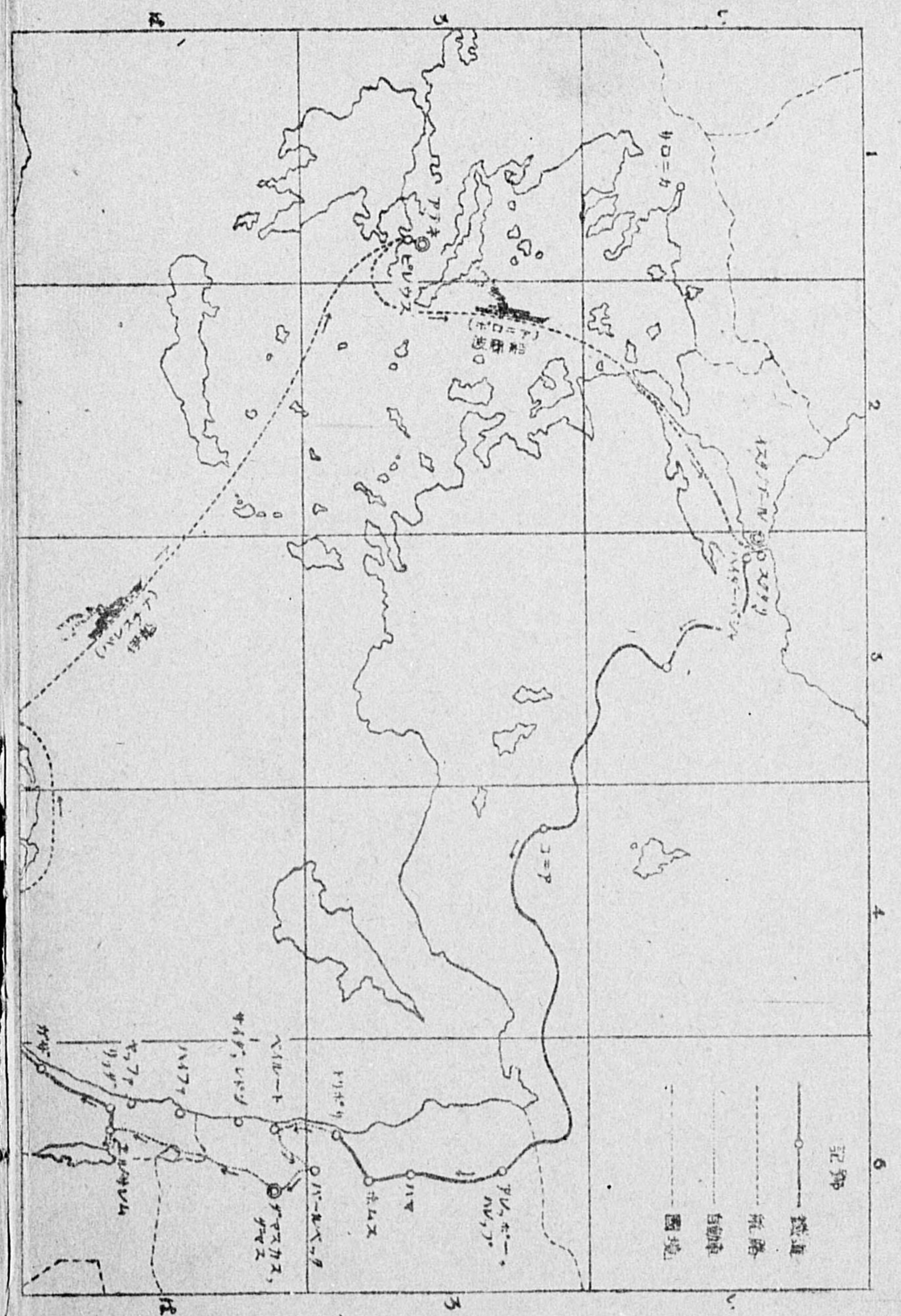
1200500745267

23
A3



始





【坡西土の坡西主】附圖

昭和六年十二月三日製圖



8889

523

昭A43

和十七年

坡あから坡あへ

三
信
一



序

昭和十年の三月も最早終りに近づき、大分春めいて来たある日の夕刻、もう薄暗くなってきたので、勤め先を退出する準備を始めた折、突然卓上電話のりんが鳴響いた。天の一角からの電話で、其結果どうも際どい所で再度外國見物ができさうになってきた。

外國へ出張する場合、十人が十人ともかくも地球を一周するようだが、どうも亞米利加といふ國は、一度素通しておけば充分、最早私には大した用事がないからやめとし、主として印度を歩くことに決めた。そこで歐洲では前回行きそくなつた希臘と土耳其、西亞ではシリアとパレスタイン、夫からもう一度埃及を見ようと思つた。其爲神戸から坡西土へ直航し、此地を根據にし、第一に上埃及を見學して前回の復習をし、希臘ではアテネ、土耳其ではイスタンブールだけで歐洲を去り、南下して沿道の古蹟名勝を探り坡西土へ歸着した。だからこの旅行記の名を「坡西土から坡西土へ」としておいたのである。

私はある種の建築物又は其廢墟以外には何も見ようとしなかつた。理由は此等以外には何を見ても少しも解らないから、無駄な時間と費用とを節約したのである。尙ほ又特種の建築物と雖、

特別見學の便宜があつた次第ではなし、よしあつたとしても、充分の効果をあげるだけの頭は、遺憾ながら持合はしてゐなかつたから、手数をかけるだけで何にもならない。だから凡そ旅行者なら誰でもできる程度の、ほんの一通りの見物をしたのである、併しながら寫真だけは隨所でとつて來たから、此書物も實は其寫真を主として、日記帳へつけても來たことを書き直して夫に添えたのに過ぎない。だから甚だくだらないものである。初めから其つもりで讀まない、内容の空虚に失望するのが落である。

附録として坡西土から孟買迄の船中日記をかいておいた。遇ま獨乙の貨物船へ乗つたので、普通の人の行かない嶋や南印の海岸へ碇泊したりして、客船なら一週間もすれば着くのに其三倍もかかったり、無駄な日を費やしはしたが、世の中の形勢が全く變つた今日では、全部が思ひ出の種となり、捨るのが惜しくなつたからである。

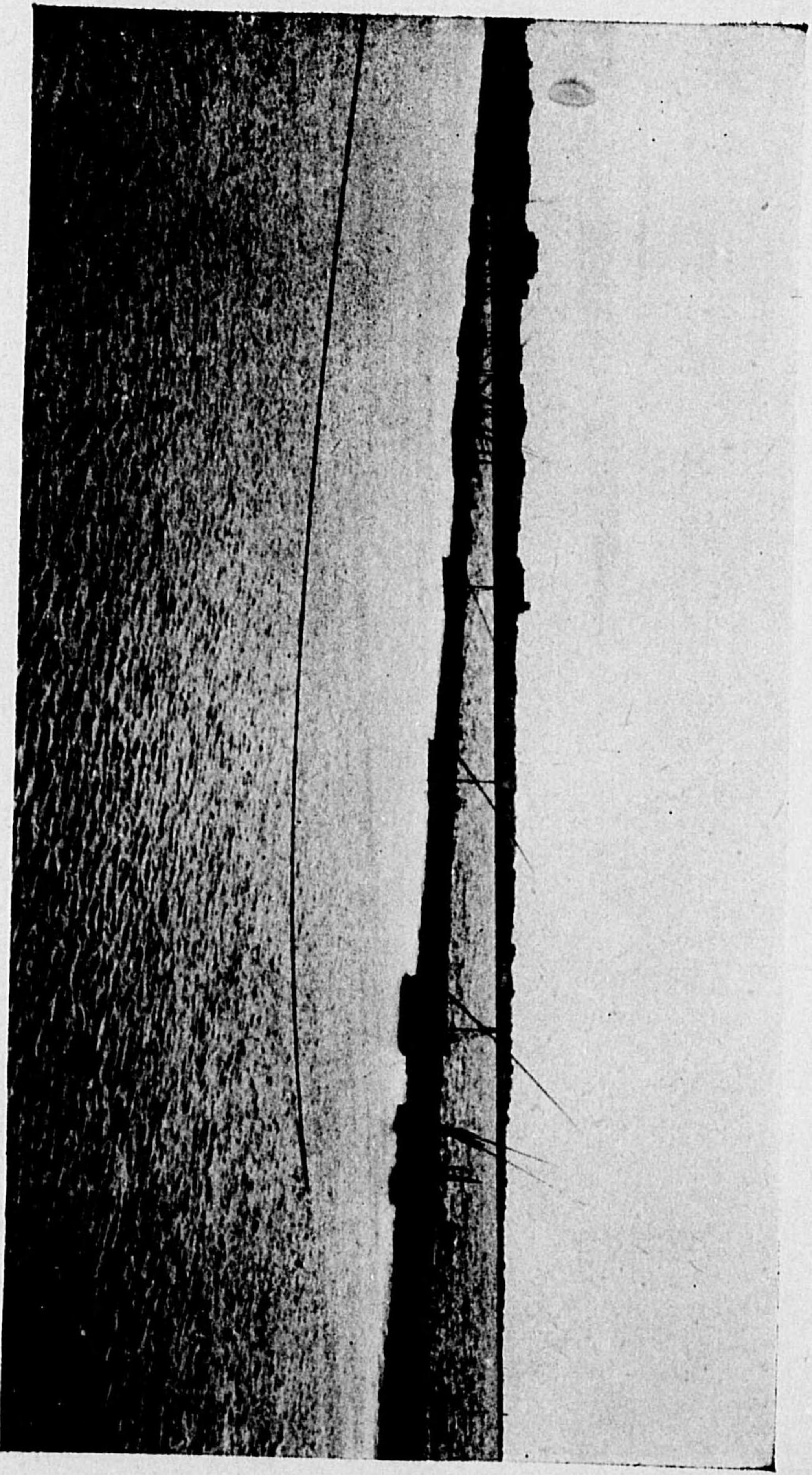
昭和十七年八月十四日

京都市に
於いて

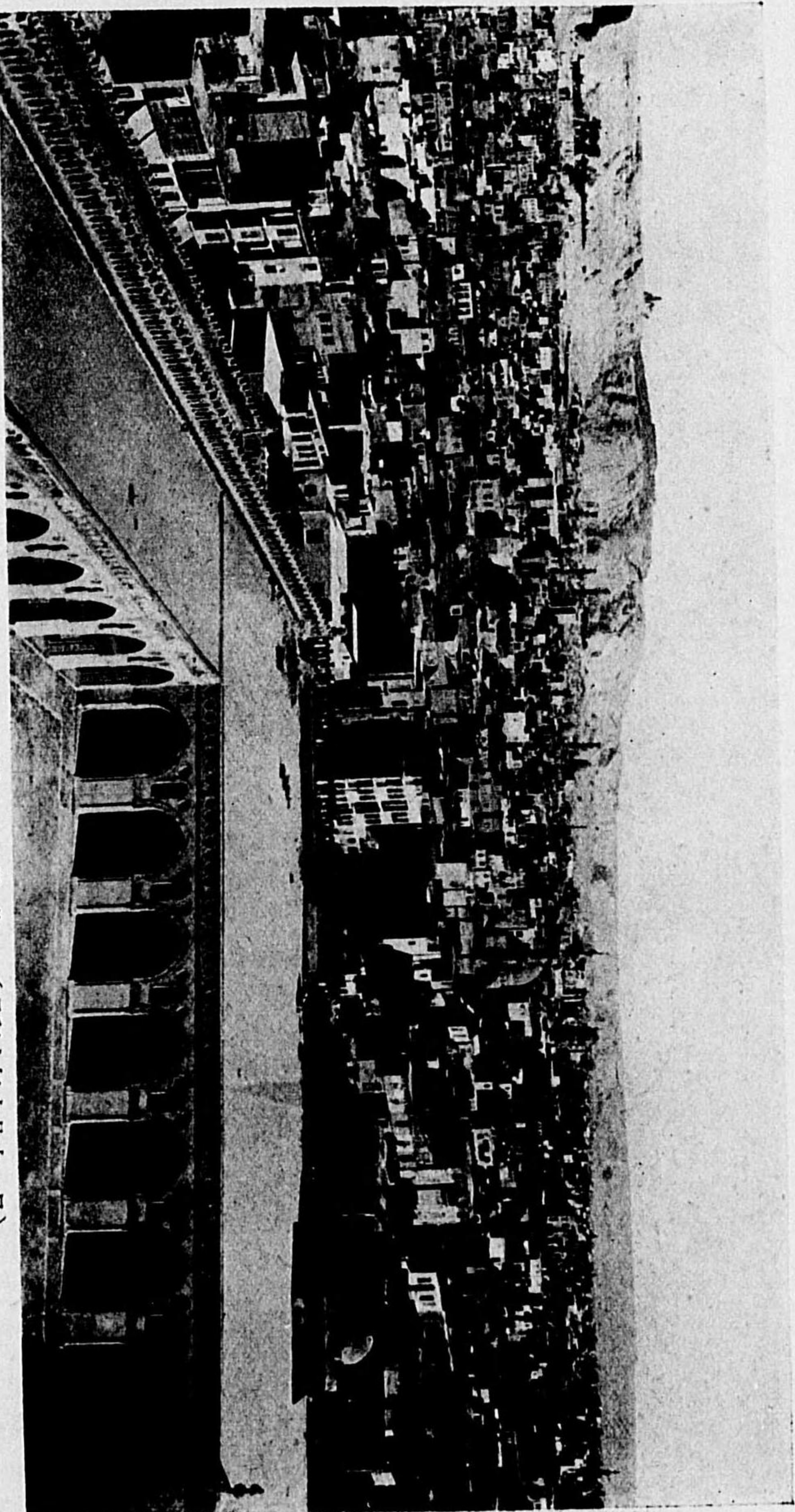
筆 者 敬 白

目 次

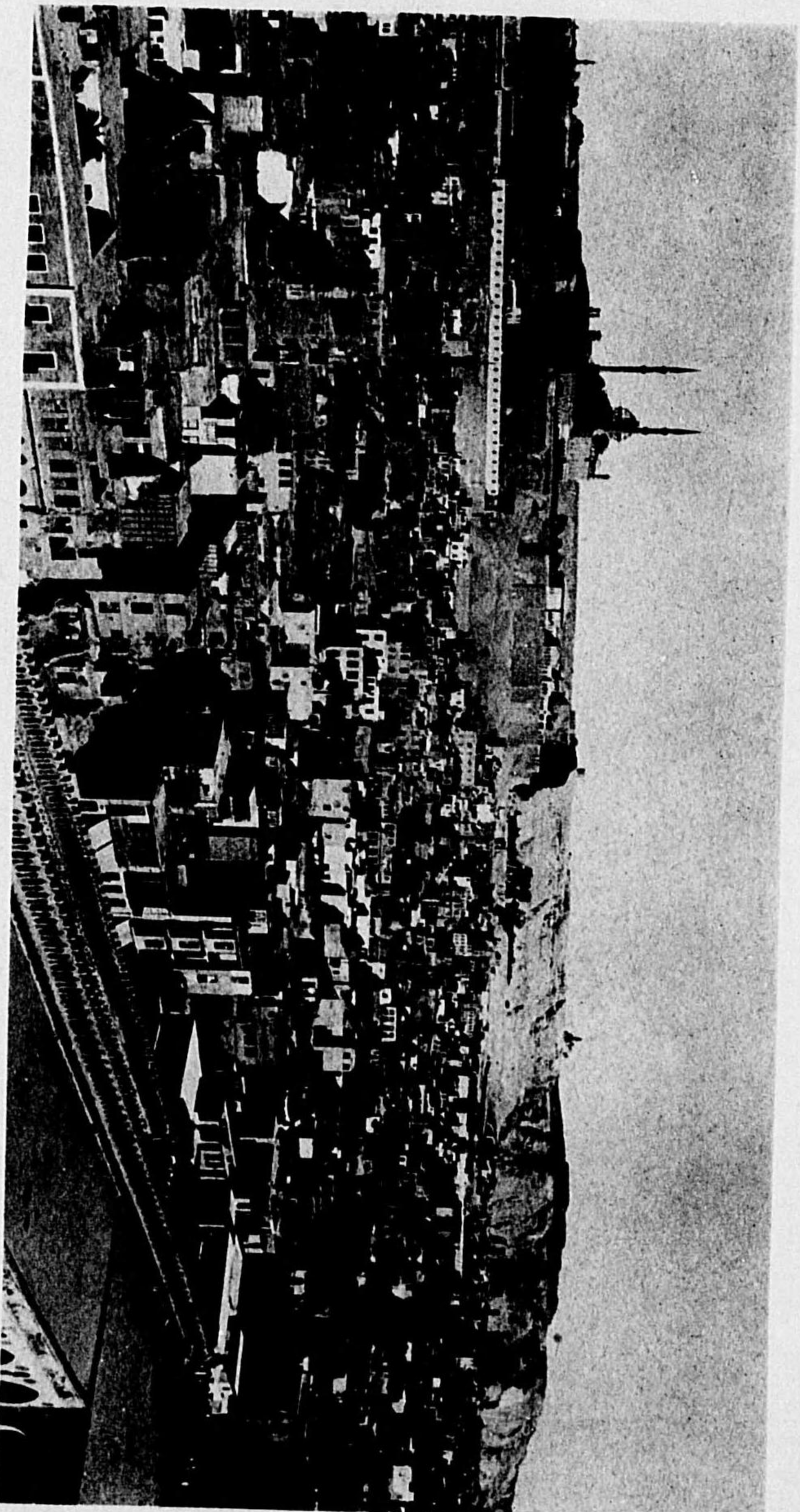
坡西土から坡西土へ(第一回)……………一
 續埃及紀行。 坡西土上陸から開路府及び近郊の見學
 同 (第二回)……………三
 開路府から「アスワン」を経て「ラクソル」迄
 同 (第三回)……………五
 「ラクソル」及び其近郊、「シーブス」の遺跡、「イスナ」を経て坡西土へ
 同 (第四回)……………八九
 歐洲の一角及び西亞旅行記。 坡西土から「アテネ」を経て「イスタンブール」へ
 同 (第五回)……………一二三
 「イスタンブール」から「バールベック」へ
 同……………一三



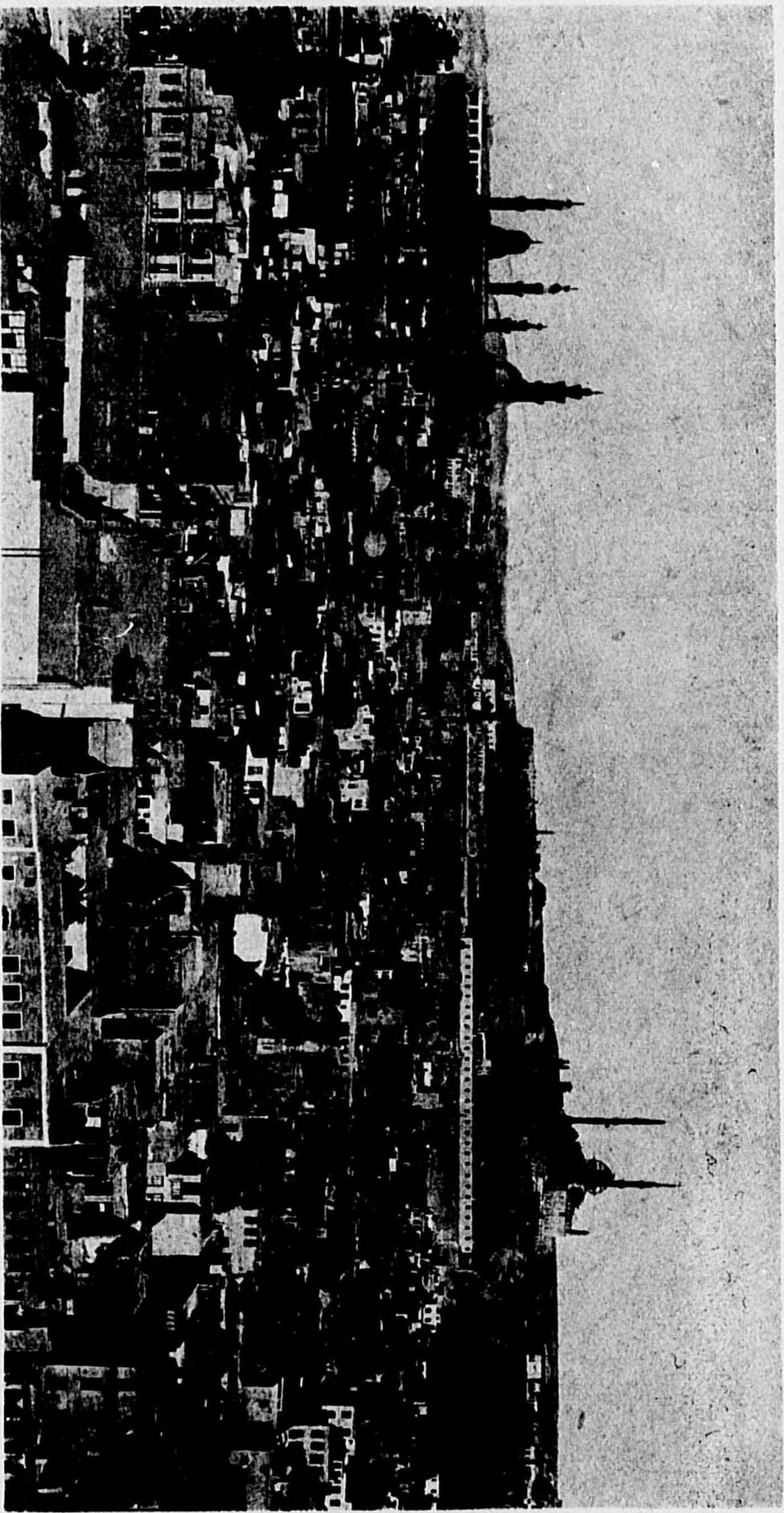
口繪 1 坡西士港の日没 (昭和十年十一月二十日)
獨船「ローゼンフェルス」の甲板上から坡西士の日没を見た所で、日輪は丁度圖の中央の陸上に見えてゐる。海上左から右へ細い絲の様なのは破網、繫いである船の後ろの黒いのは突堤の一部、遠景の左方は坡西士の町。



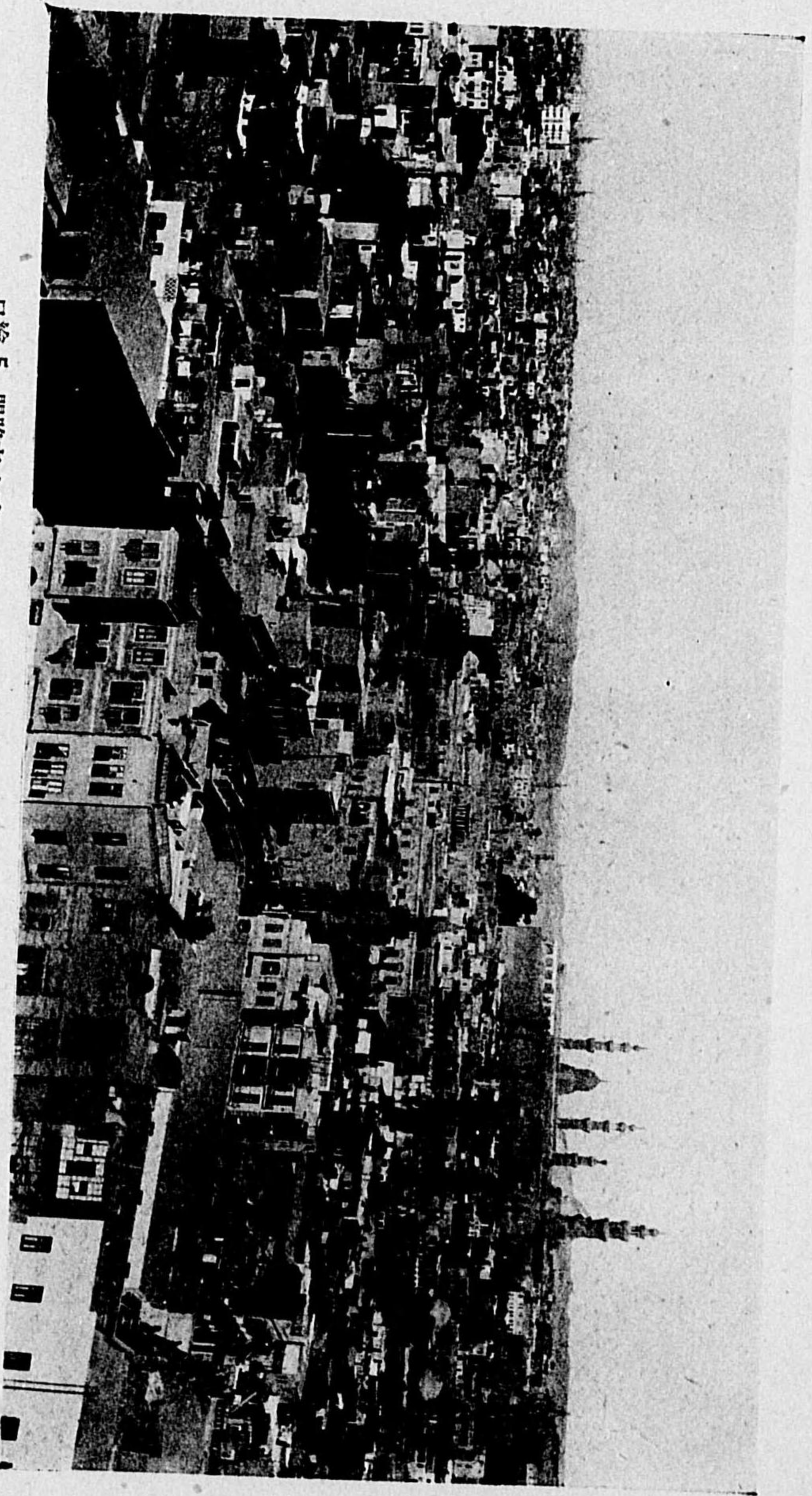
口繪 2 開路市イアン・ツールン寺光塔よりの景 其一 (昭和十年十月十一日)
 先づ第一にこれは此寺の光塔(3)の上から東南方を見た所で、遠景の禿山はモカダム丘 (Gebel Moqattam) で、左端から一寸餘りに、
 丘の頂界線に見えてゐるのがキユウシ寺 (Gami Giyushi, 本文一頁挿圖), 右下の大圓蓋は中庭中央水盤の屋根。



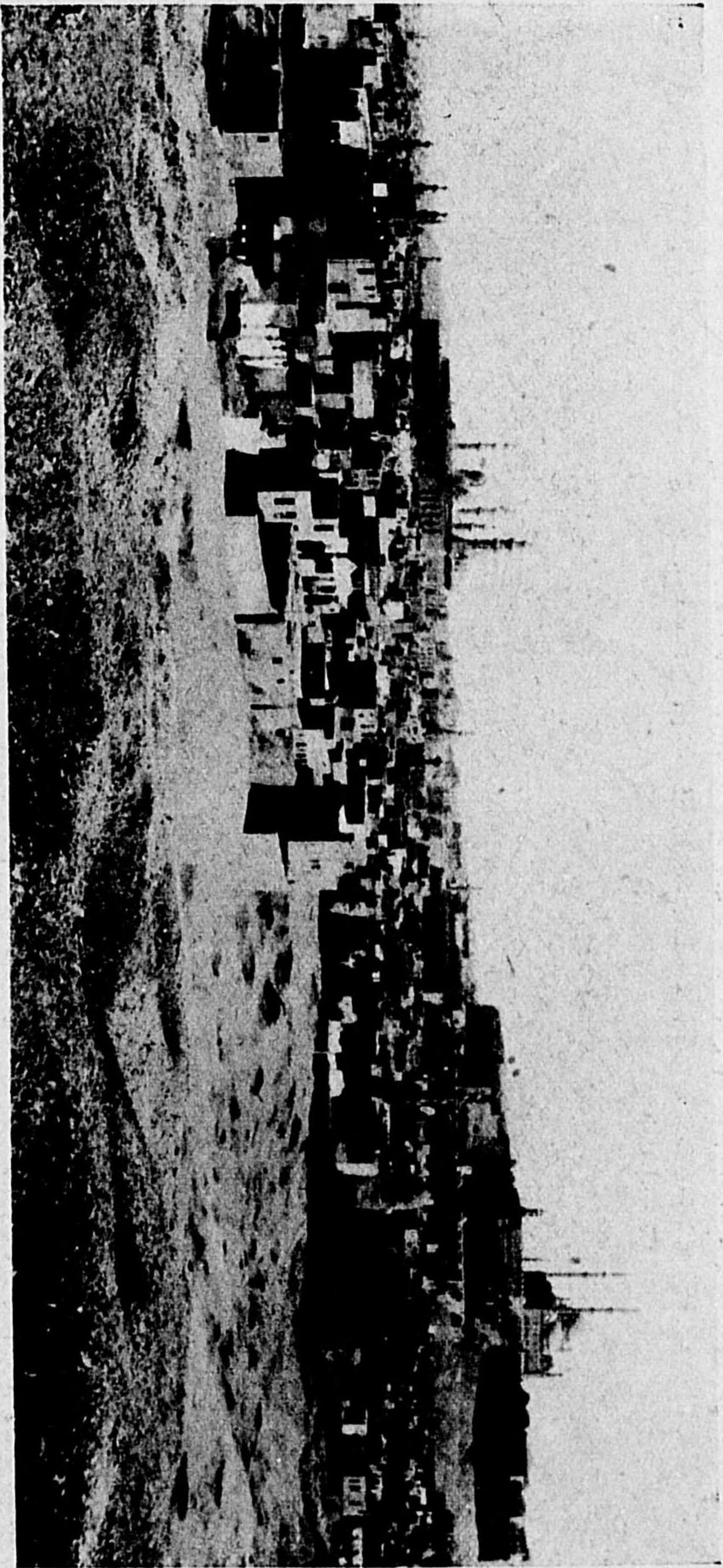
口繪 3 開路市イアン・ツールン寺光塔よりの景 其二 (昭和十年十月十一日)
 前圖の左に此が續く。キユウシ寺はモカダム丘上、右から二寸足らずの所にある。左方に二基の光塔と圓蓋とを有する大建築はモハム
 ャド・アリ寺 (Gami Mohammed Ali, 當時修理中), 其左下はラザア門 (Bab el-Azab)。



口繪 4 開路市イブン・ツールン寺光塔よりの景 共三 (昭和十五年十月十一日)
 前圖の左に此が續くので、モハメッド・アリ寺は右方に見えてゐる。左方に各圓蓋を有する二棟の回教寺の四基の光塔が天に沖してゐるが、右方のはツルタン・ハサン寺 (Gami Sultan Hasan) (27・28) で、左方のはリフアイエー寺 (Gami Refaiyeh)。

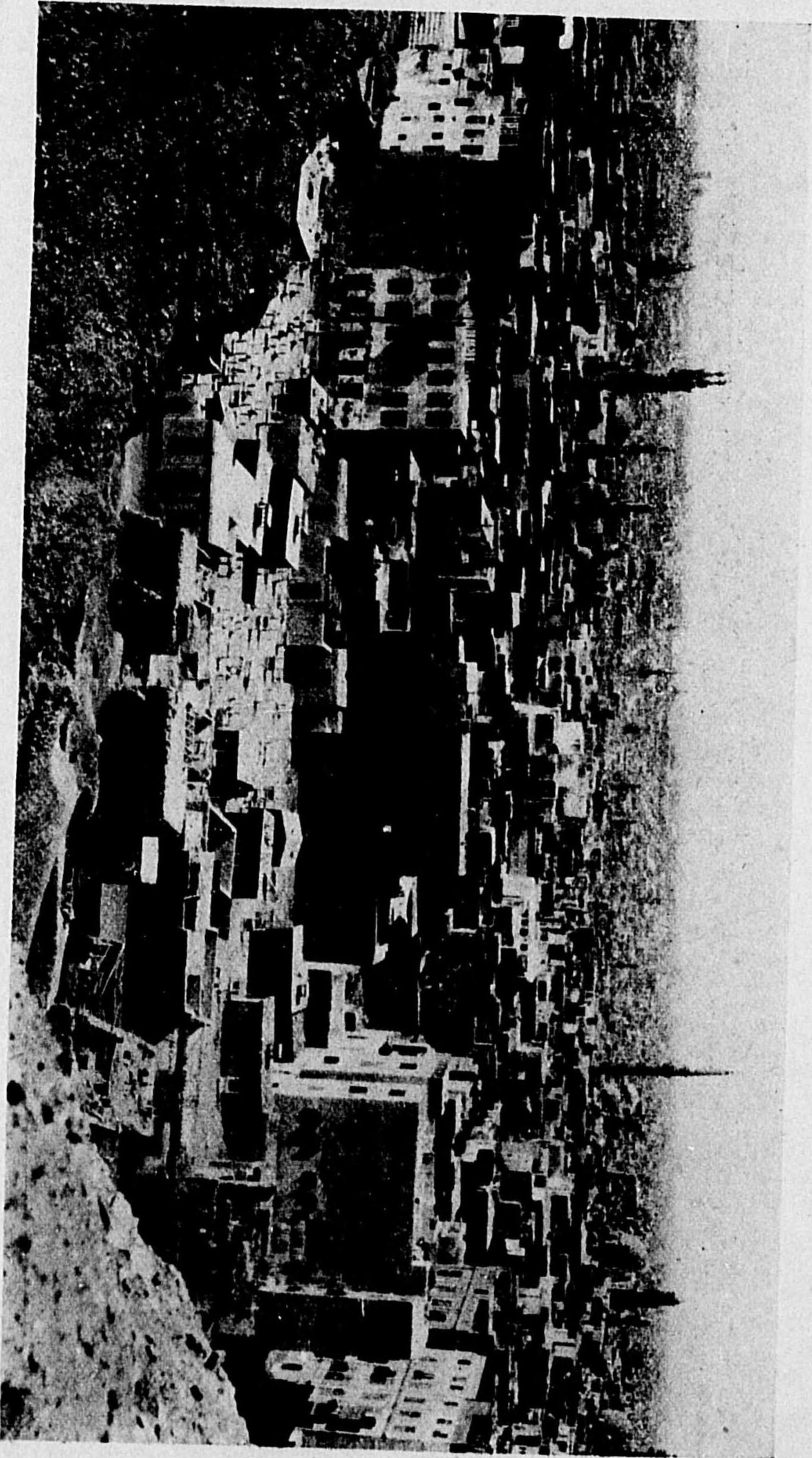


口繪 5 開路市イブン・ツールン寺光塔よりの景 共四 (昭和十年十月十一日)
 其また左に此が續く。ソルタン・ハサン寺とリフアイエー寺とは、頂界線上に突出せる著しい光塔で直に夫れと知れる。其前景の二基の光塔はシェクワウ寺 (Gami Shekhuh), 其左斜下のはアクバア寺 (Gami el-Akbar) の夫。



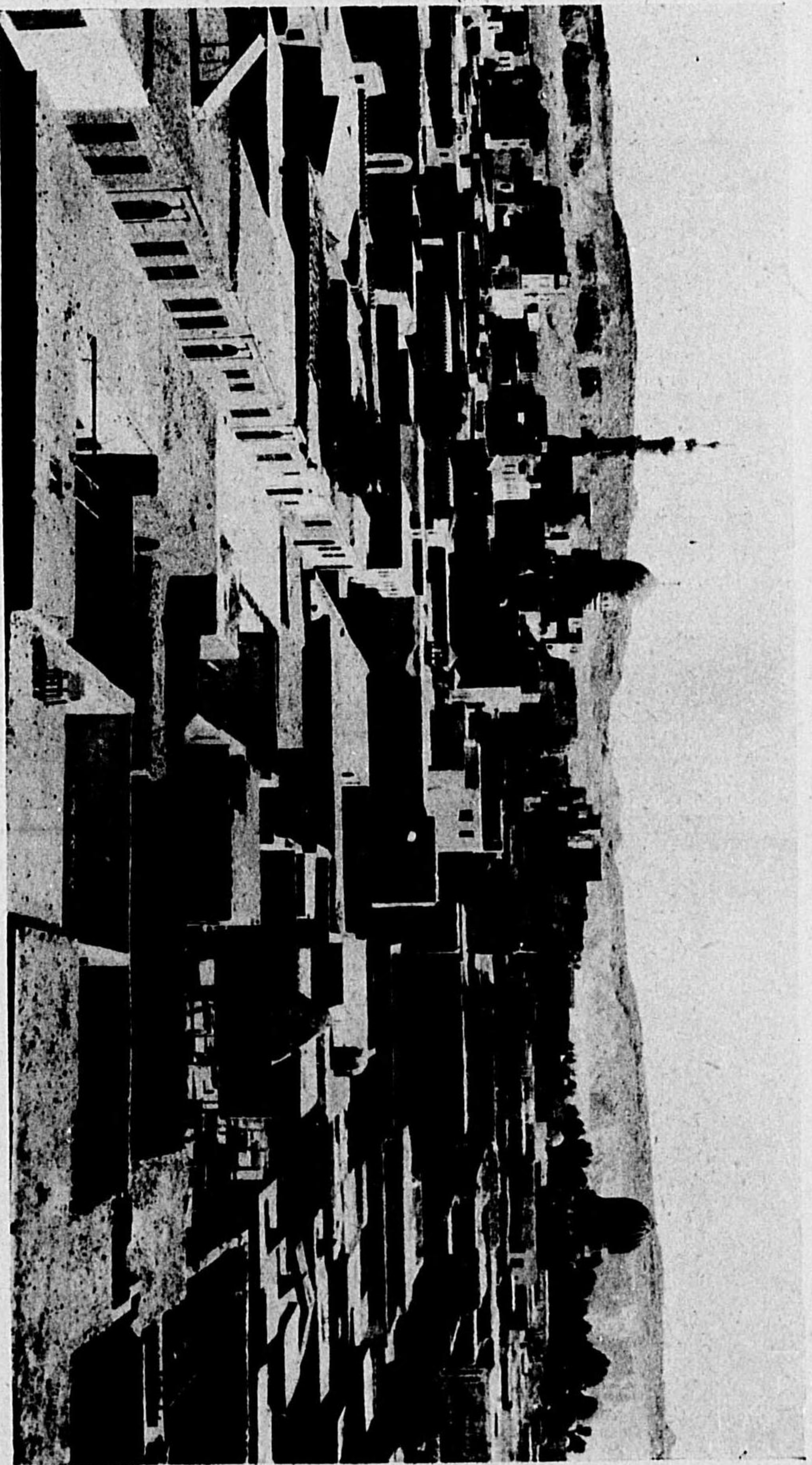
口繪 6 開路市郊外より城寨の遠望 (大正十一年十月二十二日)

前前頁に掲げた全景の一とこれとは殆んど同じものだが、あれはイブソフ・ツールン寺光塔の上からとったのだし、此は今年から足かけ21年前に開路市の西南隅から、東羅馬式外觀を有するモハメッド・アリ寺を右に、ソルタン・ハサン寺とリフナイエー寺を左に見た寫眞である。開路市は相當に發展をする様だし、又7年前の時でも盛に市區改正をしてゐたから、今日でもこのあたりからこの様な寫眞がとれるかどうか判らない。とにかく城寨上にあるモハメッド・アリ寺と、左の方の二大寺とは實に開路市の著しい建築であるから、とても上等の目標となる事は、我國の姫路城や大阪城天守閣の比ではあるまいから、今日の場合當局は多少頭痛の種にしてゐるであらう。

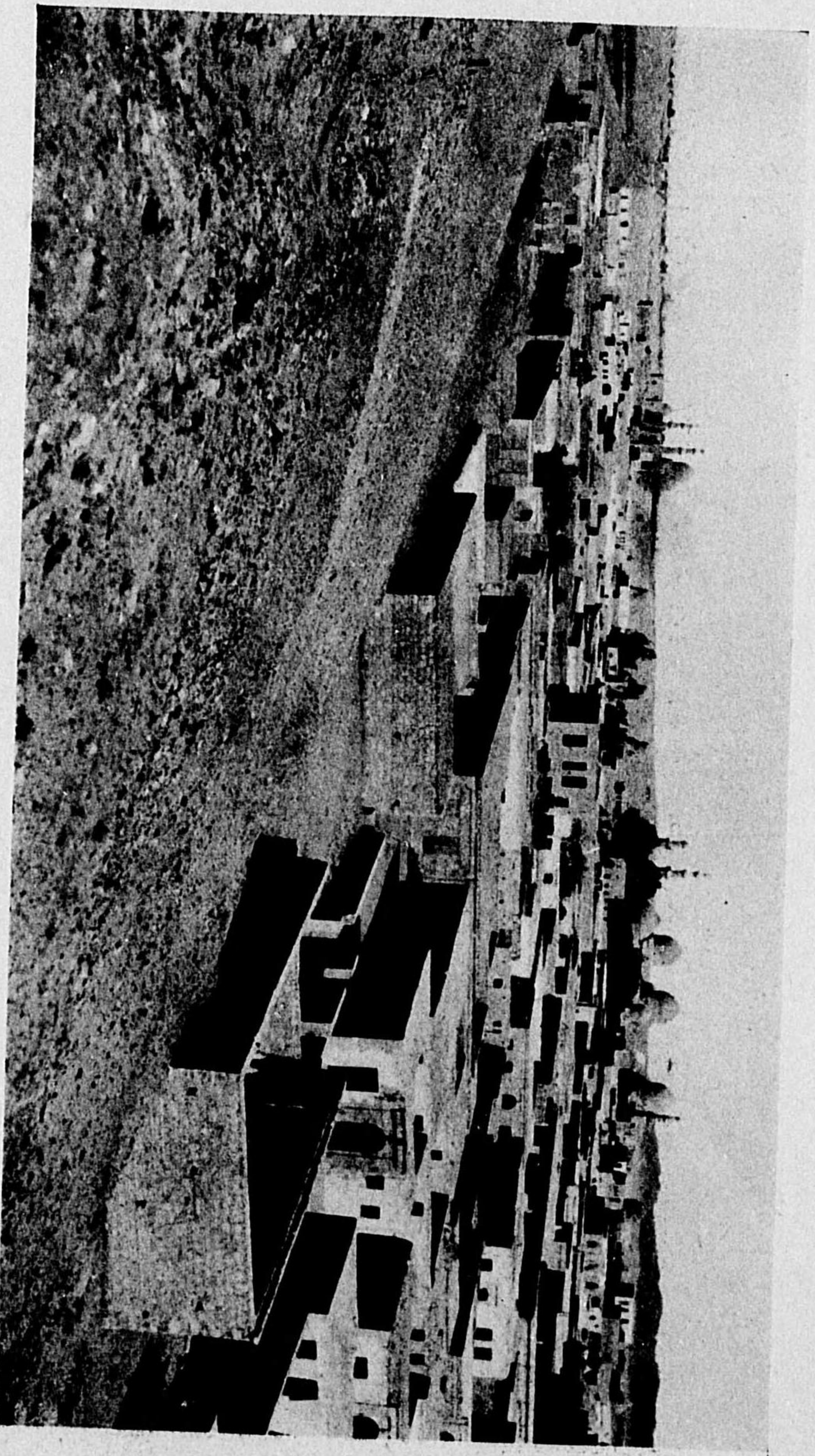


口繪 7 物見臺より開路市の眺望 (大正十一年十月二十日)

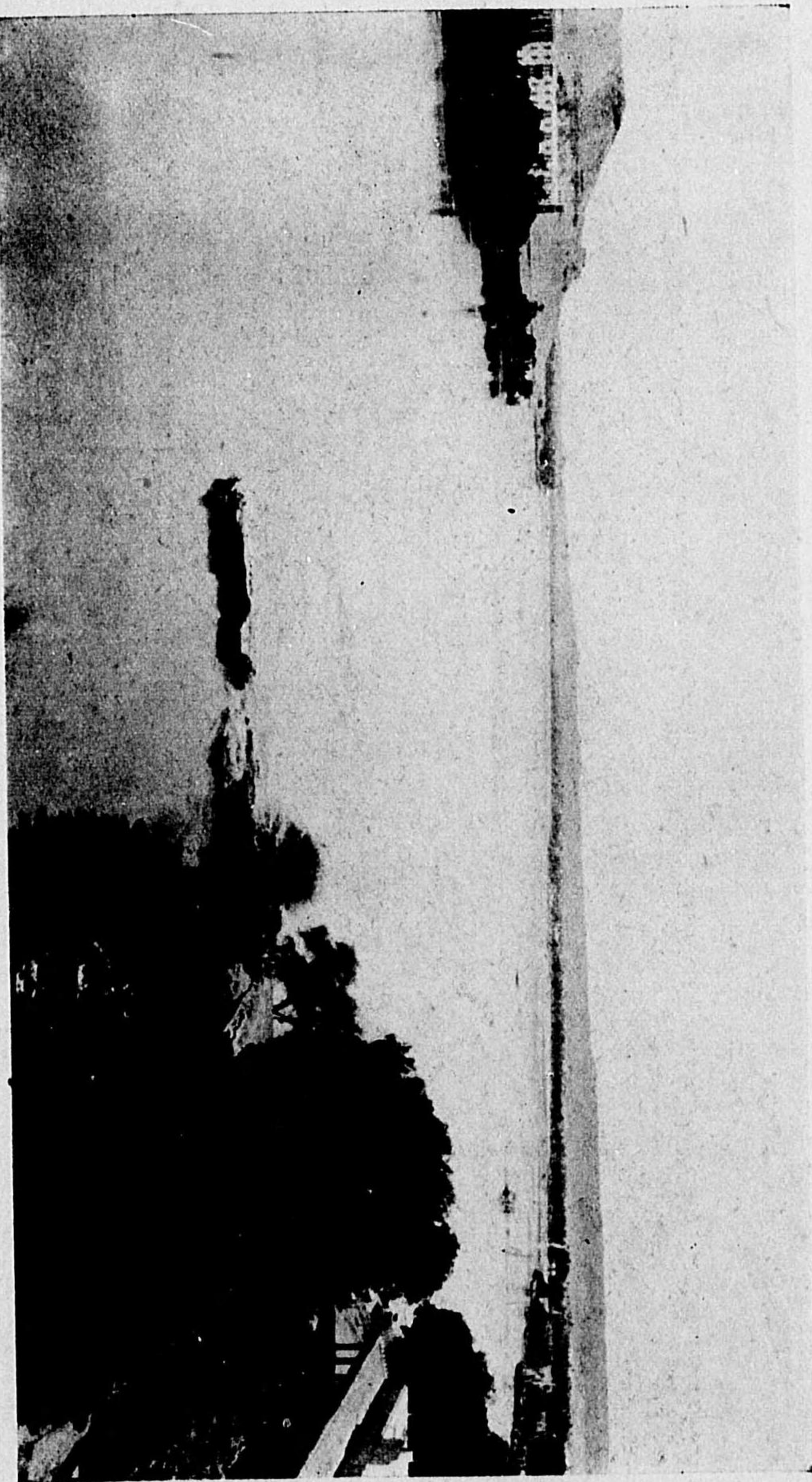
開路市の中心なるアタベル・ハドラ (Atabet el-Khadra, El-Ataba el-Khadra) からムスキ (Muski) 通を東に進む第一哩で物見臺に出る。ここから東には「カリフ墓」(8.9), 西方には此様な景が見えた。左方に近くある「二連光塔」は回教大學の夫等の一。



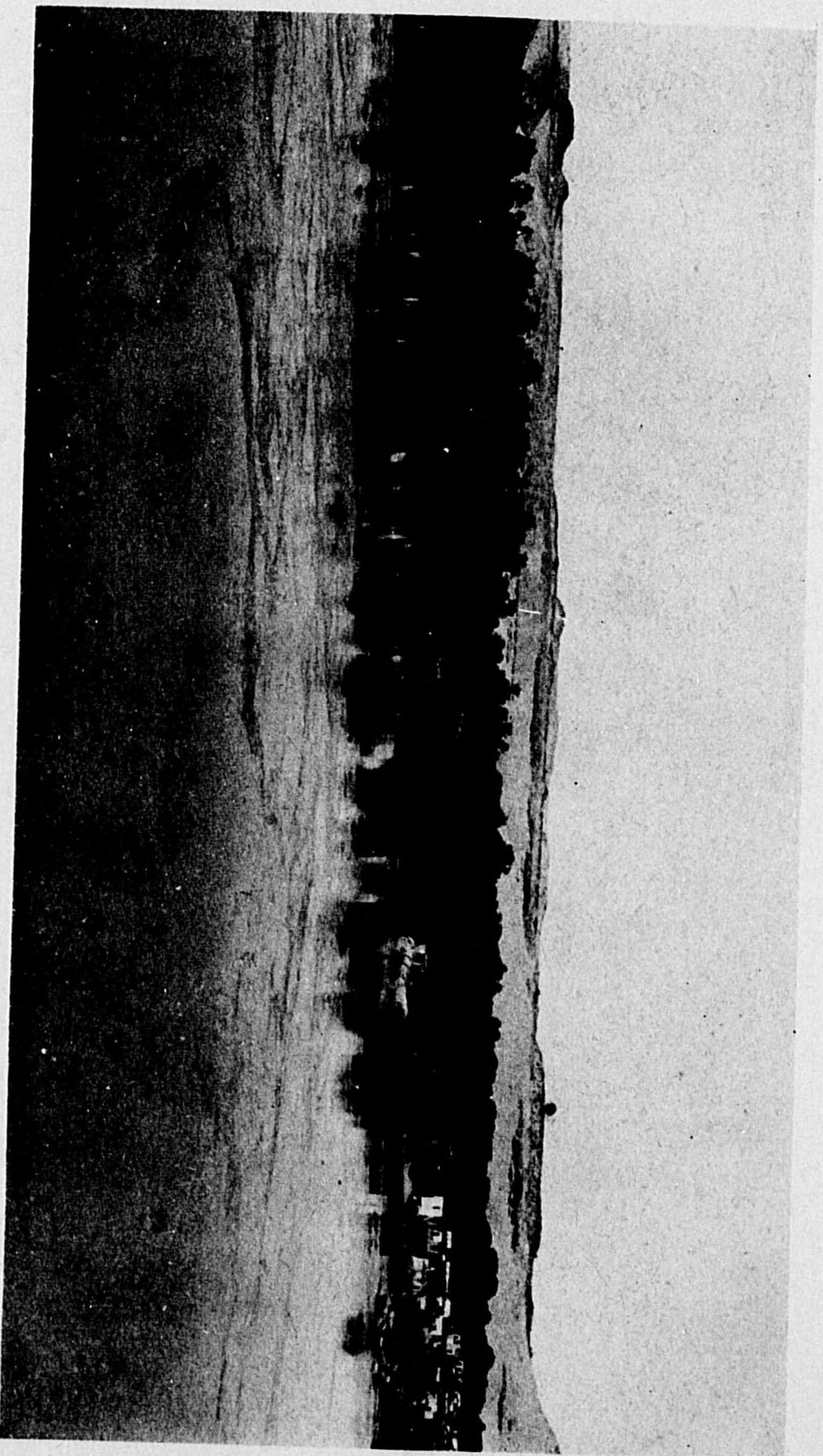
口繪 8 物見臺よりカリフ墓俯瞰 其一 (大正十一年十月二十日)
 物見臺から殆んど真東を見た所で、中央より少し左方の光塔と圓蓋とはカイト・ベイの廟寺 (Tomb Mosque of Kait Bey) で、カリフ墓に於ける最美な圓蓋で頗る著明(36 及び其解説)。右方の圓蓋はマサフキの廟寺 (Tomb Mg. of Khedive Taufik) の夫。



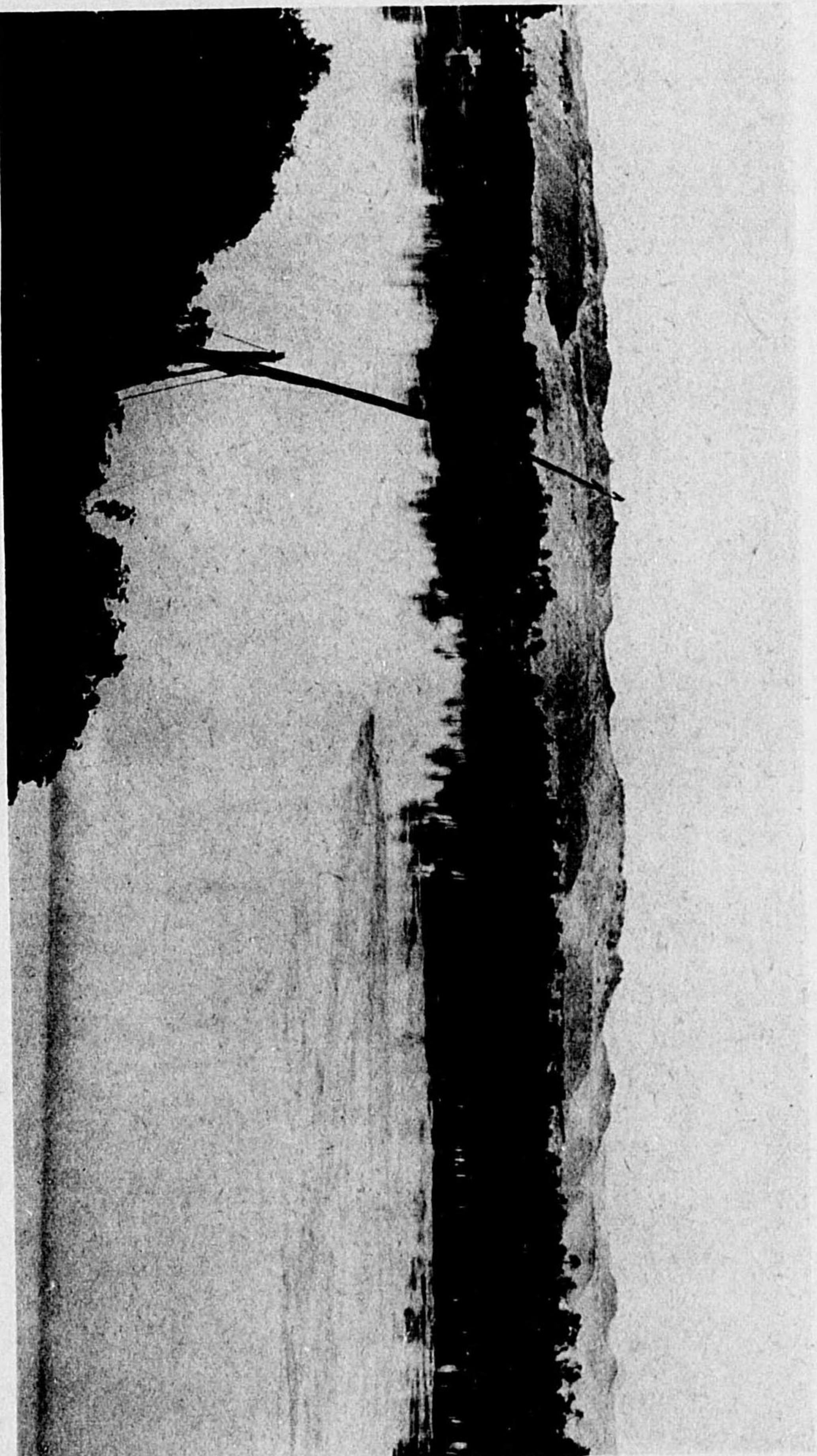
口繪 9 物見臺よりカリフ墓俯瞰 其二 (大正十一年十月二十日)
 前圖同所より東北方の眺め。中央少し右の二光塔と二圓蓋とはソルタン・ベルクツクの廟寺 (Tomb Mg. and Convent of Sulkan Ba-lquq) で第15世紀初頭のもの(31 及び其解説)。其右の同型の圓蓋はブールヌベイ (Bounsbe) の廟。左端はイナル (Inal) 廟。



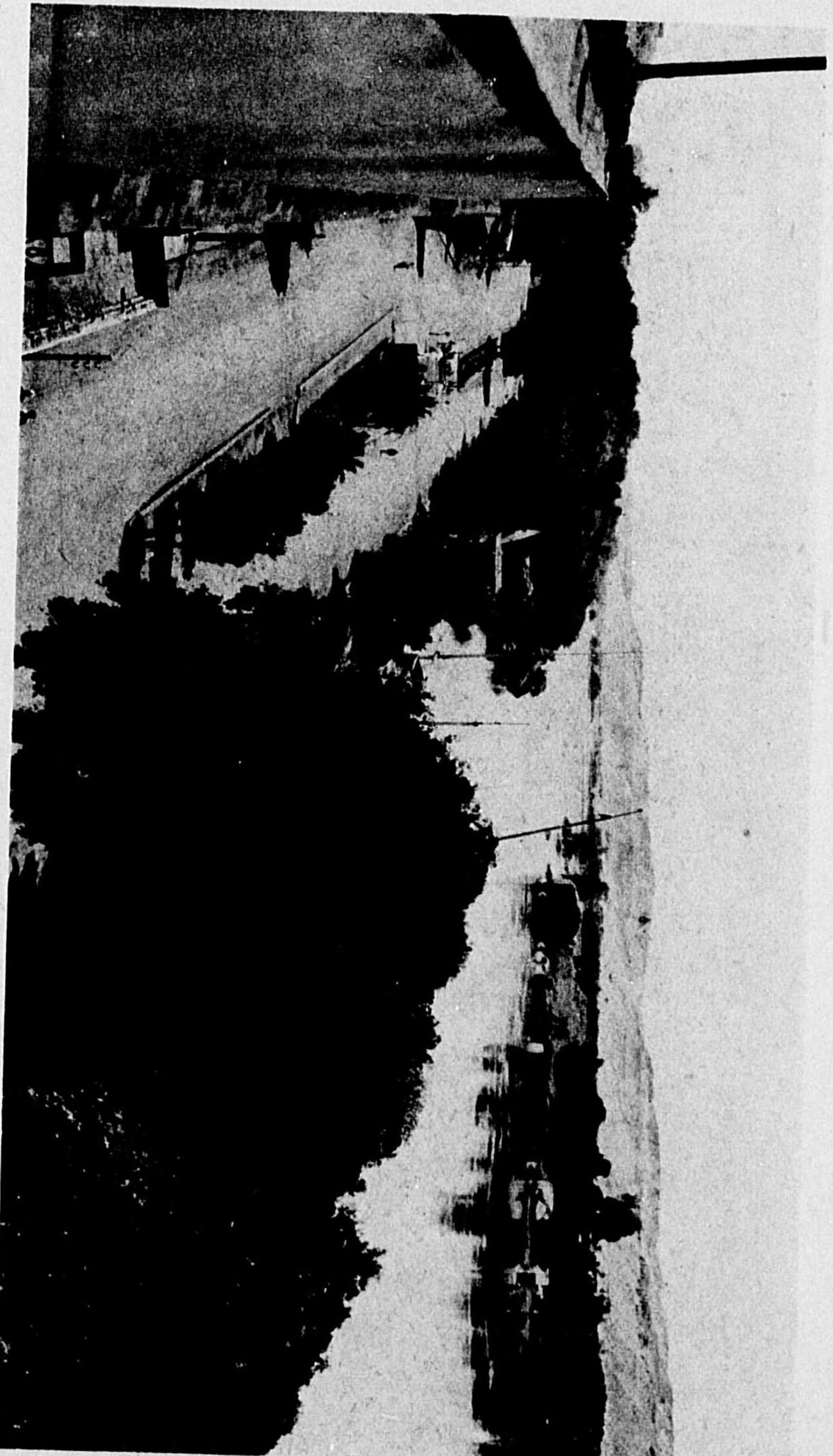
口繪 10 アヌアンのエレフアンダイソ嶋遠望 其一 (昭和十年十月十四日)
 アヌアンのグラント・ホテルの二階露臺の上から、直ぐ真正面にエレフアンダイソ嶋(象嶋)が見えるので、其全景をとって見よう
 と思って、先づ右の方から始めた。左方上にある禿山には山腹に窟墓があり、山上に一小建築がある(本文四九頁)。其下に少(次頁へ)



口繪 11 アヌアンのエレフアンダイソ嶋遠望 其二 (昭和十年十月十四日)
 (前頁より)しく出でゐるのは象嶋の南端で、四角な三階か四階の大建築はサボイ・ホテル(Savoy Hotel)。つまり前圖の次にこれが續
 くのであるが、少し失敗してうまく續かず、残念ながら間が少しきれたから、大した事はない。此嶋には二つの村落があり、此(次頁へ)



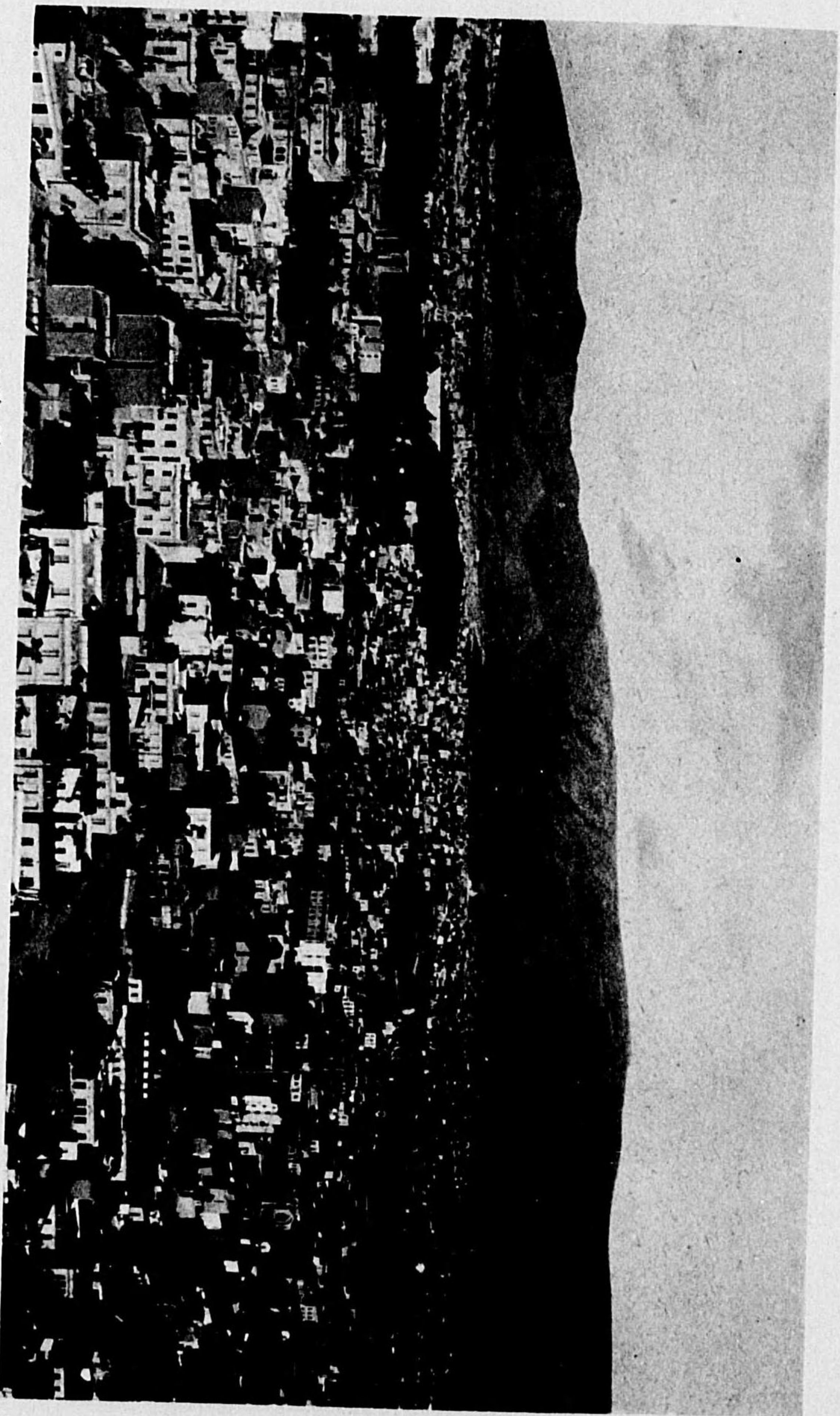
口繪 12 アヌアンのエレフアンタイン嶋遠望 其三 (昭和十年十月十四日)
(前頁より)圖右端に人家が見えてゐるのはエル・ラムラ村 (El-Ramla)。もう一つは島の南端に近いコム村 (El-kom) で、其民家の一部は次回に僅かに寫つてゐる。ベチカの案内記には「Begging is common」としてある位だから、其つもりで行かないと、うる(次頁へ)



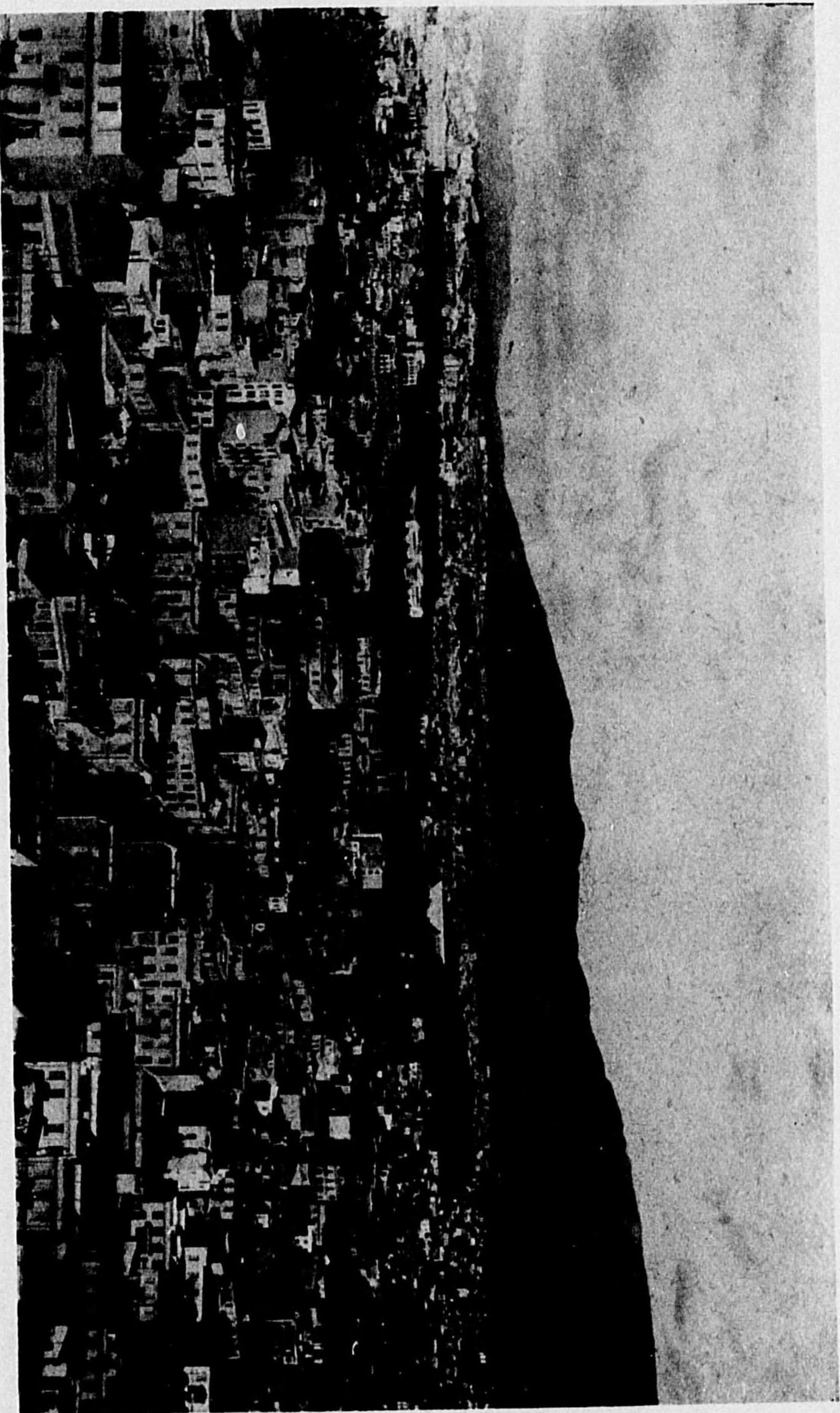
口繪 13 アヌアンのエレフアンタイン嶋遠望 其四 (昭和十年十月十四日)
(前頁より)さいので大概閉口して了ふ。扱てこの第四の部分は第三の左につくのであるが、此圖に現はれた象嶋の左端に近く、綠樹の終るあたりに縦に長く二つ並んで小さい黒い長方形が二つ見えるのはナイロメター (Nilometre) で 1870 年 (明治三年) 復原したもの



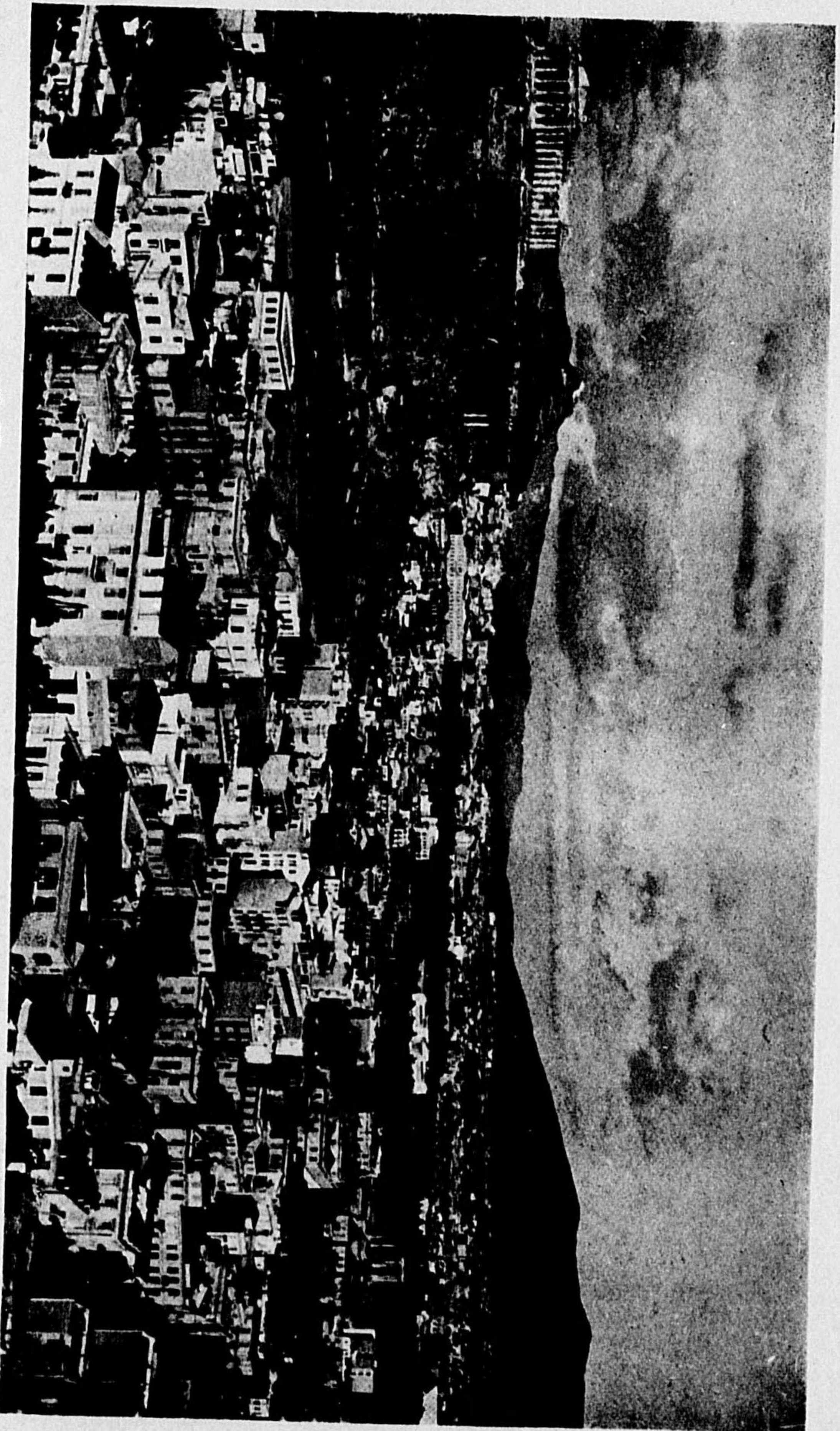
14 繪 14 キリシヤ國アテネ市全景 其一 (昭和十年十月三十一日)
アテネ市の南方にフィロパポン (Philopappon) といふ高地があり、そこへ行くと市の全景が最もよく見える。そこでまた右(次頁へ)



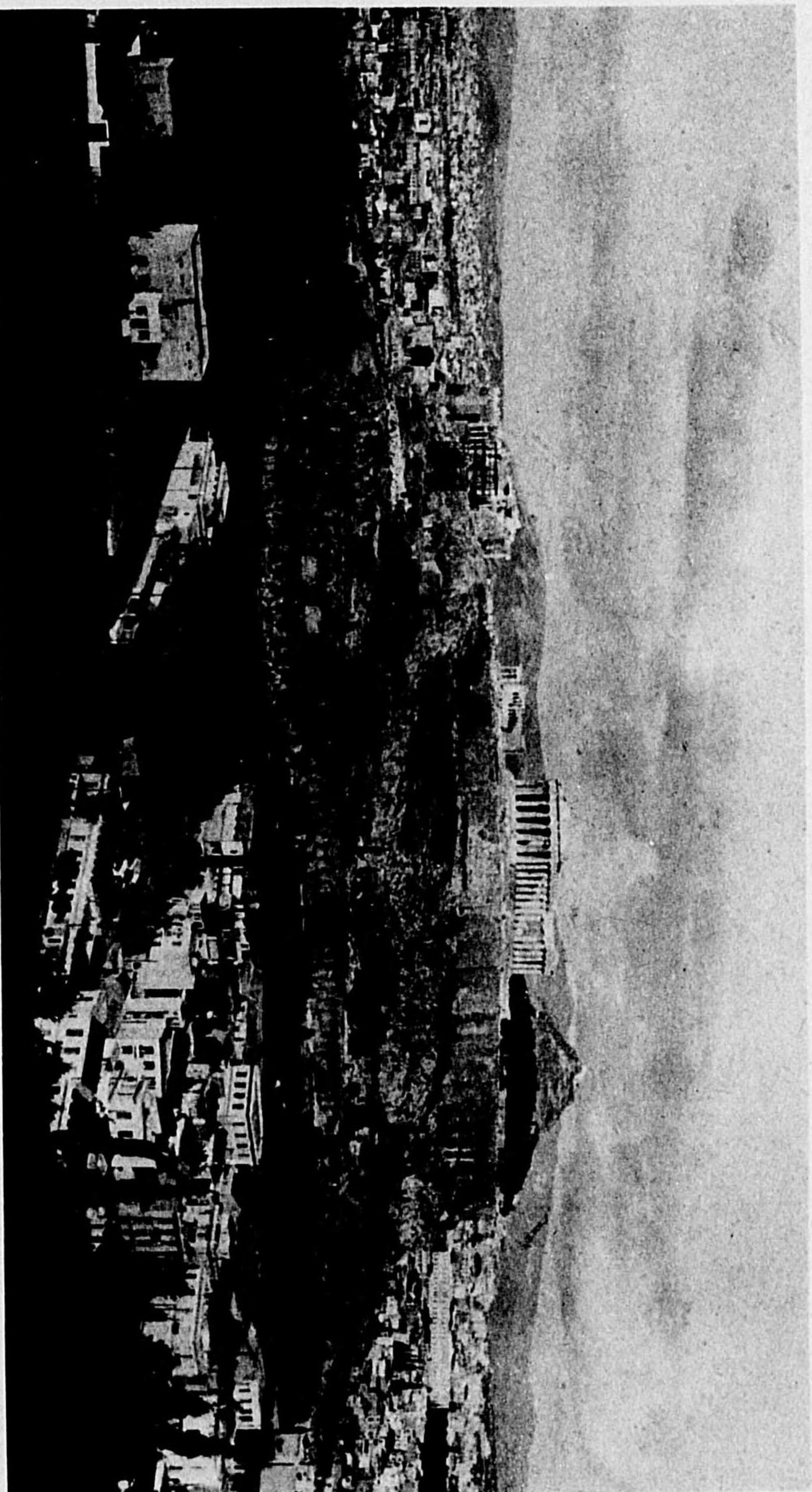
15 繪 15 キリシヤ國アテネ市全景 其二 (昭和十年十月三十一日)
(前頁より)から左へ続く全景をとってみた。此圖の左方から一寸位、次圖では中央の僅か右に森を背景としてたつてゐる細い(次頁へ)



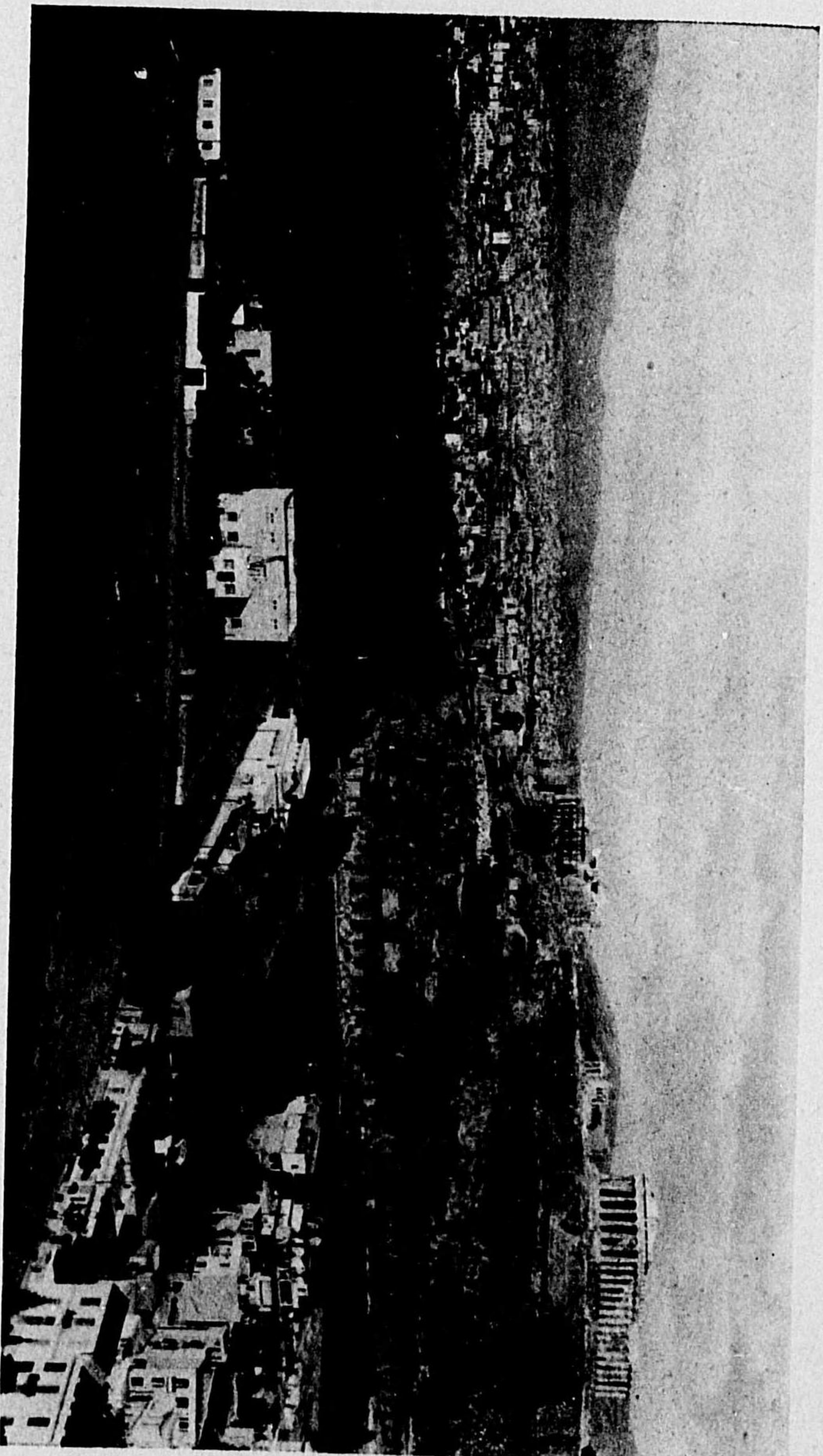
口繪 16 キリシヤ國アテネ市全景 其三 (昭和十年十月三十一日)
(前頁より) 白い棒が見えるのは、ジュピター・オリムピウス (Jupiter Olympius) 即オリムペイオン (Olympeion) の廢墟で(85-(次頁へ))



口繪 17 キリシヤ國アテネ市全景 其四 (昭和十年十月三十一日)
(前頁より) 88), 現在16本の大理石柱を廣大なる地域に残してゐる。此廢墟は此圖では右端になり, 左端に近く, 口繪 18 (次頁へ)



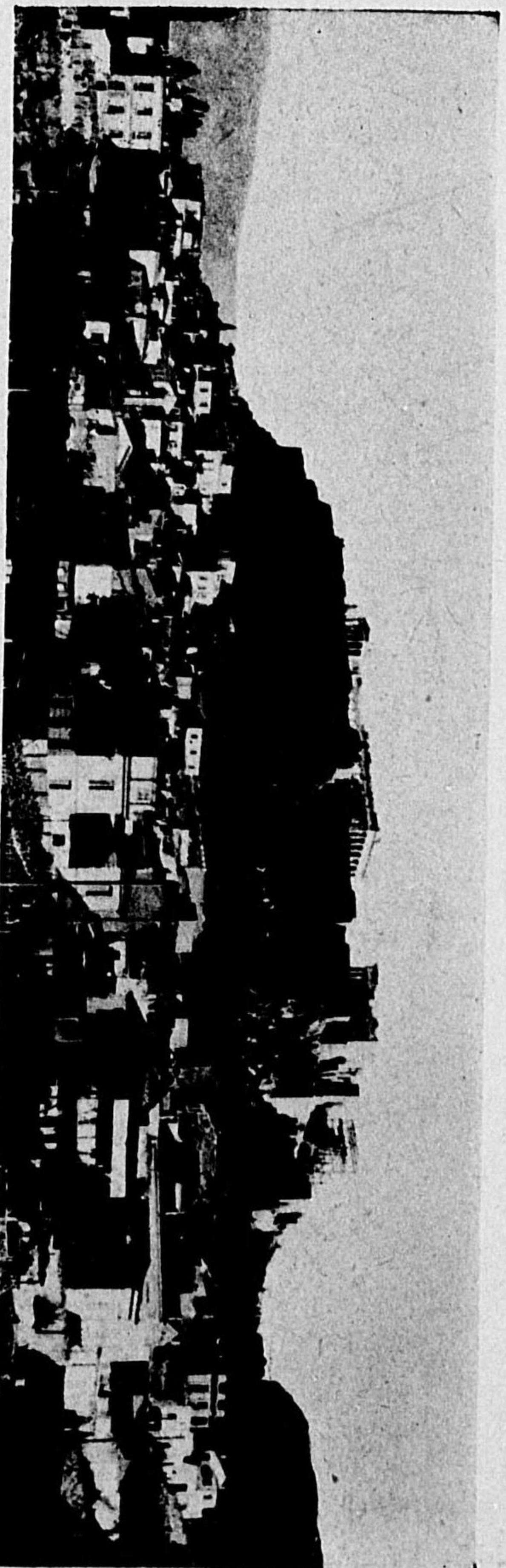
口繪 18 ギリシヤ國アテネ市全景 其五 (昭和十年十月三十一日)
(前頁より)では約中央, 同 19 では右端に近くなつてゐるが, プロピリス丘上のパルテノン(Parthenon)の妻が見え, 其左後(次頁へ)



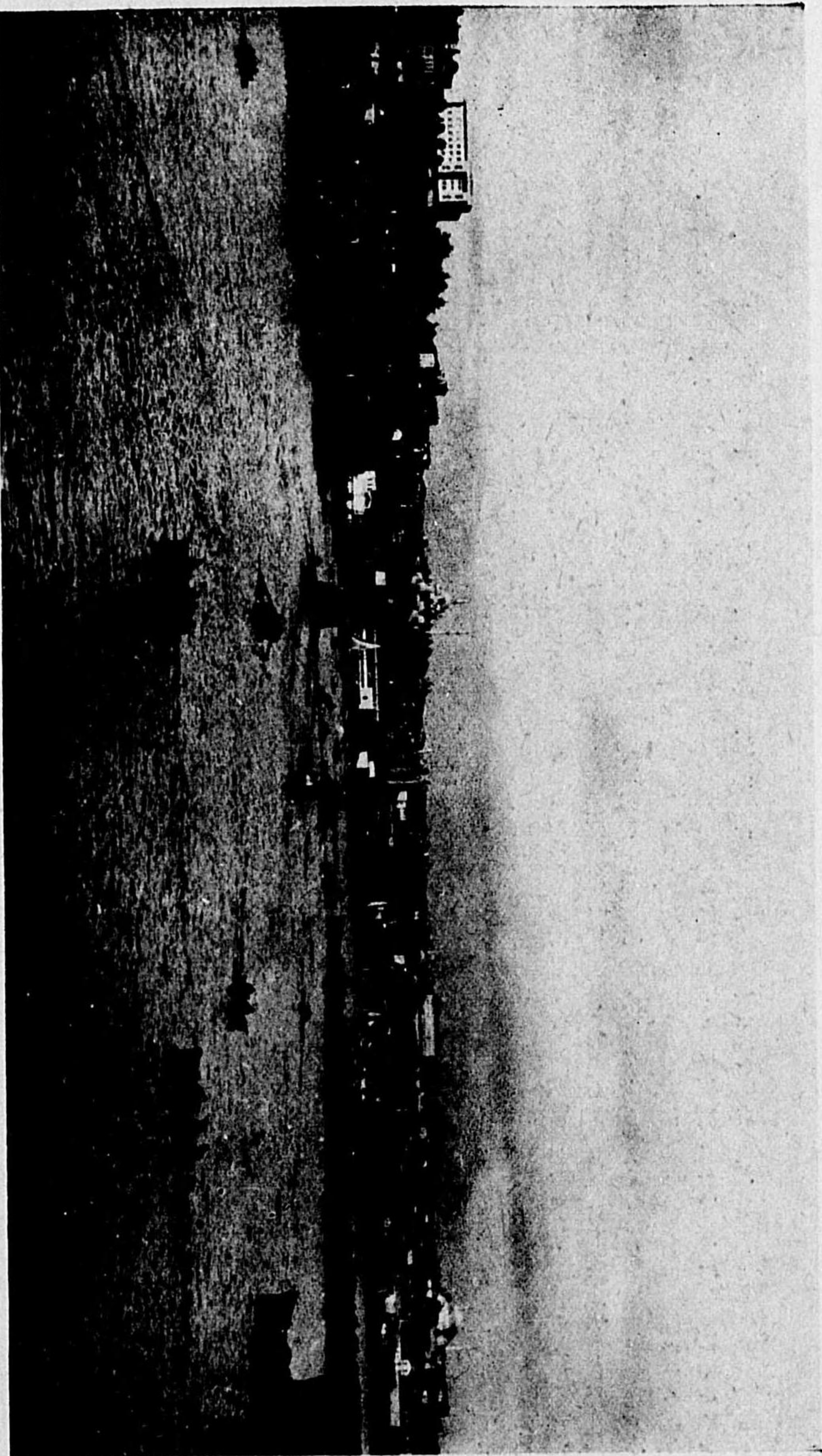
口繪 19 ギリシヤ國アテネ市全景 其六 (昭和十年十月三十一日)
(前頁より)方にはエレクタイオン(Elechteion), 尙ほ其左には入口の門なるプロピリスム(Propylaeum)とニケ・アテテロ(次頁へ)



口繪 20 キリヤ國テネ市全景 其七 (昭和十年十月三十一日)
 (前頁より) Nike Apteros) の神殿がある。さうして全景の最後なる最左端の此圖には、右の方から一寸五分位のところで、上下の
 丁度間位にテセイオン(Theaeion, 80・81) の側面の柱 13 本が、小さいながら皆見ええてゐる。

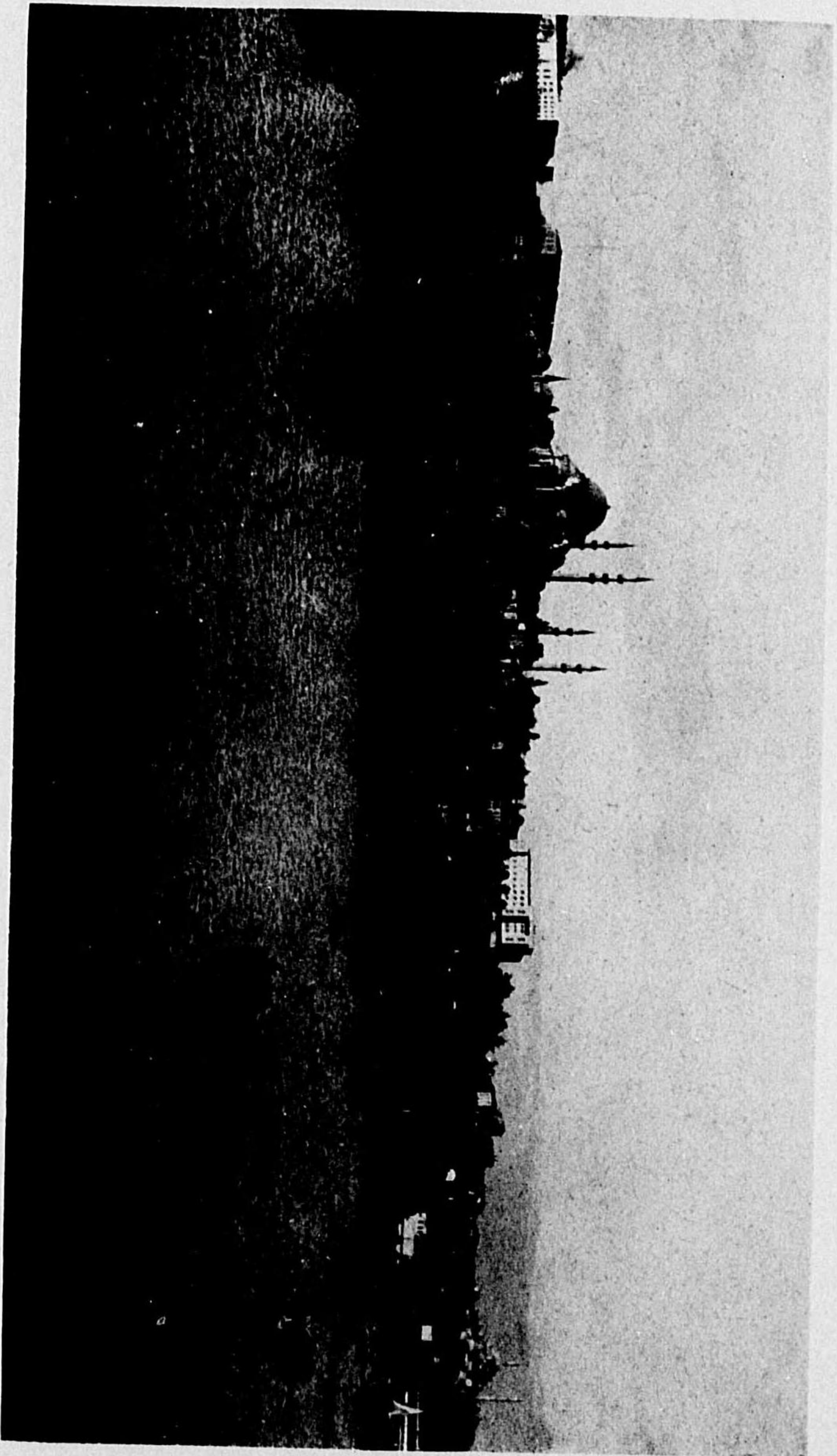


口繪 21 テコロボリス丘全景(西北方より) (昭和十年十月三十日)
 テネ市の眺は、口繪 14—20 に示した様に、南方高地からが最もよいが、夫では反對側からの有様が判らないから、西北からの寫眞をここに一枚だしておく。これだと右の方が入口になる。先づ右端低位置にあるのは後に羅馬時代に建てられた門塔で、其直ぐ左上に臨時に足場が架けてあるのはエケ・テテロス(Nike Apteros) の殿堂、其左の背の高い臺座はアグリッパ——Agrippa、本名 Marcus Vipsanius Agrippa (63—12 B. C.) 羅馬の武將兼政治家——の像が元はのつてゐたもの、其左の四角な家は繪畫館(Pinacotheca)、其在に柱が二三本見えてゐるのはプロピラエム (Propylaeum) の東口(104・105)、丘上中央に見ゆるはバルテソンの西妻と北面の一部、最左端に切妻を北面にだしてゐるのはエレクテイオンの北出入口で、この切妻の最も眼に近い隅は 99 に於いても亦最も眼に近い隅である。こうしてみると口繪 17—19 と比較して、此丘上に現存せる主要建築の相互の關係がよく判るであらう。序に東と西とから此丘の全景を寫したかつたが、どうも適當な場合がなく、止むを得ず中止しておいた。



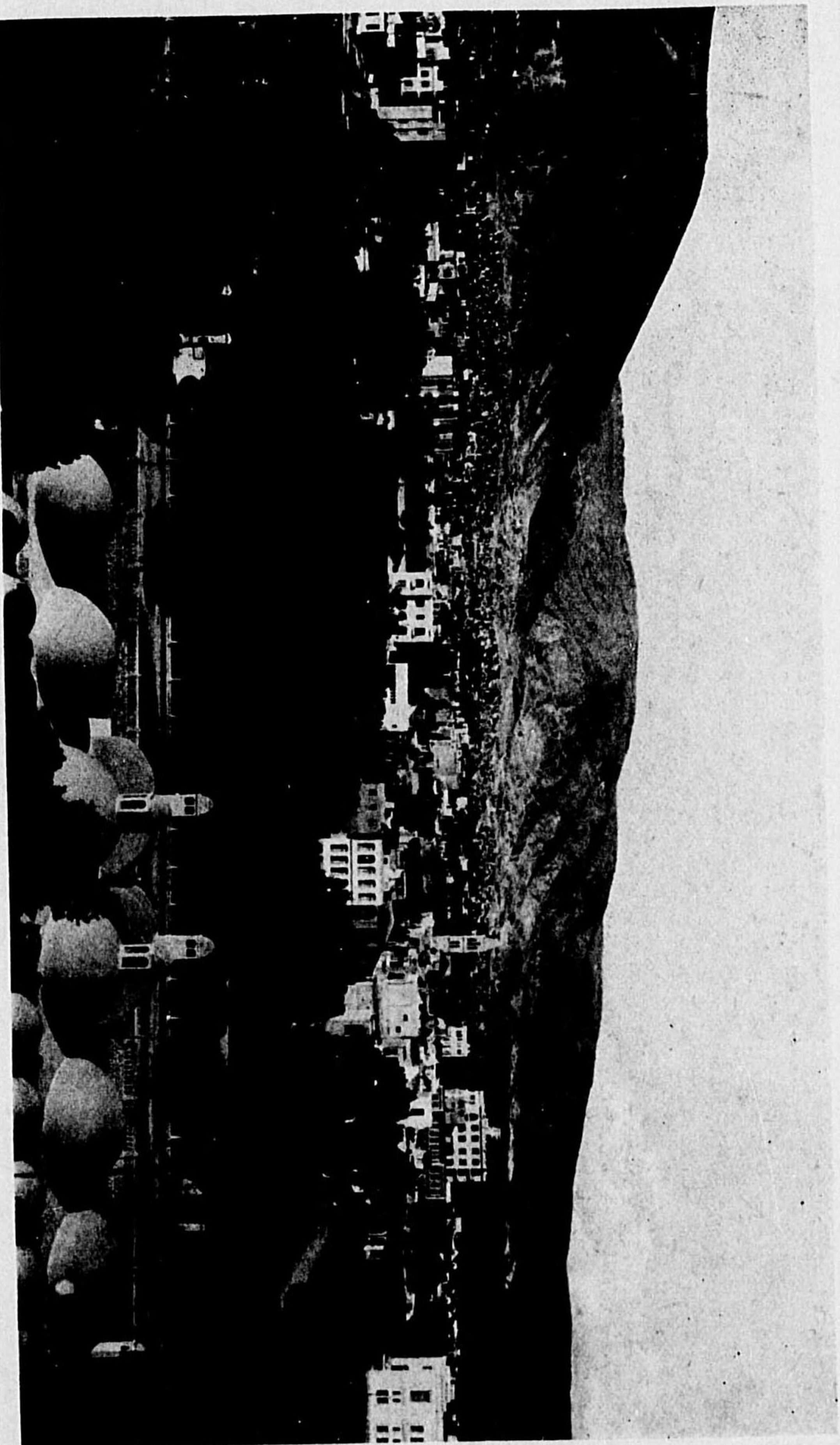
口繪 22 トルコ國イスタンブール市全景 其一 (昭和十年十一月五日)

此圖の左に近く四角な殺風景な白い家があるが、その家は次圖の右から三分の一位のところにある。兩圖併せて光塔が相當に(次頁へ)

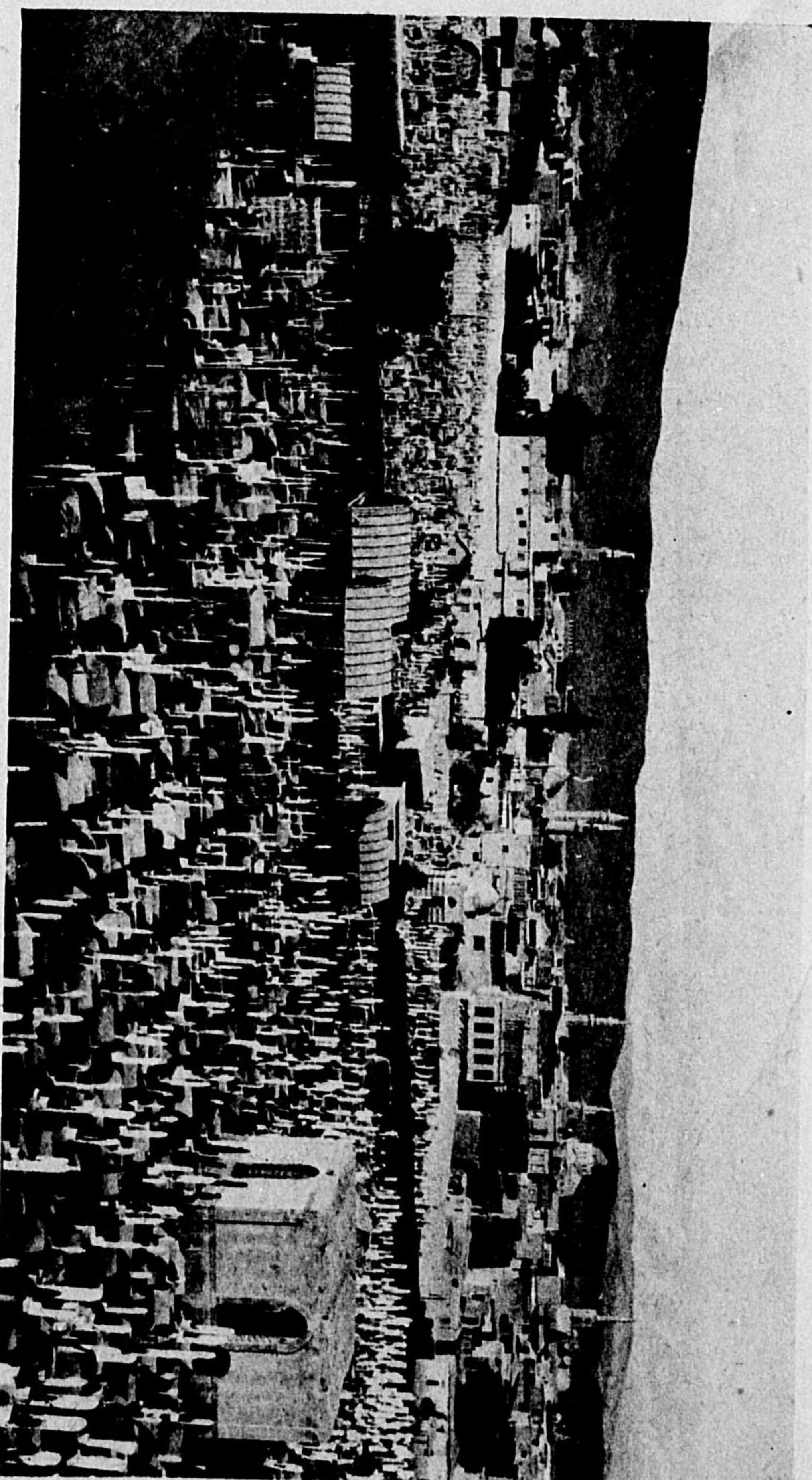


口繪 23 トルコ國イスタンブール市全景 其二 (昭和十年十一月五日)

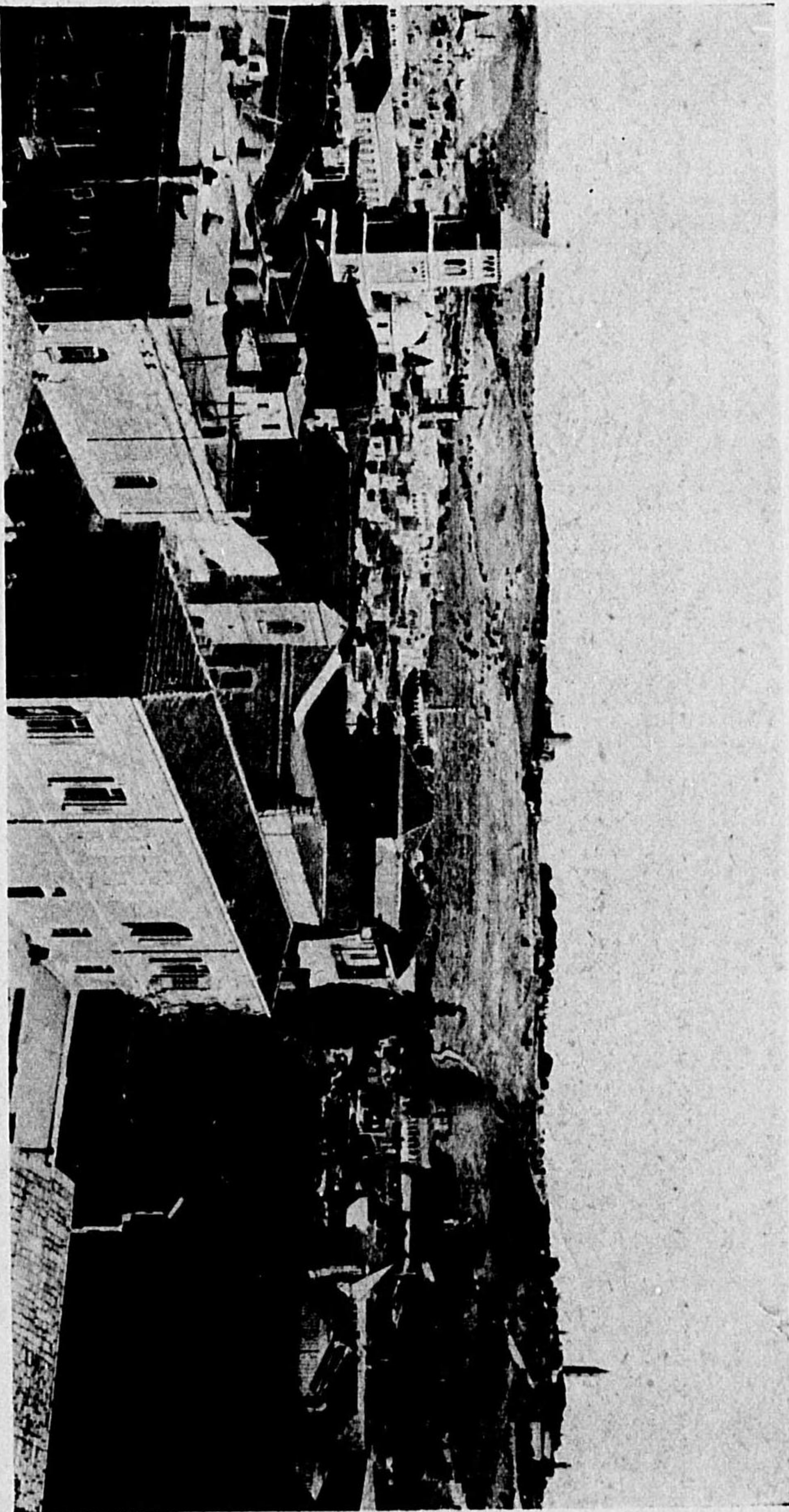
(前頁より)見えてゐるが、イスタンブールの眺めは海から格段である。此町の沿革を思ひ浮べるとは海から眺めるに限る。



口繪 24 シリア國ダマスカス市全景 其一 (昭和十年十一月十一日)
 ソルタン・サリム寺の光塔露臺(128・129)からダマス市を俯瞰したところで、圖の下方に
 並んである半球形のはサリム寺廻廊の屋根の圓蓋の一部。

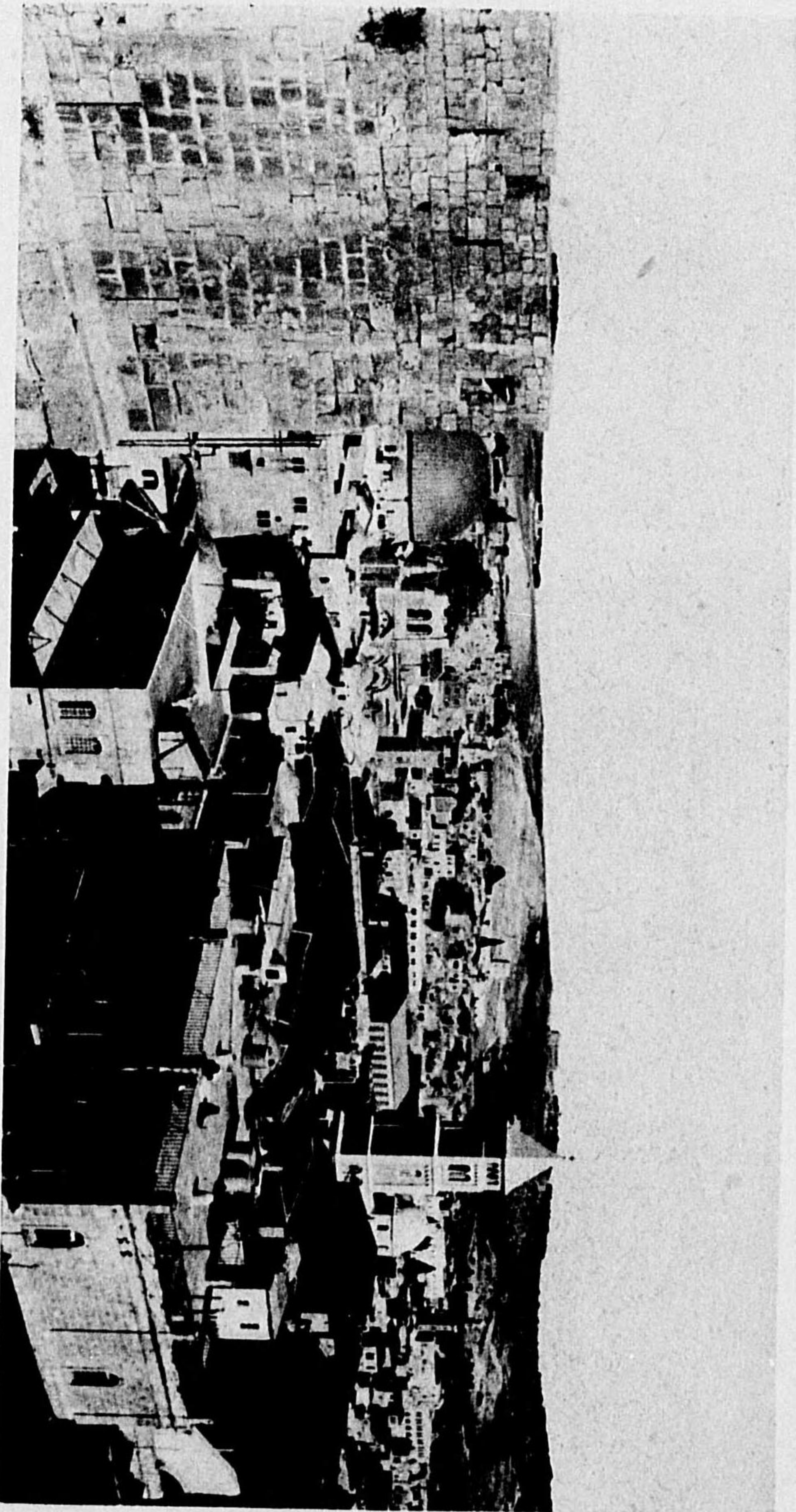


口繪 25 シリア國ダマスカス市全景 其二 (昭和十年十一月十二日)
 主として市の外部に沿ひて、回教徒の墓が散在してゐるが、オヤイサド・モスクの南方約10町にあるのが最大で、そのうちのある廟
 の光塔露臺上から、疏濬たる光塔を背景として、ダマス市の感じを出すべく試みた寫眞。前景と中景とは總て回教徒の墓標である。



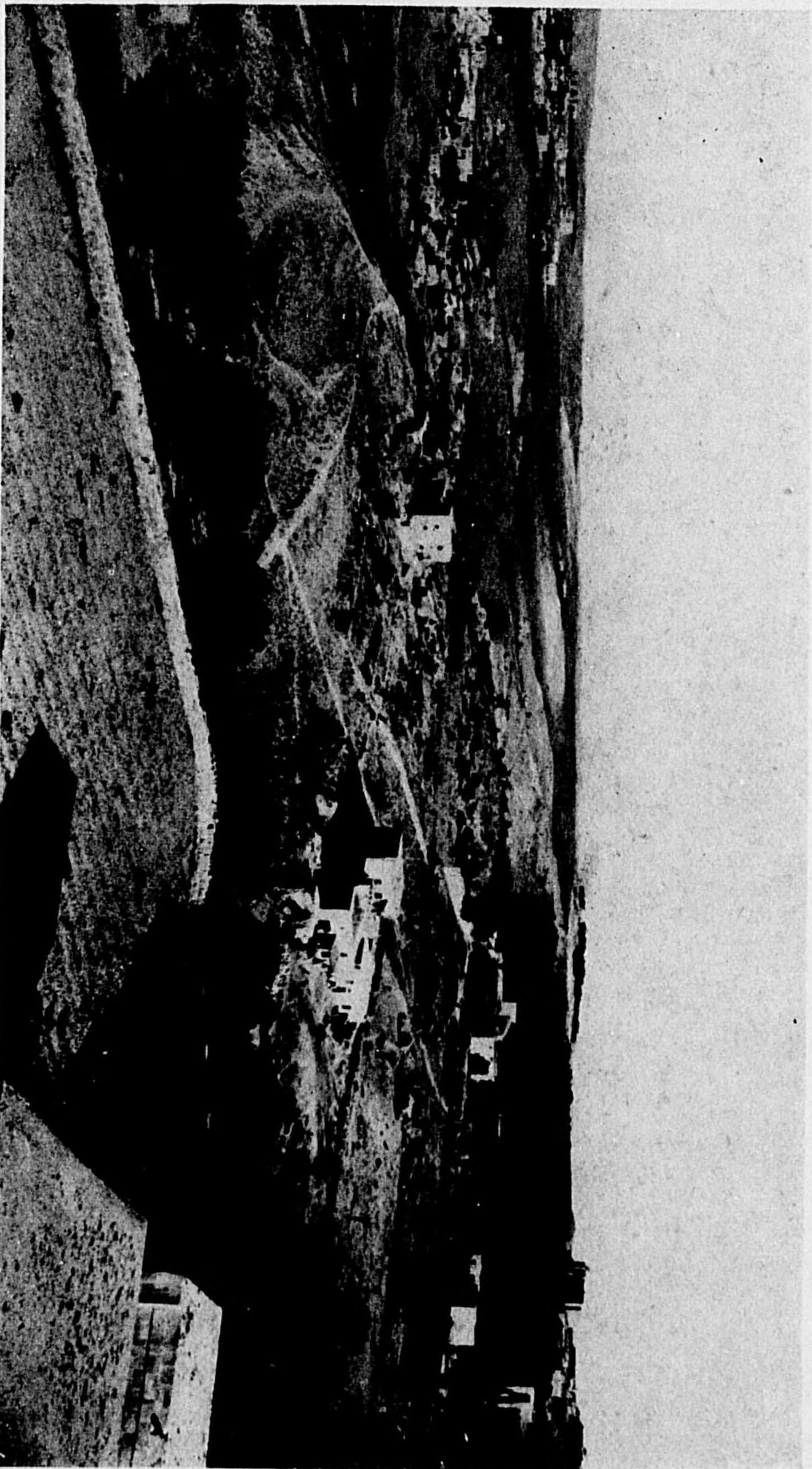
口繪 26 エルサレム市ダビッド塔上よりの眺め 其一 (昭和十年十一月十四日)

ヤッファ門 (Jaffa Gate=Bab el-Khali=Gate of Hebron) の傍に城塞がある。第14世紀に築造を始め、第16世紀に増築をしたといふ。此を「ダビッドの城」と誤解してゐるが、ここに高塔があり、「ダビッド塔」といつてゐる。圖は其塔上から東方即ちマナーブ(次頁へ)



口繪 27 エルサレム市ダビッド塔上よりの眺め 其二 (昭和十年十一月十四日)

(前頁より)山の方を見たところで、26の左に27がつくのだが、前圖右端に「岩の圓蓋」があり、其左端及び此圖右端に近く高塔と小圓蓋と見えるのは Church of the Redeemer。此圖左方の大圓蓋は基督の墓のある Church of the Holy Sepulchre。



口繪 28 オリーブ山よりエルサレム市の眺望 其一 (昭和十年十一月十五日)

以下五枚はエルサレム市の全景をオリーブ山にある物見塔の上からみた寫眞で、例の通り右から左へ續きものである。最も重要な部分、即ち「ドーム・オブ・ザ・ロック」(Dome of the Rock)とエル・アクサ寺 (Mesjid el-Aksa) の一郭きへ見えておれば充分(次頁へ)



口繪 29 オリーブ山よりエルサレム市の眺望 其二 (昭和十年十一月十五日)

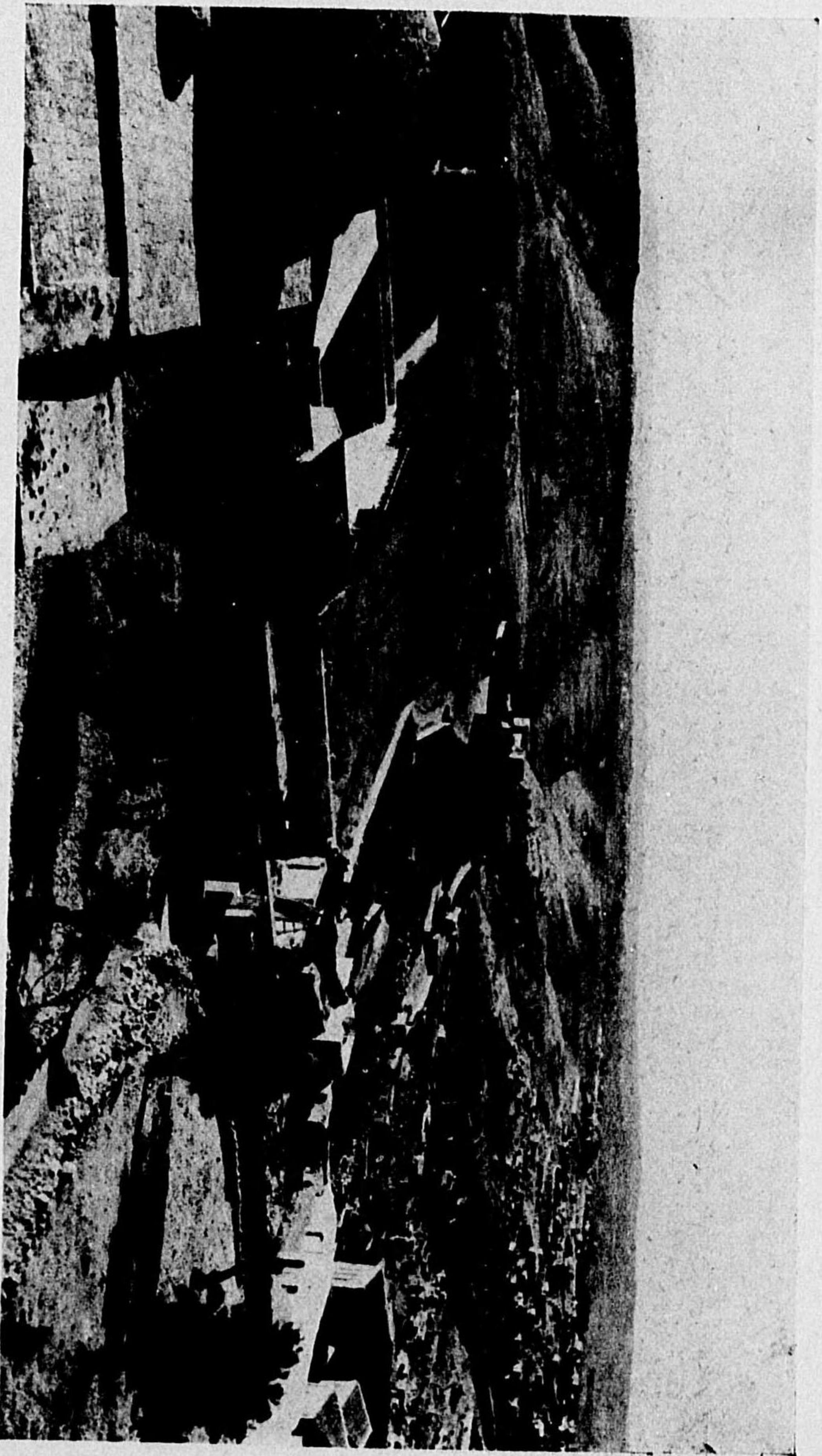
(前頁より)ではあるが、あつたにない機會だから、パノラマにしておいたのである。前圖の左端に近く中景にある樹のない小丘(次頁へ)



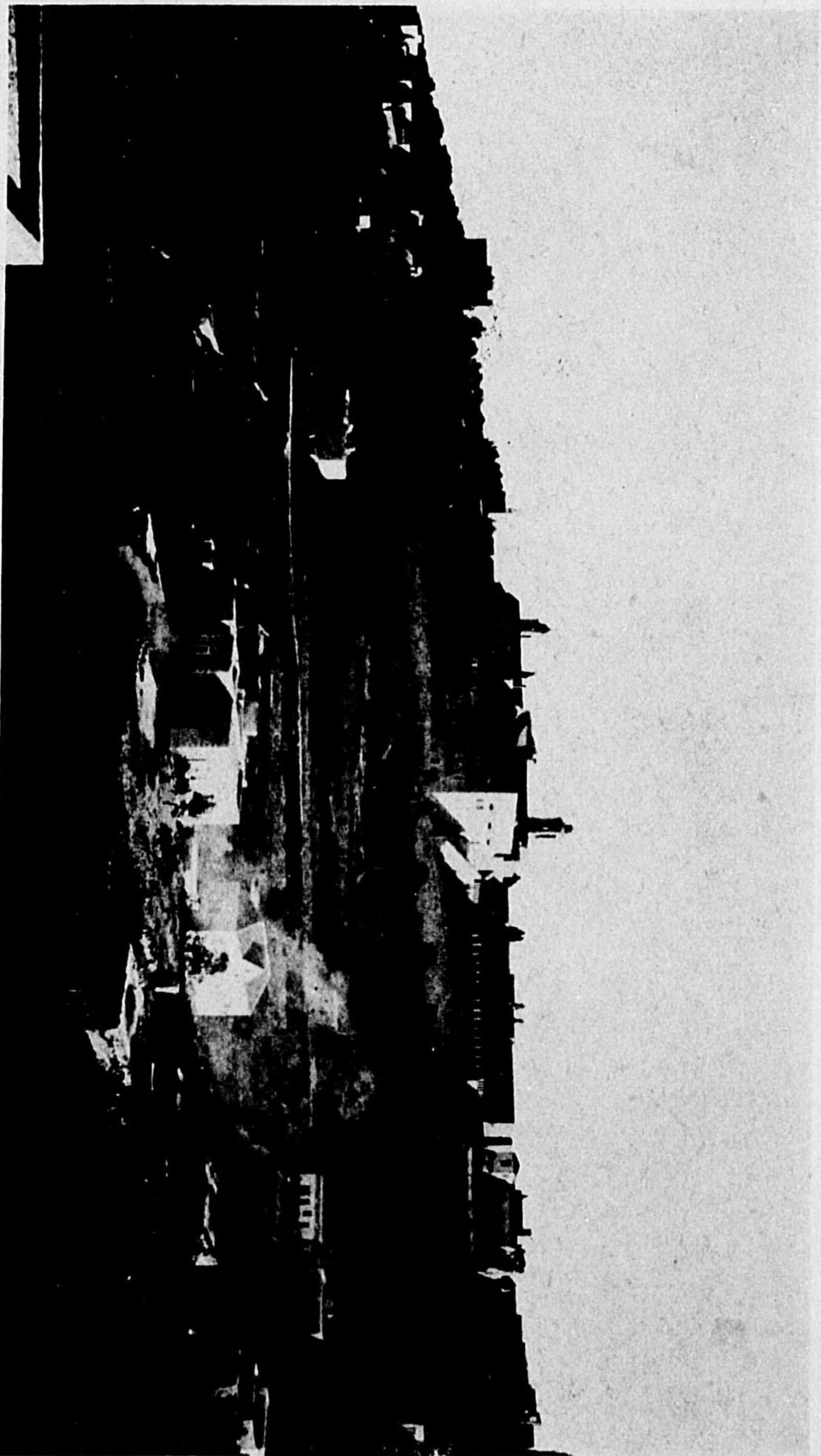
口繪 30 オリーフ山上よりエルサレム市の眺望 其三 (昭和十年十一月十五日)
 (前頁より)は、此圖では右端になつてゐる。次圖は同様はこの左につくのであるが、ここに初めて「神聖なる一郭」(A-Haram Al-Sharif, Haram esh-Sherif)のうちの北方の大部分が現はれ、次圖と併せて完域が見られてゐる。即ち此圖では左に近く、次圖では右(次頁へ)



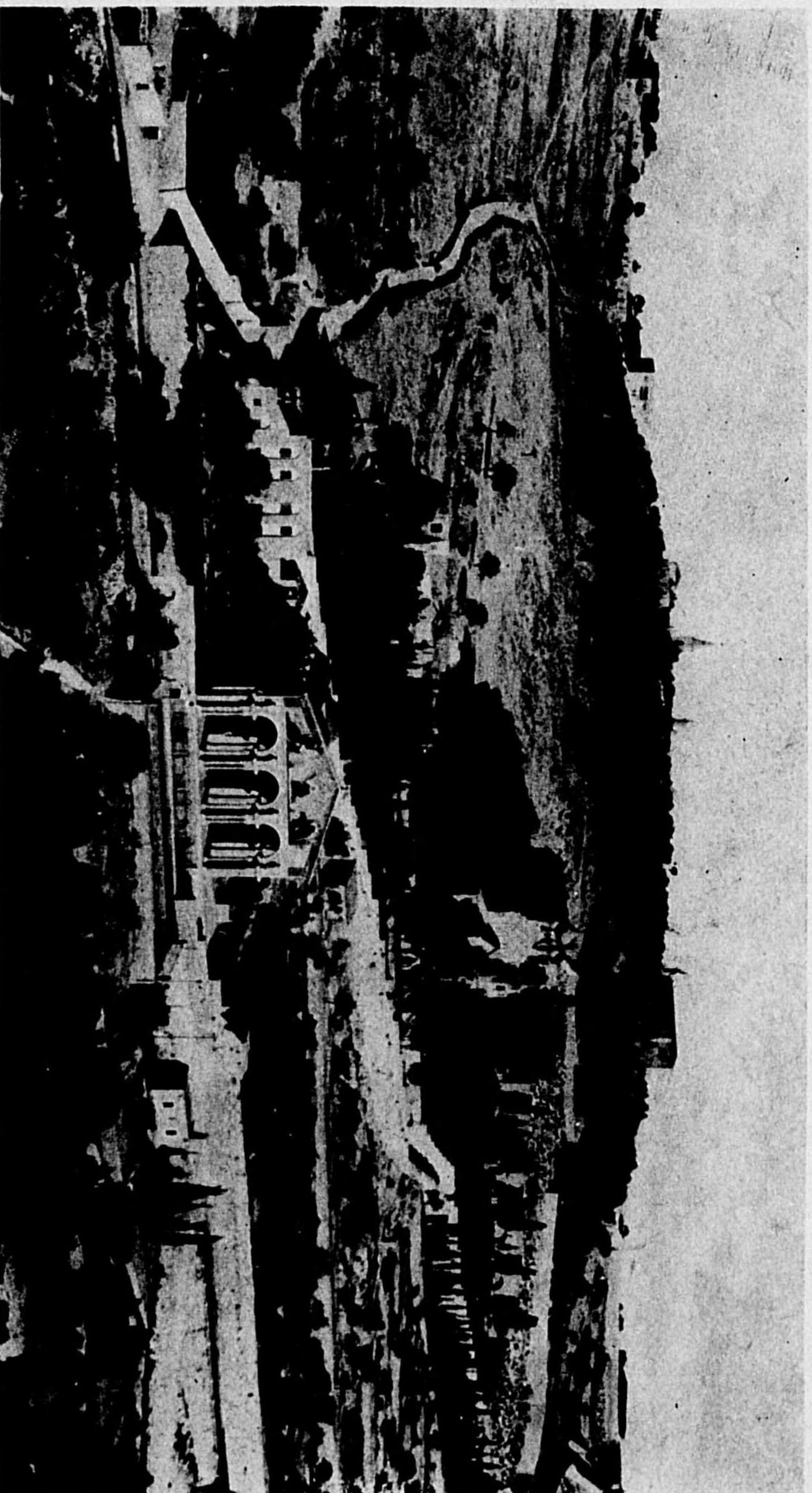
口繪 31 オリーフ山上よりエルサレム市の眺望 其四 (昭和十年十一月十五日)
 (前頁より)に近くあるのが有名な「岩の圓蓋」で知られてゐる The Dome of the Rock-Kubbet es-Sakhra で、其前方に小さくある小圓蓋は謂はゆる「鐘の圓蓋」又は「ダビッドの法廷」(Mahkamat Daud, Kubbet es-Silselah)。此一郭の左端にあるのがラクサ(次頁へ)



口繪 32 ナリーフ山上よりエルサレム市の眺望 其五 (昭和十年十一月十五日)
(前頁より)寺である。大きな圖が136—142に掲げであるし、本文第一五八頁に簡單ながら解説があるから、夫等を讀めば一通りのことは了解ができればよう。



口繪 33 ベニスレムスの基督降誕寺遠望 (昭和十年十一月十四日)
圖の中央に見ゆるのが夫。エルサレム市からベニスレムスの町へ行かうとした途中で寫したものだ。此はコンスタンチン(コンスタンティン(Constantine))帝が基督降誕の傳説地へ西紀後330(仁徳天皇の御世)に創建したもので、其平面は三後陣のバシリカ會堂である。



「岩の圓蓋」の建てる聖域の東壁外からオリーノ山をみた所、最も近い建物はゲスセマニ(Gesthemane)の會堂。切妻の左方の庭にある樹木はオリーノ樹で、基督が昔て見たであらう樹の何十代目かの孫樹であるかも知れない。

口繪 34 エルサレム市ゲスセマニの會堂 (昭和十年十一月十六日)

開路市回教大學二連光塔



(昭和十年十月十二日)

開路市には光塔がいくつもあるが、この様に二つ並んでゐるのはさうない。境内撮影嚴禁とあるので止むを通りからにしておいた。



坡西土から坡西土へ

(續埃及紀行) (第一回)

上編

大正十一年十月、第一回の埃及旅行をすまして以来、十三年目で幸に再遊の機を得た。併し此度は印度巡りを主なる目的としたので、他では金と日とを節約しなければならず、其ためまたアプウ・シムベルは到底絶望であつたからきれいにあきらめ、アスワンからおとなく引返した。

昭和十年九月五日の午後神戸港を解纜した郵船「鹿島丸」は、三十四日を費して十月七日坡西土へ着いた。實の所此度は日が充分といふわけに行かないので、シベリヤ鐵道で出かけるつもりであつたが、今は亡き母が是非船にしろといったので、前に一度斷つた郵船會社へ再び申込んだら、幸なことに中甲板の一人室が得られた。この様な好都合はさうないと思つて、大に納つて愉快な航海を續けた。だから長いとは思つてゐたが、三十四日はぢきにたつてしまひ、坡西土に着いても下船するのがいやな位であつた。航海中は事務員のNさんが、不思議な因縁から特に厚意を表され、いろいろお世話になつた。曾て白耳義國アントワープ港から、大阪商船の「アトラス丸」に乗つて坡西土迄行つた時は、これも亦ほんの僅かな事から機關長のKさんの御厚志に預つたが、今回のNさんの様に、その時以來少しも變らずにおつきあひを續けさせて頂いてゐたのに、つい四五ヶ月前逝去された。此機會にNさんの御健康を祈ると同時に、Kさんの御不幸につつしみて哀悼の意を表する

次第である。

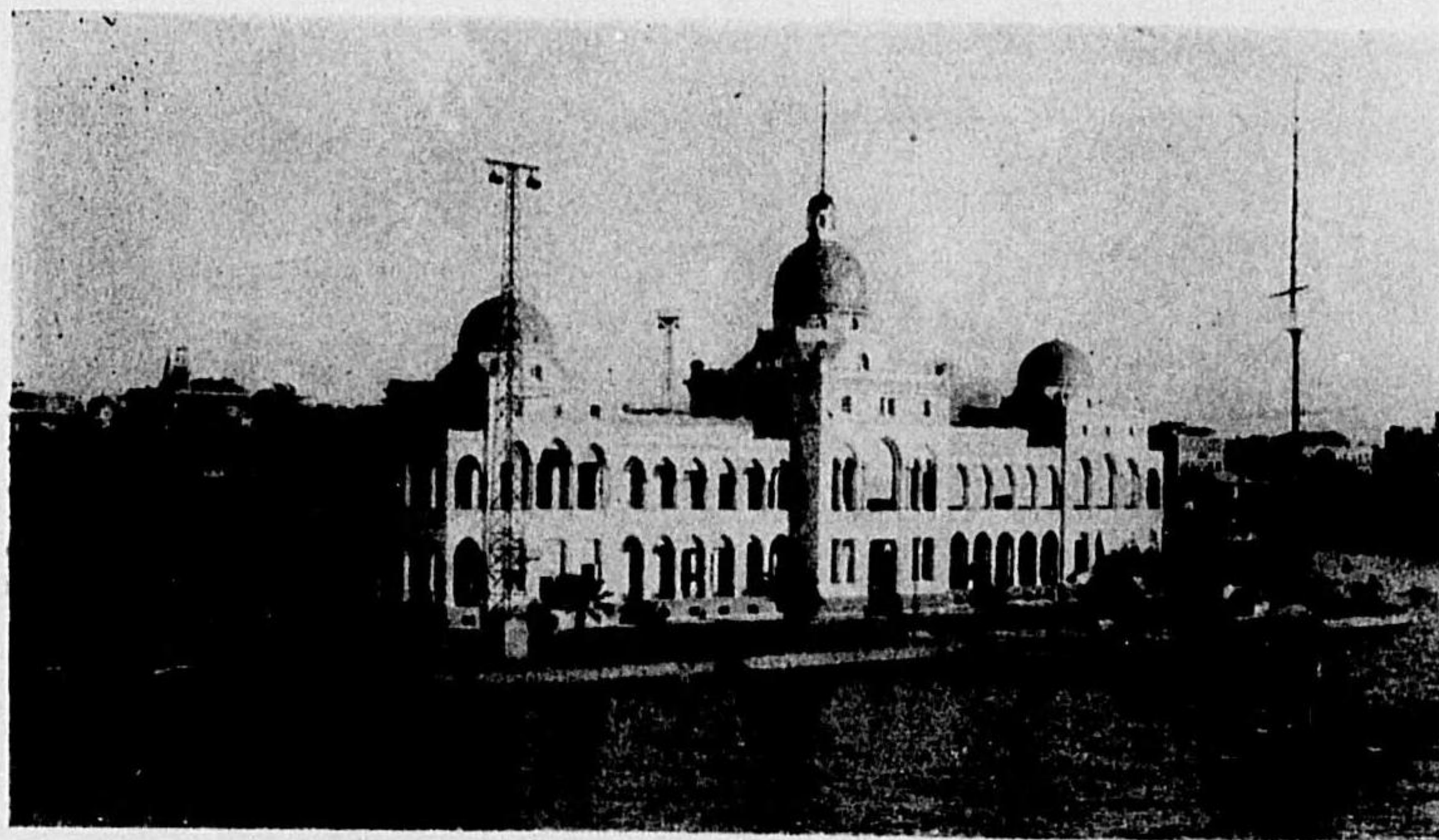
本文は『埃及紀行』と同じく日記體に認めておくが、これは當時の日記帳から取捨して然るべく書き直したものである。しかし事實を曲げたり等は決してしてゐない、どこ迄もありの儘を記したのである。

昭和十年十月七日 月曜・好晴

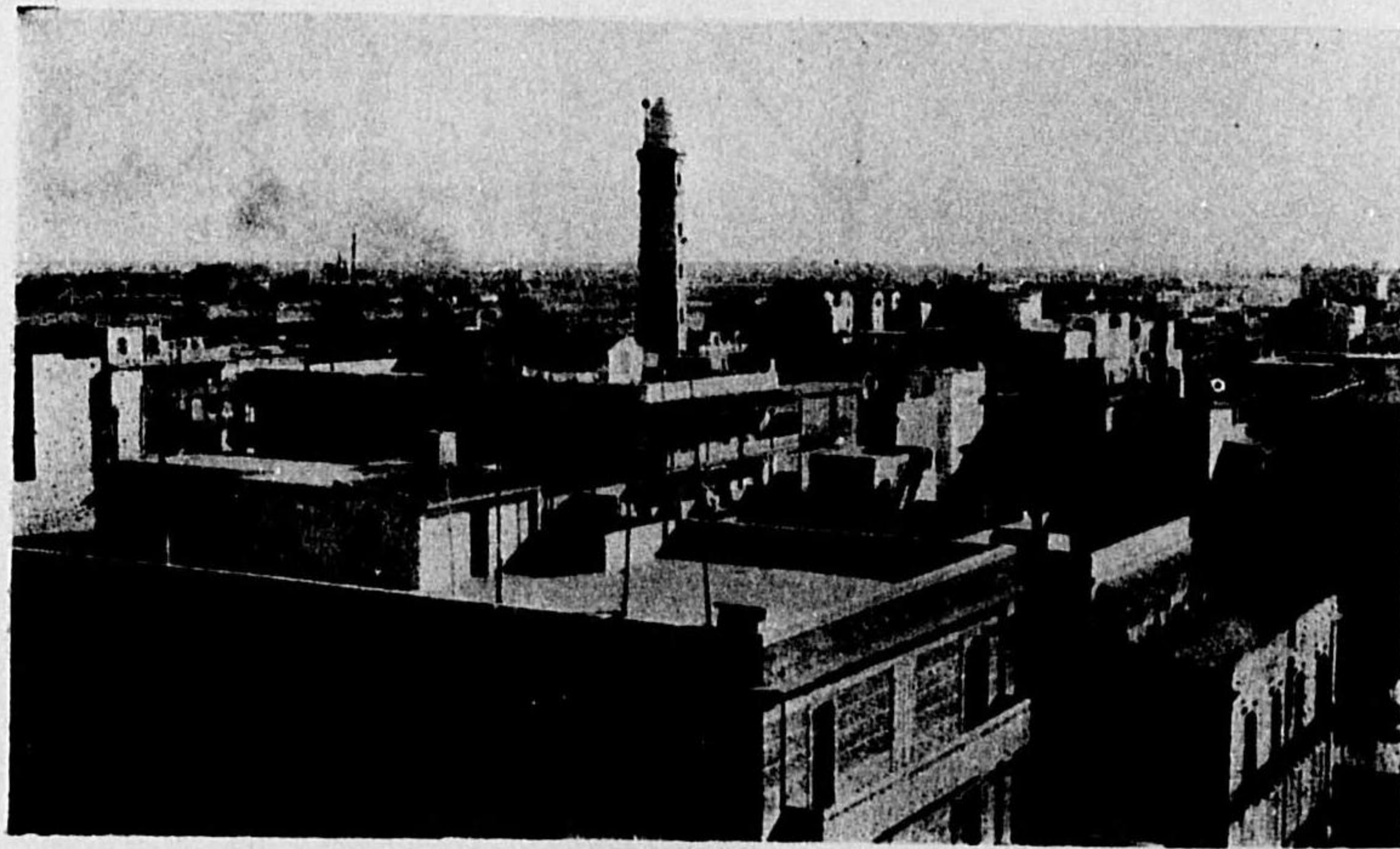
PLEASE DO NOT SPIT

MANY DISEASES ARE SPREAD BY SPITTING
THEREFORE

前7.0坡西土着、豫て同地の南部商會主南部憲一さんへ、もう一度埃及旅行をして見度いから、着の上は何卒よろしくお願致し度いといふ意味の書面を差上げておいたが、丁度船がつくと殆んど同時に、伊太利人の若い番頭が來たから、其番頭に話をしたら、よく心得てゐて直に随分遠方の税關迄連れて行つてくれた。いふ迄もなく禁制品や贅澤品等は一つもないので、直に検査はすんで了つた。さうして番頭と一所に南部商會に行き、主人憲一氏に面會して久瀾を敘し、番頭派遣の禮を述べ、上埃及旅行に就いての注意をきいたりした。夕刻になつて海岸通りの百貨店で小型の寫眞機を一個買った。⁶¹⁶ 番のフィルムが丁度よろしいので、^{3A}と相似形をしてゐるから、さうして八枚とれるから、大分都合なのできめたのである。遂に此夜は南部さんの家に招待され、とめて頂くことになつて了つた。



上。スエズ運河會社（昭和十年十月七日）



下。スエズ市の俯瞰（昭和十年十月七日）

五 上はスエズ運河會社の建物で、そばへ行つて見ないからはっきり知らないが、眞っ白くて運河に面して建つてゐるから、船からよく見えてまことに美しい。折角これだけのものを建てるなら、何とかしてもう少し回教式を取り入れればよかったのに、どうも三圓蓋の形が気に入らない。これを少し改良すると、もっとよくなつたらう。

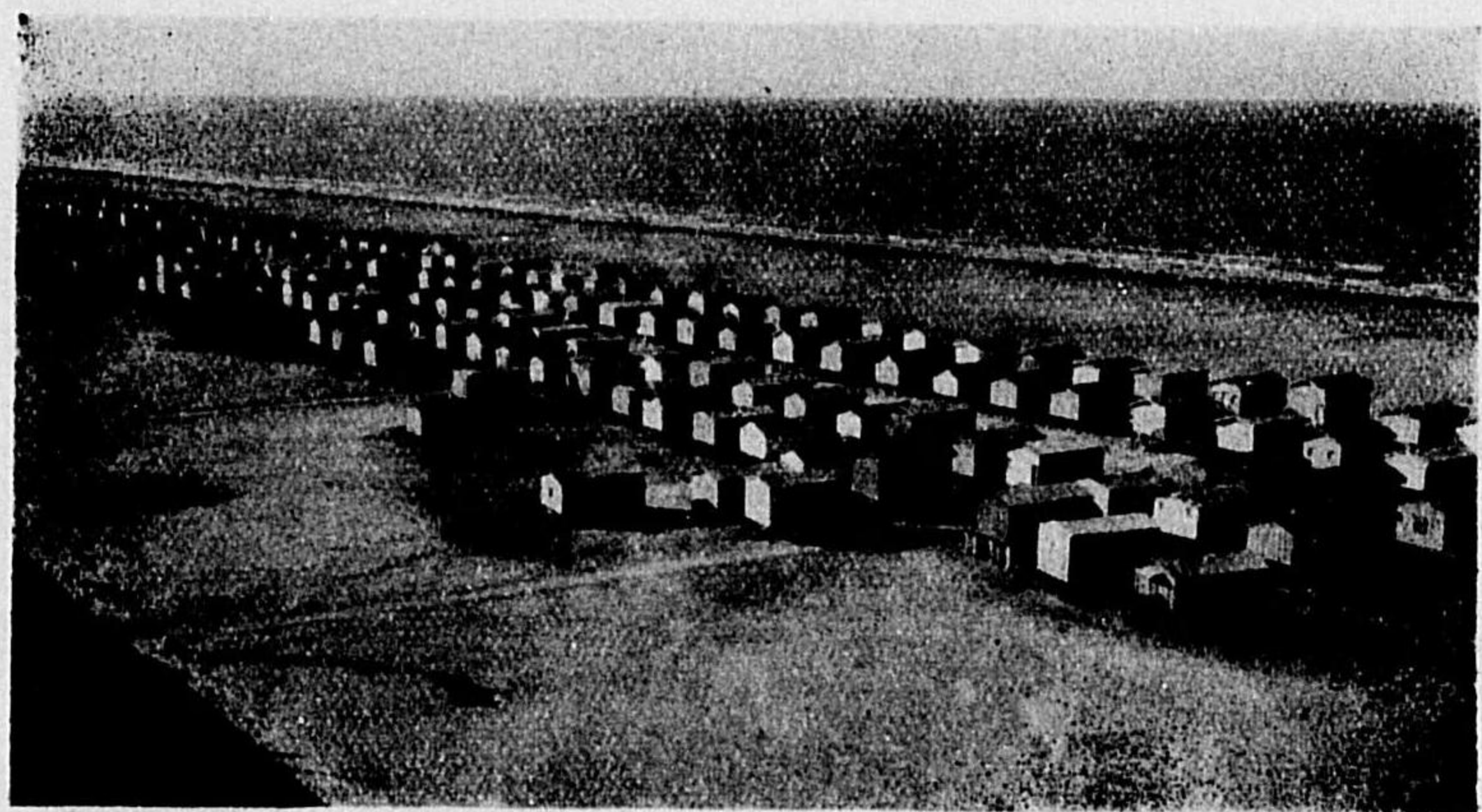
下圖は放列や地中海岸の寫眞をとつたアパートメント・ハウスの屋上から燈臺を中心にしての俯瞰寫眞で、つまらないものだが、此等の三寫眞は普通の旅客には到底とる事ができないから、聊か珍とするに足りよう。圖の左端に近く白線を三本巻いた煙突が見えてゐるのは、今朝ここへついた郵船「鹿島丸」。

同氏の住宅は新しい大きなアパートメント・ハウスの四階であつたと記憶してゐるが、客間は地中海に面した絶景の室であつた。露臺があつて、そこへ椅子を持出してゐると、涼しい風が吹いてきて非常に心地がよろしい。夜は一點の雲なき晴渡つた月夜で、いつ迄眺めてゐてもあきるところではなく、ねるのが惜しくて仕方がなかつた。併しさういつ迄も頑張つてゐるわけには行かないので、10時頃退却した。

挿入の英文は「大概の病氣は吐いた痰睡から傳染します、ですから、どうぞ唾を吐かない様にして下さい」といふ意味で、丁寧な書き方である。英國に教はつた通りにやつてゐるのだらう。英國は「どうぞ」といふ字をつかうのがすきな様である。例へば倫敦市地下鐵座席の凭に「Please keep your feet off the Seat」（どうぞ前の座席に靴のまま足をあげないでください）と注意してあるの等は其一例である。此揭示は税關の荷物検査場の壁の至る所に貼りつけてあつた。併しこれは一片の空文で、セメントの床にはそこいら一面に痰睡が吐き散つてあつた。英文だから英語の讀めない人には何の事か判るまいから無理もないが、埃及あたりの土人には、恐らく暴夜文字でかいてあつても、まるで役に立つまい。我國でも禁煙の札の出てる電車やバスの中で、充分承知してゐるくせに平氣で煙草を吸つても、運轉手も車掌も知らん顔をしてゐる様なものには再三今でも出遇う所で、甚しいのは省線電車でそんなのを見る事がある。だから恐らく同様であらう。してみると餘り人の事は言へないやうである。

十月八日 火曜・好晴

昨夕買った616の寫眞機は、朝になつてよく見たら連子に曇があつた。此を取替る事になると、私では



上、坡西土のアパートメント・ハウスの屋上よりの景 其一
下、同 其二

(昭和十年十月七日)
(昭和十年十月七日)

坡西土市に於ける當時の南部氏の居たアパートメント・ハウスの屋上(七階建位であつたらうか)から、地中海の沿岸を俯瞰したところ。長方形切妻造の家が行儀よく並んでゐるのは、海水浴客めあてのもので、夏日は満員だらうが、十月七日では全部がらあき。下圖は港の突堤に近き常設の放列だが、一見したところ舊式の砲車がただ並べてあるだけで、こけ嚇にもなりさうもない。上から一つ爆弾を落されたら、こんなものは一度に飛んで了ふだらう。遠景に氣のきいた軍艦が見えるが、多分英吉利のであらう。



どうかと思つたので、南部さんに頼んで完全なものと替へて貰つた。開路行の汽車の切符は伊太番に頼み、開路の案内人は前回のアーメッド・サラールが先年死亡したさうで、其後釜のサイドといふのに、宿屋の室の豫約と同時に南部商會から電報を打って貰つておいたから、總て手筈はできてゐた。そこで0.30³⁰坡西土驛發四時間を費し、4.30³⁰開路驛着、出迎へた案内人と共に、今度はメトロポリタン・ホテルといふのへ行つた。メトロポリタンといふ形容詞は、「首府の」とか「首都の」とかいふことだから、さしづめ「都ホテル」であらう。全く翻譯すれば「都屋」「都館」くらゐのところだらう。

此「都ホテル」は相當に高級で、風呂付一日1ポンド位ときいたが、當然備付けてあるべき石鹼も含嗽の水もなく、其上にHを逆に捻つていくら放置しても出てくるものはぬるい湯ばかり。先づ劈頭痛癢を起して煮黒の給仕を呼つけ、石鹼を持って來さして入浴した。泥土の粉末と芥とで上衣の襟はだいなしになつたのを、何とかして始末はつけたが、やはり小瓶に揮發油を入れたもの位は用意して持ち歩く必要がある。

夕食は8.0からの事であつたが、8.0になつたらヌビヤの煮黒が夕食ができましたといつて來た。鍵は鍵孔へ入れた儘おいて行つてくれといふからさうしたら、私が出たと入れ違ひに床をとりて女中が入つて行つた。

十月九日 水曜・好晴

案内人西土は、7.30といふ約束を15分遅刻して7.45に來た。昨夕驛へ迎に來たのは代人で、本人には此時が初対面であつたが、太った割合に感じのいい男であつた。此日はギザへ再遊の豫定で、前回の様に電車へのつもり所、今日に限り自動車にしようとする主張した。半日位だから大した影響もないと見て、彼の申出を承認し、玄關へ行つて見たら、もうちゃんと車へ乗つて來てゐた。あきれたものである。サラールは見かけはぢぢむむさい老爺であつたが、こんな點は非常に正直で、ホテルのランチ・バスケットを小腕に抱へて電車で行つた事をよく記憶してゐる。西土は風采は立派だが、心臓は大分強い。併しどこことなく愛嬌があり、どうも腹をたてるわけに行かない。

新しくできたといふ郊外の廣い舗装した街道へ出た時位から少し霧があり、遂に大分ひどくなつたが、僅か30分間ですつかりあがり、ギザへ着いた時分は好晴になつた。繪入倫敦新聞に出てゐた、第二塔の前から新発見の石の斜面になつた堤道も見た。スフィンクスも全部掘出され、前肢も後肢も、つまり獅子の形が完全に出てゐたのは嬉しかった。併し惜しい事に一切近づけなかつた。鐵條網もはつてあるし、巡查も立番をしてゐた。だからこれはあきらめて鐵條網の外から寫眞をとつておいた(41・42)。夫から第二塔に近付かうとしたが入れなかつたから、そこいらを歩いて制札のない所から入り、第二塔の前で寫眞をとつた時、土人が一人で來て西土に何か言つた。これは

寫眞をとつてはいけないといふらしく、此男について歩いて、遂に第一第二塔の間へ出た。正味2½時間を費した。

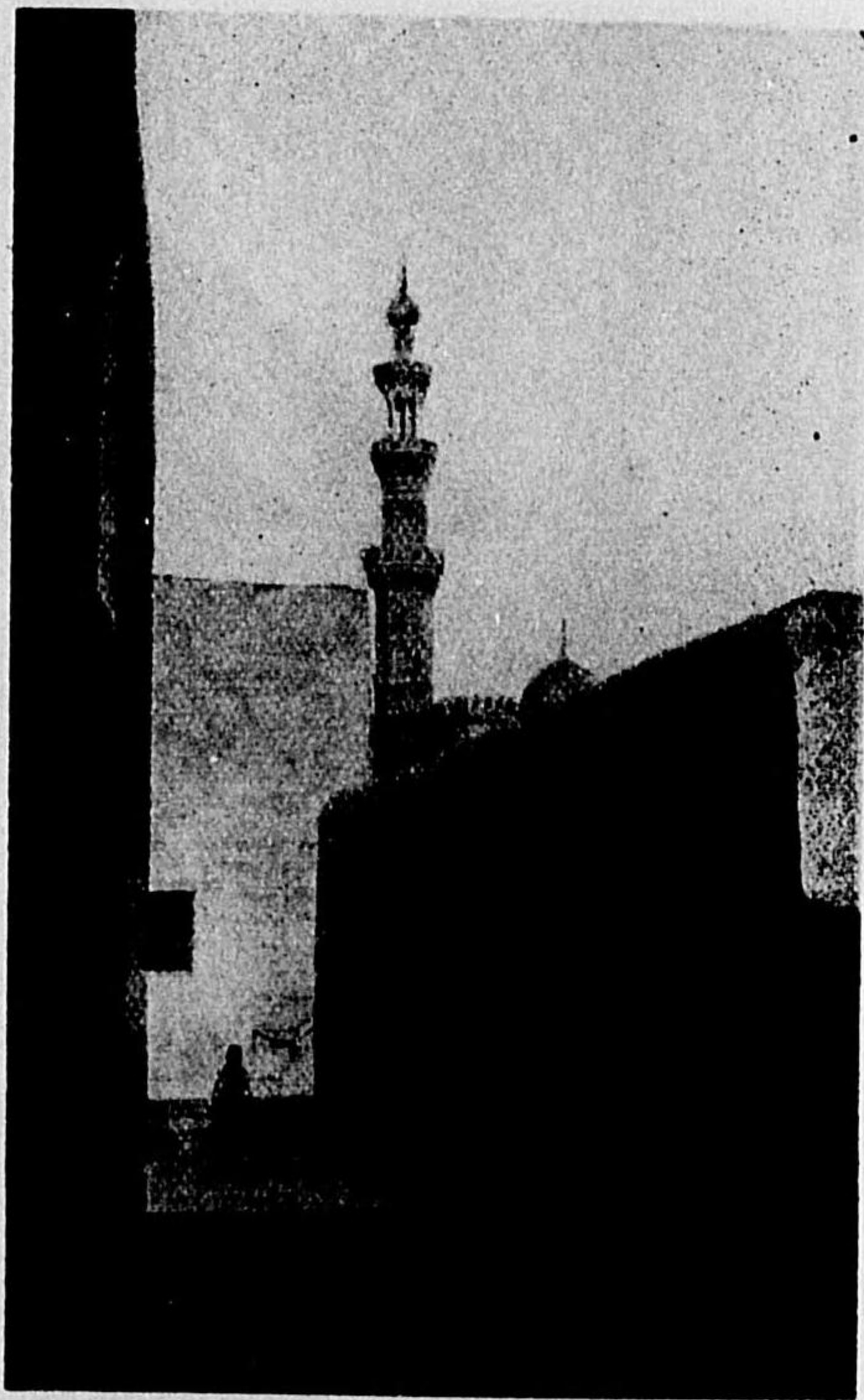
午後はフォスタートの廢墟からマメリュークの墓の復習的見學をしてモカタムの丘に出るべく計畫をした。この道順では電車も大して利用ができないから、自動車にしてくれといった。どうも若いくせに成るべく歩かぬ工風をしてゐる様に思はれてならないが、實は歩けば時間もかかるし、午前にも少し歩いてゐるから、車にする事にした。私は2.0發を主張したのに、西土は2.30にしてくれといったので承諾をしたところ、やはり15分遅く來た。

最初に Mg. of Anr 寺(1・2)へ行き、フォスタートの廢墟を瞥見してマメリューク墓へ行き、今度は隅弓に注意をしたら、鐘乳式の取扱をしたのは新しいのに込み入つたのが一つあり、他は何れも簡單だが氣持のいいのがあつた。このあたりから美しい光塔と圓蓋とが見えたから、案内人に尋ねたらシャフキエー寺だといったが、案内記には何等記載がないし、寺名の眞偽の程は保證しかねる(第一頁上圖)。ここの城塞に建ち、随分遠方からいい目標になつてゐるモハメッド・アリ寺の大圓蓋と、四方から此下方の四壁にもたれてゐる半圓蓋とは修理中で骨ばかりといった體裁であつたが、東羅馬建築のまねをしたところで、つぶれては致し方がない。

モカタムの丘へ登るのは此モスクの所から歩かなければならないのである。暫く行くと英兵の立

つてゐる門がある。此門を出てからの道路といふのは、夫は實に形容のできない程漠漠たる土の粉末が一尺位あって、歩きにくい事言語に絶してゐた。此種の道路は後に北印度に普通な事を知ったが、此時は大分辟易をした。併し努力して漸く昇りつめたら、そこには鐵砲をもった男が二人ゐて、そのうちの一人がついて来た。目的のエル・ギューシ(第一頁下圖)といふ寺の僧が片手に石油の空罐を下げて出て来たが、直に引返してあげてくれた。寺は光塔が殊に面白く、又聖龕も四心拱の様なものからできて居り、又本堂の出入口の拱を支へてゐる柱が随分變つたものであった。

寺を出たら丁度日没で、太陽がリビアの絶壁に入るところを見た。モカタムの日没は是非見ると案内記に勧めてあるが、事實其通りであった。ギザとサッカラの寶形塔がはっきり見えるのと、色彩が時時刻刻變化してゆくのは、形容の辭に苦しむところ。後方をふり返ると寺と城塞とがあり、空の色は下から紫・赤・黄・青といった工合で、勿論其境界は二色が混合してゐるし、其上の方は月が美しく輝きだしたから、私の様に文字で意志を發表する事の不得手な者にとつては、全く何と云つたらばいいか判らぬ景色であつた。カリフ墓の美事な圓蓋も澤山見えたが、形容の仕方のない殺風景なタンクが眼前に邪魔をしてゐたので、折角の景色は臺無しであつた。西土はソルタン・ハンサン寺とリファイエー寺を見ようといつたのを一蹴して来たのは全くの大當り、あんな寺はいつでも見られる。もう少しでモカタムの日没を見そくなふ所であつた。



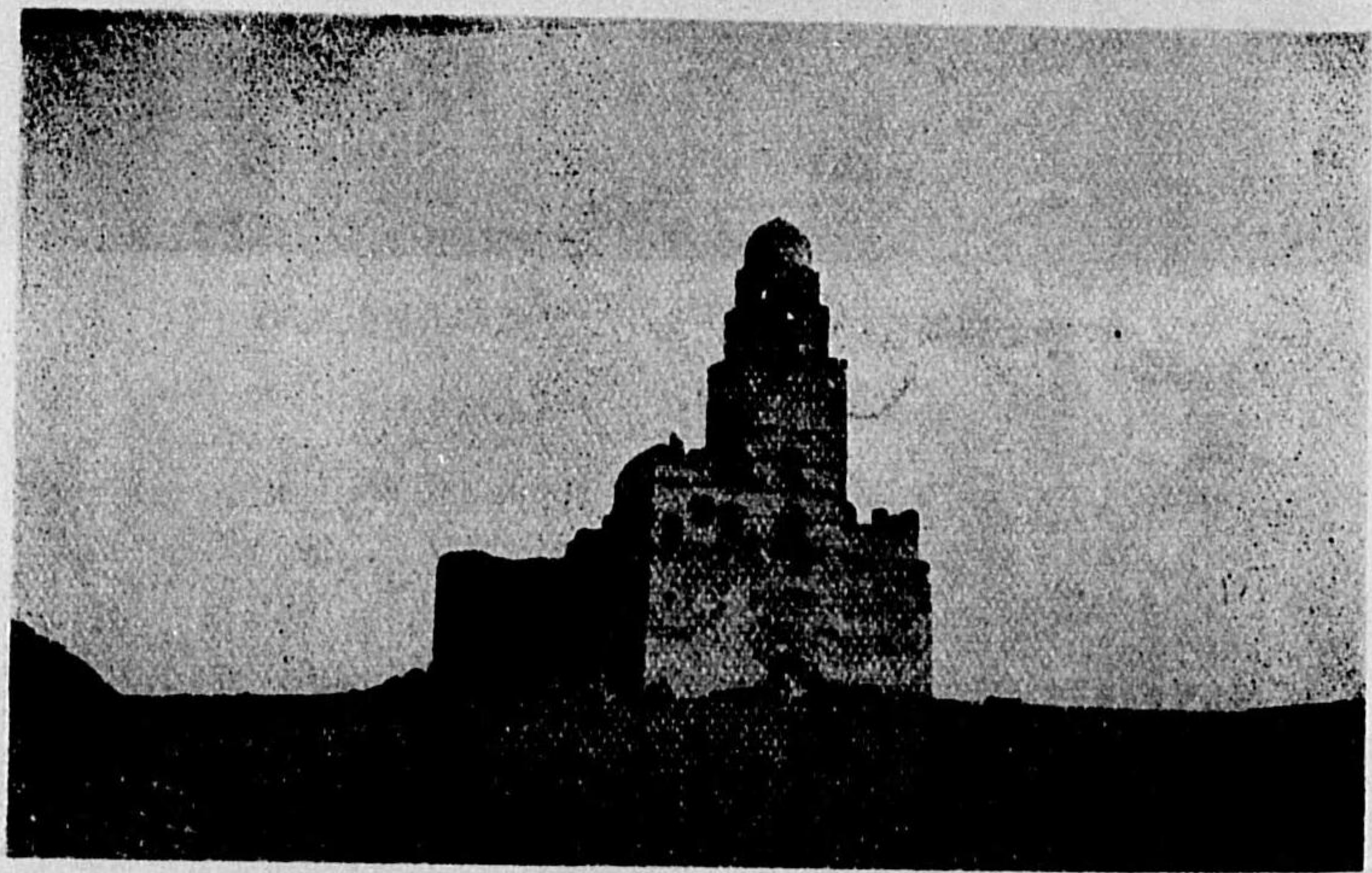
上、エル・イマム・エル・シャフネー寺の光塔

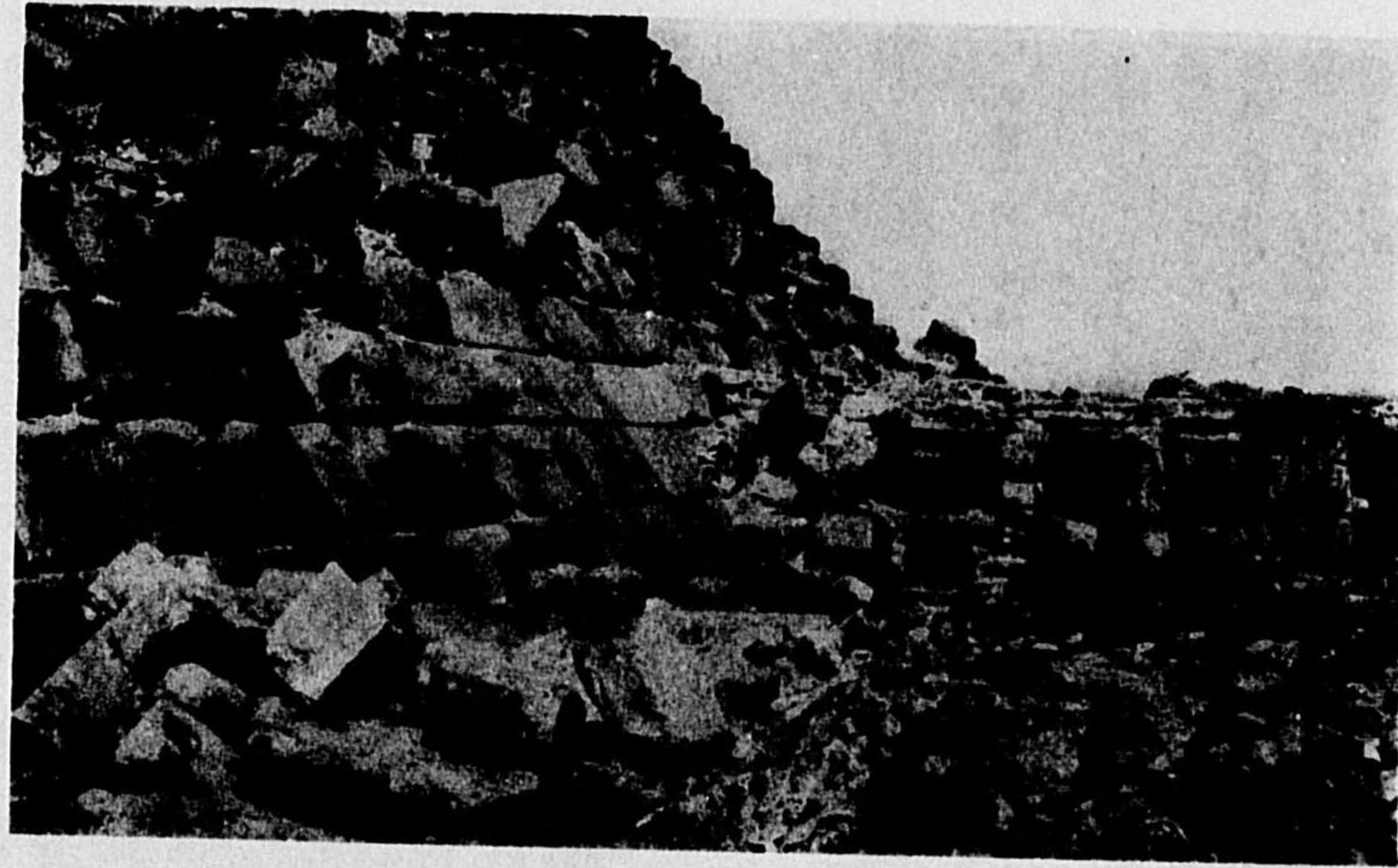
(昭和十年十月九日)

下、エル・ギューシ寺全景

(昭和十年十月九日)

マメリュークの墓のあたりを歩いてゐたら、上圖の様な美しいキャッシャな光塔が、狭い往來の土壁の背景に見えた。あたりとよく調和してゐて、どうしても回教國だといふ感じがした。そこで土地の人を一人たたして、この様な寫眞をつくつて見た。下圖はモカタムの丘上、砂地に特立せるギューシ寺、此等二枚は景色寫眞としては左程拙いものではないと思つてゐる。



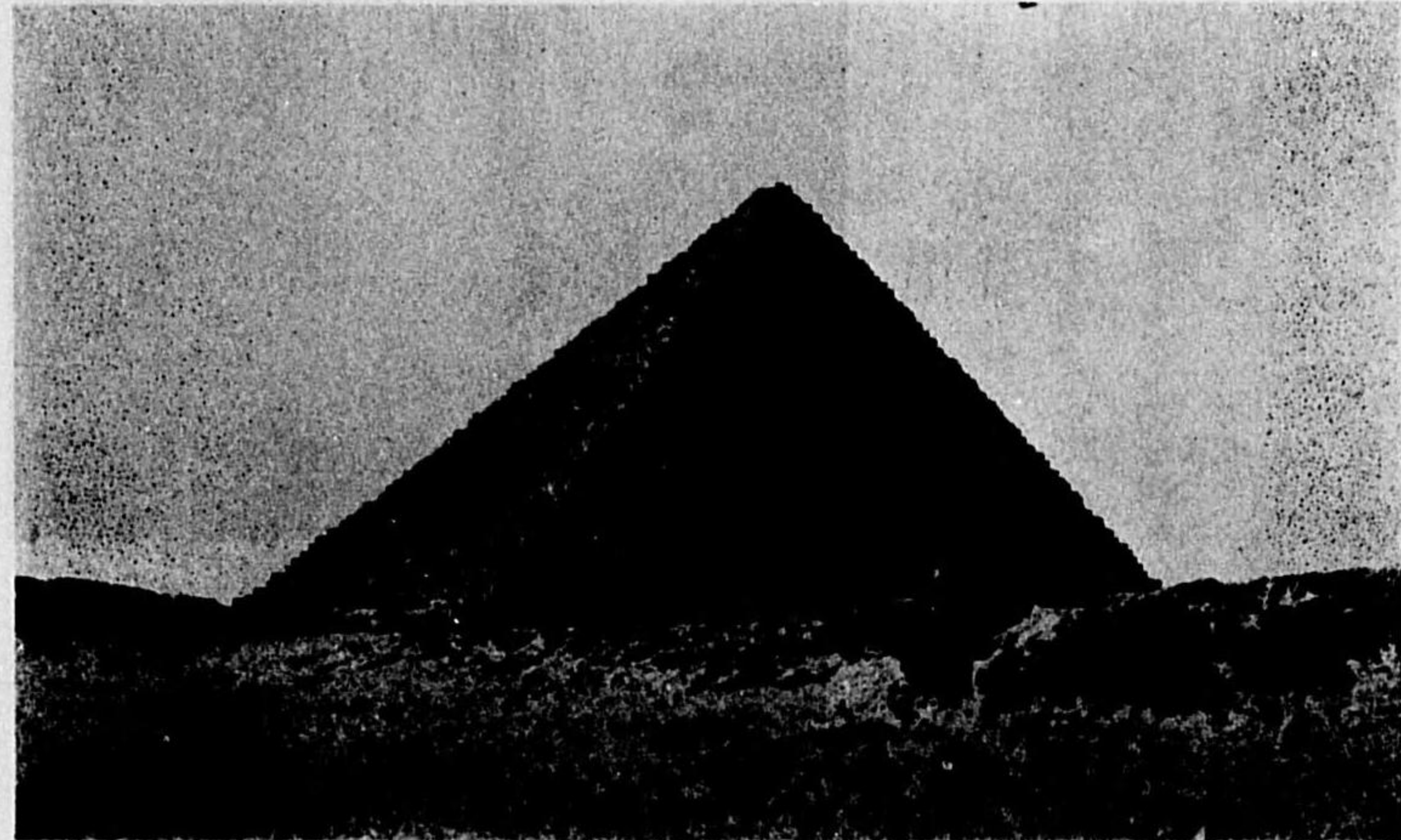
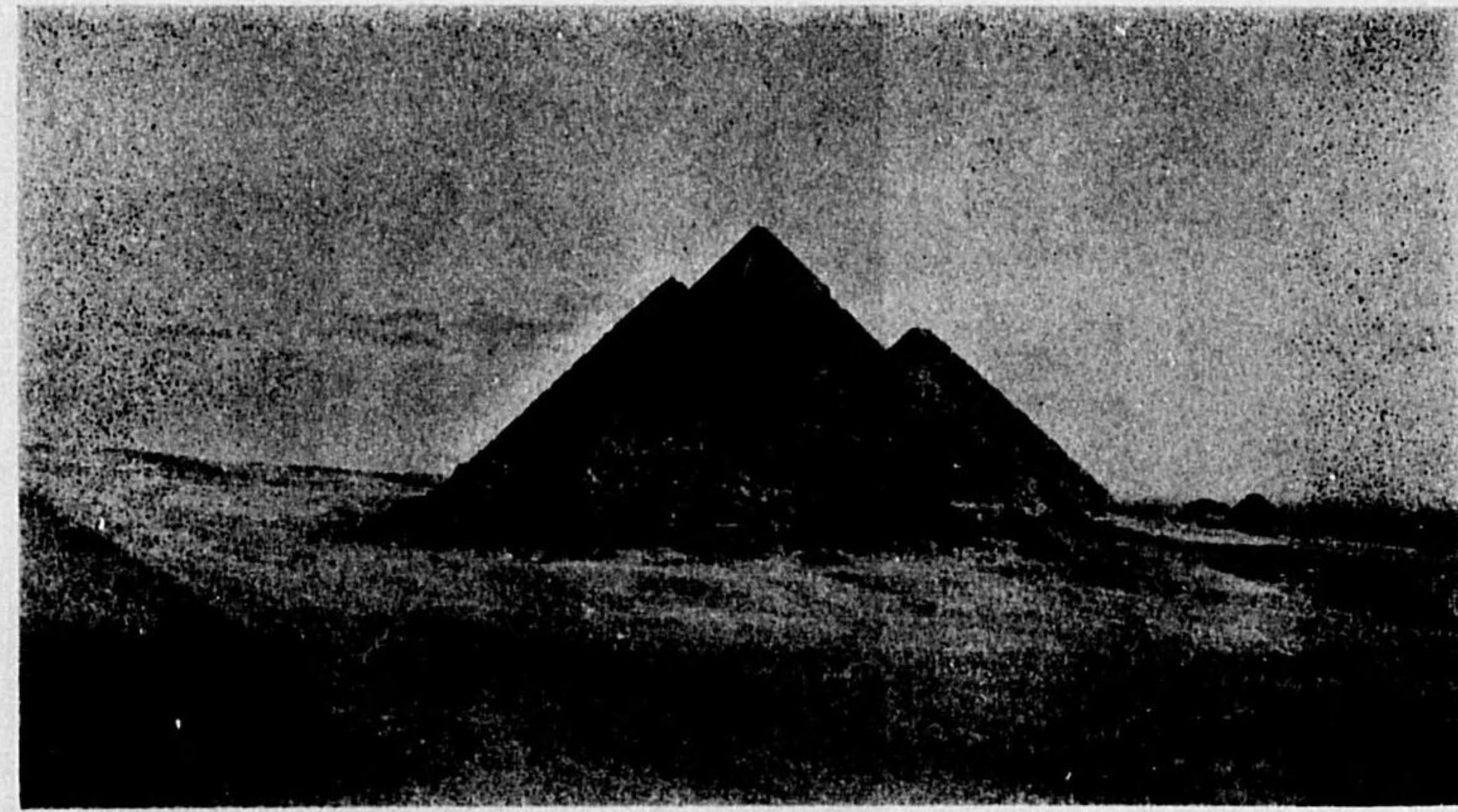


上、ギザの第三塔東側部分 其一（大正十一年十月十六日）

下、同 其二（昭和十年十月九日）

一三

第三塔の基部に近く當初化粧積に用ひた赤花崗岩が残っている。上圖は東側の一部と、東側の北端に南面してゐた半ば破損した石造の建築とを併せて寫したのであるが、其後この邊は多少整理せられ、幾分そこいらも片づいて下圖の様になった。即上圖右方の突き當りの建築の右から二本目の柱の様な石壁は、下圖に於いて人物がよりかかっている壁と同じものである。下圖をもう少し離れて寫せばよかつたのに惜しいことをして了つた。下圖右端に一部見えてゐるのは第二寶形塔の南面と北面との交會部。

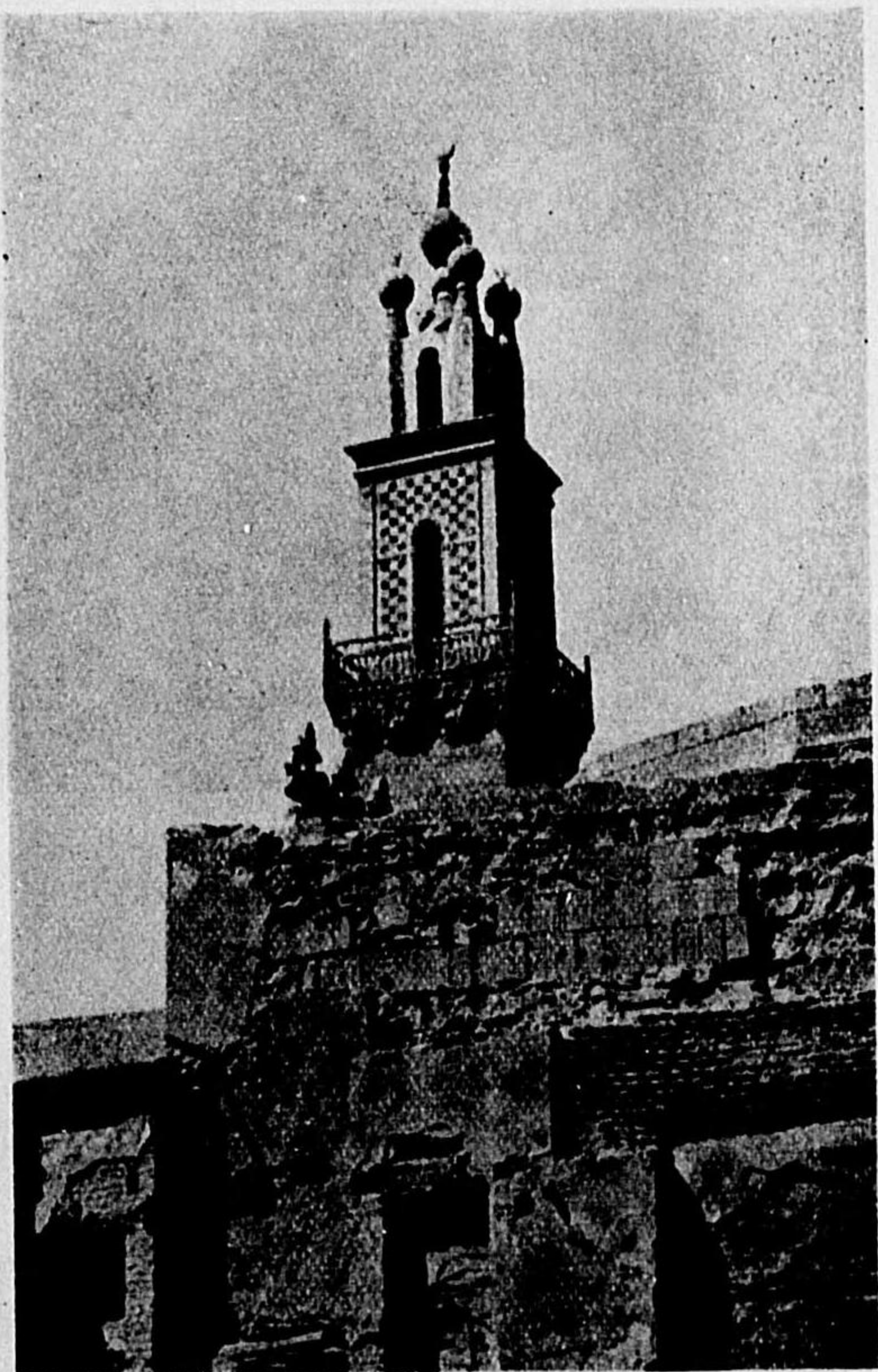


上、ギザの三寶形塔を西南方より見る（昭和十年十月九日）

下、同 第三塔を東北方より見る（昭和十年十月九日）

上圖は向て右から第一・第二・第三塔の順序で、前方の三小塔は第三塔附屬のものである。もう少し南へよつてとれば、この様に重ならなかつたが、夫では前回（大正十一年十月十六日）とつたのと同じになるから、態とこうしておいたら、夫が使用できぬ様になり、今ではこれだけになって了つた。下圖は第三塔即ち上圖最左端ので、頂上に人が四人登つてゐた。頂上の右方に、ごみの様に小さい黒點が見えるのが即夫。

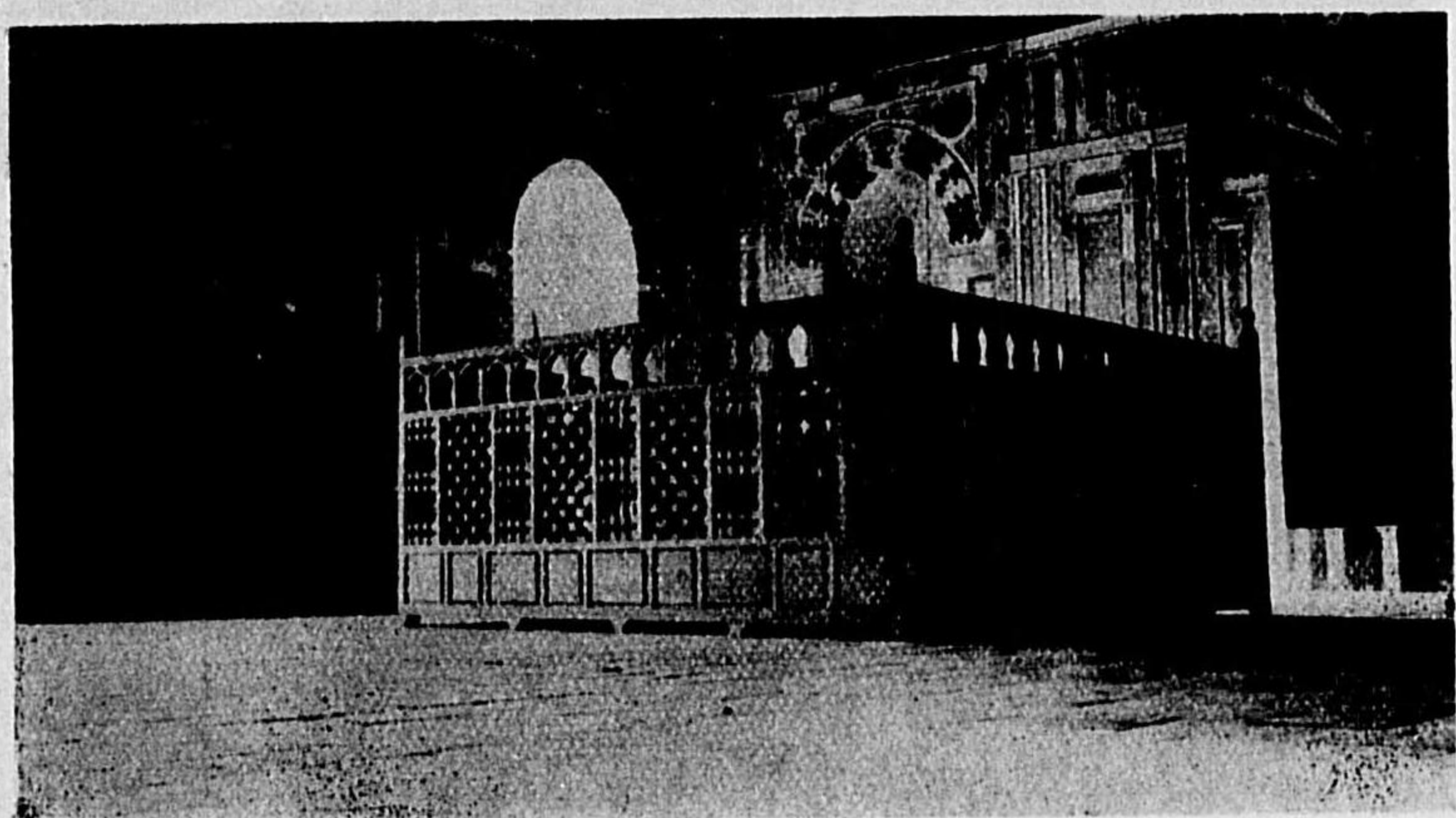
一三



上、開路市ゴウリ寺の光塔

(昭和十年十月十一日)

下、同 ソルタン・ハサン寺内ハサンの墓
上圖のゴウリ寺は創造は古いかも知れないが、現在の光塔は何度も修理を経てゐて、頗る新しいけれども、五塔式のところは面白いので、参考のため圖示しておいた。
下圖は有名なハサン寺内、ハサン王の墓。此寺の平面は十字形をなし、四腕のうちメッカに向つてゐる方に聖龕・説教壇等があり、其後方の室内に此墓がある。全部木棚に圍まれてゐて、墓其物は見えてゐないのは遺憾である。



一四

開路市に於ける最初の夕、モカタム丘で日没と月と美しいそらを同時に見た事は、印象殊に深く一生忘れる事のできない事實である。

十月十日 木曜・好晴

今日は昭和十年十月十日で、十の字が三つ重なる日である。私は歴史家でないから、其方面は全くの素人であるが、開闢以來十の字が三つ重なる日で、私の知つてゐる唯一の重大なる出来事であったのは、今をさる正に五七五年前、永祿十年十月十日であり、此日は松永久秀が東大寺大佛殿を焼いたのである。此時の大佛殿は建久六年に俊乗坊重源が當時初めて宋國より移入した新様式、今天竺様として知られてゐるところの、從來我國に行はれてゐたと全然異なつた様式をもつて再建し、衆庶をして驚異の眼を睜らした堂堂たる大建築を、一舉にして烏有に歸せしめたので、洵に困った事をしてくれたが、如何とも致しがたく、夫から寶永年間に現在の大佛殿が再建されるまで長い年月の間盧舍那の大像は雨曝しになつてゐたのであつた。これは十の字が三つ重なるため、學校で講義を聞いた時一度で暗記して了ふことができた。

敢てこの様な重大事件と比べて云云する次第ではないが、ただ序にかいた迄である。扱て今度の十が三つは私の一生にとって重大な日になつたのである。物の数でない微微たる取るに足らない程

度の人間のだから、出来事もまことに夫に相應しいので、よく似合つてゐる點が頗る興味がある。

即この日私は開路市にゐて、ツート・アング・アメン(ツータンカーメン) Tutankhamen, Tutankh-Amen, Tuth-enkh-Amun)の墓からの發見物の陳列を博物館で見、サツカラの段塔の傍から發掘された建築物を見學する事ができた最も記念すべき日になった。大正十年十月十日は倫敦にゐて外套を註文したり、トラファルガア・スクエアのセント・マルチン・イン・ザ・フィールズの見學をした。明治十年十月十日は私は僅に數へ歳二つの時で、これは別であるが、大正も昭和も十の字が三つ重なる場合は外國にゐるといふ不思議な因縁らしい。二度ある事は三度が事實なら、この次十が三つ重なる日は、特別許可を受けてヤマ・デバカプルトーの宮殿建築の細部を、折柄地のすき間からさし込んだ光線を利用して反射をかけ、漸く手に入れた^{3A}のロールフィルムで寫して、記念だといつて喜んでゐるのだらう。南無阿彌陀佛。

*

*

*

*

先づ博物館へ行つた。第一にラー・ホテップ公と妃ネフェルトさんの座像、次に村長さん、次に胡座した書記さんの前へ行つた。洵に平素は御無沙汰のみ仕り申譯無之、といった氣持で、ほんとうに久久で知人にあつた様な氣がした。さうして夫からツータンカーメンの遺物をみた。此王陵は先年私が坡西土から孟買へつき、上陸して間もなく發掘の結果が公表されたが、夫から随分有名になつ

たので、其時以來かいた繪や寫真でのみ見てゐたが、愈よ實物が見られるので多少の興奮は禁じ得られなかつた(『埃及紀行』第一、六三―六五頁)。私も相當に此等の發掘物に就いては豫備智識を持つてゐたつもりであるが、夫でも一つ一つ驚異の眼を睜ざるを得なかつた。此所に夫等を紹介し、記載する事はできぬから、總て専門書に譲り省略をする。但し一つ書いて置かうと思ふのは、此墓からブーメラングが見出された事である。

もつと他に書く事はいくらでもあるではないか、何だこんなもの、そんなに大騒ぎをするには及ばないぢやないか、といふ人があるかも知れぬが、私はこれに非常な興味をもつたのである。抑もブーメラング (Boomerang) とは濠洲の土人が戦争や狩獵に用ひるもの、長さ二尺位の中央を鈍角をなす如く削つた薄い木で、巧みに造り巧みに投げると再び投げた人の所へ歸つて來て其人の後ろに落ちる一種の飛道具であるが、夫と同じものが出たことで、如何によく似てゐるかを知らしむるため、現今オーストラリアで使用されてゐるものとならべて陳列してあつたのである。さうすると前¹³⁵⁰から後¹⁹³⁵(昭和¹⁰年)迄、精しく言へば³²⁸⁵年間、ざつと³³⁰⁰年間、少しの進歩發達もなかつたといふ事になる。この事實は例へばインダス河の流域なるモヘンジョ・ダロ所在の前³⁰⁰⁰年の遺跡出土の、當時用ひられてゐた荷車の模型が、現今印度に於いて實用に供されてゐる二頭曳牛車と全く同じである

* MOHENJO-DARO AND THE INDUS CIVILIZATION, VOL. III. PL. CLIV. Figs. 10, 11

のと好一對である。而もこの方は今を距る約5000年だから、此場合にも亦上には上があるものと心得べきである。

次に大にうれしかったのは、大正十年十月十五日この發掘物陳列室で初めて見た謂はゆる Royal Mummies が全部なくなった事であった。埃及の古帝國時代の大王であったラムセス二世 (Ramses the Gr.) を初め、王・女王・貴族其他が、無慘な顔をした木乃伊になり、猫や羊のそれ等といつしよく、箱入の儘陳列棚に並べられてあつたのを見たとき、何ともいへぬ心地になり、變な塊りが胸の中にできて、正視するに忍びず、早急に室を出て氣分を轉換すべくつとめた。どうも實にけしからん事だ。こんな不敬極る事をしておくと、今に自分のところへおはちが廻ってくると思つてねばならぬ。差詰英や佛は考ふべきであらう。ひどい事をするにも程度があると、大に田作の齒車を許を得なければ、拜觀ができぬ様にしてつた。一層の事舊陵に納め、上は國王より下は一般庶民の代表者が參列して、盛大なる慰靈祭を行ひ、古埃及帝國の建設者に敬意を表してはどうか。ツート・アंक・アメン王の遺物を陳列する場所がないため、こんな事になったのかも知れぬが、夫にしても永年曝物になつてゐたのを、有象無象の眼に觸れさせぬやうにしたのは結構である。さすがにツータンカーメン王の木乃伊は陵内の舊位置に安置してあるさうで、これは正にこうすべき



サッカラ道所見 (大正十一年十月十八日)

圖の様な原始的木製齒車を牛に引かせる。齒車は圖の如く取りつけてあるから、牛はいやでも圓を描きながら歩く。さうすると齒車は回轉する夫と直角に咬み合つて他の齒車が回轉する。其齒車にバケツの様なものが同じ方向に固定してある。だから第二の齒車が回轉すると其バケツに水が入り、汲みあげられ、同じところであけられる。其水は掘つてある溝に入り、流れて畑を灌溉するのである。この簡単な水を汲み上げる方法は、どの邊まで分布してゐるか知らないが、私は印度國ベシャワール市の郊外の、淋しい田舎の農家でもみた。

である。

午後はサッカラへ行つた。前回行つたから今度はやめるときめてゐたら、西土は連りに觀覽を勧め、新しい發掘ができてゐるから見る價値は充分にあると力説したので、思ひ切つて出かけた。今度も亦メムフキスの廢墟を通つたが、ラムセスの像も池中のスフィンクスも變りはなかつた。但し池水がひからびたり、近くに土人の家ができたり、米利堅の住宅とかいふ没趣味な四角なものが建つたり、それ位で他は元の通りであつた。

然るに驚いたのはサッカラの有名な段塔で、大規模な發掘事業が略ぼ完成し、いろいろな建築物や壁體の一部の様なものが出て來た。現在の塔が段形をしてゐるため、ステップ・ピラミッドの名を得てゐるが、北側の前の方は廣くなつてゐて、石灰石の皮が斜面をなして少し残つてゐるので見ると、初めから段段に積み上げられたものかどうか判らないと思つた。

ともかくも中央の段塔の周圍若干離れて壁體があり、其壁から更に控壁を積み出して丈夫にしてあり、外には周圍の殿堂の様なものがある。其柱には溝彫が一面にあり、ベニ・ハサン (Beni Hasan) やデイル・エル・バハリ (Deir el-Bahari) 迄行かないでも、立派な標本が手近に見出されてゐる(46—48)。其上ほんとうの胡麻殻決りをもつてゐる柱が、二十二本づつ兩側に立つてゐるのだから、合せて四十四本の柱をもつた殿堂が東南隅に發見され(44・49—53)、其兩側二十二本づつの外側には、更に方柱が行列してゐるが、前方の二列は皆同一の柱だから、つまり四柱式堂である。日本では漸く鎌倉時代の唐様勾欄の親柱に胡麻殻決りがある位で、あとは江戸時代にならなければ實例がないのに、埃及では随分古い時にこんな大きな、こんな立派なのがあるのかと、暫くは茫然として眺めてゐた。恐らく口を開いて間の抜けた顔をしてゐたのだらう。

以上が午後の見學の最も主なもので、其他にも收穫はあつたが省略する。全部を終つたら丁度太陽がリビアの沙漠に没する所であつた。同時にステップ・ピラミッドの中腹に月が懸つてゐた。ダ

ーシュールの腰折寶形塔も輪郭がはつきりと目立つてゐた。以上の光景は到底再び見る機會はないと思つてゐる。

大正十年十月十八日、案内人のサラーとこの邊を歩いた時、彼は私の鞆を下げて此寶形塔の傍を先に立つて行つたのを後から寫した。この時は段塔は單に段塔に過ぎず、下の方は全部砂に埋まつた儘であつたが(43)、よくもこの様になつたものだと、只管感嘆するより他はなかつた(44—53)。

十月十一日 金曜・好晴

金曜日は回教徒にとりては神聖な日である。だから博物館は8.0—11.30との事だから、昨夕西土に必ず7.45迄に來る様に固く言つておいたのに、やはり15分後れてきた。此頃は河海工學が進歩したから、加茂川の水はそんな事はあるまいし、山法師も居らないから其方の心配はない。そこで思ふ様にならぬものは雙六の骰子と埃及の案内人となつて了つた様である。

自動車は高價で贅澤過るから、電車かバスとあれ位いつておいたのに、まるで言ふ事をきかず、黙つて馬車を雇つて來た。馬車位ならさう大した事もなし、差支はないのだが、夫ならさうと斷はればいいのに、さうしないで勝手に雇つて賃錢だけ私に拂はせるのである。甚だ以てけしからん次第である。運轉手や馭者と連絡があつて、お互に金をもうけさせる事に内約束ができてゐるらしい。

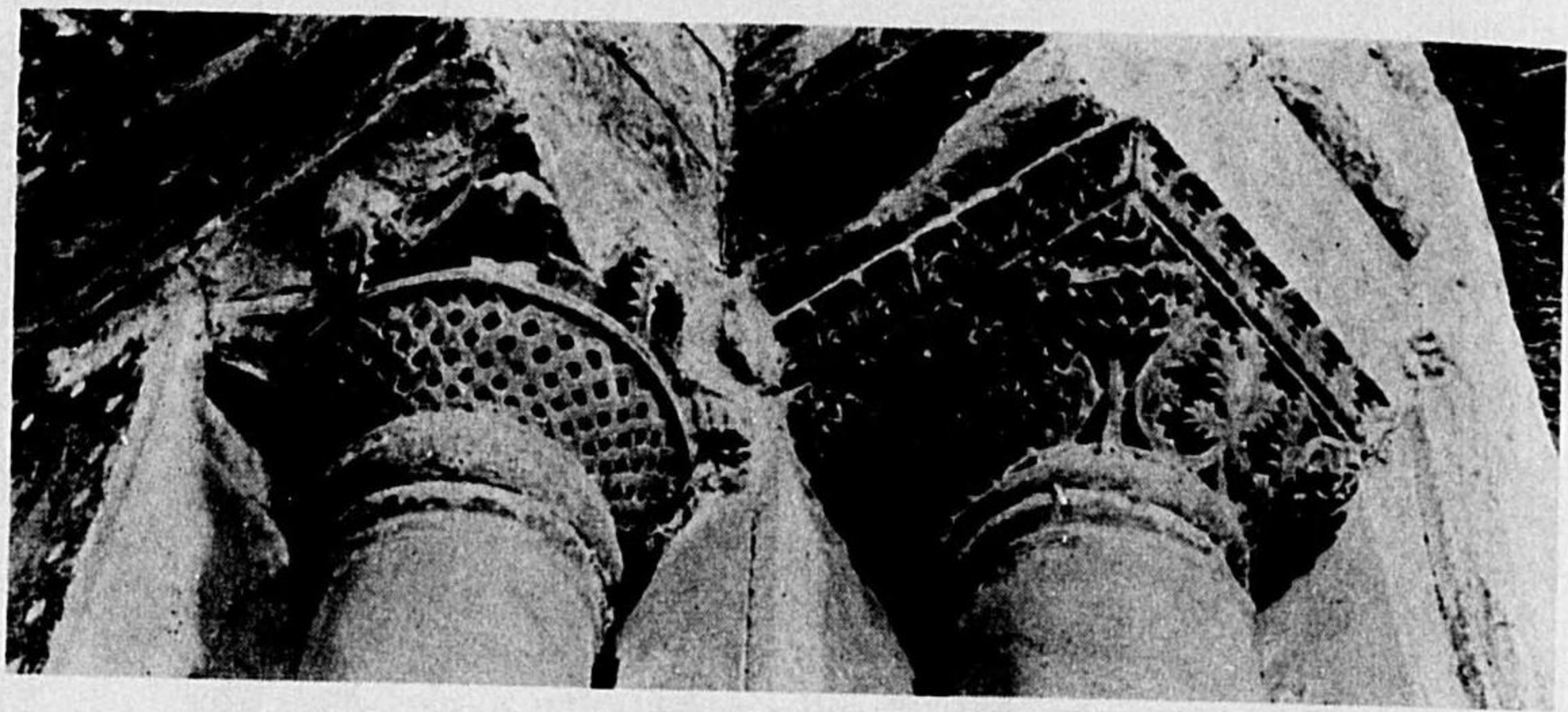
博物館は8.30—10.0で切りあげ、午前中暴夜博物館は開館してゐるといふので直に行ったら、扉はしまつてゐた。金曜日は休、これも西土にだまされた一つ。彼は知らぬ筈がない。怪しからん事である。どこ迄も金曜日が祟り、寺といふ寺は一つも内部の観覧ができなかった。仕方がないから市中を乗りまはし、ゾウエー門 (Bab Zouweleh) を出たら、左手即東側に其時修理中であつたが、特有名な上心四心拱が正面に行列してゐる建物が見えた。入って見たら中庭の東側だけが古く、あとは全部後補である所を見ると、どうもこれは謂はゆる第十二世紀のモスクであらうと思ふ(第三七頁上圖)。即本名タラエー寺 (Saleh Talayeh) らしいが、どうも遺憾ながらはつきりしない。その頃埃及政府は、開路市の市區改正と古蹟保存とに相當に力を盡したらしい。埃及考古局 (Archaeological Survey of Egypt) といふ様なものでもあり、そこでやつてゐるのかも知れない。恐らく佛蘭西あたりの指金であらう。暴夜人の智恵ではありさうもない。

午後(例により西土は五分遅刻) イブン・ツールン寺へ行き、光塔に昇り景色を觀賞した(口繪2—5)。此寺の東北側は民家を取拂ひ立派な芝生をつくり、綠樹等を植ゑて小公園の様にし、廣い道路ができて

* 上心拱・上心迫持。Sulted Arch. 半圓又は弧の中心が迫臺より上にあるものをいふ。

四心拱・四心迫持。Four centered Arch.

故に「上心四心拱」といふのは、拱が迫臺より高くあつて四心から成つてゐるものを指す。挿圖参照。



イブン・ツールン寺聖龕脇柱 (昭和十年十月十一日)

此寺は我が貞觀十八年着手、三年を経て落成したといふが、元より其ままでないのはいふ迄もあるまい。此等の聖龕脇柱は二本共東羅馬時代のもので、特有な彫刻の美しい柱頭をもつてゐる。尙ほ第一一八・第一四九頁参照の事。

しまった。だから以前に一ぱい民家でつまつてゐたのを見てゐたものには、面目が全然新しくなつたので、全く見違へる程美化してあつた。市中の光塔は何本となく見え、いつ見ても、何度見ても私の大すきな景色である。モカタム丘のエル・ギューシも遠景にはつきりしてゐた(口繪2—3)。元屋上にあつた小光塔も、後補でじやまになるせぬか、取拂つてあつたのは大によろしい(口繪2—3)。

次にソルタン・ハサン寺へ行つた。先年番人を日本語で怒鳴りつけた舊跡である。今度は——勿論先年の男ではなかつたが——金をつかまされたのか改良したのか、私一人勝手に見させて西土と二人で遠方で喋つてゐた。誰もゐないし、寫眞をとつてはいけないといふ揭示もないから、墓室に於けるソルタンの墓をとつた。墓は西南に向ひ、頭の方に板碑が立ち、擬寶珠型の柱が四方にあ

り、大理石製で、新しい木柵で圍つてあつた。だから寫眞には折角だが木柵だけが寫り、肝心の墓標はまるで見えてゐないが、めつたにない寫眞の一たるを失はないと思つてゐる(第一四頁下圖)。

ハサン寺を辭してから、隣のリファイエー寺 (Gami Rifaiih) へ入つた。新しいもの(大正元年落成)で大した興味もないが、序だから入つてもう一度みた。前回には氣がつかかなかつたが、王の墓といふものがあつた。イブラヒム・パシヤ (Ibrahim Pasha) (當時の埃及王の父)・his mother・and his three wives ので、當時の王は Son of the first wife だといつた。私は夫等の墓標が單にセノタフであるか、或はさうでないか、はつきり知らないし、今知り度いとも思つてゐない。其上に餘りに端近かで安値で、甚だ以て工合がよくないやうであるが、回教國ではそんなものかも知れない。案内人が敬意を表するどころか、持つてゐる杖で指しながら、一つづつ順にイブラヒムパシヤから始め、ヒズ・スリー・ワイブズで終つて、さうして私の顔を見て笑つた。埃及國に生れないでよかつたといつづく考へた。

上埃及の旅行を、其頃大割引で募集してゐた。其割引は大分有利で、既に坡西土で南部さんからも、その方がとくだから、申込む方がよからうと注意された。アスアン往復 10 days and 9 nights, 5 10, 100 といふのを、熟慮の上で申込む事にした。十三日夜發二十二日歸着とすると、丁度十日

(日本式に出發の日は夜だけれども夫を一日に見て)九夜となる。故に埃及國有鐵道の當局は文句はない筈である。宿屋で取扱ふといふので、番頭に頼んだら手数料を要求した。物質文明を誇る白化ホモの癖に、暴夜人や奴比野人等と永年一緒に暮すと、バクシーシユは請求すべきものと考へる様になると見える。

十月十二日 土曜・好晴

遅刻常習犯の西土に、此朝は必ず8時に來る様にいつておいたところ、確かに來たが若い男が一緒について來た。曰く、これは自分の助手だが、今日はどうしても手がぬけないので、すまないが此男を連れて歩いて貰ひ度い。見ると典型的の暴夜の若造で、相不變蟲のすかない顔面だが、仕方がないから我慢する事にした。

第一に舊城砦を巡つてカリフ墓の方へ行けといひ、其通りに實行した。カイト・ベイの墓寺からソルタン・バルクック廟の方へ歩いた。總てこの邊は前回の復習で、反對の方から逆に歩いてみたのである。今度は圓蓋の意匠の異なる廟墓の寫眞を少しばかりとつて見た。29から36に掲げたのが夫等であるが、30・31の様な波線文は至極簡単な方で、時に36の如きよくもこれだけに造つたと思はれる様なものもさう珍らしくない。折あしくバルクック廟は大修理中で、落成したら立派にはならうが、推定復原の個所も相當にあるらしかつた。殆んど到る所一ぱいの足場で仕方がなかつた。

先年よくあれだけ寫眞をとつておいた事だと思つた。いつもさうだが、此時も寫眞はとれる時できるだけとつておかなければならぬものと思つた。併し東側の兩端にあるバルクック及び妃妾墓の出入口の仕切に用ひてある格子は、37に其一部を示した如き特殊のもので、ここは幸に未だ修理をする程でなかつたせいも、別に足場もかかつてゐなかつたので、この様な寫眞ができたが、この寫眞は丁度以前に『埃及紀行』第六一頁に掲げたものの詳細圖として役立つのは幸であつた。

カリフ墓を切りあげてからエル・ハキム寺へ行つてみたが、ここも亦修理中で、もう一度登つて見ようと思つてゐた塔も駄目。リーワン(Liwan, Leewan)の壊れた所だけ見て早急に退却、晝食のために歸宿をした。

午後はモスクをできるだけ見る事にした。エル・ムアイヤドへ行つて聖龕の寫眞をとつたのも此日であつた(4—5)。案内人は回教大學だけで歸らうといふ。するい事夥しい。いけないといつてブルデイニ(el-Bourdeini)といふのに行つたところ、これは實に小さい寺であつたが、内部に階廊があり、其裝飾がやはり鐘乳式になつてゐた(18)。

6.0に西土が宿屋に來て明日の豫定を尋ねたから、Mouristan Kaloun と en Nasir と Abu Bekr Mazhr el-Ansari とが午前、Kait Bey が午後といつておいた。三番目のアンサリ寺は前回サラーム知らないといつて随分探し、こんな所へ來た事はないといつたが、西土も未だ見た事がないとい

つた。職業的案内人はいつもこれで困る。無理に行けといふと、仕方なしに行くには行くが、勝手に案内人が案内人を雇ひ、其賃錢をこちらに拂はせるのである。

十月十三日

日曜・朝好晴・雷鳴

西土は吉例により10分遅刻。最初にムアイアド寺へ行く豫定を變更してキスマス・エル・イシャキといふ寺へ行つたら、番人も何も居らず内部の觀覽不能につきムリスタン・カラウンへ行つた。其隣りのエン・ナシル寺もあいてゐず、仕方がないのでアンサリ寺を漸くさがして行つて見たらやはり駄目、引返して俗名「製本師の家」へ行つたが、これは大に氣に入つたから充分入念に見た都合がついたらもう一度ゆっくり見たい位、まことに面白いものであつた。窓といふ窓にはすべてマシユラビエーが嵌め込んである。いくらゆっくりしても見あきることはない(20—26)。

* 開路市には、エン・ナシルといふ名の寺は二所ある。一は城塞にあって Mosque en-Nasir と云ひ、西紀一三二八年(文保二年)の創立で、他は市の東北、ハキム寺の西南約六〇〇メートルあり。Mosque of Mohammed en-Nasir 又は Madrasah and Tomb of en-Nasir と呼び、其創始は二説あるものの如く、一は西紀一二九八年(永仁二年)とし、他は一三〇三年(嘉元元年)に遡り得るといふ。私は今何を是とするか判断し得ないが、ここに見學を希望したのは後者の方で、マテカには「……now almost a total ruin」とあり、正に其通であるが、聖龕飾漆食の様子が特に傑出してゐる(9・10・11)。

** House of the Bookbinders. 本屋 House of Ganāl ed-Din ez Zahābī. 西紀一六三七年(寛永十四年)創建といふ。

*** Mshrabeyeh (Arabic, *sharab* = a draught) 20—24等に見る様に非常に手の込んだ格子細工で、窓・出窓・市街家屋の正面の一部・飲用噴水等に用ひられるのである。埃及に限らない、ネバル國首都の市街家屋の窓等にも普通である。

此をすまして露地の様な細い道を出たら、漸くといふところで葬列の横腹に突當った。だから自然其後へつく事になった。此葬列は狭い割合に繁華な通りのゴツ、タ返しの中を、土耳其帽の五列側面縦隊が、丁度お練りの調子でのそりのそりと行進を續けるのだから、それは實にゆっくりで且つ通り一ぱいに廣がつて歩くのを、巡查が見ても知らん顔をしてゐるし、先以て開路あたりでなくては見られない圖である。

併しいくら芋蟲毛蟲でも、はさんで捨てない以上、時が來れば自然に蛹になり、更に其ままにしておくと羽が生へて飛び出す様に、さすが泰平の逸民の集りの様な五列側面縦隊の土耳其帽の行列と雖も、漸次前進してイシャキ寺を過ぎたので、今度は番人も出勤してゐたから内部をみるべく入った。寺全體としては往來へ跨つてゐて面白い。併し内部は割合につまらなかつたが、其聖龕の曲面をなしてゐる部分のモザイクは、模様としては大したものとは思はないけれども、意匠に東洋的のところがあり、技巧も亦精巧を極め、大分氣に入つたので6に大きくだしておいた。

昨日見て寫眞をとつたが、今日も午前中もう一度ムアイヤド寺へ行つた。午前は實によく西土が世話をしてくれた。遅刻の常習犯人だが、それはそれとして此日は有難い事だと思つた。昨日來た助手だといふ男であつたら、到底こんな能率はあがらなかつたであらう。

午後はイブン・ツールン寺の先のカイト・ベイ寺へ行つた。内部に入つて聖龕や説教壇の寫眞

をとつたりした。4時が少しすぎたので氣がせいたから歸る事にした。これだけゆっくり見れば、これ一つでも充分満足せねばなるまい。

案内人に金を拂つたので相場が判つた。寺では大概寫眞をとるので、心付が7ピアスタ、馬車は終日で60に心付が10で合計70ピアスタ、案内人の雇賃一日60ピアスタ、といった工合である。右のうち案内人の分は前回(大正十一年)の時は50であつたが、10値上げでこれは前から承知してゐたが、寺の7や馬車の70は先方の申出通りで、おとなしく拂つてやつた。當時の相場は馬車の70が邦貨約11圓だから寺心付の7は1.1圓といふ割合になる。生やさしい事ではないのである。

7.10に室を出て驛に向つた。先刻から稻光りがして神鳴が騒がしかったが、雨が降つてゐたことは出がけに初めて氣がついた。埃及國に雷雨は珍らしいさうである。

汽車の寢臺は前回より大變によくなつた。何にしる一人室で電燈は勝手な時に勝手に消せる。一つの點滅の取手を上中下する事により、青いやうな紫色の光りが天井の近くに薄ぼんやりつき、或は消えてまっ暗となり、或は明るい煌煌たる白熱電球がついたり、其他裝飾でも器具でも、さすが一夜もH. 1.30 = Y 22.50 とらふべし、ポー、ポーな料金をとるだけあつて、價値は充分にある。其寢床へ横臥して大に優越感を覺えた。

然る所、得意になったのは束の間で、消燈後暫時にして一大事件が突發した。朝鮮三十一本山の一なる〇〇山〇〇寺の僧坊の客室を初め、朝鮮所在隨所の寺に於けると同一の事件で、例の奴がゐたのであつた。多年の經驗でゐたなと直感し、電燈を全部つけて検査し、敷布についてゐた偉大なる奴を發見して直に仇討をやつた。さうして靴から要意してゐた今津の蠅捕粉を出し、白布や毛布に一面に散布してねた。印度の田舎のバンガロー等には、何があるか判らないので、さういふ所で用ひるつもりで、日本から持つて行つたものだが、坡西土をたつ時萬一の場合を考へて持出して來てよかつた。Egyptian State Railway と銘を打つた堂堂たる Wagon-lit の敷布には、ピンデの♀がゐる時もある確證を得たのである。

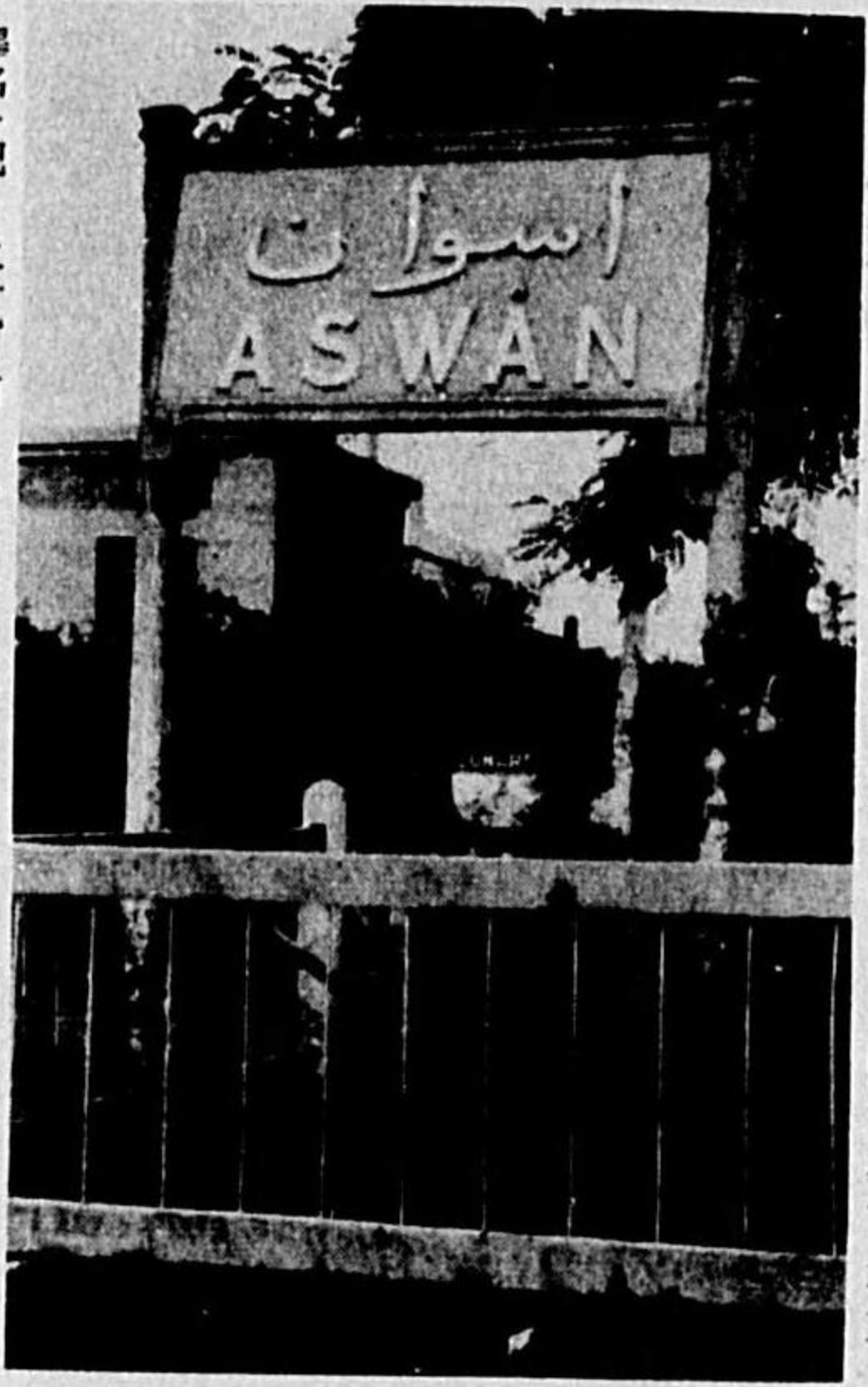
翌朝起きてから室の鈴を鳴らしたら相當の年齢の男が出現した。列車給仕かも知れないが、或は車掌らしくもあつた。純白であるべき筈のがピンデの♀の亡骸と、そこいら中一面に今津蠅捕粉のため大分汚らしくなつた敷布をつきつけ、昨夜はベッド・バッグのためひどい目にあつた。運輸課へ申告はやめておくが、開路驛へ歸着したらこの寢室はすっかり消毒をしておかないと駄目だといつたら、夫でも神妙にどうもすみませんでしたといつて、敷布を抱へて退却した。

去年の今日、即昭和九年十月十三日は神角寺へ行き、圖録の材料にするため盛に寫眞をとり、夜は別府から同行された故日翁と共に寺の庫裏へ一泊した思ひ出の日である。

坡西土の南部さんから前前日電報、前日クックで作らせた宿屋の宿泊料金及び汽車賃の概算(バルの一角及び小亞細亞方面旅行の)を都ホテル宛に送つてくださったに對し、此日最後の決定の返事をだした。希望してゐた亞細亞土耳其のコニア(Konia)の宿は不明で、クックでは全然連絡がないらしく、又アレツポ一(Aleppo)のも判らぬと見えて、宿の名も書てなかつた。ベデカのシリヤ・アンド・パレスティン案内書は持つてゐなかつたので、斯くては不安極るから、いろいろ見度いものはあつたが、斷然やめることにした。

(昭和十六年四月二十五日稿了)

アスワン 碑立札



昭和十年十月十五日

譯名を記した立札は可なり面白いので、あちこちで集めて来た。埃及ではエ
ル・シエールのを盗さうと思つたが、惜しいことによる事ができなかった。

坡西土から坡西土へ
(續埃及紀行) (第二回)

續埃及紀行

十月十四日 月曜・好晴

昨夜上埃及行夜行列車の豪華なる寢臺車の純白な敷布についてゐた偉大なる♀の南京蟲を退治した後、今津の蠅捕粉を振り蒔いたお蔭で安眠ができた。夜中に一度眼がさめたので、起上つて窓のガラス戸をあけて見たら、いい月で内流河は眼の前を靜に流れてゐた。^{6.40}ラクソル驛着、打合はせておいたのでムスタファが来てゐた。彼は一塊の名刺を渡し、見てくれといったから、汽車中で一通り眼を通した。日本字が讀めないから、自分では好評のみだと思つてみせたのであらうが、随分ひどい事をかいてあるのがある。勿論その通りであるが、この邊へ來ては最早致し方がない。金錢上の事を云云したつて、夫は考へが異なるのだから駄目である。つけがけ等は彼等としては謂はゆる尋常茶飯事で、決して不都合でもなければ怪しからなくもない、否寧ろ當然すべきと考へてゐるのだらう。若しこれ等の人がヘメダの様な男につかまつたら何といふだらう。

ラクソルから先は「イスナ」「エドフ」「マハミッド」「コム・オンボ」等の大驛へ停車をしたが、エドフとコム・オンボとは埃及式に改築してあつた。此は此頃各國でやり出した事で、大變によろしい考へである。然るに我國だけはいつ迄たつても思ふ様にいつてゐない。我國の歴史的建築は、鐵道の停車場に不向だから止むを得まいが、夫にしても細部位はいくらでも加味できる筈である。いつ迄たつても米利堅のセメント建築の糟粕のみを嘗めてばかりゐるには當るまい。尤もたまには細

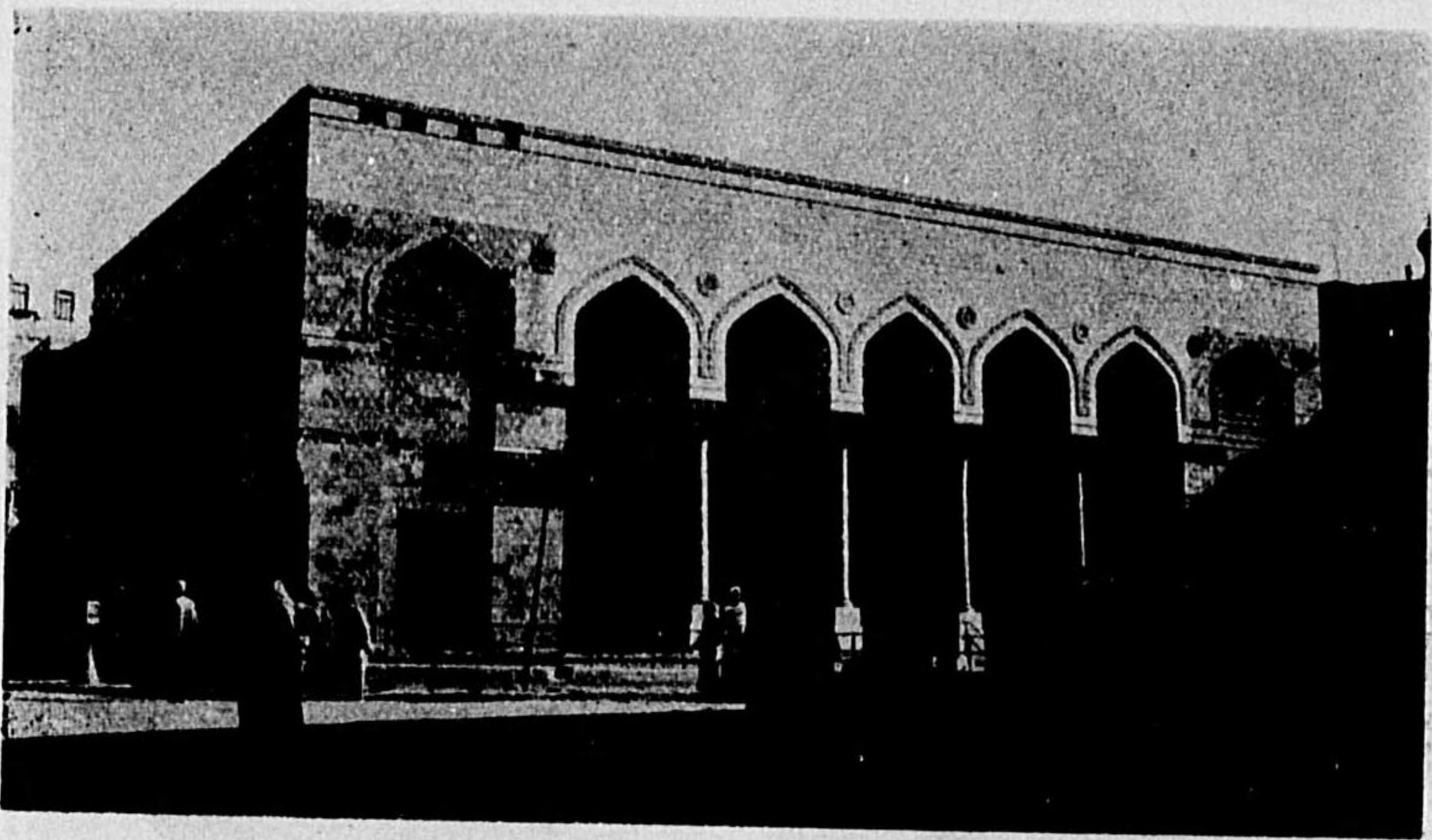
部をとり入れたのがなくもないが、大部分は研究が足りないから、拙い江戸末位のを喜んで入れてゐる。急場の間に合せに圖版位を見てやつても、そんな附焼及ではものにならない。所詮虎を描いたつもりでも、猫に類するのは上等の部で、何ともわけの判らない鶴類似のものができてゐるのである。命令を出す側では勿論何も知らず、命せられた側では圖版が唯一の虎の巻といふ心細い状態の下に設計施工されるのが多い様であるから、こんな風ではいつ迄たつても駄目である。現在我國所在の日本を加味した公共建築のうち、遠方からみるか、繪葉書位でみるかしておけば無難だが、そばへよつて細部を點検しても、批難のないものを列舉せよといつたら、列舉どころか一棟だつてむづかしいであらう。そこへ行くと外國には敬服させられる様なものが相當にある。いつになったら我國に於ける古建築の細部を巧にとり入れた新建築ができるであらうか。これは其建築に従事する技術家が細部の曲線の意味をよく研究し、夫を應用する様にならなければ駄目である。圖版と首つ引ばかりしてゐたのでは、寧ろ百年河清を待った方が早く埒があくかも知れぬ。

議論はやめて旅行記に戻るが、豫定通りアスワン驛(へ4)に着いた。驛からだと同泊つた聖ゼームス・ホテルから少し先のグラランド・ホテルといふのへ行つた。名實件はず、名も平凡だし、あ

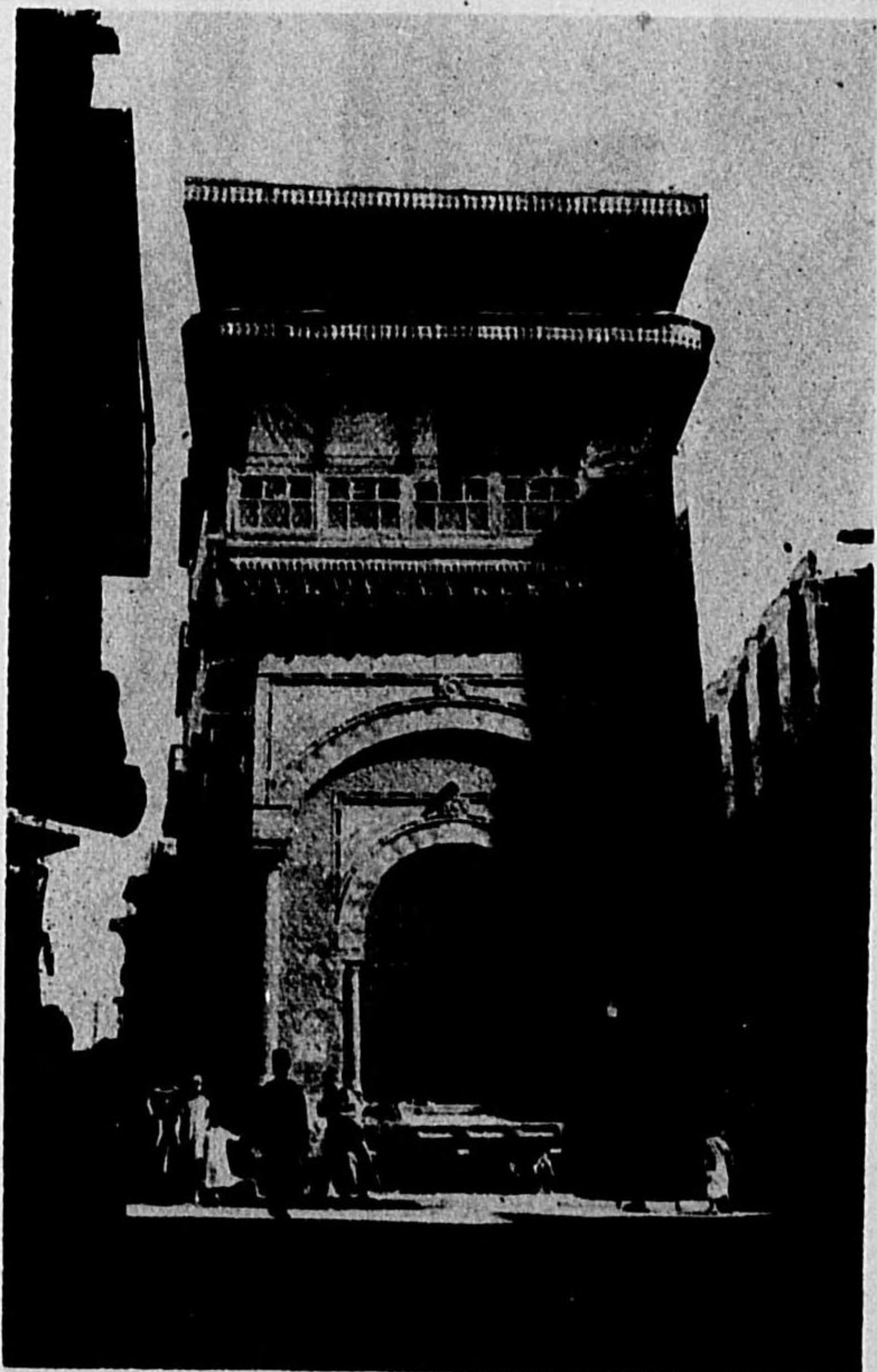
* ヘメダといふのは、前回上埃及旅行の際、開路市のクックで雇つた案内人で、總ての點に於いて不都合極つた。ラクソルで解雇してムスタファに代へたのである。

らゆる點に於いてグラウンドではない。前日迄休業してゐたが、此日から營業を始めたとの事で、部屋も三室位しか掃除がしてないさうである。さうすると其年の好季節の初客となつたわけだが、隣室には同じ汽車で來た異人が一人泊つてゐる。此男は動作が粗野だからすきでない。一夜で歸つて行けばいいと思つてゐた。

屋上へ出て景色を眺め、前に見える象嶋の景を左端か右端へ續きものにして寫した。これには面白くなるだらうと考へた。併し出來てみたら左程でもないが、記念だから口繪10—13に掲げておいた。何しろ暑い事は夥しい。寒暖計をもつて來ればよかつた、ただ暑いだけでは見當がつかない。先づ入浴——といった所で湯なんか出ない。Hは飾りもので役に立つのはCだけ、換言すれば水浴——を試み、肌着を洗濯して戸棚の内に吊しておいたら一時間ですつかり乾いた。十月十四日で此暑さだから、夏だったらたまるまい。素裸の黒ん坊ばかり住んでゐる筈だと思つた。勿論亞細亞人が人類正常の皮膚色と考へなければならぬ、さうすると歐羅巴に住んでゐる人間が「白化ホモ」といふ事になる。さうするとこの邊に「黒化ホモ」の居るのは當然過る位當然になるのである。蝶類等でも春型には絶対にないやうだが、夏型には翅の黒化したのがよくある。熱と黒色との關係は、古往今來洵に歴然としてゐる。だから人類の場合だつてこれと同じ理窟が成立つてであらう。成立たなくともそこは素人だから大した問題ではあるまい。



續埃及紀行



上。開路市サレー・タラエー寺正面
下。同 アブデル・ラーマンの噴水

(昭和十年十月十一日)
(昭和十年十月十一日)

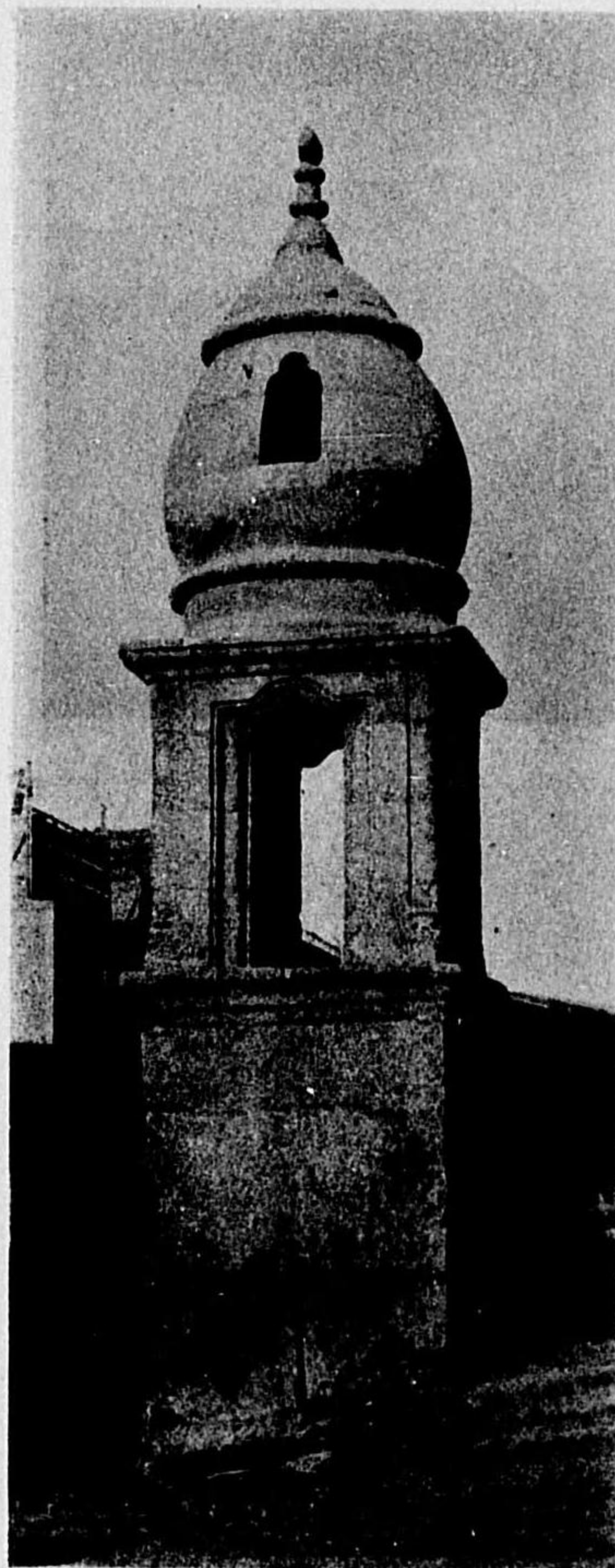
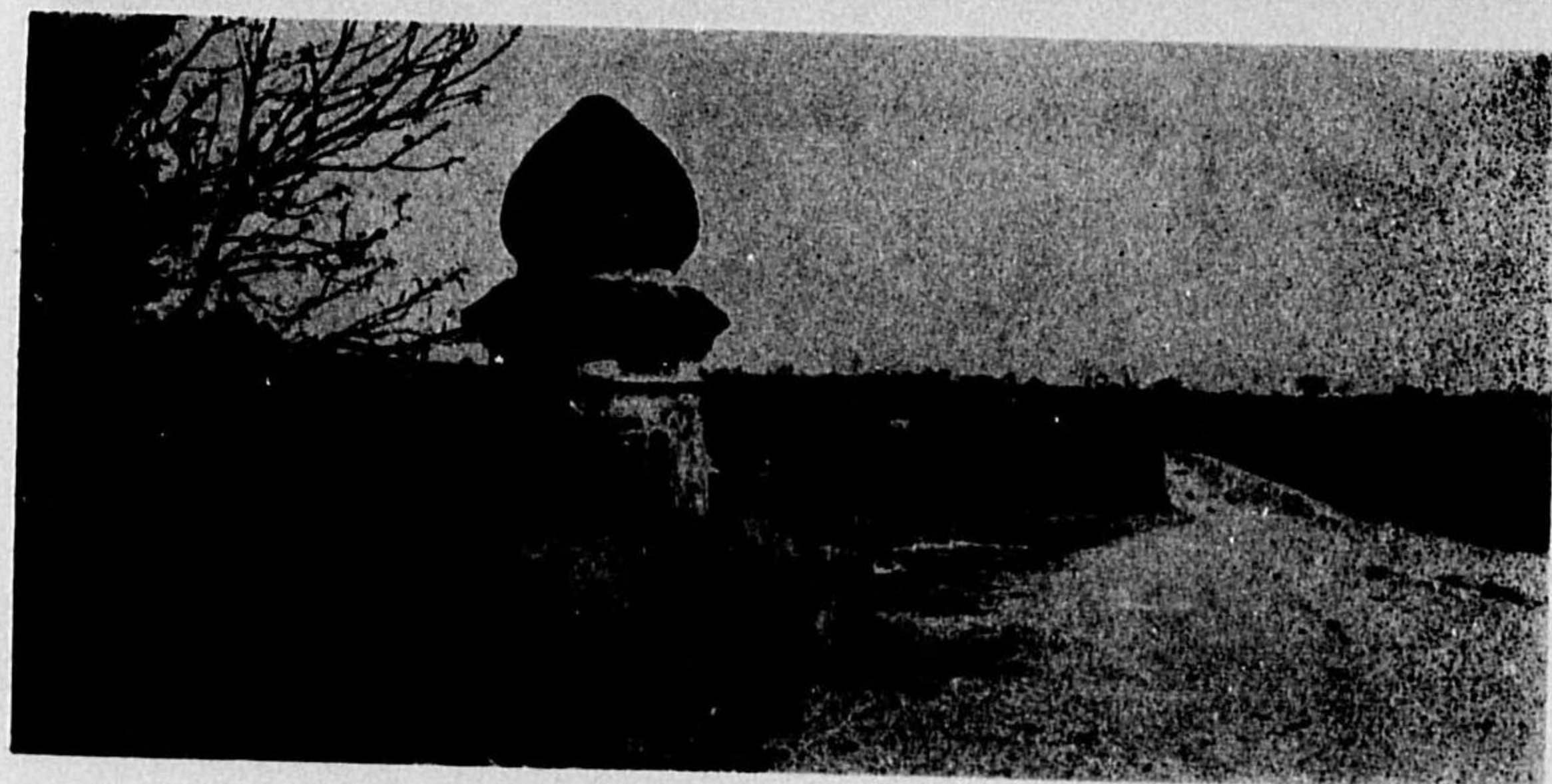
正面は殆んど全部推定復原らしく、古いところは中庭東側だけの様に見える。大修理中で寫眞のとり様がなく、止むを得ず正面だけとつたのが上圖。
開路市(ばかりではないが)には所所に飲料の噴水がある。下圖は其一で町の交叉點にある。Sebil Abd er-Rahmān といふ。階下は配水室、上層は初等學校になつてゐるさうな。此噴水は開路市所在最美のものの一で、第十八世紀の創始といふ。



上、カトマンヅ市ツクチャ川の橋の親柱の一
 (昭和十一年三月二十日)
 中、カトマンヅ市郊外バゲマチ川の橋 其一
 下、同 其二

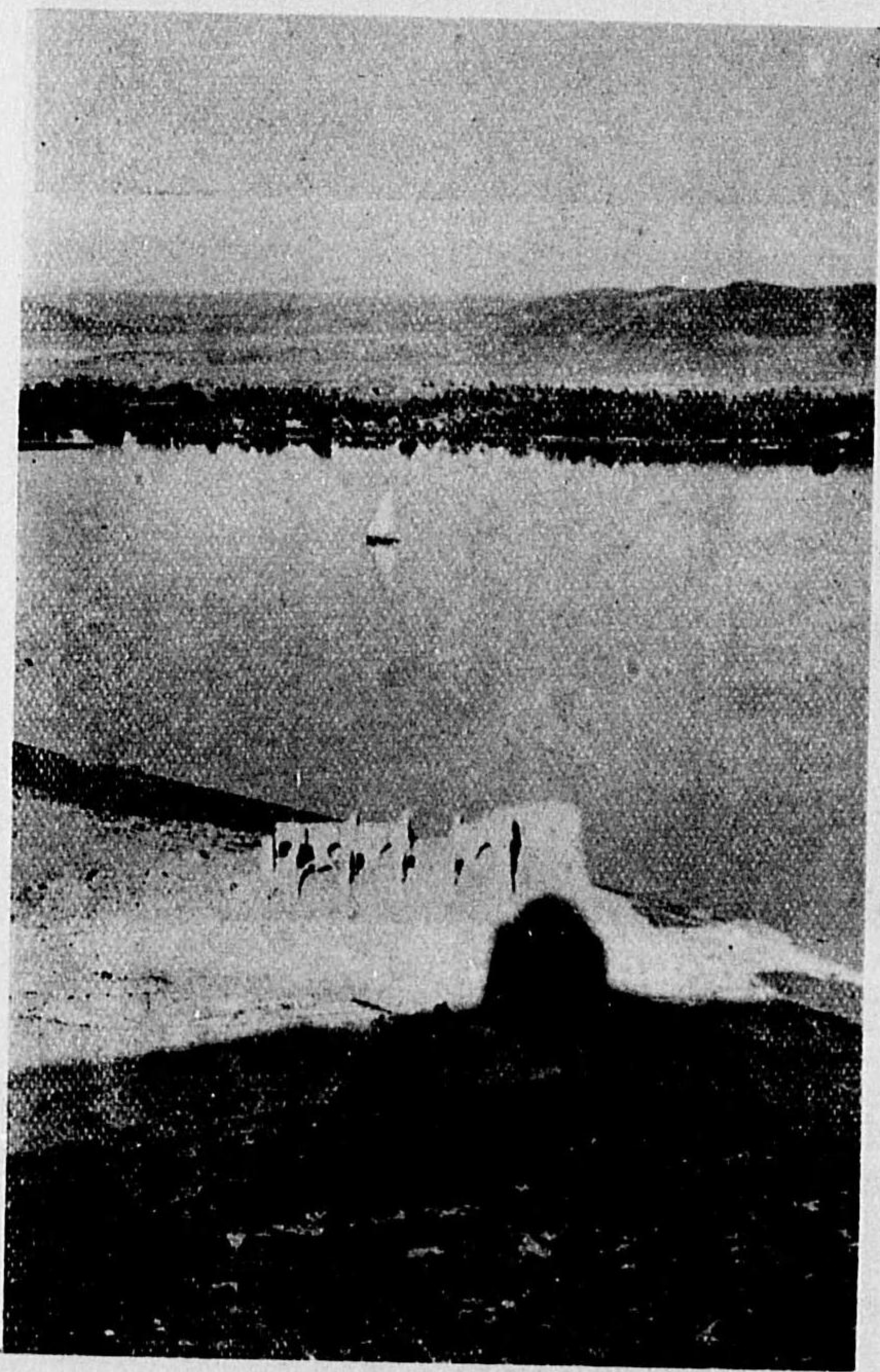
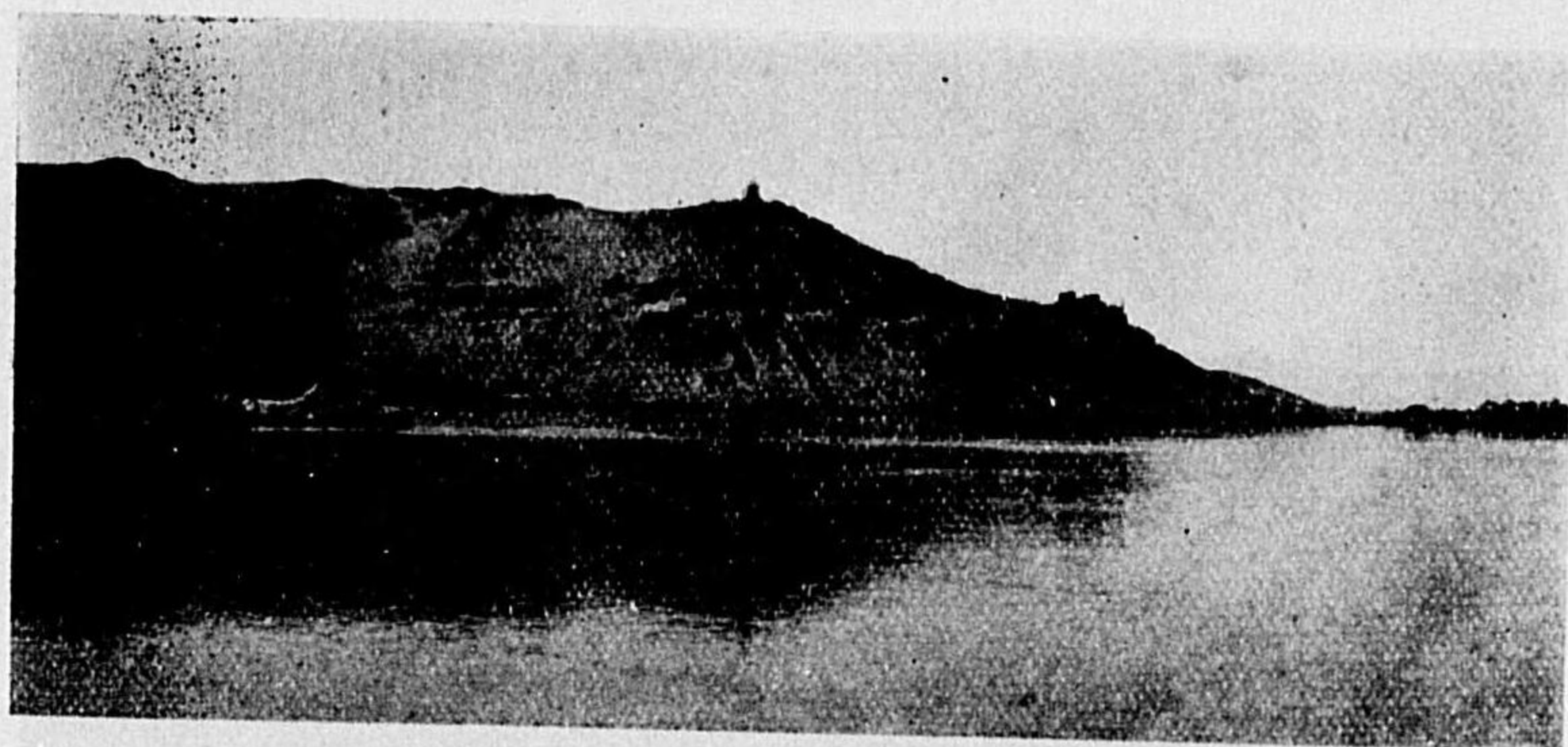
開路市の比べると、規模に於いては大差があるが、ネパ
 ル國首都カトマンヅのある橋の親柱の如きは、傍の人物と比
 較しても判る様に實に大きく、軸部は方形で、盲連子の裝飾
 窓(?)があるのは面白い。この上圖に比して、中・下圖は同
 様偉大であり、これは軸部が圓形の平面である。何れも單に
 裝飾であらうが、大に風致を添へてゐる。

續埃及紀行



右、開路市城壁門の一の勾欄親柱 其一 (昭和十年十月十一日)
 左、同 其二 (昭和十年十月十一日)

開路市城塞附近にある門の一にバベル・ゲチッド (Bab el-Gedid) といふのがある。
 其勾欄の親柱はここに示した兩圖の様に、夫自身が小回教建築の如く、まことに面白
 くできてゐる。後に印度國グワリヤ市 (Gwalior) の回教徒の墓の前になつてゐた石
 燈籠が、稍や此に類してゐて、やはり一つの小建築の如くであり、大に興味を惹いた
 が、後者は數種類があつたのに、開路市のはここだけで、
 他には見なかつた。次圖と比較せよ。



上。シエークス・ツーム遠望
下。シエークス・ツームより對岸遠望
アスワン市グランド・ホテルの屋上から、内流河を隔てて對岸のシエークス・ツーム (Shai
k's Tomb) を見たのが上圖。其中腹の横線は窟墓のある所で、河岸より夫に向へる二本の線は
石段。下圖はシエークス・ツームから對岸即アスワン側を見たところ。下方黒い凸字形の陰影は
其影。ここから雪花石膏伐出場は強烈な日光を受けてはつきりと見える。

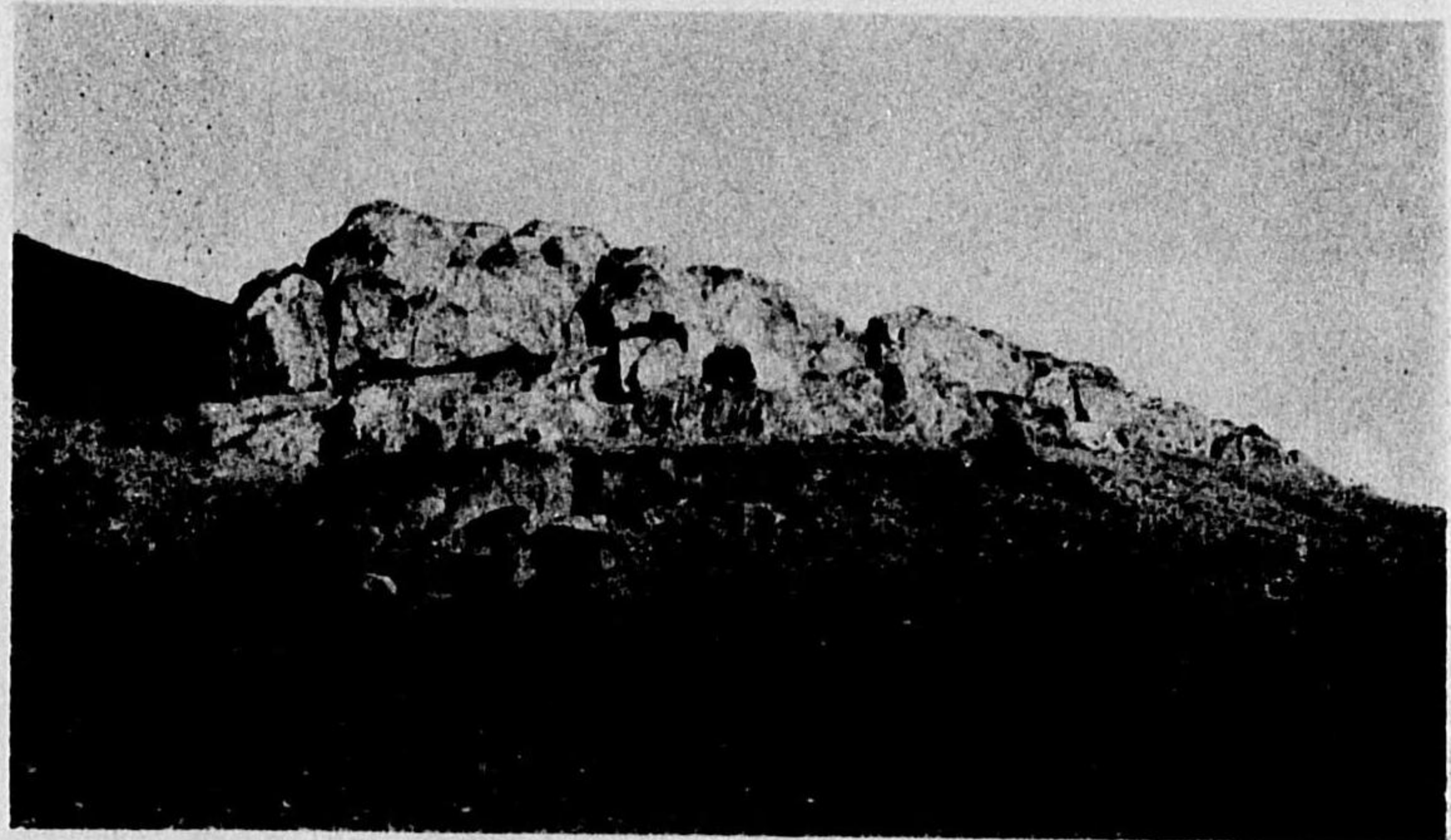
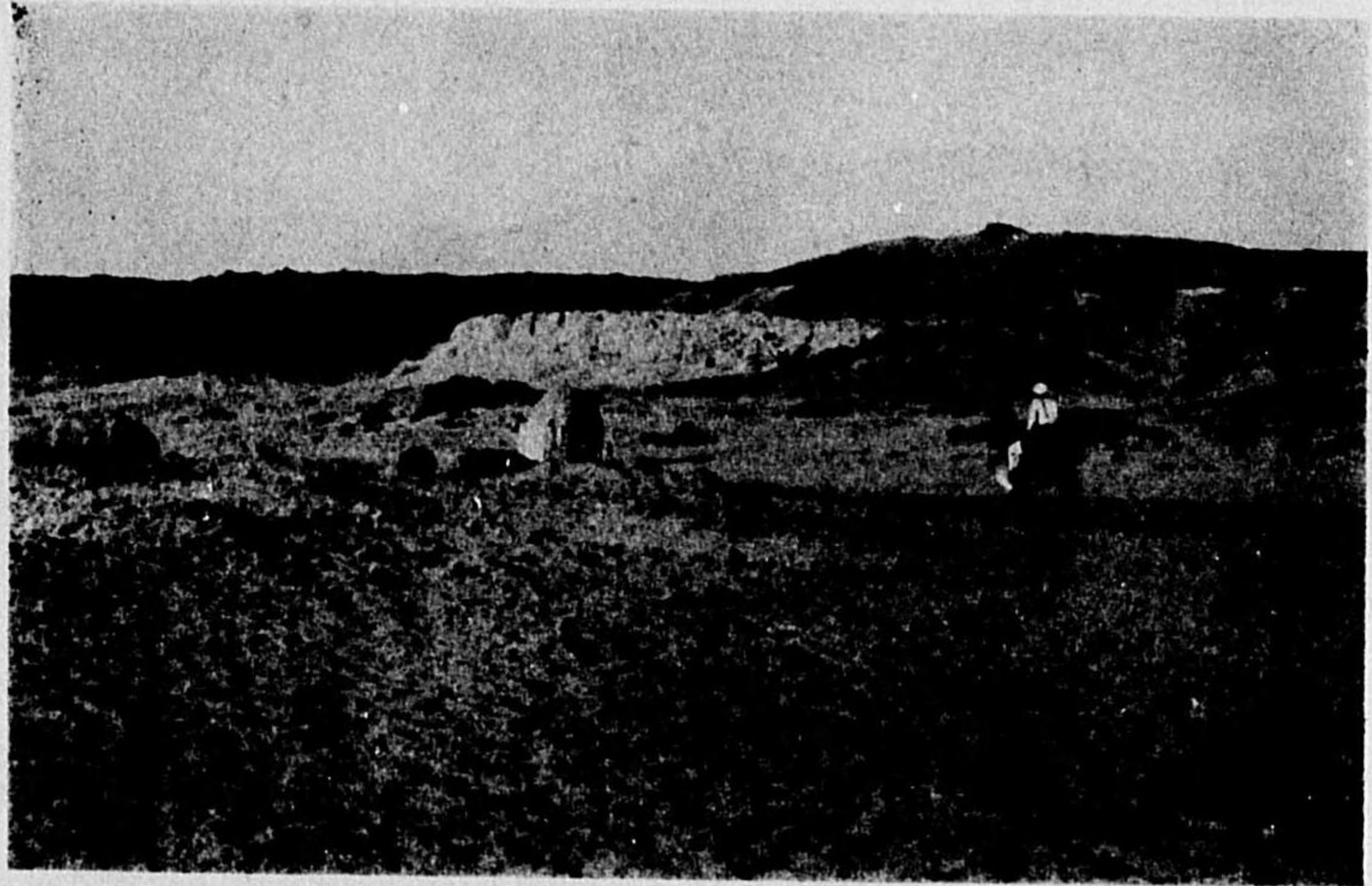
(昭和十年十月十五日)
(昭和十年十月十五日)



上、アスワン象嶋のエル・ラムラ村風景 (昭和十年十月十四日)

下、同 　　に於ける小羊の棺 (昭和十年十月十四日)

上圖は象嶋の北端に近きエル・ラムラ村の一部であるが、此村には面白いヌビヤ土人の住家があるので、夫を見るつもりで行って見當らず、羊の放牧を寫した。中央の羊の様に脚を結へると、駈ける事ができないから、逃げられる心配はない。つまらない寫真だが仕方がない。下圖は同嶋南端に近く發掘されて露出してゐた羊の棺で、この内に木乃伊にした大羊小羊の死骸を埋めたといふ。ここに割合に集つてゐたので、一枚寫しておいたもの。



上、アスワン郊外の謂はゆる雪花石膏伐出場 共一（昭和十年十月十六日）

下、同 共二（昭和十年十月十六日）

往昔埃及人が硬質の石材を磨くための材料を採取した石山で、まっ白で光り輝いて
 るに實に美しい。上圖は遠望、下圖は近景。上圖前方路傍の圓蓋は無名氏の墓らしく、
 驢馬にのれるは私の案内人で、點景人物として役立っている。アスワン市から驢馬で
 左程急がずに、約2½時間で樂に往復ができる。案内記にも書いてある通り、午後
 の見學に適してゐる。

午後2½—3.0に出かけるといふから、それはいけないといって正2.0に出ることにした。先づ向ひの象嶋 (Island of Elephantine) に渡り、ナイロメーターをよく見たら、暴夜文字が刻んであった。梵字の隠れた大家なる遠齋九郎兵衛次命が、假に同行されたとしても、失禮ながら到底ものにはなるまいと拜察した。そこでムスタファに讀ましたら* 1210 A.H.とあり、又1897年7月3日等の文字があるといった。暴夜の数字だけなら何とかなるつもりだが、それは沈思黙考しなければ、急いでは無理である。この数字もたしかかどうか、今となっては判然しない。

夫から殿堂の廢墟や小羊の石棺(第四頁下圖)なるものを見てから村を巡りだしたら、天候突然險惡となり、急に大風が吹きはじめた。その風たるや實にひどいので、見る見るうちに今の今迄はつきりと美しく見えてゐた對岸は、まるで泥煙濛濛としてなにもも見えなく、空陸の區別もつかず、ただ一面に煙幕をはった如くになって、顔には泥の少し大きなのがあたり、眼なんかあいてゐられなかつた。多分極く小さい一種の Sand Storm であらう。言はば其卵子位のところか。尤も砂漠のまん中ではないから、泥土の粉末の方が多い、だからドライド・マッド・ストームといった方が適當であらうが、とにかく町の方から吹いて來た風だから、まだ幾分いいので、砂漠であつたら始末にお

* H. は Hegira, 回教紀元。マホメットがメッカからメヂナへ逃走した年(西紀六二二年(推古天皇三十年))。A. H. = After Hegira. (アフター・ヘジラ)。

へないことがよく判った。これで半日駄目になってしまったが、倫敦の霧と同様、いくら話にきいても、きいただけでははつきりしなかったのが、例ひ卵子でもとにかく見たので大きな奴の想像がつく様になった。

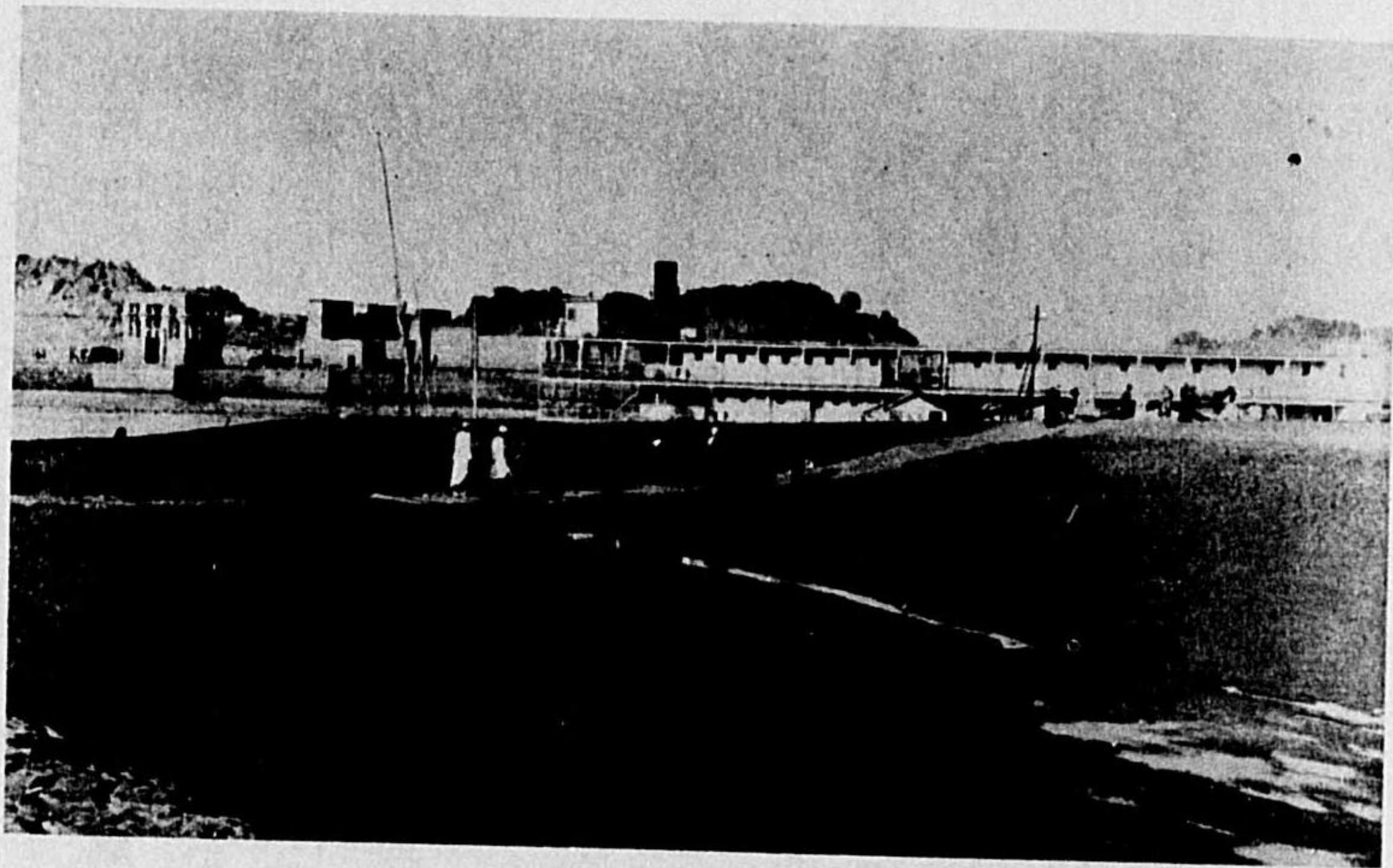
歸りに宿の近くの店で繪葉書を一組買った。案内人が話したと見え、店の主人は1921年に私が此町に來た事を覚えてゐるといつて珈琲をだした。珈琲をそこいらで飲むと一杯1ピアスタする、夫がバクシーシユの親方の仕事だから、どうも薄氣味が悪く眉唾ものだと考へたが、ムスタファが飲んだから私も飲んだ。主人は暴夜人が客に對する誠意だといった。ほんとうか知らん。

開路市の都ホテルで入浴をした時、石鹼がついてゐなかつたので、持って來させて用を辨じたが、元より附屬品だと思つたから風呂場へ残りをおいて來たのは當然である。然るに帳場で金を拂つた時、請求書をよく見たら石鹼代がついてゐた。どうももう一度室へ歸つて残りをとつて來る事もできず、惜しいが其儘にして來た。ところが此宿にもついてゐない。午前入浴の時は借りて入つたが、滞在中借りておくわけにも行かないから、外出の序に宿の前を素通りしてバザー迄買ひに行った。ペアス・ソープと同じ位の大きさので Bull soap といふのを、たった3ピアスタだといつたので買つて歸り、袋をよく見たら Made in Greece とあつた。アスワンのバザーの荒物屋のおやぢは希臘人だといふ想像がついた。

夕食後は室の前の露臺へ椅子を持ちだしてゆつくりした。黒雲浮動して時時月が顔を見せるだけであつたが、やつと晴れていい月夜になつた。前回は聖ゼームス屋の二階の窓からいい月をみて喜んだが、復び此地の月をみる機會に恵まれた。

十月十五日 火曜・好晴

6.0 朝食、豫て日本から用意して來た安物(金壹圓)の魔法瓶をだして、冷茶を入れさせそれをぶら下げて出かけた。前回は水筒の用意を忘れたので、のどが乾いて随分苦しかったから、今度はその様な目に遇はない様



スーダン行の汽船 (昭和十年十月十五日)

右方に碇泊してゐるのはスーダン行汽船「S. R. SUDAN」。アア・シムベル迄二日半だといふ。此日拔錨ださうで、こんなものが眼前にあると、豫定も何も忘れて了ひ、直にでも乗って行きたくなる。だから甚だ以て不都合である。背景の石塊の禿山はビゲン (Bigen) 嶋。中景はファイレー(フ・レー (Philae)) 嶋で、アイシス (イシス (Isis)) 堂の大門 (パイロン (Pylon)) がよく見えてゐる。左端のは未完成の謂はゆる「涼亭」。

に氣をつけたのである。

汽車は正に時間表通り^{6.45}にアスワン驛をでた。エル・シェラール(へ4)に着いたから下車しようと思つたら、もつと先まで行くといふから、其儘ゐたらスーダン行の汽船がでる所迄お負けがあつた。蘇丹行の汽船といふのは、此挿圖に見る様なもので、少なくとも外觀だけは美しく白色に塗られた大型の船だから、一等なら定めて申分はないだらうと考へた。ラムセス大王の莫大な椅像が四つもならんでゐるし、どうか死ぬ迄に一目でいいから見度いと念願してゐる、其所在地のアブ・シムベル (Abu Simbel) 迄^{2 1/2}日ださうな。見ると便乗の客は絡繹として絶えない。どうも羨しくて仕方がないが、如何とも致し難く、めつたにない好機を逸して了つた。ファイレー嶋に渡る小舟は此汽船の直ぐ傍からでるのでその時にみたら船首に S. R. SUDAN とあつた。S. R. とは何の事か未だ判らない。

島の有様は變りがなかつたが、前回は下手から上陸したのに、今回はずっと上手の正面に近い所であつたから、趣はちがつて見えた。大パイロンの石の一部を破壊して盗み去つたとかで、其あとに大きな孔があいてゐるが、水面が高くなつた時に船で來てもつて行つたとの事である。併し眞偽は元より不明、聞く所によると、有名なる石堰堤を3米か7米か高くしたので、今度は水が建物よりも高くなり、水を一ぱいためた時は、アイシス堂は全部水面下に没するさうである。以前はそん

な事はなかつたので、最高水面の線が建物の内外部にはつきりと残され、面白くない結果を來してゐたので、資源開發と史跡保存とは到底兩立し難いものだといふ事を今更の様に感じたが(『埃及紀行』^{第二三三頁}挿圖)、一層の事全部水面下に入ることになると、残つてゐる色彩等は全部なくなつて了うだらうが、同時に線もとれて幾分はよくなるかも知れない。現在建物の上から木の棒を、最高水面に位置を示すために立ててあつた(77)。内陣の當初御船代にあたる Sacred Boat を置いてあつた臺は、豫てから愛用してゐる銀紙の反射をムスタファに持たせて、熱帯の強烈な光線を反射させて寫したものを59に掲げておいた。

夫から向ひ側のビゲン (Bigen. ^{標高一六〇米} 嶋) に渡つて全景を見たが、この方面からの眺めは初めてで大變によかつた(77)。ここから下の堰堤迄小舟で下るのが、こちらは兩岸の景を觀賞しながら行つたら、下の船着場に驢馬がちゃんと二頭待つてゐた。かかる手配はホテルでも無論するが、案内人は平常は魔除けとこんな事に役立つ位のものである。この船着場から石堰堤迄随分遠かつた。サイカチの様な荳科植物と思はれる並木道があると、萬一^{*}ゴライアスコガネが樹液でも吸つて居やしないかと思つて、怠らず注意をしてゐるが、西亞弗利加は金剛國特産と稱せられてゐる昆蟲がこの邊にゐる筈もなく、又其出現期も知らないから、實は随分無理な探しもので、つい見付からな

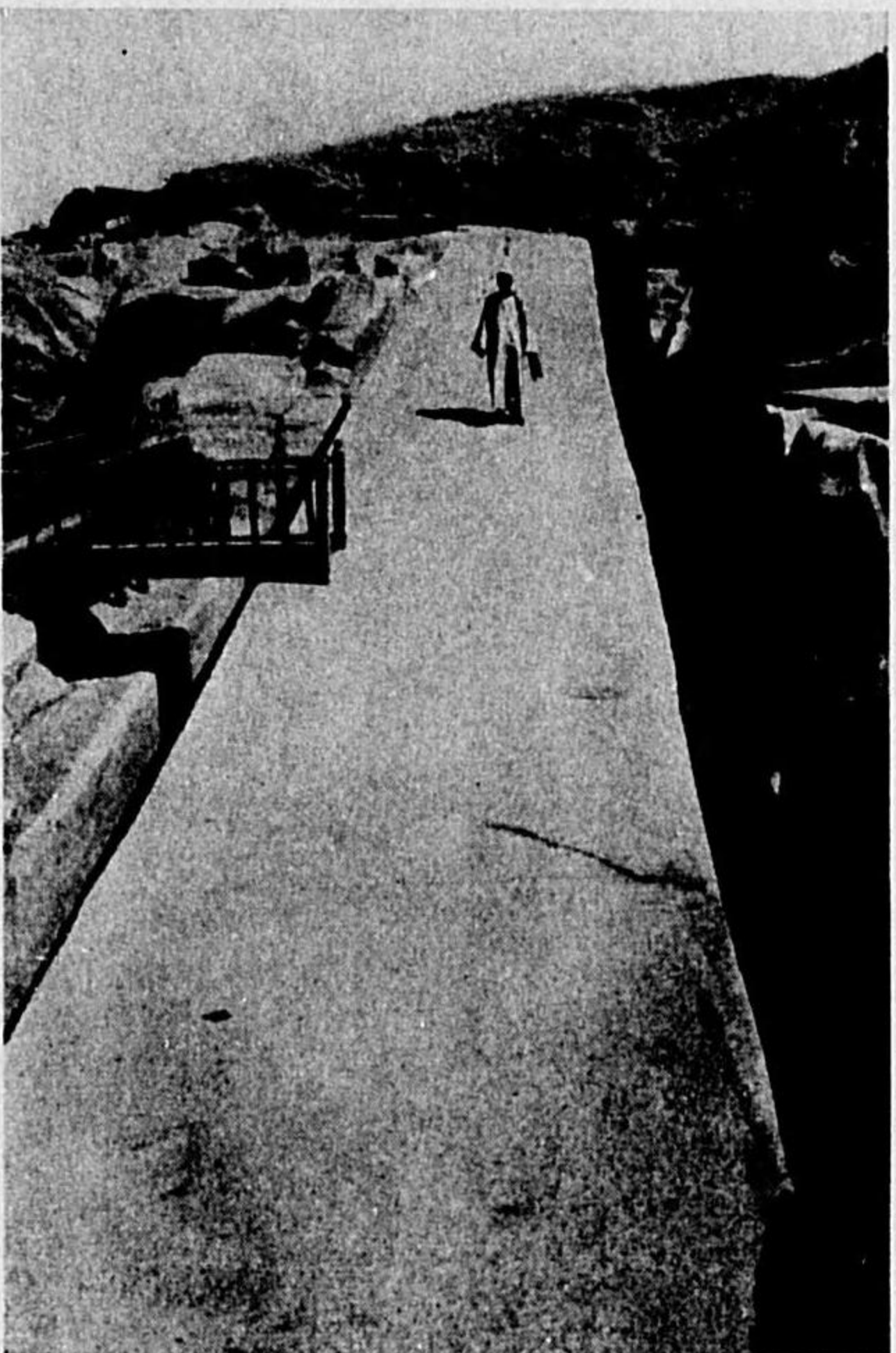
* この様な和名はないと思ふが、ゴリアアス・ギガテウスでは始末にわるいから、假にかういふ名をつけておいた。

った。従って持つて歸つて自慢をしなくなった。

堰堤の上を例の手押車で走った。片道3軒あるさうだから、往復だと6軒になる理窟である。勿論軌道の上を押して走るのではあるが、押人夫なる眞つ黒黒の黒助は、實に物凄く早い。夫が職業

アスワンに於ける未完成オベリスク

(昭和十年十月十五日)



木の階段を作ったので、至極樂に上がって見る事ができる様になった。折角作りかけたが、何かの都合でやめて置去りにしたものと見える。

いくらやつても満足はしない、いくらでもねだるから、あれで充分だといった。そんなものか。

であつていくら熟練してゐるとしても、この暑氣によくもつづいたものだと思つた。ムスタファのやつた金をみたら7ピアスタで、これは私も少ないと思つたが、勿論彼も不満足であつたか、幾分のバックシーシュをねだつた。バックシーシュが正當(?)と考へたのは此時ばかり。案内人はいくらかやつた様だから、あんな仕事をして可愛想ではないか、10ピアスタもくれといふのか。ときいたら、うるさいから1/2ピアスタやつた。あんなものには

驢馬へのつて出来かけてやめたオベリスクを復見に行った。樂に上つて見られる様に階段ができてゐたから、この様な設備はいつしたのかと尋ねたら、先年國王が見物をされた際にできたといつた。アスワン市と石堰堤との間、砂漠の中に狭いながらもアスファルトを以て舗装した道路もでき、両側には申譯的の街路樹を植ゑてはあつたが、熱帯の強烈な光線により、火の様に熱してゐる道路を、奴比野の女が跣足で平氣で歩いて來たのにすれ違つた。足の裏をやけどしないところを見ると、皮は随分肥厚してゐるのだらう。

朝は6.45に出た事は既に記したが、歸つたのは10で、5時間25分働いたのだから大分に疲労した。午後は休養すればよかつたのに少し慾張りすぎて、向ひ側の窟墓を見に行くことにした。2½時に宿を出た。私は内部を見るつもりであつたが、ムスタファにして見れば夫は前回にすんでゐるから、其必要なしと考へたので、番人を呼ばなかつたものか、窟墓の前でいくら待つてゐても誰も來なかつた。そこで失敗したと思つて、自分は上の墓(Sheik's Tomb (Kubbet el Hawa))迄行つて來るから、そこに待つて居なさいといつて出かけた。あんな所迄わけはないと考へたから(第四一頁上圖)。

然るに此は大變な誤算であつた。非常に登りにくい。遂に途中で禿山の中腹に仰臥して了つた。腦貧血でも起したら大變だと思つたからである。午前は魔法瓶の茶で助かつたが、午後は其必要なしと見て持參しなかつた。暫く休み再び登り、又臥して復登り、三度目で漸く目的の墓に達し、日

蔭の方にひっくり返り、ものの20分もたった後、内流河を隔ててアスワン市遠望の寫眞(第四一頁下圖)をとり、そろそろ降り始めた。さうしたら案内人が上ってきた。何にしに來たといったら餘りおそいから見に來たといった。實際疲れて立てない位になって了った。

船を待たしておいた所迄下りた時、もうこんな事はやめようと思った。歸りにイスナへよるのもいやになり、先づラクソル迄直行してそこを根據とし、イスナは往復すればよからう。先が長いのにこんなに疲労してはものにならない。宿へ歸った時はうれしかった。温浴はできなくて相不變水浴だが、夫でも何でもうれしかった。大變な風で象嶋の方から前にある山を越してまともに吹きつけたが、焦熱地獄の様なリビアの砂漠あたりから吹いて來るせぬか、まるで熱風で苦しい事夥しい。開けておいても閉めておいても、どうしても暑いのである。

夜になつても、どうも風が熱いので氣持が悪くて仕方がない。足は痛いし咽は乾くし、こんな時高級の煎茶を一杯飲んだらどの位氣分が爽快になるだらうと思つた。煎茶を小さい罐に入れて持つて來る事には氣がつかかなかつた。腹がブクブクになる位曹達水や紅茶を飲んだが、どうもうまく行かないからねる事にして、最初濡椽の方迄すつかり閉め、全部締りをして臥床したが、到底ねつかれないので椽の方だけあげ、入口の戸は鍵を掛け、椅子の上で假寝をしたが、さうしてゐるわけにも行かないので寢臺へねころんでみた。蚊帳を吊つてあるので、暑くて如何とも致し難かつた。併

しつかれてゐると見え、知らぬうちに眠つたらしい。

然るに夜中に眼がさめてからは、とるべき方法がなかつたので、入口の扉をも開放し、風が室内を自由に吹抜ける様にし、夜が明ける迄此状態を續けた。廊下で時折咳が聞こえたので、あかるくなつてから出てみたら、廊下でホテルの雇人(土人)が二人ごろねをしてゐたのには驚いた。十五日のひるから十六日の朝にかけての暑さで此土地が少しいやになつた。

十月十六日 水曜・好晴

漸く夜があげたので、ヤレヤレと思つたがやはり暑い。私は平素大してあつさを感じないのに、この位あつがるのだから、餘程暑氣は劇烈であると思ふ。曹達水を飲み過たせぬか、腹工合がよくない。さうして食思缺損となつた。疲労し過たせぬであらうと獨りできめた。

9.0に小舟を雇ひ、川向ふの陳列所を見に行つた。開館時間は前8.0—後1.0とあるから、此朝は20位に行つたのに、未だしまつてゐた。番人を呼出し、入場料1ピアスタ(季節になると5ピアスタに値上すると云)拂つて入つたが、何にしる觀覽人なんかまるでなし、窓は閉切つてあつてあつて始末に悪いから、あけるといつて皆あけさせた。さうして館内を一巡し、更に館庭も一周し、雇つた小舟で象嶋の周りを巡り、Kitchner Island と呼ばれてゐる小舟を通り抜けて、またこの小舟で歸つた。

遂に腹をこわして了つたので、晝食は可なりまづかった。午後は3.0に宿を出て、謂はゆる「雪花石膏の伐出場」を見に行った。驢馬で行くといっておいたのに、ムスタファは勝手に駱駝を引張つて来た。前から駱駝なんか嫌ひだと言つたのに、なせ言ひつけ通りにしないのか、おれは乗らんといつて、彼自身乗るつもりで雇つた驢馬へ私が乗り、駱駝は追ひ歸へしてしまつた。實の所、あんな背の高い大きな奴へ乗つて、若し落ちでもして打所でもわかつた日には、取返しがつかぬから大に用心をしたのである。

仕方がないのでムスタファは歩いて出かけた。途中から彼は驢馬を雇つて乗り、遂に謂はゆるアラバスター・クオリーに達した。眞つ白の石山で、前日にも山の上の圓蓋の墓 (Sheik's Tomb, Kubbet el-Hawa) の所から遠方に白くよく見えてゐたもので、全體としても大さは知れたものが、實に美しかった(第四二頁圖)。

5.20に歸宿した。3.0に出たのだから、つまり2時間20分でゆっくり往復ができた。夕食もまづかった。此日は曹達水四本、魔法瓶に冷紅茶二杯で漸くしのいだ。夜は濡椽に引張り出した椅子の上で轉寝3時間、蚊帳を吊つた暑苦しい寢臺の上で、入口の扉も何もあけ放して翌朝5.0迄眠り通した。

* A favorite afternoon excursion leads to the N from the station of Gezirah to the so-called Alabaster Hill, marking the site of an ancient quartz-quarry, whence the Egyptians obtained the necessary material for polishing hard stone. (Baedeker's Egypt. p. 361-362)

隣室の異人は思ひ通り一夜で退却したので、大きな伽藍堂のホテルは私唯一人で占領した。暑いアスワンも愈よ終りに近づいた。ここでこの位弱るとすると、カーツーム (Khartum) 等は到底駄目であらう。暑さにやられて病氣になるかも知れない。

夕食後入浴をしようとしたら、部屋の前の風呂場は修理を始めたから、少し遠いがといつて廊下を突當り、左へ曲つて大分行つた奥の浴室に案内をした。珍らしく湯が出たので喜んでゆっくり入り、扱て出たのはいいが、燈火といふ燈火は全部消してあり、眞つ暗で足元も判らず、どうしたらいいか當惑した。そこで大に氣を落つけて考へてみたが、全館寂として音なく、愈よ困つたとき、不圖意外なところで人のけはひがしたので、氣をついたら扉のすき間からかすかに燈火が洩れてゐた。敲いたら異人が寢間着のまま扉を開けたので、まっ暗で歸りみちが判らないから、何とかしてくれといつたら、どうもすみませんとか何とかいって廊下のあかりをつけてくれた。帳場の番頭ではなくて、もう少し上の男らしかった。ホテル獨占と得意になつても、こんな不便もある。泊り客なんかないと思つたので、うっかりして全部消燈したものと推定される。めつたにないことだらうが、こんな事もあり得るから、小さい懐中電燈位は持ち歩く必要がある場合もあらう。

十月十七日

木曜・好晴

10 $\frac{1}{2}$ に宿を出でて驛へ行き、10.55發の汽車へのった。併し汽車は遅れて11.10に永久にお分れをしたのである。晝食の爲食堂車へ出かけたが、食欲のない爲かまづくてとても食べられなかった。皿の上に三片のせてあったサンドウイッチと來ては、一週間も前に焼いたかと思はれる様な、石ころの様に固くなった麵麩の間に、厚いハムが二切も挟んであったのだから、平生でも頬返しがつきかねる所へ、腹工合がよくないのだから仕方がない。茹玉子は黄味だけとし、生蕃茄を二個平らげたのが漸くの仕事であった。但し宿でつくらして持参した冷紅茶のうまかった事は例へやうがなかった。先年の熱帯旅行の苦い経験から、今度用意していった魔法瓶がどの位役に立たか判らない。

出がけに15分後れた汽車は、其儘でラクソルに着いた。埃及の晝汽車は實に砂でやりきれない。同じ砂漠を通るのだから、同じ様でありさうなものだが、印度の方が稍やよろしいやうである。先年はラクソルから先<sup>(上埃及に
向つた方)</sup>は白色に塗った小型の——と記憶してゐるが——客車であったが、今度は大型の立派な客車が開路驛から直通してゐた。窓硝子が藍色と無色の二重戸であったので、初めての前回は少し意外に思ったが、印度が全部さうなので、今回はこんなのは珍らしくも何ともなくなつた。

改札口を出る時切符を見せたら、切符を受取る男が驛長室でスタンプをとれといった。開路へは



改築されたコム・オンポー驛の景(昭和十年十月十七日)

10月14日朝此驛へ停車した時は、太陽は東にあり、丁度逆光線で乗降場に向いた方はうまくとれなかったが、歸りには正午過ぎのため太陽がいい工合にあたり、折柄下り列車を待つ人達で賑つてゐた。私の乗つてゐた客車も都合のいい位置に停車したので、記念寫眞が一枚とれた。埃及古建築の殿堂式に改築され立派な停車場になった。

アスワン驛より遙かによろしい。

いつたつか、其日を書いて貰つて驛長の證明をとる様にと聞こえたから、出發は二十一日と答へた。「十日九夜」だから二十一日で一ぱいと心得たからである。所がどう感違ひをしたか、いきなり恐ろしい顔をして英・佛・伊語のうち、どれかでいってくれと呶鳴つた。彼は土人の下級現業員だし、そんなに澤山の外國語ができるとは思へない。汽車がついて混雑してゐるときに、不馴れな外國人には親切であつて貰ひ度いものである。今ではない。たつ時だ。と言つてくれれば何でもないに判つたものを。我國でも改札なんか時には癢にさわる位傲慢な態度で、乗降場の番號でも尋ねようものなら、噓

んで吐き出した様な言ひ方をするのもある。だからどこでも同じで、下つ端程威張る原則は此際立派に當嵌つたのである。

ムスタファが一所にゐたら何でもなかったらうが、彼は荷物の按配をしたり、馬車を雇ふために驛前に出てゐた。彼は直に引返してきてスタンプは今とるのではない、出發の時で自分がとりに行くといつたので、よくのみ込めた。日本の様に下車驛で改札が驛名入の小印を押したら便利だらうと思はれた。

ラクソル・ホテルに着いてみたら、以前とは位置がまるで變つてゐた。低い一階建であつたのが、三階の堂堂たるものになつてゐた。主にサラセン式を採つた様だが、拱が圓いのが意に充たない。埃及サラセン式が充分にでてゐない様に思はれた。これではコルドバあたりの回教寺を見る如くで、スペインのサラセンの様式が偲ばれるのである。なせ馬蹄型尖拱にしなかつたのか(頁五九)。

一休して直に道路一つ隔てたラクソル堂を見に行った。夕刻の薄い光線であつたが一見をした。歸宿入浴、生き返つた様になつた。上衣を脱いでみて驚いたが、どこからどこ迄汗だらけで、此夏高島屋で買った大枚貳圓五拾錢の富士絹のシャツは、去る九日から外出の時着づめであつたせゐるか、手の着け様がなくなり、洗つてみるか捨るか二つに一つとなつた。思ひ切つて洗つてみたら、案外結果はよかつた。

腹を治さんがため昨日から懷爐の入れづめで、随分熱いのをがまんしたせゐるか、軽い火傷をしたと見えて、火膨れが三つもできた。どうも曹達水のみ過たせゐらしいので、此宿では冷水が備へつけてあつたから、食事の時の飲物は冷水にしておいた。風はまるでなく蚊と蠅とが大變にゐた。アスワンよりはすつと涼しいだけ大に助かつたので、眠るのには全部室をしめ切つておいた。

アスワンのグランド・ホテルでは英番頭が非常に叮嚀で愛想よく、食事の時は必ず食堂へ出て来て何か不都合はないかときいた。給仕人も大變感じがよかつた。たつ時には門口の車のあるところ迄出て来て見送つた。人間味が多分にあつたし、言葉もはっきり判つた。然るにラクソルでは、驛の改札も食堂の給仕も英語はどうもはっきりしない。私の聴き様が悪いのか、ラクソル人の發音がよくないので、ホテルはここの方が餘程上等だが、ここ人間は大してすきでない。

(昭和十六年五月五日稿了)

坡西土から坡西土へ
(續埃及紀行)
(第三回)



ラクソル・ホテル (昭和十年十月十七日)

ラクソル・ホテルは改築されて立派になってゐた。前の方は一階だが、これは大玄関で主屋の方は三階である。玄関の部分の拱が圓いのは丁度コルドバの大回教寺を見る様でどうも大いに感心できない。

十月十八日 金曜・好晴

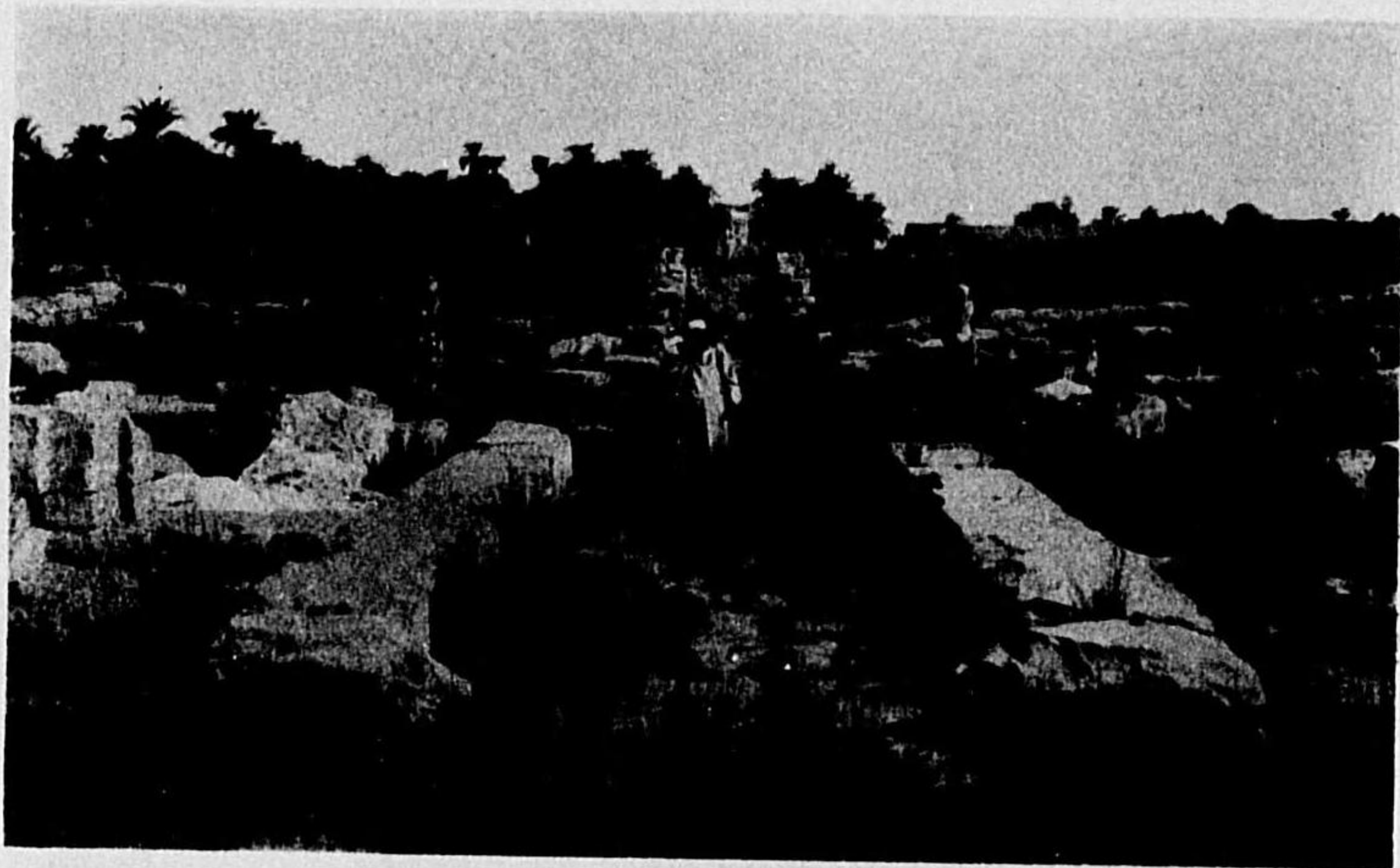
8.30に宿を出で先づラクトル堂へ行き、正面からよく見て寫眞をとった。ここから驢馬へのり、ゆつくりカーナックの大堂に向った。前回は馬車だったので、餘り急ぎすぎて甚だ不満足であったから、馬車も自動車もいけない、驢馬でゆつくり行くと書いておいたのでさうなのである。嘗て私は

夫から序だから Mut 堂と Mont へ行き度だったが、案内人はどちらも何もないといった。ベデカには平面圖が立派に出ているのだから、何かありさうに思ったので、是非行ってみると主張したが、夫よりも「Egy 堂を観た方がいいだらう。書物の挿圖と實際とは大分に異ふ」といって案内人も言ひ張った、さうなると或はさうかも知れぬといふ氣もおこり、旁暑熱と疲労と兩方から攻められて意志頗る薄弱となり、遂にやめて了った(『埃及紀行第一五一・一五二頁』)。

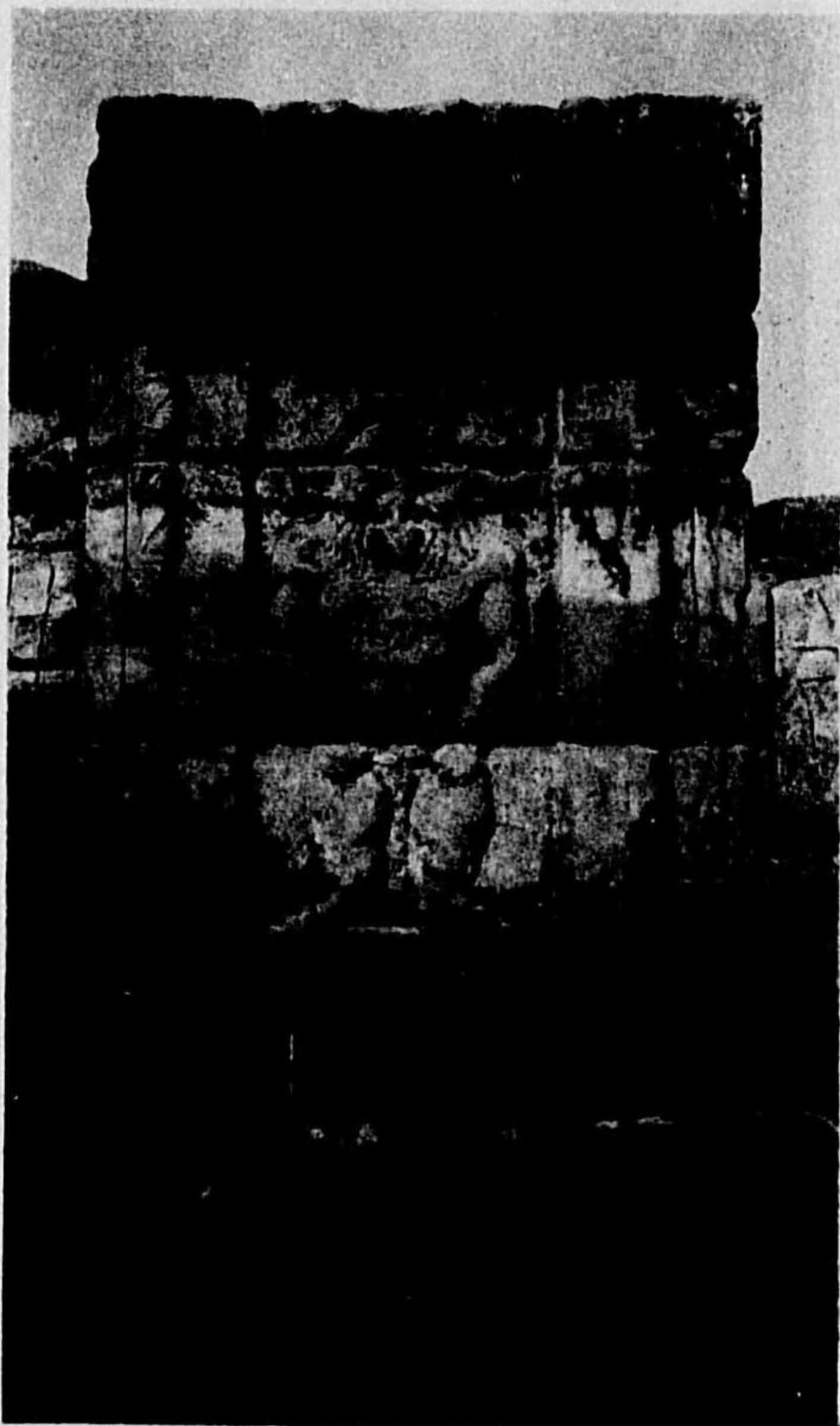
とかいた事があつたが、幸に再遊ができたのだから、是非今度は目的を達し度く思ひ、何氣なき風で、こちらの方から最も近いムート堂へ初めに行つて見るといったら、大に賛成をして、夫がよからうといった。

何もないどころか澤山に残つてゐる。ベス(Bes)神の薄肉彫等は、初めてここで見たのである。南側には池も残つてゐるし、西南方にはラムセス三世堂の残骸もある。私は此池のはたを一巡した。此度ムスタファは大變におとなしく、此遺跡を私の後についてすっかり歩いた(第六一頁圖)。

此所を去つて北に進んだところ、カーナックの大堂なら正面へ行かなければ入れぬとの事に、夫



續埃及紀行



上、カーナックのムート堂内陣より北方をみる
下、同 に於ける薄肉彫ベス神立像

(昭和十年十月十八日)

ムート(Mut)堂の趾は、上圖の如く割合によく残つて居り、何も見るものがないどころか、當初の規模は明らかである。ここで私は初めてベス(Bes)神の薄肉立像を見つけた。ベスは埃及固有の神ではなく輸入神ださうで、三重五重の神格を有し、形相は物凄く奇怪異形、僂僂で侏儒で鬚が生え舌を出してゐる事圖の通り。



上、カーナックのムート堂入口より北方のスフィンクス道をみる。

下、カーナックのアモン大堂大中庭列柱のスフィンクス群(羊)。

(兩圖共昭和十年十月十八日)

前頁上圖の中央を北に通リぬけて外へ出て、更に北方を眺めたところが上圖である。つまりその圖の中央人物の左上、樹木の間に見えてゐる小建築は、此圖の左方にあるものと同じだから、夫れで見當がつくであらう。つまりムート堂を出てからアモン大堂南端の第十大門へのスフィンクス道の光景で、何れも甚だしく破損してゐる。そこいらに散布してゐたのを寄せ集めて勝手に並べて、ともかくも体裁だけ整へたらしい。此に比べると下圖のは羊(Ram Sphinx)ではあるが頗る完全である。これも完全なのを並べたのかも知れない。

六二

上、カーナックの大コガネムシ側面



下、同 正面



(兩圖共昭和十年十月十八日)

(臺上の物差は曲尺の約一尺(一呎))

ラクソルの町に近いカーナックの大堂の東南隅に大神聖池があり、此神聖池の西北隅にアメノーフクス三世の大コガネムシ(Scarabaeus of Aeneophis III)が、大きな「飯盒」の様な形をした赤花崗岩の臺の上に刻んである。随分大きなもので蟲體の長さ約三尺、腹から背迄の厚さ約一尺、いくらゴライアスコガネが威張ったところで、そんなものはまるで問題にならない。下圖蟲體の上に突出してゐるのは大堂内オベリスクの一。

(臺下に立てる物差は曲尺の一尺)



上。内流河畔の新大通り

中。カーナック大堂内方柱の一
下。同

(昭和十年十月二十一日)

共一 (昭和十年十月二十一日)

共二 (昭和十年十月二十一日)

なら一層後ろを巡ってモント堂へ行くことに決め、其通り実行した。此は案内人が何も知らなかったからできたので、若し知ってゐたら到庭駄目であった。理由は折角行ったらやはり入れなかったから、つまり大堂の四方を一巡したので、爲に全部外廊を見得た。時間は多少損をしたけれども。

正面から入り、先づモント堂を見て大殿堂の裏を巡り、赤花崗岩製の大コガネムシを見た。以前には此邊に水が一ばいにあり、寫眞は勿論近づく事さへ出来なかつたのに、あとで池を縮少して修築し、コガネムシは臺ぐるみ地上に出る様にし、誰にでもよく見られる様にしてあつた。爰に参考のため二枚の寫眞をだしておく。私の鞆を肩からかけてゐる案内人は、私より少しばかり背の高い男だから、夫と比べてみると地上から臺の高さ約五尺五寸、蟲の高さ約一尺餘長さ約三尺となる。ゴライアスコガネのざつと十倍の體長をもつてゐるのだから、容積凡そ千倍で、洵におそろしい大きさである(第六三頁圖)。

カーナックの大殿堂の第九大門の東の方のは、前回に随分壊れかけてゐて危険此上なかつたが、遂に半分位に崩れて了つてゐた。私の記憶違ひかも知れぬが、そんな事は萬萬あるまいと思ふ。午前はこれで終りとしておいた。午後は3.0に宿を出て、新しくできたといふ内流河畔の道路を通り、再びカーナックの大堂へ行った。此大堂はハイポストイル・ホールの縦の通路兩側の壁が危くなつたか、Angle Iron & I Beam を以て大きな頑丈なトラスを組み、其壁の間に挟んでしまつた。こ

(Form No. 1688, Antiq.)

SERVICE DES ANTIQUITÉS

N^o 105 رقم ١٠٥

Carte délivrée le 10.10.35

valable jusqu'au _____

à M. S. Amanuma

lui donnant droit de visiter tous les monuments fermés ou enclos de la Haute Egypte et de Saqqarah.

PRIX : L.E. 1-800 (Cent quatre-vingts P.T.)

Signature du Titulaire, Amanuma Le Directeur Général.
(à recroquer à l'encre).

AVIS

Cette carte est personnelle : les noms des visiteurs ainsi que la date d'émission doivent être inscrits lisiblement et à l'encre. Au cas où cette formalité ne serait pas remplie et la carte non signée par le titulaire, l'entrée des monuments serait refusée et la carte serait confisquée.

MM. les visiteurs sont instamment priés de ne remettre cette carte à aucune autre personne dès qu'ils n'en auront plus besoin, mais de la restituer au Service afin de prévenir toute fraude.

Le produit de la vente de ces cartes servant à la restauration des monuments égyptiens, le Service des Antiquités fait appel au concours de tous les visiteurs en vue de l'aider dans ce but.

En cas de perte, le prix de la carte ne sera pas remboursé.

**Du 1er Juin 1935,
Au 31 Mai 1936.**

埃及古蹟觀覽券 (價1封度80ピアスタ)

前回の分は『埃及紀行』第四七頁に寫眞をだしておいたが、赤クロスの表紙で、幅5寸3分高4寸1分二つ折であった。今度のは青クロスの表紙、二つ折だが間に二枚紙があり、佛・英・獨・暴夜の四ヶ國語で注意書を印刷してある。大き
幅5寸5分高4寸2分。通用期間滿1年。

れは丈夫といふ點に於いては確かに成功してゐるが、其體裁の悪さ言語に絶してゐた。これだけの修理を思ひ切つてやつた技師の勇氣に先づ敬服し、隨分長時間に亙り觀てゐたが、觀れば觀る程感心せざるを得なかつた。此時どうしたものか、ラムセス三世の堂内で入場券を落した。上に示した様な各古蹟共通觀覽券で、一年間通用、價約參拾圓の頗る高價なもの。實は落した事にも氣がつかかなかつたら、番人が拾つて持つて来てくれた。此跡始末としてらピアスタやつ

た。これに續いて蠅拂を落し、寫眞の材料店へゴム輪を忘れた。どうも餘り暑氣劇烈なので籠が弛んだ様である。

午前も午後も驢馬で往復し、ゆっくりで大變によかつた。午後は歸りも行きがけ同様、内流河畔の新道(第六四頁上圖)を歩いた。この歸りの時は、日が砂漠に沈んだところで、形容のできない程いい景色であつた。ムスタファが自分の知つてゐる寫眞屋では非現象を試みにやらしてくれといふので、昨日ためしに二本持たしてやつたフィルムは、叮嚀親切にしてあつたので、引續いて現像をさす事にしたが此は失敗であつた。

十月十九日 土曜・好晴

7.30に宿をたち河を渡り、前回同様クルナのセトス一世堂へ行つたが、堂前で驢馬から下りたつた足元に、何と珍らしい事には海膽類心形目の種類と思はれるものの化石が落ちてゐた。早速拾つてみたが、稍やつぶれてゐたけれども、可なり完全であつたから随分喜んだ。これは絶好の記念品を得たと思つて落さない様に大事に鞆の中へ入れた。さうしてセトス一世堂を一巡して裏口からでた

* 後にこの化石を地質學の専門家に一覽を乞ひ、珍物かどうかを尋ねたら、こんなつぶれたのはいくらもある、もつといい形をしてゐればいくらか價値もあらうが、これでは仕方がないであつた。でも私は今でも大事にとつてある。

ら、物賣が數人待機して何か買へといったが、相手にしないで王墓へと志した。

王墓への道は狭かったと思つてゐたのに、大變に廣くなり、自動車も樂に通るので、轍の跡も、のこつてゐた。やがて目的地へ達したところ、ツート・アंक・アメンの墓は、ラムセス六世墓の直ぐ下にあつたのだ。前回ラムセス六世墓を見た時は、未だ發表されてゐなかつたので何も知らずにすましたが、こんな所にあつたのかと思ふ位、但し未だ遊覽季節にならないので、觀覽謝絶とあつた。どこ迄も縁がなくできてゐる。

此所で二王墓をみてデイル・エル・バハリの方へ行つた。峨峨なる小丘を驢馬に乗つて炎天干にあつて越して行くのである。途中で氣がついたら、南部さんから借りた蠅拂ひを持ってゐなかつた。どこかへ落したのであらう。どこで落したかまるで覺えがない。昨日はカーナックの大堂で落し、やつとさがして此朝は寫眞屋へ置き忘れたら、小僧が後から追かけて來て渡してくれて少しきまりがわるかつたが、三度目正直遂にはほんとうになくしてしまつた。

丘を越えて下りかけた時、今度は氣をつけてゐて、女王ハタスの殿堂と、其隣りのメンツィホテップの方錐墓の俯瞰寫眞をとつた(68—70)。遂に丘を下り切つて先づ此殿堂に到着した時は、くたびれて「動けなかつた。實にどうすることもできなかつた」と日記にかいてある位に疲れた。この度はどうあつてもメンツィホテップの墓へ行つて、近くでよく見ようと固く決心してゐたが、いくら決

デイル・エル・バハリ堂にあるハソール頭殘闕。



(昭和十年十月十九日)

大正11年10月28日、初めてここへ來た時、これを見付けて寫眞をとつたら、不幸ほかのと二重寫しをして失敗をした。ところが今回再度行つてみたら、滿13年間少しも位置が變らず、同じ所に同じ様にあつたので、今度は二重寫しをせぬ様、充分注意をして、下に例の約一尺(一呎)の物差を置いて寫したら、こんな工合に寫り、漸く目的を達し得た。現在の額だけでざつと高さ幅さと二尺づつあるから、これで完全であつたら随分大きなものになるであらう。

心だけでも身體がいふ事をきかない。だからやめにしてラメセウムの方へ行つた。行き着いたのは0.1⁵。ここ迄來れば一休みができると思つて一安心をした。私はいくら蜂に苦しめられても、やはりラメセウムの石の上に腰を下ろして千古の遺蹟を鑑賞しよう、さうして辨當を開いて、食事のすんだ後は鋪石の上にひっくり返り、うまくいったら午睡をしようと考えてゐた所、近年この近くに休息所ができたから、そこへ行つてゆっくり休んではどうか、寢臺も備付てある、といふ様なことをムスタファが言ひだした。持參の冷紅茶は飲んで了つたし、曹達水一本では到底不足である。休息所には飲みものはあるといふ。これに釣られて出かける氣になつた。行くには行つたが、洵に不景氣極る風通しの不良な暑い家であつた。飲物としてはエビアン(Evian)

水といふ佛蘭西出來のがあり、四合瓶位のが一本八ピアスタだといふ。曹達水もあるにはあったが、一本四ピアスタで氣のせむかオリがあるし、口金も錆だらけであった。だからやめてエビアン水にしたが、飲んでみたら只の水ではないかと思はれた位無味無臭の蒸溜水の様で、どうも何だか變であつた。彼等はグルになつて只の水を八ピアスタで賣付けたのではないかと思つた。

咽が乾いてゐたから、變な水だが皆飲んでしまった。腹工合が漸く治りかけたのに、魔法瓶に冷紅茶一ぱいと曹達水一本とエビアン水大瓶一本のんで了つた。而も此最後のがエタイの知れない水で、いつ頃からおいてあるのか判らぬときは、再びしくじるのではないかと思はれたが、飲物ばかりほしくて辨當なんかまるで食べたくない。どうも困つた事になつてきた。夫でともかくも晝辨當をすましたら、休息所の番人は註文をしないのに珈琲をだした。一杯二ピアスタだといつた。此は市價の正に二倍であるが、夫は止むを得ないと思ひ、まあ飲んで空茶椀を其儘にしておいたが、暫くして見たら復いっばいにしてあつた。大に憤慨してよく見直したら、やはり空っぽうであつた。多分暑氣のため少しばかり視神経中樞をやられ、異狀を來たしたせゐで、視力も朦朧となり、いろいろの錯覺を起したのであらう。とにかくこのあたりの煮黒と來ては、何でも賣りつけたがる。少しでも笑顏を見せたら最後直になめて了う。であるからかういふ風に悪くばかり見えるのである。休息所は寢臺があるにはあるが、寢轉んでみても暑いばかりで仕方がない、だから1.30に引あげて

復ラメセウムへ行き、先年食事をしたと思はれる石の上に仰臥し、眼を半眼にしていい氣持になる事^{1.15}時間、3.0出發してメヂネット・ハブウに向つた。實は女王墓へも行く豫定をしてゐたが、到底身體が續かぬと考へてやめにした。序にデンデラへ行く様にムスタファに言つておいたのもやめる事にしたら、嘘か眞か知らぬが、既に昨夜手配をしたから、電報で斷るといつた。もうどこもここも皆やめる事にする。一度みてゐるのだからそれで充分としておく。

フレッチャアの建築史の挿圖にメヂネット・ハブの窓の繪が出てある。前回はまるで見るのを忘れて了ひ、残念至極だつたから、今度こそと思つてすっかり探したが判らなかつた。史蹟の番人もムスタファも知らないといふので、これも駄目になつた。何にしる直に休みたくなる。4.20に10分間休憩して歸る事にしようときめ、河邊迄15分位かかるかときいたら1時間はたつぷりかかる、未だ水が引かないので大迂回をしなければならぬといつた。これは大變な事になつた。尤もメムノン像は水びたしになつてゐた位だから、多少の事は止むを得ないと思ひ、4.30に愈よメヂネット・ハブウを出發した。

然るに道はラメセウムへ出た。何だ逆戻りかと思つてゐたら、次にセトス一世堂へでた。これぢや大變だ。容易ぢやない。隨分驢馬を走らせた。而しやつと河岸へ達していざ船に乗らうとした時には5.50であつた。ところが其儘船を引張つてうんと上流迄溯り、漸く乗船した時は、これで歸れる

のかとうれしかった、それ位くたびれたのである。驢馬二頭終日50ピアスタ、バクシーシュ二人の馬子に10づつ、合計70の約拾貳圓(當時の相場)となる。

歸宿したのは6.15であった。歸りに現像をとったが、やはりいけない。フィルムに紅いものがついてゐる。寫真材料屋の主人はアブウヂといふ。Aboudiと綴つてあるが、混血らしく愛想はいいが現像は下請をさせるせゐで極めてぞんざいで且つ不親切である。少し無理をしたせゐか、食思なく飲物ばかり欲しい。食後は室に歸り寢臺に仰臥し、暫くして消燈、アスワン同様部屋を明け放してゐた。昨夜からまた暑いので締切つては到底眠られない。

十月二十日 日曜・好晴

前夜は疲れたためか9時間よく眠つた。ムスタファは8.0迄に来る筈なのに、8.10になつても来ないから、宿の玄關を出た廣場で待つてゐたが、待ちきれないので出かけたらずつて来た。もう7分きりないせといつたら、彼は自分の時計を出した。さうしたら8.12を指してゐたので、さすがにあわて驛へかけつけ、やつとの事で間にあつた。此朝はイスナ(Isnā, Esneh) (へ4)の町へ行くのである。何の目的かといふに、此町にあるイスナ堂を見るためである。

他の町所在の殿堂は何れも前回いつたから、夫等は總て『埃及紀行』に記してある。故に今度の

記事から其沿革等は省いておいたが、此町は今回が初めてであるので、大凡のことを記しておく事にした。先づ第一に何と發音するのかといふに、右に記した以外に、まだAsnā, Esneとかいたのがある。こんなのを考慮に入れるとイスナかエスナかイスネー位のところではあるまいか。尋ねたがどうしても明確に聞取れなかつたし、私がいふとイスナでもイスネーでも直に通じた。

イスナ町はラクソル町を距る鐵路³⁵/_{1/2}哩、開路市からだ⁴⁸/_{1/2}哩、上埃及に於ける重要都市の一。埃

イスナ町所在回教寺の光塔

(昭和十年十二月十日)



古代のは皆形がよろしいが、新しいのはどうも思はしくない。これは拙い例に示したものである。

續埃及紀行

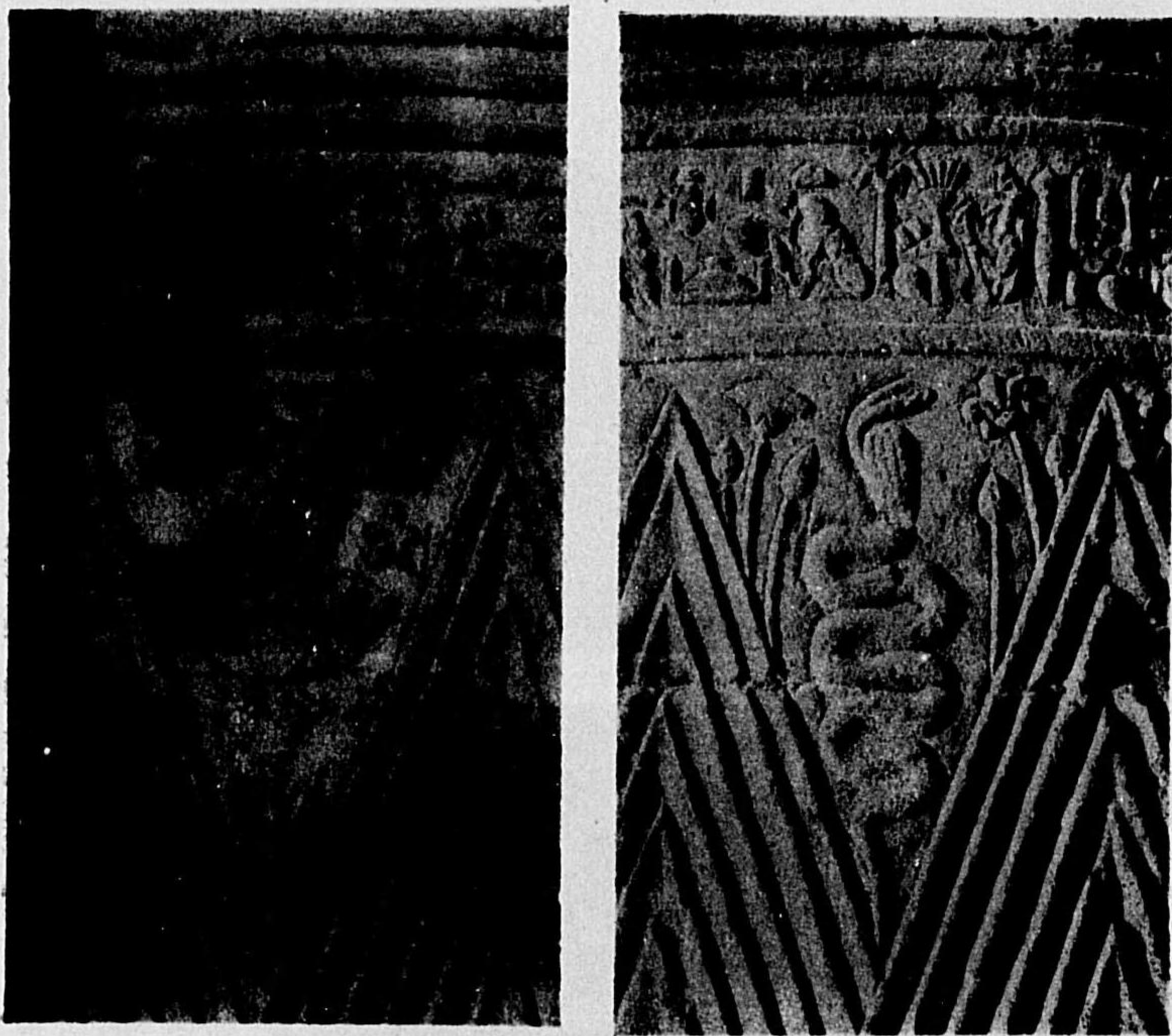
及名は Tenet。ノフト名の Sne は其變化で、遂に暴夜名の Esneh となつたといふ。希臘人は此町で拜まれた魚ラトス(Latos, Latas)の名に因んでラトポリス(Latopolis)と呼んださうである。書物に載つてゐるから確かであらうが、ものによつては随分違ひ過るので、何れが眞か判らないのがある。例へば1914年の本に此町の人口15000人とあるのに、1921年の本には15000人とあるが如くで、餘り違ひ

過るので困ることがある。

イスナ堂の本尊は牛頭人身の地方神クヌム (Khnum) ださうである。これも亦 Khnemu, Khnem としたのがある。其クヌムが主で、配偶者のネブート (Nebaut) と其子供とを合祀してある。現在發掘されてゐるのは正面入口の所だけであるが、其部分の正面は長108^尺奥行54^尺正方形を横に二つ竝べた形、この奥にまだ中陣と内陣とがある筈だが、壊れてしまったか地中に一部分でも埋まらぬか、とにかく掘り出されてはゐない。これでもあたりに民家がなく、椰子の樹でも生へてゐるのだと如何にも埃及らしくていいのだが、71で見ると通り町のまん中にあるので、餘り端近過ぎて氣分がでない。そんな事をいへば、ラクソル堂だつてさうだが、内流河岸にあるのでまだよろしい。これは少しひどすぎる。

此入口の部分は四列六行に太い柱が立つてゐる。即ち合計柱は二十四本だが、其内正面の六本は間を石壁でつないでゐる事圖の如く、柱間も普通の場合の様に中央が最も廣く、そこに大きな出入口が設けてある。この現存の部分は左程古いものではなく、トレミー時代のもので其銘文の一はトレミー六世(西紀前一八一—一四六。孝元天皇の御世から開化天皇の御世に至る)の時代に始まつてゐるといふ事である。

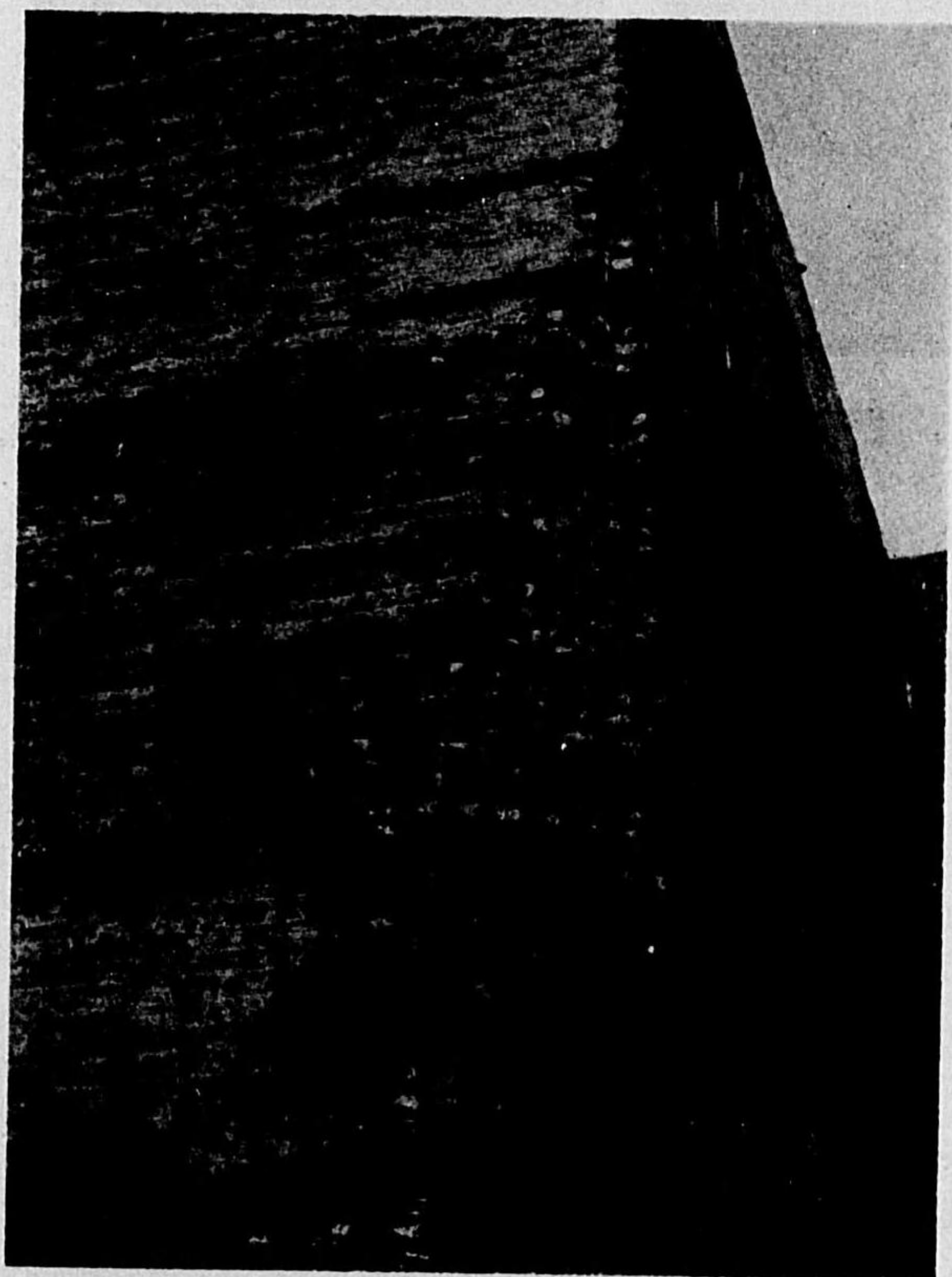
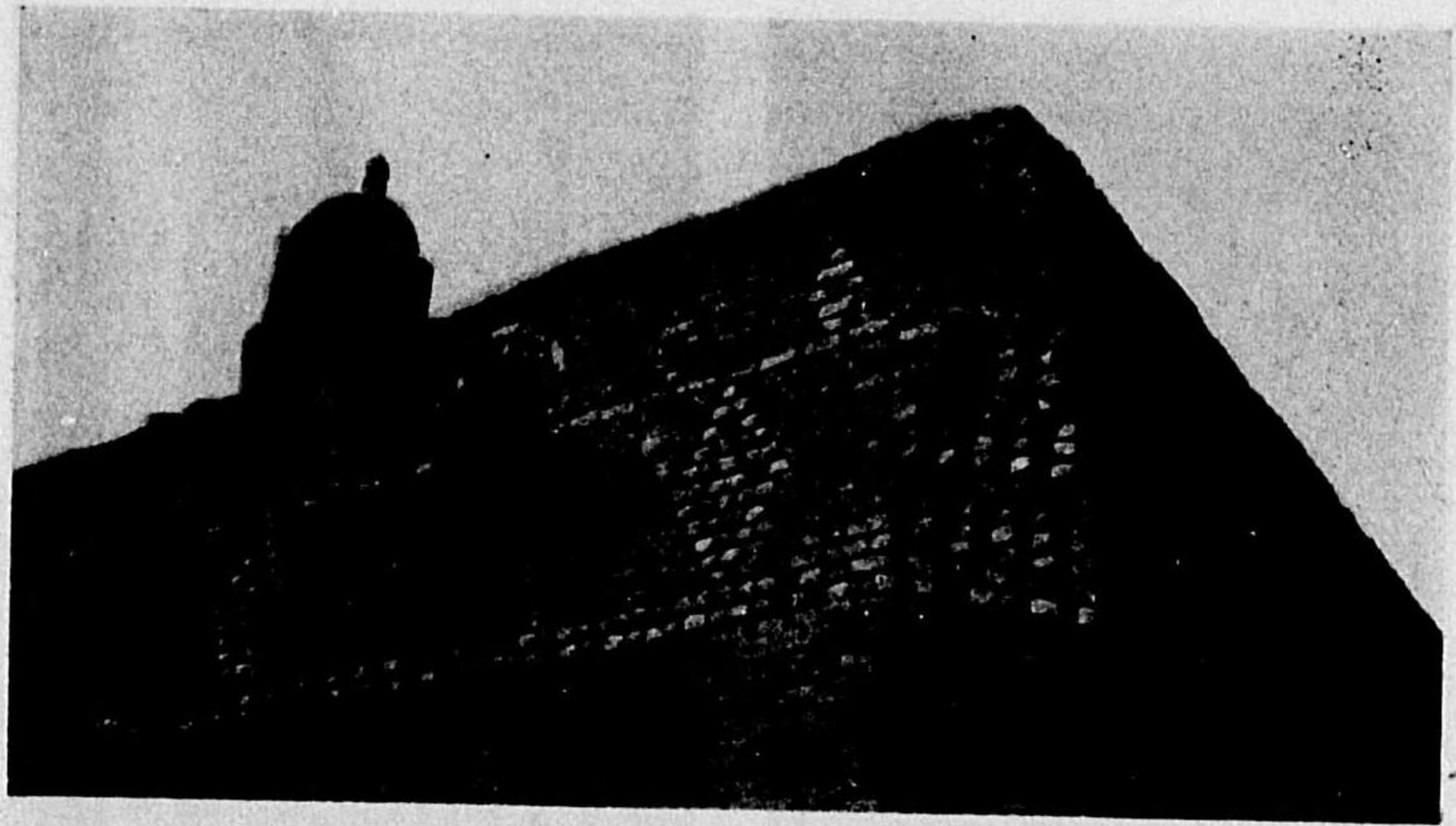
正面の六本の柱は71で明らかな通り柱頭は皆同様であるが、内部のは種類は多い。其數種を71—75に掲げておいたから、圖を見る時に解説を一讀すれば、大體了解できる筈である。各柱高さ37^尺徑



イスナ堂内柱下陽刻の蛇(右)と迦樓羅(左)(昭和十年十月二十日)

埃及の象形文字のうちに蛇はあり、又コム・オンボの堂の軒からは蛇が鎌首をあげて並んでゐるところが刻してあるが、右圖の様な形をしてゐるのは、つい見た事がない。埃及では蛇の害は左程ではないせむか、河馬や鱈に比べると、さう多くは祀られてゐない様である。蛇が少しづつとぐるを巻くところが印度のお伽話の中にあるのでみると、いつもこう大腸型とは限らないようだが、日本の蛇の様に正しい圓錐體にいつもなつてゐるとは限らない。

左のは手の二本ある鳥だから、これには何かわけがありさうであるが、私には判然しない。Wallis BudgeのTHE DWELLERS OF THE NILE 其他類書の中に、靈魂が鳥として現はれた圖があるが、顔は人で片手に呼吸、片手に生活の記號を持って飛んでゐるところが描いてある。夫とは異なり、これは何も持つてゐないが、やはり靈魂鳥であらう。さうしてこれが正面を向いて兩翼をひろげ、兩手を夫に添へて同じ様にひろげるとネパールや印度のGARUDA (迦樓羅)になる。迦陵類伽も迦樓羅天も、共に埃及の靈魂鳥から變化したと思へなくもあるまい。歐洲に入ったのは希臘神話のハーピー (Harpy) となり得る。



上。イスナ町所在回教寺の一隅。下。同民家の一隅。 (兩圖共昭和十年十月二十日)
 上圖は煉瓦のみを積み、下圖は補助として木材を用ひ、共に鐘乳飾に擬したものであるが、此と同じ方法で回教寺の光塔の露臺持送をつくり出したのを亞細亞土耳其の一部で見
 たし、又隅弓に應用したのを北京の清真寺本堂内圓蓋四隅に於いて見た事がある。この様
 なのは隨所で行はれた方法と見える。

約⁵/₁₀。ムスタファに例の愛用の四つ折の銀紙反射を持たせ、骨を折ってとつた寫眞は大事をとりす
 ぎて何れも露出過度になつて了つたが、M君が特別の取扱をして、非常に上等な版にしてくれたの
 で見違へる程立派になつた。正午迄この堂にゐて、夫から河畔のニュー・グラント・ホテルといふ
 宿屋で休憩をした。此宿屋は名ばかり立派でも木造でペンキは剝げ、窓と扉はすき間だらけだが、
 内流河岸にあるから位置としては理想的なるホテルの二階の濡椽に陣取つて持參の辨當を平げ終つ
 た後、時間が餘つたので町を見物した。

泥土煉瓦で積んだ民家だの寺だのの壁の出隅の部分が鐘乳飾を眞似てあつた(第七六頁圖)。先年北京で
 見た回教寺の内陣の圓蓋の隅弓の手法と同一である事を知り、非常に面白かつたが、後に亞細亞土
 耳古を汽車で通り抜けた折、窓から回教寺の光塔露臺の持送が同様の取扱がしてあつたのを見て乙
 や丙が甲の影響を受けた等と考へるは當らず、簡略にするか或はほんとうの手法がのみ込めない時
 分には、この様な處置をどこでもとるものだとみた方がよさうに今では考へてゐる。

蒿^チの油を絞るのを見た。大きな圓形の臺の中心に圓柱があり、此圓柱に直角に丈夫な棒を取り
 つけ、此棒に圓壻形で中央に孔を穿てる石臼の様なものを挿す。中心の圓柱と此棒とは堅固にとり
 つけてあるが、中心柱と石臼とは自由に回轉する様にしてある。そこで此棒の先に眼を布で結へた
 駱駝をつける。駱駝が歩くと棒は大きな圓形の臺の中心に嵌めてある圓柱を中心として、此臺上を

回轉すると同時に、此棒に挿込んである圓壩形の石臼は、一定の幅さを有する臺と同心圓輪を描く装置がある。此石臼の軌道の上に萵苣の實を散布しておく。さうしてつぶした實を油絞り機にかけるのである。つまりこれは簡単な一種の Edge runner である。此場合駱駝の眼隠の布をとると決して歩かない。直に停止して了ひ、どうしても動かないので、又眼隠をすると直に歩きます。町の中の汚らしい覆屋の内で作業をしてゐた。ムスタファが案内をした。

十七日同様上り列車は後れ、^{2.40}の^{3.05}になって正に25分後れた。其儘そっくり持越しラクスル着^{3.45}であるべきのが^{4.10}となった。明るいうちに歸れたのはうれしかったので、直に入浴、疲れた身體を休めることができた。明夜は寢臺車で明後日朝開路といった工合で、先づ上埃及旅行も無事に終りさうである。

*

*

*

*

例ひ其市價は僅かに壹圓五拾錢にせよ、此際生命から二番目と心得てゐる魔法瓶を、萬一失つたり盗まれたりしては、意氣銷沈して前途の不安を拂拭すべくもないから、それはそれは大事にして、寫眞機や現像したフィルムと同等の貴重品待遇をしてゐたのに、此朝ほんの僅か、約3分間部屋をあけた間に盗まれた(と思つた)。少し早い食堂へ行かうとして、着物を着替へて扱て氣がついて魔法瓶を見たらなかつた。どこを探してもない。何度もさがした揚句、簞笥の下迄も見ただがなかつた。

部屋給仕は人相がよくないから、あいつは魔法瓶へ眼をつけてとつたな。とるなら明日にしてくればいいのに。一體給仕は私の留守に室を開放し、大丈夫の様に安心をさせ、こちらが少しばかり氣を許した所でやつたな、どうもけしからんと、失望と憤慨と半半位の心持で食堂へ出て行つた。食事中給仕長と見ゆる太つた不愛想な男が来て、私の大事の大事の生命から二番目の魔法瓶を机上へ置き、あなたの留守中に部屋から持ちだして「冷し紅茶を入れておきました」といつた。此時位有難かつた事はなかつた。同時に人を疑つたのは何ともすまなく、給仕の顔をもてきまりが悪かつた。併し又一方からいふと、實際は埃及の宿屋の召使——埃及に限らず、日本國以外のは全部——等には少しも氣が許せない。だから疑ふ方にも半分位の理由はある。いくら早手廻しても、僅か二三分の間に黙つて部屋から人の所有物を持出す等は決してほめられない。由是觀之、例ひ僅

* 此大事な魔法瓶は、昭和十一年一月二十八日、西北印度のラワルピンヤ驛からタキシラ驛へ行く汽車に乗りがけに盗まれてしまつた。私はラワルピンヤ驛で汽車を待つてゐたところ漸く汽車がついたので、空室へのつたが、何にしろ大變なほこりであつたから、從僕のワッサンは停車中掃除を始めた。ところが不圖彼は隣室の方がごみも少なく美しかったので、その方へ私の荷物を皆運んだ。併し先の室へ魔法瓶だけ忘れたらしい。此汽車は急行車だからタキシラ迄一度停車しただけであつた。下車したら魔法瓶がなかつた。ワッサンは自分の過失だし、乗車驛の苦力が盗んだに違ひないからとて、随分思ひとまる様にするために、是非探してくるといつて直に次の汽車でラワルピンヤに引返し、驛長に届けたり、いろいろしたがなかつた。いつて翌朝戻つて来た。私も直にタキシラ驛からラワルピンヤ驛長へ魔法瓶紛失につき搜索方依頼の電報を打つておいたが、そんなものは何にもならなかつた。一瞬間でも眼を離したら最後、何でもその邊のものは消失すると思はねばならぬ。後の旅行者への注意迄に記しておく。

少の時間と雖も部屋から出る時は、忘れずに必ず錠を下ろすべきである。

* * * * *
 写真屋へ現像したのを取りに行く。洗ひ方不良でやり直しを命ず。阿風次は四ヶ國語に通じてゐるのかも知れないが、あんなでは駄目だ。初めの二本の見本だけよくして、あとはどうでもいいといったやり方。商人はどこでも同じやうなものだ。開路の Kodak Ltd. の現像と餘りにも差があり過る。

十月二十一日 月曜・好晴

午前三度目のカーナック大堂見學をした。此が最後である。だから多くの寫眞をとった。ツートモーシス三世堂の柱に「CHAMPOLEON」とある樂書を發見した。CHAMPOLLION と同人かどうか。本人がやったのなら、いたづら書きでも少しばかり面白いが、どの書物をもても……LEON と綴つたのではないから、誰か遊覧人か何かのいたづらであらう。

晝食のため歸宿、午後は休養とした。さうして一寢入したいと思つたが、中中さうはいかなかつた。5.30 にムスタファが金をとりにきた。随分高いが大してつけがけはないらしく思はれた。但し汽車だけは三等へ乗って二等の運賃が請求してある。これは埃及のドラゴマン共通のやり口らしいの

で仕方がないらしい。寫眞屋へ現像フィルムをとりに行き、石鹼の極めて大型のもの一個を買つたが、此時は彼は同行した。高いが義務はきちんと果す、併しこれも取様によっては用意周到な計畫と見られなくもない。石鹼は Luxor Pharmacy といふ看板を掲げてある家で買つたが、歸りに彼曰く、あの家は一番安價だ、今の賣子はコプト人で正直だといつた。さうかも知れないが、私がいゝろいろの石鹼を見てゐるうち、ヘアス・ソープのあるもの、アスワンの町で3ピアスタで賣つてゐた同じ包紙のものを4だといつた。内容はどんなか知らぬが、とにかく1ピアスタ高いのはどうもあやしい。ムスタファと一緒に行くのは少なくとも10%位の口錢をとるのが主なる目的であらうといふ疑をもつてゐる。

*

*

*

*

彼はアスワンで少し金が足らんから貸してくれといつたから£3 渡しておいた。ところが今夕の請求額は、彼の八日間の料金も、立替の807も勿論含まれてゐて合せて16.37。それに心付として50、總計16.87 16.87 やつたら其儘受取つて了つた。その時は前渡の金を忘れてゐた。買物をして宿屋の門を入り、彼に分れて玄關迄來てから氣がつき、玄關番に彼を呼んで貰つた。さうしたら追ひついたら見えて間もなく、一緒に引返して來たから、部屋迄連れてきて其事を言つて金を返せといつたら、夫れは請求書中に書いてある筈だと言ふので、其請求書を見せてやつたが、元よりある筈はない。そこで

往生して返金した。返金したからいい様なものの、金銭にかけては正直だといつも褒められてゐると常に吹聴してゐる手前、なせ最初に言ひ出さなかつたか。やはり奴比野の土人はどこ迄も奴比野の土人、雇主が忘れてゐれば幸ひ、だまつてとつておくのが正直といふのだらう。それを差引いて返すのは、やはり正直ではあるが、上に二字形容詞がつく正直で、夫は現代式ではない。と心得て其通り實行してゐるのだらう。其昔ロバート・ブルースに奉仕した様な氣のきいた勇敢なのは、末世の今日かねの草鞋で上埃及中探がしたつて見付かるまい。

懐中はおそろしく淋しくなり、この調子では開路へ着くなり早速金をとらなくてはいけないと思つたのに、回収した£3で助かつた。合計すると£7あるからこれなら、坡西土迄歸れるだらう。

£9 残して£9で雙眼鏡を買ふ計畫は全く晝餅に歸して了つた。

*

*

*

*

十三日の夜に開路驛を出で、今夜が二十一日の夜になるから、丁度これで規定の「十日九夜」になると思つたのは大間違で、汽車のなかは勘定に入れないと見え、宿屋では二日二晩棄權するのは損ではないか、なせ今夜たつのだといつた。これが日本だところは行くまい。何でも彼でも其日を入れて數へるから、さう思ひ込んでゐて、別にきいても見なかつた。併し今更先がつまつてゐて、どうする事もできなく、みすみす大損をして了つた。

9.20 宿を出て驛に向つた。部屋から正面玄關迄のあちこちにいるいろいろな男が立つて私の顔を見てゐる。決して一つ所にかたまらず、適當の距離間隔に歸路を要して、少しでも金にありつかうといふ寸法である。これでは請求書に記入してある10%の心付は何にもならない。だからいくら先方が眼に物を言はせようと、こちらは一切不通で知らん顔でぬけて出た。

汽車は例の如く遅延した。おくれるのは常態で、時間通りに來るのが珍らしいのだから、日本の様に掲示等はださない。切符の謂はゆる Stamp はムスタファがとつた。汽車へ乗つたら、他の異人を送りに來てゐた寫眞屋の阿風次が私の部屋に入つて來て、ムスタファが窓口まで持上げた荷物を内から受取り、うまく按配してくれた。だから私はこの兩人に挨拶して横になった。間もなく汽車はでた。ラクソルとは永久に分れた。

十月二十二日 火曜・好晴

昨夜發車するなり直に眠り、此朝6.0に眼がさめた。車掌が來たので朝食をする旨を告げたら、食堂へ行くか部屋でかときいたから、勿論部屋だといつたら、註文をきいて出て行き、暫くしてから盆へせて自分で持つて來た。車掌が食堂車の給仕兼任には少しばかり驚いた。日本あたりでは到底見られない圖である。本職の他にこの様な兼職を持つてゐるのが埃及國有鐵道の車掌である。

食事を終った頃は開路市に近付いた。さうしたらまた車掌が請求書を持参に及んだ。40とあつたので50の札をだしたら、釣銭をもって来た。併しどうもこれは一割とは行きかねたので10ピアスタヤつたが、其後は全然出現せず、終點に近づいてから窓をあけに來た。

下車したら西土が迎に來てゐた。今度は一泊だからコンチネンタルへ行つて見ようかとも思ったが、やめてやはりメトロにした。主として所持金の心細さに原因をしたのである。私は午前中もう一度暴夜博物館を午後は回教寺を見るといつたら、彼は連りに自動車を勧めたが、私は馬車を主張した。體裁を考へて高價な自動車なんか奮發する——寧ろさせられる——事なんか絶対排斥すべきである。

9.25に宿の玄関前から馬車で出かけ、先づ暴夜博物館へ行き、次にケヂビアル・ライブラリ(Kedi Vial Library)へMSS.を見に行つた。さうして町を一巡して歸宿。午後は2.0からムルダニ寺(Murdani)から始めて最後にザールヒル寺(Mosque Ez-Zahir)へ行つた。このモスクに就いては去る日西土に尋ねた所、Not so bad. だといふ答をした。然るにこれは彼が一度も見た事がなく、ごまかした返事であつたと見え、愈よ行くといつたら道を知らなかつた。さうして連りに考へ込んでしまったから、Midan ez-Zahir といつたら判つた。ここは外からは寺らしいが、内部は公園となり、花等を植ゑてあり、美しくしてある一の廢墟になつて了つたが、夫でも多少修築をしてゐるものの如く、東隅

に少し古い窓が残つてゐた。

此モスクを最後として本日の日程を終つた。西土は日埃協會にU氏を訪問しようと言ひだした。實は早く歸つて休養したかつたが、少しく考へた點もあり行くことにした。ここは商品陳列所見た様などころで、二階に導かれて日本人U氏と、次席のI氏とに初兼最後の對面をしたが、I氏は館内を一巡し、陳列してある日本の商品に就て説明をしてくだされた。歸宿したのは6.0頃で、夕食後は寫眞の整理に費しておそくなつた。

十月二十三日 水曜・好晴

起床後食事迄寫眞の整理を續けた。9.30西土來り10.20に驛へ向つた。發車した時刻は記載してないから今では判らないが、愈開路市に分れ西土にも分れ、途中ではカンタラ驛で驛の立札を一枚とり、3.30坡西土着。南部商會から例の伊太番が主人の命により來てゐてくれた。アクセントの正しい日本語で「天沼さん、こちら」といつて、先に立つて人込みの中を巧に誘導したのには少なからず面喰つた。さうして感心しながら歩いてゐるうちにマリナ・バラス・ホテルへ連れて行き、三階の51號室へ案内をしてくれた。前回は大正十二年十一月六日、此宿の二階15號室へ泊つたので、年月日には何の關係もないが室が15と51とで番號が反對になつてゐるのが少しばかり面白かつた。

南部商會に預けてあつた鞆を取りよせ、荷物の入れ替をしたが、夫が終つたか終らないかに番頭が迎に來たから行つた。南部さんにあつていろいろ世話になつた禮を述べたら、「船はあした伊太利のがでる、此船は亞歷山港へはよらず、ビレウスへ直行する。希臘船は船員の同盟罷業で出ない。あしたの船をやめると十五日のびるから、取敢へず切符は買つておいた」と、又「クックの方も各地の汽車寢臺等豫約させておいたが、宿屋はどこでも泊れるからやめにした。船は明日朝つき午後1時に抜錨する、だから午前^{11.30}迄に乗込むやうに」といつてくださった。

實は虎の子の£7は此時50ピアスタ(當時邦貨換算8圓50錢位、ざつと10圓足らず)あるかなしかに減じて了つた。明朝がそんなに急がしければ寫真材料は今日のうちに買つておいた方が安全だとあつて、金はいくらでも南部商會で立替へおくとのこと、早速海岸通の百貨店 Simon Artz で 616 Verichrome 二打とリリズ三本買ひ込んだ。夕食は南部さんのところで日本食を御馳走になり、9.0 退去歸宿をした。

*

*

*

*

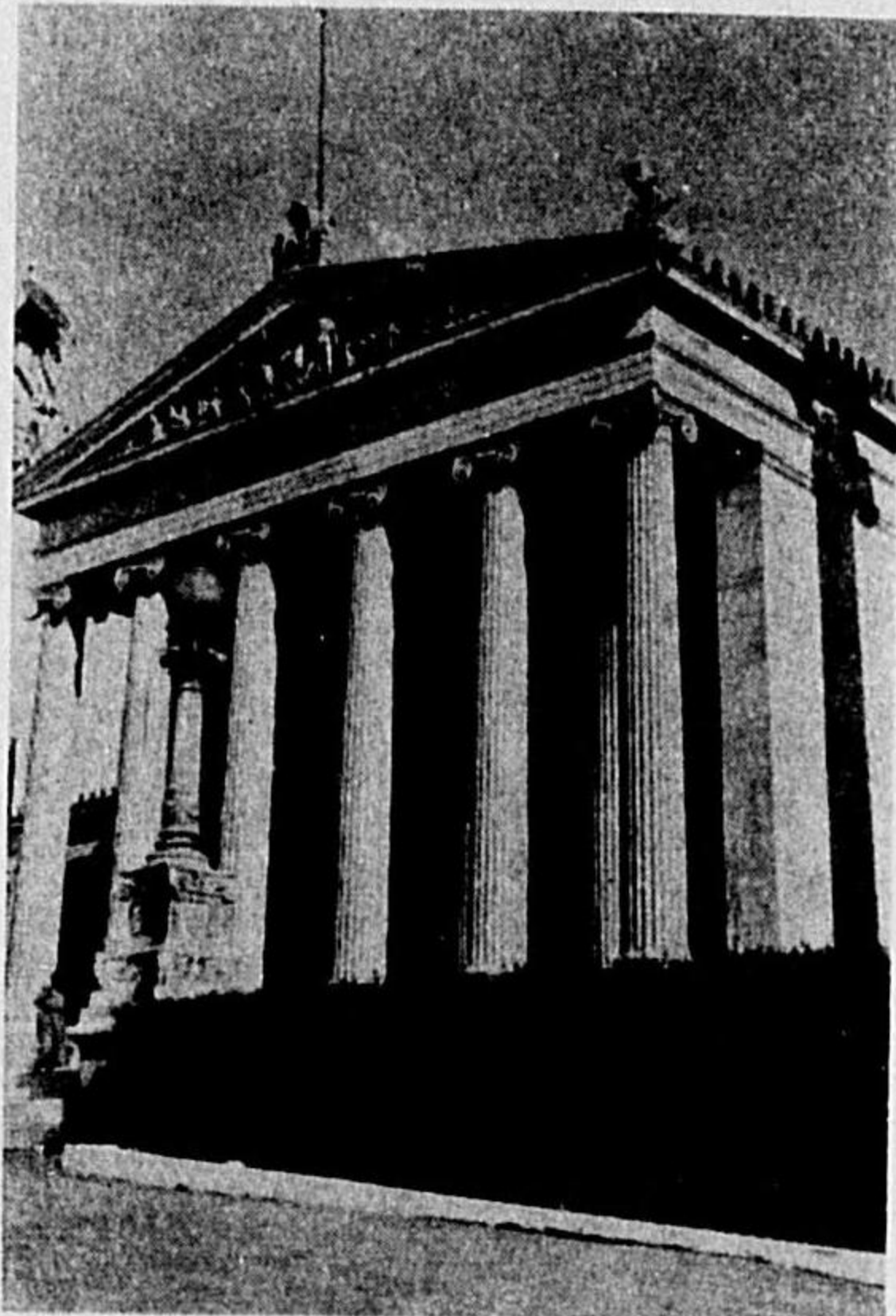
埃及といふ國は、外交官か何かの資格で行くか、左もなくば官憲の正式招待でも受けて大威張で行くか、何かそんな事ででもなければ、案内人を連れなければ手も足も出ざるべく、連れれば關から關へ流れ出す金が相當にかかると思つておぼろげな覚悟せねばならぬのである。私としては純粹のお上りさんではないつもりであつたし、時々そんな事を仄めかして、馬鹿にするな知つてゐるぞ、といふ様な顔をし

て見せたり、自分ではいろいろの手段方法を講じたつもりだが、充分の効果があつたと思へない。あれだけ立派な古蹟があるのだし、政府でも此頃大分其保存顯彰に力を入れてゐる様であるから、此際案内人等も政府の仕事として教育し、上品で素養があり信頼のできるものに仕上げ、遊覽者は一定の料金を考古局あたりに納め、專屬の人をつけて貰つて歩いたら、安心して愉快に序に學問もできる様にならう。今の有様では彼等のいふ事はそっくり書物にある通りで、少し變つたものがあったり、氣のついたものがあつたりして尋ねても、何一つ答へられない、さうして成るべく自分はずるけてうまい事をしようと考へてゐるいぢの汚い連中ばかりでは、心ある人は失望するのが落であらう。然らば連れなければいいが、それでは歩けないから仕方がない。料金の高いのは、此は季節中に一年中の金をとらねばならぬのだから仕方がないが、あれではいけない。これは錫蘭のアナラジャブラでの話であるが、大正十二年一月に初めて行つた時、道案内のつもりで雇つた案内人が、同所の無畏山塔の説明をした時、此塔に用ひられてゐる煉瓦は大變な數で、例を擧ぐるならば「イブスウキツチかコベントリー位の大きさの都會をつくれるし、或は倫敦から伊丁堡迄高さ十尺の壁をつくれる位である」と得意になつて喋つたが、これはマレーの案内記にあるのとそっくり其儘で、彼は一度も英國へ渡航した事は勿論、無畏山塔に使用してある煉瓦の計算をした事もないのである。案内人が書物の受賣ばかりしてゐて駄目だといふ一例に擧げたのである。

日本でも近頃名所舊跡が多い、例へば京都や奈良等に於いて、ホテル専屬案内人の學力を増し品性を高め、簡単な學術的説明位はできる様にせねばならぬといふ様な意見が、ツーリスト・ビューローやホテルの幹部員の間に行はれてゐて、近い將來にある形式で實行されるのではないかと思はれるが、私は萬事につけ名實共にどこへ出しても耻かしくない様な、ホテル専屬案内人の出現の、一日も速かならん事を祈るものである。

(昭和十六年五月九日稿了)

下
編



アテネ市高等工藝學校入口

アテネの高等工藝學校として、この様な式で建築するのは最も適してゐると思ふ。昭和十年十月二十一日寫眞。

坡西土から坡西土へ

(歐洲の一部及び西亞旅行記)

(第四回)

此旅行記は、坡西土から希臘のピレウスに渡航し、アテネを見物し、再びピレウス港より船で土耳其に向ひ、イスタンブールに上陸、南下してシリヤのトリポリに出でてベイルートへ行き、ここから「パールベック」・「ダマス」・「エルサレム」を経由、カンタラにて蘇西運河を渡り、汽車で坡西土へ歸つた間の記事である。昭和十年十月二十四日發、同年十一月十八日歸着。日數二十六。

*

*

*

*

十月二十四日 木曜・好晴

朝食後銀行へ行き、信用状を示して£E 100 とつた。さうしたら手数料とかいって3だけ先方へとり差引£E 97 くれた。少しく高い様だが、文句を言つても大した効果がないと見て引下り、其足で豫てからの懸案を解決すべく百貨店へ行き、カール・ツアイスの8倍の雙眼鏡を奮發に及んだ。價£9

* £E 1 (埃及の一ポンド) = 1/10/6 (英貨一ポンド六ペンス)、即埃及國の一ポンドは英國の一ポンドより少しばかり(即ち六ペンス)多い。併し埃及國の百ポンドとなると、英國の百〇二ポンド十一シリング三ペンス半に當る。當時英貨一ポンドは邦貨約拾七圓に當つてゐた。さうすると百ポンドに對して九十七ポンドでは、手数料が正に三ポンドで、邦貨にするとざつと五拾圓の手数料となり、甚だ以てけしからん次第である。十月八日にも上埃及旅行のため£E 60 を引出した時、£E 40 しかくれなかつたから、やはり手数料は參拾餘圓であつた。だから止むを得ないとあきらめたが、とにかくこのやうにして次第に所持金はなくなつて行くのである。銀行の名は CREDIT LYONNAIS.

(約一五) 税金のかからない土地ださうだから、相當な品であらう。

船は伊太利國 Lloyd Triestino の「パレスチナ」(PALESTINA)といふので、後1.0 にでるから是非11.30 迄に乗込めとの事で、朝になつて其通知を受けたから随分急いだ。荷物一個は南部商會に預け、二個をもつて乗る事にした。併し税關の手續や何やかや可なり面倒なのを、例の伊太利生れの番頭と、土人二人で全部してくれたので、私は何もしないで其儘乗船をした。而も伊太番と一緒に船迄來てくれたので一層都合であつた。室は14號の一人室で、又しても14がついてまわつてゐた。廣くて綺麗で實に氣に入つたから、何とかして一月位乗つて居たいと思つた。坡西土から希臘の港ピレウス迄運賃606 リラ、當時邦貨換算約103 圓。然るに乗つて間もなく解纜は3時だから、船で晝食するなら飯代^{10/6}だといつてきた。こんな事がもう少し早く判つてゐたら、ホテルで食べてきたのに、折角ホテルへ注文しておいたのを、せき立てられて氣のどくな思ひをして斷つて乗るには當らなかつたのである。^{10/6}は何といつても高いが仕方がないから食べる事にして食堂へ行つてみた。

高價ではあつたが、此食事は非常な美味で、喜んで満足して金を出すといふ氣持になれた。然るに船は後^{5.50}になつても依然として荷役をしてゐた。やはり午後3.0 解纜がほんとうであるらしい。夫だのに1.0 ときいて周章狼狽、鞆の革紐をホテルの寢臺の下へ忘れたまま乗込だのは大失敗であつた。併し今となつては最早致し方はない。あきらめて室で寫眞機の革囊の修理をしてゐたら、知らない

うちに船は動いてゐた。

夕食後入浴をしたが、入浴したいといふ意志を先方に傳へるにつき、面白いことがあった。室の呼鈴を鳴らしたら、意外にも老婆が出現した。如何にしても bath が通じない。風呂場を指して言つても依然不通であった。作り話かも知れないが、ある人が外國へ行つたとき、土耳其風呂へ入り度いと思つては Turkish bath とどこにあるかと尋ねたら、Taxi bus ならどこにでもあると答へられてまごついたといふのを思ひだし、苦笑してもはじまらないので、バンとでも言つて見たら一番よかつたらうが、あわてたので氣がつかず、困つた揚句先年マドリッドの宿へ泊つた時、女中が風呂の事をよく「バニョー」といつたから、或はこれならバードよりも通ずる可能性があらうと考へ、唯一言「バニョー」とやつてみたら、婆さんは笑つて「シー・シー・シー・シー」と四度續けていつて消えてなくなり、湯は直にできて漸く目的を達し得た。

十月二十五日 金曜・好晴

朝6.0アレキサンドリア港口に達し、夫から奥に入り、9.0に岸壁に横附になつた。フェルムの現象と焼附八枚を頼み、部屋の給仕にいつできるか尋ねようと思つたら、バニョー婆が傍から今日中にできると英語でいつた。英語ができるのには少し驚いた。これでは拙者も完全に bath と bus の

仲間に入つたらしい。

亞歴山港はさすがに賑かだ。英國の軍艦が澤山ゐた。部屋給仕はエチオピア遠征の伊軍牽制の爲だと誰かの受賣をしてくれた。航空母艦だといふ變な型の軍艦もゐた。海軍の軍人なら一見直に名も判らうし、斯る光景を興味深く眺められようが、門外漢には薩張判らず、ただ航空母艦のほんものを初めて見たのが珍らしいと思つただけであつた。水上飛行機が海面に浮んでゐるのを見つけ、これも初物なので嬉しくなり、前日買ったばかりの雙眼鏡で覗き、のろ臭いものだと思つてゐたら、突然ブルブルブルツといふが早いか飛んで行つてしまつた。まるでゆっくり飛翔してゐる珍蝶を捕蟲網で伏せようとした時、電光の如く飛び去られた體。

船は後2.0にでるといふから、相當に時間はあるが、土地不馴だし、博物館だけでも一見し度いと思つたが、中止して上陸しなかつた。船は合圖も何もせず、知らぬうちに出た。港口を出ても2時間港の家がはつきりと見えてゐた位によく晴れた天氣であつた。然るに6.0頃からゆれ始め、7.30の夕食の時は相當に動き、上下左右に複雑な曲線を描き始めた。一等客は五人ゐたが、隣の机に座つた夫婦のうち、初めは細君が大變な元氣で、大きな聲でポターージュか何か註文してゐたが、間もなく退却、主人獨り孤軍を拵げて大に奮闘した甲斐もなく、戦利あらず敗退に及んだ。異人達はこんな時は大していくぢがあるとも思へない。異人が船暈に苦しんでゐる顔ときたら、ゴヤの繪を見



此はサルゲニアの風俗をかいたもの、色刷で美しい。第二第三頁には伊語と佛語で獻立が書いてある。

てゐる様で私は餘りすきでない。先年第二回目の歐洲大陸の旅行を終り、佛から渡英した時、カレ・ド・ドーバー間の連絡船がカレを出ると間もなく食堂が始まり、最初は満員で座席がなかったが、暫くしてやっと一席を得た頃から大分動き出したので空あきとなり、私が食事をすまして上甲板に出た時分には、そこいら中にゴヤ式顔面が充満してゐたので、相當に恐縮した事をよく記憶してゐる。

十月二十六日 土曜・好晴

前夜動き通して此朝8.0頃から平穩になったのは、風が凧なのであらう。海面が平靜になったのは

有難いが、少し寒い。つい一週間ばかり前には、上埃及で暑氣に苦められてゐたのに、當然ではあるが随分ちがふものだと思つた。此分では明日あたりから可なりこたへるだらう。

十月二十七日 日曜・少曇

朝は太陽が出たり引込んだりしてゐたが、やがてピレウス港が遙に見えだした。イソップ物語のうち「^{**}猿と海豚」の話で、ピレウスといふ名は、随分子供の時から知つてゐたが、見るのは初めてである。其ピレウスに刻刻近づくのだから、多少の感慨なきに非ずであつた。

旅券の検査も済んで愈よ町に最初の歩を印したのは午前9.0であつた。大正11年には希土の間が穩かならず、行くのはやめるとあつたので、せめてアテネだけでも見物したかつたのをやめてしまつた以來、十三年目でもかくも希臘國の一角へ確かに上陸したのであるが、扱て上るには上つた

* Piraens. ほんとうの發音は Piraecus ださうだ。

** 話の筋は次の通りである。アテネの町に歸る人が、一疋の猿をつれて船旅をしてゐた。船が海岸に近づいた頃不幸にして大時化にであひ、船は轉覆した。乗客も船員も一生懸命でおよいだ。ところが一尾の海豚が猿の泳いでゐるのをみて、人だと思つて背中へのせ、陸に向つて泳ぎ、漸くピレウス港にきた時、海豚は猿にあなはアテネの方ですかとときいた。ところが猿は自分はアテネでも名望家だといつたので、海豚は重ねて然らばピレウスを知つてゐるだらうときいた。猿はピレウスといふのはきつとゑらい人か何かだらうと思つて、あの人は私の友人だと答へたので忽ち化の皮をむかれ、海豚は愛想をつかして直に水中にもぐり、猿は溺死してしまつた。(The Monkey and the Dolphin.)

が、夫からがまるで判らず、どうしようと思った瞬間、出て来た變な男に導かるる儘に車に乗り、廣い街道を一直線に走った。これは多分アテネ街道であらうと、大に落着いてすましてゐたら、やがて曲り角の電車通に面した大きな家の前に車が停った。これは宿屋で、アクロポール・パラス・ホテルといふ。53號室に入る。時に前9.40。窓から町の有様がよく見え、直ぐ眼の前に希臘文字でアテナイオンとかいた看板を出した家があり、如何にも希臘へ来たといふ感じがした。其昔アルファ・ビータ・ガンマでは随分と苦しめられたから、シータやオメガと併せて其位はよめる自信がある。一休する間もなく車代をとりに来た。總計300ドラクマといふ。高いのか安いのか丁度いいのか全然見當がつかず、こんな事なら一層クツクに頼めばよかつたと思つたが、土地不案内でそれもできかねた。所詮網にかかつた椋鳥を以て甘んずるより仕方がなかつた。寒いと思つたのに案外で、あひ服を着用して少しくあつい位であつた。

アテネの町にあるクツク社から人が來たので、明日午前半日案内人つきの自動車で町を一巡する約をした。賃金^{32/-}との事。これは頗る高價だが、概念を得るためには止むを得ない。此宿で晝食を試みたが、其まづさと來ては例ふるにもなく、就中鶏の天婦羅はまるで味がなくて、甘くも辛くも酔っぱくもなく、正に文字通り蠟を嚼む如くであつた。伊船「パレスチナ」の料理のうまさ、この宿の不味さとは事實兩極端であるといつて決して過言ではない。

1.30に宿を出て、地圖を頼りに町を一人で散歩を試みた。坡西土や開路や上埃及であれ位うるさかつたせゐか、ここでは誰一人見向くものさへなく、非常に樂であり、さすがに亞弗利加の黒ん坊の國よりは開けてゐると思つた。さうして遂にアクロポリスの丘の周圍を一巡して歸宿した。「テセイオン」・「バルテノン」・「エレクトイオン」及び「リシクラタスの記念碑」等、或は遠方から或は近くから見た。永年受賣をしてゐた此等の古典建築は、此時初めて見る事ができたのである。

10月7日坡西土に上陸して以來20日間、連日續いた好晴は、遂に曇つた上に、至極僅かではあるがパラパラの程度に雨が降つた。北の方へ來ると熱帶の様には行かない。併し暑いのでとうとう夏服にした。

アクロポリス丘に就いては、例の『萬國名所圖會』第四卷に、先づ第一に雅典府全景 (VIEW OF ATHEN CITY) 同アクラポリス山景 (VIEW OF ACROPOLIS MOUNTAIN) 同山古代の圖 (VIEW OF ACROPOLIS ON ANCIENT) の三圖を掲げてある。其堂堂たる繪葉書式英譯は姑く措き、其圖なるものは、知つてゐるから了解ができるが、知らなければ全然意味をなさぬもの。古代の圖とは今の言葉でいふ復原圖でバルテノンもエレクトイオンもプロピリアムもあるし、正面から見たところには、アグリッパ像の臺座の上に、馬上の同將軍の像がのせてあるの等は、何といつても愉快である。雅典府之記に曰く

雅典は希臘の首府にして
 ・ 土耳其の首府より西南方
 ・ 海上三百八十英里
 ・ ビュリウリス港より鐵路にて
 六英里の内地にあり
 ・ 人口四萬に過ぎずとす
 ・ 此府は古來數回の
 ・ 兵燹に罹りて市街みな
 大いに破壊し名所や
 ・ 古蹟多く破損せり
 ・ 然に輓今それ之れを
 ・ 修築改造なし以て
 漸く古昔風光の
 ・ 一斑を見るに至りたり
 ・ 然り而して其位置は
 ・ 原野の中に有るなれど
 府邊は丘陵起伏して
 ・ 市外を繞り歐洲中
 ・ 勝景都府の一と稱ふ
 アクポリスといふ山は
 ・ 高さ三百五十尺
 ・ 古昔該山嶺上に
 ・ 世界一てふ美麗なる
 大堂ありて是府の
 ・ 四方數里の遠方より
 ・ 光り輝く勝景を
 ・ 眺望得べく而して
 是に詣づるもの多し
 ・ 且此堂の神像は
 ・ パルテノンてふ女神なり
 ・ 二百餘年の昔まで
 其まあまりしが當時彼の
 ・ 土耳其と戰爭したる時
 ・ 該山上の火藥庫が
 ・ 破裂せし時此堂も
 ともに破壊し今は只
 ・ 石柱及び二三の
 ・ 小堂遺存なせるのみ
 ・ 其他市街に觀るべきは
 王宮並に大學校
 ・ 二三の大寺等となす
 ・ 當國獨立せし以來
 ・ 財政未だとのはず
 歳出は歳入に超過して
 ・ 内外公債多額なり
 ・ 今王位に即きし際
 ・ 英佛魯より借財し
 其他内債多額にて
 ・ 其利子とても歳出の
 ・ 四分の一に及ぶとぞ

右のうち第一行のビュリウリスとはピレウスであらう。第六行目のアクポリスはアクロポリスの誤記で、ロの字がぬけてしまった。アクポリスといふ山とあるのが面白い、だから當時の英學者がマウンテインとしたのであらう。既にマウンテインである以上、嶺上が生きてくる。且此堂の神像は、パルテノンてふ女神なりは、一代の名工フェイデアス作のアテナ・パルテノスの神像を指してゐる事勿論である。トルコとの戰爭の時は、パルテノンの神殿を火藥庫にしておいたのに、砲彈が

命中して大的に破壊して了つたのであつた。市街に見るべきものは、オリムペイオン即ちジュピター・オリムピウスの神殿、ハドリアン門、タワー・オブ・ウキンズ(風塔)、リシクラチーズの記念碑、耶蘇會堂では小さいけれども東羅式の代表的のものがある、等等。いくらでもあるのに、王宮大學二三の大寺で片付けてゐるのは氣のどくである。雅典府之記がとも面白いので、引いておいたのであるが、『萬國名所圖會』は總て此調子で、洵に愉快なものである。

夕食は實に困つた。8.30からといふので、見當をつけて8.40に食堂へ行つたら、眞つ暗でしまつてゐた。さうして反對側の室に電燈が一ぱいにつき、其光景當ならず、而も今夕はその室で食事があるのだといふ。どうも勝手が判らないので、一先づ歸室し給仕を呼んできいてみたら、結婚披露か何かあり、泊り合せた客も隨時そこへ出席するのださうな。それは少し困るから、室で食事をする事にして、何か取寄せておいた。如何に風俗習慣が異なるにしても、私にとっては左様なことは辭退した方が勝手なのである。

十月二十八日 月 曜・好晴

8.30に車をもつて來る約束の案内人は8.35に來た。鼻の異常に發達した太つた氣に喰はぬ容貌の小男

であったから、成るべく其顔を見ない様にして話をしたが、先づテセイオンを見て一枚寫し(81)、東の方へ麓の道を半分廻ったら、アクロポリスへの入口が直に知れてよかった。此入口は一人では簡単に見出せない様な所にある。後1.0迄の約束なのに、0.15にすんだので少し體の工合もよくないから、午後は休養にきめた。

クックへよったら、31日に出發する様に取計らっておいたといつた。さうしてイスタンブール着の時、案内人が驛へ出迎へて宿へ案内する事。宿に於ける室の豫約、汽車では寢臺車の豫約迄萬事手違のない様に申込んでおいた。聞く所によるとアテネからの寢臺車はサロニカ驛迄しか行かず、サロニカとプシオン間は食堂車もない。其上サロニカには夜中の12.0着、0.20發で更に其翌日の前10.20にイスタンブール着との事であった。つまり10月31日にアテネをたつと、11月2日の午前でなくては目的地へ着かない。尙やつかいなのはプシオンとイスタンブール間の寢臺車はベルグラード(元のユーゴスラビアの首府)へ電話で照會しないと、とれないといつた。

以上は事實さうなのか、或は幾分お負けが入つてゐるのか、その邊は判らない。抑ベルグラード

* Acropolis. アテネ市に於ける高丘城砦。

** Istanbul. ホスボラス海峡にある土耳其の都。昔の東羅馬帝國の首府なるビザンチウム(Byzantium)。元のコンスタンチノール(君府)(Constantinople)。又 Istanbul, Stamboul.

(Belgrade) と云ふ名は、この頃少しゴタゴタがあるので毎日の様に新聞紙に出てゐるし、4月14日の朝刊には獨軍の猛攻によりて13日遂に陥落したとあつた位だから、大分お馴染になつてゐるだらうが、私がヨーロッパの國のなかにこんな名の都がある事を初めて知つたのは随分古い事で、今のユーゴスラビアの前身なるセルビア國の君主であつたオブレノウキッチ家のアレキサンダーが弑されて同家は滅亡し、當時瑞西國に亡命中であつたカラゲオルゲウキッチ家のピーターが代つて王位に即した時、夜は町の家に電光飾をしたといふルーター電報が新聞紙にのつてゐた(明治三十六年(1903)の事)時からであるが、その町のどこかへ電話をかけるといふのが非常に私の興味を唆つたのである。とにかくどうしてもするがよろしい、どうせ行かなければならないのだから、といふ氣持になつて歸宿、8.30のまづい夕食をすまして臥床した。

* 當時のルーター電報は、切抜いてしまつておいたので、探したが見當らなかつたから、薄い記憶を辿つて書いてみると、當時のセルビア王なるオブレノウキッチ家のアレキサンダー王に王子がなかつた爲、皇后トラガの弟なるリユンゼウキツァ中尉を世嗣にしようとした事が口火となり、軍部がクー・テターをやり、王は皇后と共に弑逆にあひ、ピーターが代つて王位に即したとあつた。ルーター電報のうさび King Alexander, Queen Draga, Lieutenant Lehnzewitza, Prince Peter Kalageorovich 等の名前があつたり、on her childless 王の King and the Queen found naked in the bed とか何とかうさび文句もあつた様に思ふ。字引には Obrenovich の氏に Alexander (8/14 1876-6/11 1903), King of Serbia; son of Milan; succeeded his father on the latter's abdication; married Draga Maschin, Aug. 5 1900; assassinated with his queen and several palace officials (FUNK AND WAGNALL'S STANDARD DICTIONARY) とある。

十月二十九日 火曜・雨・大雷

午前は宿屋の前の考古博物館へ行き、一巡して晝に歸宿したら、クックから電話が掛つたといふので仕方なしに出かけた。隣室がやかましく、夜晩く迄大聲で話したり歌を歌ったり、泣いたり笑ったり到底辛棒ができないので、番頭に談判して53號から54號に替る事にした。あの室には亞米利加人の夫婦が居るのだが、そんなやかましいかと番頭は不思議さうな顔をしてゐた。粗製の米利堅と來ては、全くどうも始末によくない。

クックへ行つたところ係のもの曰く、アテネからサロニカ (Salonica) 迄は毎夜寢臺車はあるが、それから先は一週間に二度で、日曜日と水曜日とに限るのだから、今夜か來月2日にたつかといつた。今夜は困るし、來月2日は尙困るから、船はないかと尋ねたら、船なら11月1日にでるのが3日につくといふので、直にそれに決めた。其歸途に大嫌な大雷雨に出あつた。27日朝着いて今日で三日目、好晴は僅か一日。希臘あたりにも期節外れの大神鳴があるといふことが判つた。

十月三十日 水曜・好晴 (但し風あり)

好晴につき此日は午前も午後もアクロポリスの丘で暮したが、午前に一度西北方から、丘の全景をゆっくり眺めて見た(口繪21)。唯獨りで此丘を歩き巡り、昔を偲びながら、適當な所に腰を下ろ

してぼんやりしたり、寫眞をとつたり(92-103)してゐるのは洵に心地のいいものである。寫眞をとらうと思つてゐたら、邪魔な女がこつちへ向つて來るので困つてゐたところ、此朝^{*}プロピリアムの一部に店を出してゐた繪端書とフェルム賣の婆さんが、そこへ忘れてきた寫眞機の革囊を持って來てくれたので、これはほんとうにうれしかった。歸りに謂はゆる「風塔」を一見した(89・90)。

アテネといふ所は、寫眞の現像は實に亂暴な所だ。開路優秀、ラクソル中の下、アテネ下の下。灰棒が一面に附着してゐて始末におへず、切らずにおく様^{*}に命じ、晝食に歸る時受取つて來て、風呂桶に水を入れて其中につけ、食事をすましてからよく洗つてほして外出、夕方歸宿し名稱を記入して切り離すといふ寸法。そこで風呂附の室をとる事が絶対に必要である。

十月三十一日 木曜・好晴

午前市内の耶蘇會堂を三つ見た。その中の一つ、世界に於ける最小なる本山として有名な東羅馬式會堂たるハギオス・エレフテリオスの寫眞をとり、更に午後出かけて行き、西面即正面を寫しておいた(第一〇五頁圖)。クックへ行つて汽船運賃とアテネ・ピレウス間の車賃(これは二五〇ドラクマで、先日來た時のより五〇ドラクマ安價であつた)とイスタンブールの宿屋の料金を拂つておいた。さうしてベナキといふ博物館を一見した。午後は

* Propylaeum (復、Propylaea). アテネのアクロポリスの入口の門。一般には神殿等の入口のこと。

アクロポリス丘の全景を見るべく東方のフクロツパボンと呼ぶ高地へ行ったところ、一目に見えて絶景とも何とも言ひ様がなかった(口繪14—20)。此高地は洵に羨しい。雪が降るかどうか知らぬが、若し降ったらアクロポリスの丘の雪景は比喩もないであらう。今日は何といつてもいい一日を過したと思った。

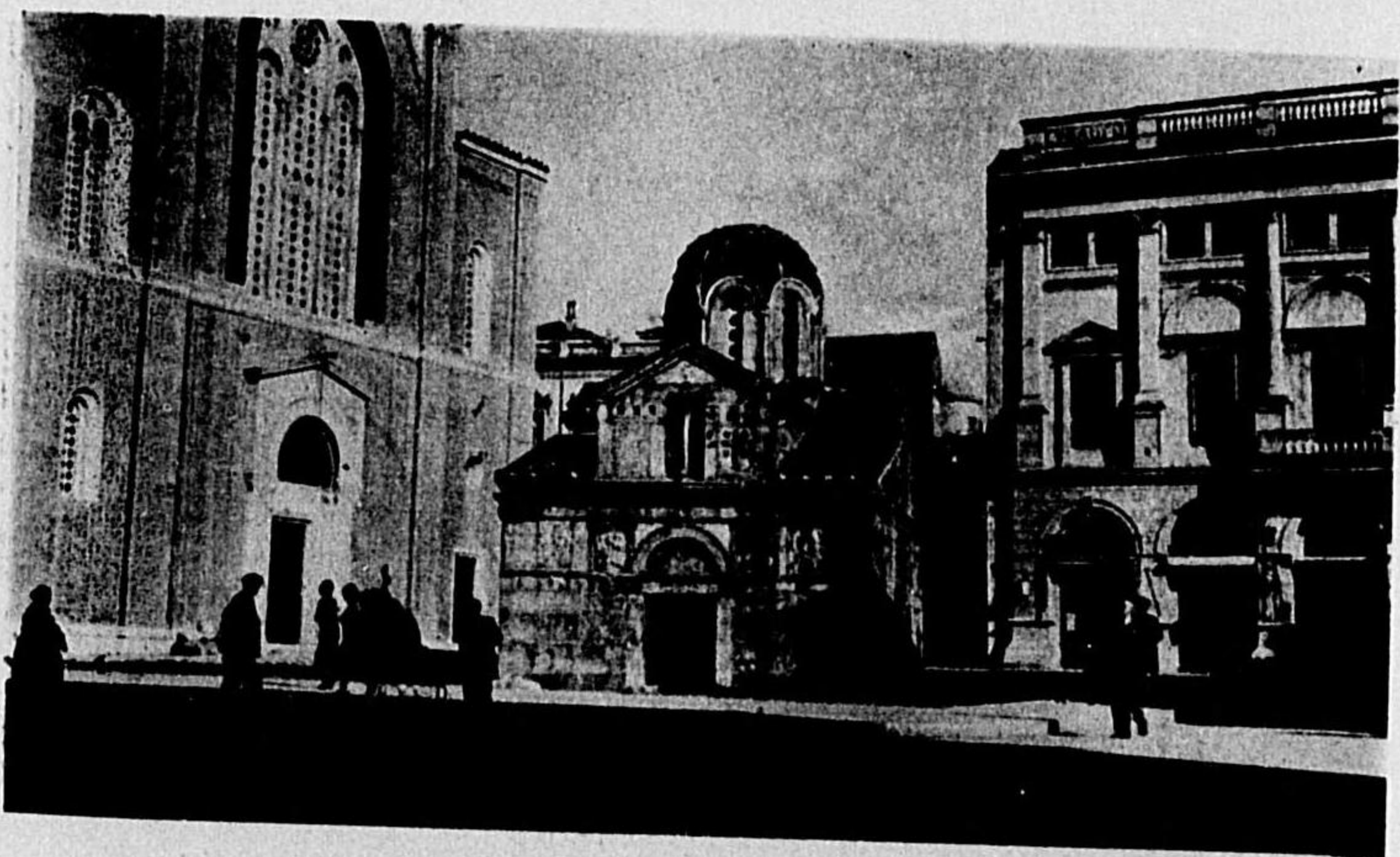
十一月一日 金曜・好晴

午前東ローマ博物館へ行つた。前日行つたベナキ博物館の直ぐ先の様に地圖にはかいてあるが、判らないので兵隊にきいて見たら、自分はよく知らないといつて態度巡査にきいて教へてくれた。非常に親切であつたから厚く禮を述べたら、先方でも丁寧に禮を返して、どういたしましてといつた。こんなだから獨りで外出してもまことに心地はよろしい。

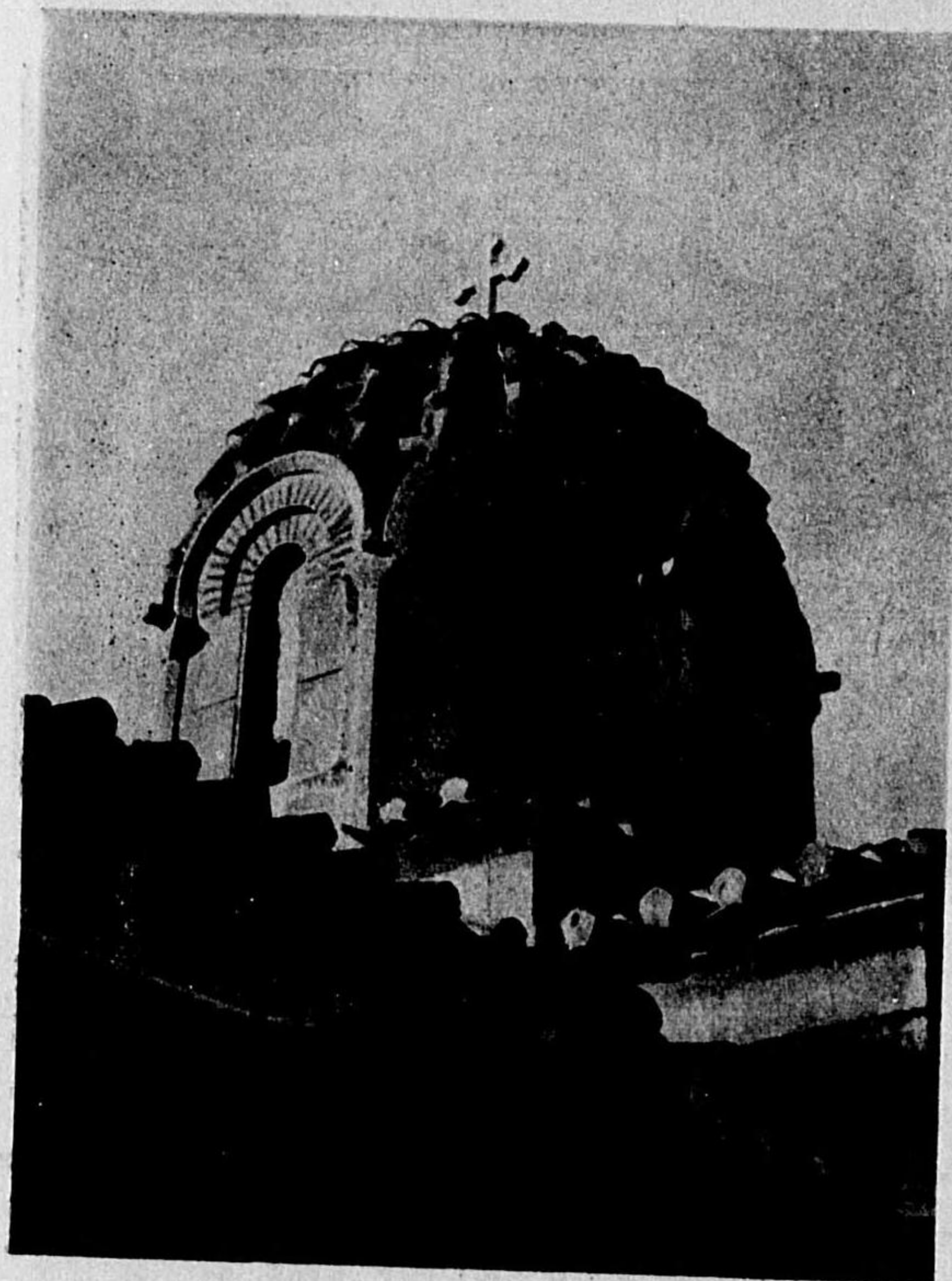
確かに此博物館は地圖よりも一町先きにある。第一室が初期耶蘇教建築のバシリカ式に出来てゐるから、感心をして看守に寫眞をとつてもいいかと尋ねたら、頗る氣味のわるい眼をして内證でとつてくれ、自分が張番をしてゐるからといった。どうもあきれたもので、埃及や印度と同様、随分

* Early Christian Architecture, 西紀三〇〇年—九〇〇年の約六〇〇年間行はれた一種の建築様式。

** Basilica, バシリカは元來羅馬時代の裁判所であるが、其裁判所の變形した初期耶蘇教様式時代の耶蘇會堂をバシリカ會堂と云ふ。



歐洲の一部及び西亞旅行記



上。アテネ市ハギオス・エレフテリオス正面
下。同 中央圓蓋 (昭和十年十月三十一日)
(昭和十年十月三十一日)

アテネ市にある最小なる大本山(The little Metropole Cathedral)として有名である。一二五〇(建長二年)の頃の創建といふ。大さ外法にて奥行三十八尺間口二十五尺五寸餘。中央圓蓋の直径僅に九尺。ギリシヤ式東羅馬建築の好例として知られてゐる。此他にアテネ市には此種の小建築が二棟ばかりある。



上、パルベック大堂廢址遠望（昭和十年十一月十日）

下、同 軒飾一部（昭和十年十一月十日）

上圖はパルベックの町に於けるパルミラ・ホテルの客室の窓から堂の廢址を見たところで、左方の六本の柱は大堂の夫、右方の白壁はパカス堂の東壁。私の泊った室の窓から寫したもの。下圖は大堂の軒の一部で、傍に立てる土耳其帽を冠った人物と比較すると、如何に大きなものであるかといふ事が判るであらう。夫にしても僅にこれだけが残っただけで、あとはどうして了ったのか。

墮落したのがゐる。四枚とって少しつかまりました。これは禁を犯して賄賂をとる方が不都合か、金をやって寫眞をとる方が不都合か、いづれゆつくり調査研究してみるつもりである。

次に歴史及び人種學博物館へ行つたところ、解説が全部希臘語でつけてあつた。外國語を用ひてないところはゑらいと思つたが、一つも判らなかつた。こうなると残念ながらアテナイオンの調子には行かない。ピナコテカ（繪畫館）を見たがこれは貧弱であつた。寫眞の現像此日は最もひどく、風呂桶につけた位では埒があかず、アルコホルで拭かねばならぬ状態であつた。

7.50 クックから人と車と來たので出かけた。眞つぐらの途をピレウス迄走り、出國の手續や何かして乗船をした。こんな事は到底獨りではできさうでない。よくクックへ頼んだ事であつた。みすみす周旋料をとられながらも感心をしたので、巡查も使用人が金をとるのを黙認してゐるのではないかと思はれた。若しクックを頼まなければ、車代50ドラクマ餘計に取られた上、もつとまごつかなければならなかつたらう。何れにしてもうまく金を取られる様にできてゐる。

船は「ポロニア」(POLONIA)といふ波蘭土船で、部屋の番號は20であつた。上下のバースと長椅子一脚。客がない爲か森閑として、人馬鶏犬の聲も聞えない。先日の「パレスチナ」號と比べて同じ一等でも餘り室がひど過るので、困つた様な表情をしてゐたら、クックの男は「此室にはあなただけです」といつたので落付いた。クックと入代りに女給が出て來て大に世話をした。此女は英

語が判るので都合がよろしかった。

見れば見る程汚しい船で、窓硝子なんかまるで拭かないのか、何かついて居てボツボツだらけである。バースの幕が下つてゐる横棒は、塗った白ペンキが垂れかけて皺だらけになつてゐた。上下バースの間は狭く、上の直ぐ顔につきさうである。ソファはコチコチで凹凸だらけである。「バレスチナ」が一等ならこれは三等位、伊太利と波蘭土、随分違ふものだと思つた。但し11.0に解纜することである。

十一月二日 土曜・好晴

午前3.0に眼がさめた時、大變に静かだと思つたら未だ碇泊中であつた。然るに朝6.0に起きて見たら動いてゐた。中中寒い。明朝つく豫定だからデック・チェアといふ程でもなし、汚らしい室の寢臺の上にひっくり返り、時々汚らしい窓から海を見る事にした。希臘の山で船窓から眺めた範圍では、鬱蒼たる森林等あるべくも見えず、一面に倭樹が生へてゐるだけで不景氣至極。但し全國の全山が皆こんなであるかどうかは見ないから知らない。船足は頗るのろくさく、どうもこんなでは明朝はむづかしからうと思はれなくもなかつた。夫にしてみてもとにかく明日中につけば、其翌日から3日間はある。3日では仕方がないから、聖・ソフキヤ他一二の東羅馬式建築の耶蘇會堂を見て満

足しておかなければなるまい。

夜入浴を試みた。湯ができたといふから行つてみたら、つくつてゐる最中であつた。石鹼があるといふから、見たら包紙に Salt Bath Soap (鹽湯用石鹼)とあつた。つかつて見たがさっぱり感心ができなかった。氣がついて見たら上り湯がない。どの船の湯だつて上る時は眞水を沸かした湯で身體を洗ふものなのに、これは實に不思議な國である。熱い潮水につかただけでは何とも致し方がなかつた。

十一月三日 日曜・風雨

此朝は天候險惡の方で、ダーゲネルス海峡は夜中に通過したと見え、起きた時は船はマルモラ海を航行中であつた。併し遂にボスポラス海峡に入った。天氣は大分に不良。不圖窓から見たら、背の高い回教の四本の光塔と、其中心に東羅馬の大圓蓋が霞んで見え、黒雲は盛に浮動してゐた。やがて船は海峡の中央と思はれるあたり、即ち亞細亞洲と歐羅巴洲との境の邊へ碇をおろした。岸壁があるではなし、どうも何となしに不景氣である。クックが來ると思つて暫く待つてゐたが來ないので、先づ上陸してみることにして小舟を雇ひ、可なりゆれたが夫でも無事に上陸が出來た。同時に制服制帽のクックの男が出てきた。少しばかり横着で怪しからんと思つたが、税關等の面倒な手

續は皆うまくすましてくれた。どういふ次第か税関では有金全部の額を届出せとあった。こんな事を請求されたのは初めてで、届出した所でつかへば直にへるのに下らない事をいふと思つたが、それは頗る正直に届出た。

此男に連れられてホテルへ行つた。甚だ賑かな電車の通つてゐる往來に面した家で、出入口の硝子戸に HOTEL TOKATLIAN と金文字でかいてあつた。トカトリアンとはどうも變な名で、餘りどころか絶対にきいた事がないから、氣になつていけなかつたが、後にアルメニア人の經營だときかされ、さてはこんな名をつけたのかと思つた。「トカトリアン」館ではどうも語呂がよくないし、横文字の假名書では覺えにくいから、一層日本流に譯して「都歌鳥屋」位のところはどうか知らん。夫でいけなければ「都歌鳥庵」、これなら音相通ずるから差支はあるまい。

然るに最初案内された室は如何にも工合がわるく、いくら安價でも此では我慢をしかねたから、もつと上等の室へ案内しろといつて風呂附のにした。この室だと三食付で一日8.5ポンド(土耳其のポンド)、英貨換算 $8/10$ 位だから、まあ大したこともないので此に決めた。室におさまるや直に入浴を試みた。さうして不景氣なポーランドの汽船「ポロニア」の鹽風呂、換言すればエーゲ海の潮水のうちに含まれた鹽分が、皮膚についてゐるのを洗ひ落してさっぱりした。こう氣が落つてみると、外の風の音が氣になつて來た。正に低氣壓襲來らしく、ビュービューガタガタと可なりやかましい。併しこ

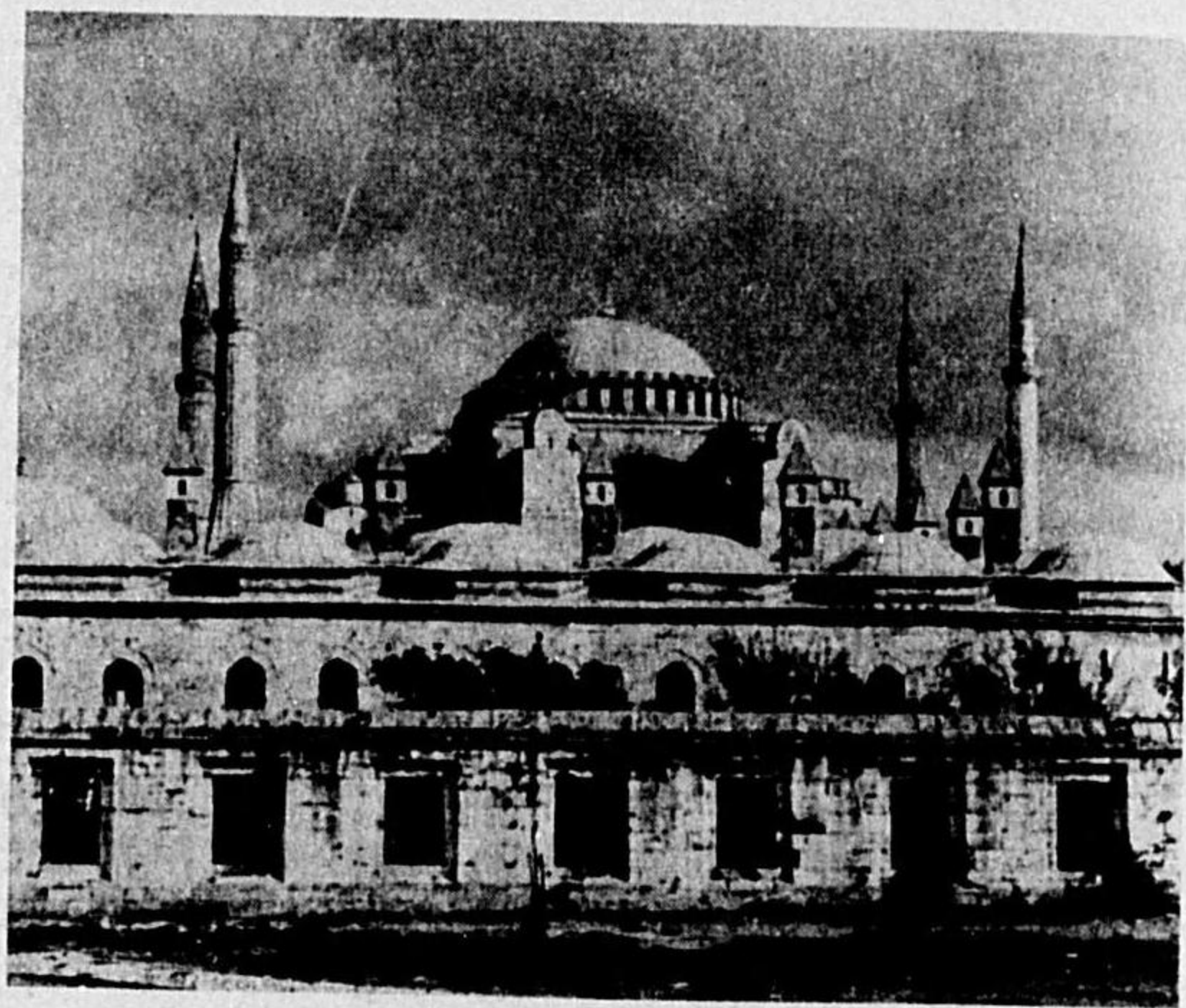
うひどく吹いたら、明日は天候が恢復するかも知れないといふ望みもあつたので、愈よ代表的の東羅馬建築も、24時間以内には確實に見學ができるだらうと思つて、一先づ休養にきめた。

此時から約一ヶ月後、即ち11月30日のことであつたが、印度行の途中、獨船「ローテンフェルス」の甲板の腰掛の上に新聞紙の丸めたのが落ちてゐた。獨逸の新聞紙らしく、棘の生へた字で印刷してあり、頗る苦手であつたが、擴げて皺をのばし、勇を鼓して拾ひ讀みをしてみたら、11月5日のブカレスト(ルーマニアの首都)通信に黒海大荒のためルーマニアの港には船をつけることができず、同國の何とかいふ船は大難航をしたとあつた。イスタンブールがボスボラス海峡の西口にあるからいい様なものの、東端即黒海への出口にあつたら、或は上陸ができなかつたかも知れない。併し「ポロニア」のことは何も書いてなかつた。

部屋は93といふので雑音がなく靜かで氣に入つた。風の音は仕方がないとして、どこからか音楽が聞こへて來た。夕食の時食堂へ出て行つたら、樂隊がゐて盛にやつてゐた。伊船「バレスチナ」の午後の「お八つ」の時の餘興の音楽は、同じ判らないにしても頗る上品で工合がよかつた。ところが都歌鳥庵の食堂のと來ては、耳のはたで遠慮なしにやられるせゐか、頭に響きすぎて大分に困つた。

アテネの宿屋で特別不味な食事で苦しんで来たあとでは、ここのは比較にならない程よろしかった。但し「パレスチナ」のに比べると、可なりの遜色がある。夜10時になり、さすがに楽隊も退却したらしく、静かになったので、風の音をききながら床に入った。

(昭和十六年四月十二日稿了・十五日補)



聖・ソフキア寺 (昭和十年十一月五日)

東羅馬建築として代表的のものは聖・ソフキア寺で、古のビザンチウム、後のコンスタンチノーブル、今のイスタンブールにある。四隅の光塔は後に回教徒が補加したもの。

坡西土から坡西土へ

(歐洲の一部及び西亞旅行記)

(第五回)

十一月四日 月曜・雨・後曇

5.30に起床した時は曇つてゐただけで何ともなかったが、6.0から入浴してゐた間に大粒の雨が降り出した。初めは絶望であつたが朝食中稍や小降になつてきた。8.30に約束通り案内人が来たが、雨なら延期する事にしてあつたので、今日はやめると言つたら、然らば自身所用の爲クックへ行くから一所に行かぬかといつた。先方では何とか口實をつけて引出さうとするのは當然だし、どうせ私も行かねばならぬから同行し、事務員に7日にシリアのトリポリ行汽車の寢臺券を要求したら、出國の手續をするから旅券を貸せといふ。旅券は用意して來なかつたので、然らば夫は明日に延期するとして、取敢へず英貨を土貨に替へようとしたら、兩替も旅券がなければできないといつた。

案ずるに事務員と案内人と馴れ合ひであらう。兩替に迄旅券を見せるとは何としても腑に落ちない。併ながら此が事實なら、苟も案内を職業としてゐる以上、夫位のこととは知つてゐるべきである。然らば宿を出る時旅券を持つて行け位の注意は當然すべきである。夫をしないで知らん顔をしてゐるのは、成るだけ無駄に時間を費させ、少しでも餘計に金をせしめようといふので、これがつまりガイド根性といふのだらう。どうも實に怪しからんといつていくら憤慨してみても何の役にも立たない。仕方がないから歸宿して旅券を持參し、夫を見せて兩替をすました。さうして警察の方の手續をすましたため、其儘事務員に預けておいた。

此案内人は身なりは立派であるし、風采は頗る瀟洒だが、どうもいちが汚いのとその態度とで、すつかりいやになつて了つた。いつ椋鳥が引掛るか判らないのだから、多少は無理のない點もある。即ちある程度の斟酌をすべきは勿論だが、夫にしても餘り露骨すぎる。随分長い間観度いと思つてゐた東羅馬建築も、もうどうでもよくなつて來た。とにかくこんな事で朝の貴重な¹時間を費し、やつとすんだら^{10.30}になつたから、ひる前の半端な時間を博物館で費さうと思つた。だから彼がこれからどうするときにいた時、私は博物館を見に行くといつた。

博物館は中判りにくい所にあるので、一人では無理だらうから自分が一所に行くといつた。つまり案内の押賣を始めたのである。地圖には明らかだが、行くと案外まごつく場合が相當にある。さうすると時間が無駄になると思つて、仕方なしに案内をさせる事にした。クックの店から歩いて十分位のところで、さう知れにくい程でもなかつた。博物館の事だからその陳列品が多いのはいふ迄もないが、殊に眼立つたのは、^{*}シドン(Sidon)から發掘した、謂はゆる亞歴山大王の白大理石の棺で、夫は夫は實に立派とも何とも形容の出來ぬものであつた。此棺一つ觀るだけで博物館へ入る價値は充分ある。併し又あれだけ大きく版圖を擴げた大王の棺が、イスタンブールの博物館に曝し

* 古のフェニキア(フィニシア)國の港。地中海の東岸。今のシリア國ベイルートの南なる今のサイダ(Saida)(地圖はら)。
サイドン(英)。

物になってゐるところを見ると、洵に感慨無量である。けれどもマア古埃及帝國の大王連の木乃伊が、開路府の埃及博物館の二階に曝され(先年やつと引込、
ましたたそうだが)、末世の有象無象共を驚かしてゐたよりは、い
くらか我慢ができればよい。1.0 歸宿。

午後は王宮を見に行かうといふのを斷り、食後一人で町の様子を見るべく出かけた所、ガラタ橋
の上で偶然前方から來た彼に出會つた。悪い所であつたと思つたら、果して又王宮見學を勧めた。
王宮なんかつまらないといつたら、陶器の大蒐集が陳列してあるといつたが、皆斷り少し歩いて歸
宿した。眞つ暗に曇つてゐて甚だ鬱陶しい。大正十一年歐洲大陸一巡の時、見そくなつて以來やつ
とここ迄來たところ、雨が降り風が吹き、其上に大慾張の案内人ですつかりいやになつて了つた。

十一月五日 火曜・好晴

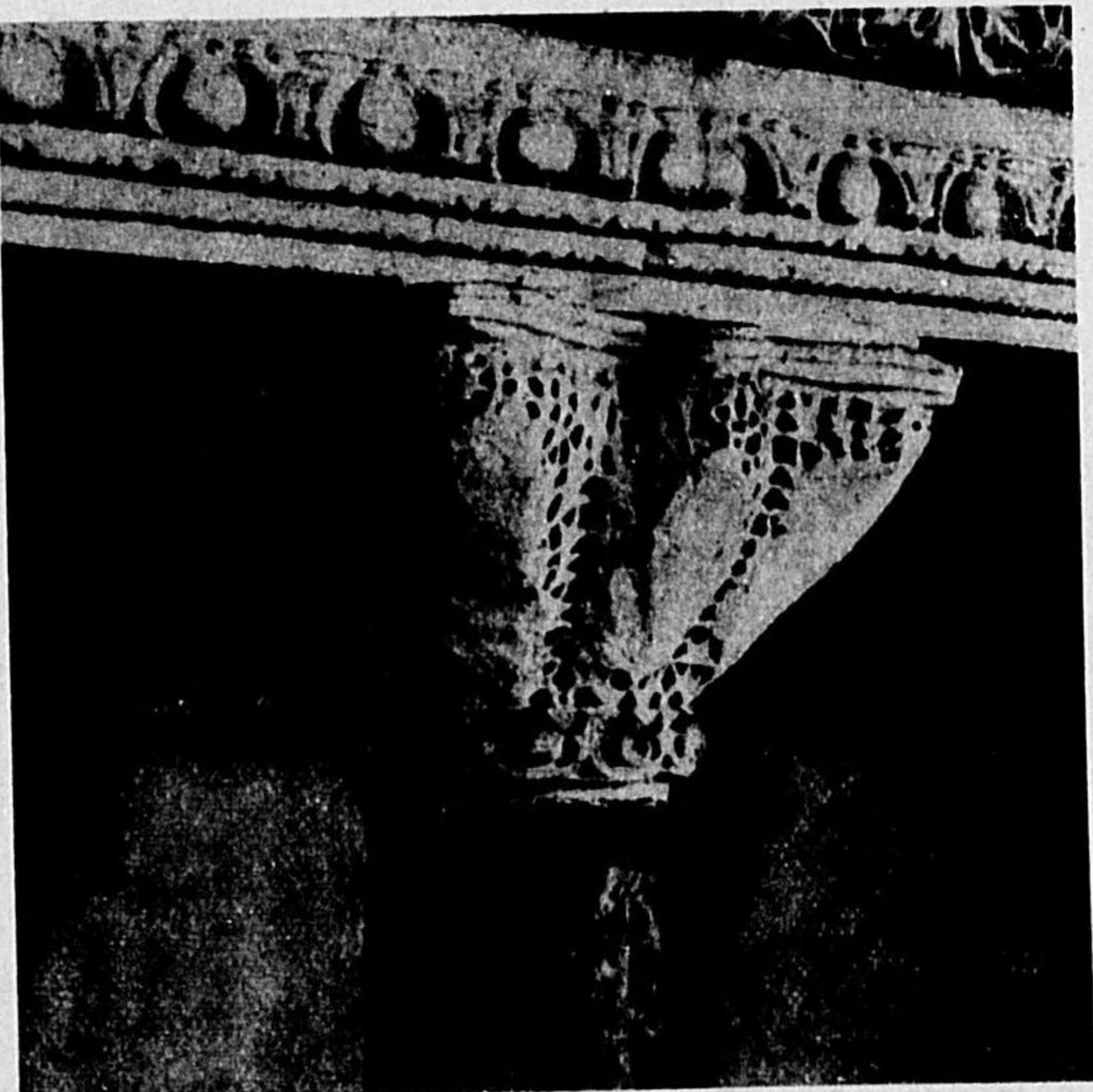
6.30 に起床したら晴れてゐたので安心ができた。案内の男は時間だけは精確で、此朝もきちんと
來たので直に出かけた。聖・ソフキア寺は10.0 からでなくては見せない——もう此年の一月から寺
を廢業して博物館にしたのださうな、看守の様な男がゐて寫眞機を預けなければならなかつた——
さうで、それ迄のつもりで聖・サージウス・アンド・バッカス (SS. Sergius and Bacchus) (108・109)
を先にした。途中古の競馬場 (Hippodrome) の圓形になつてゐる部分の名残を見た。

聖サージウス・アンド・バッカスは、立派な東羅馬式建築に聖龕などをつけたり、今は壊れたか
壊したか、とにかく以前には光塔を造つたり、回教寺にしてしひ、おまけに直傍を鐵道線路
が通つてゐる。日本でいへば私の見たうちでは會津若松に近い俗に藤倉二階堂、本名地藏堂と同様
である。此所に東羅馬式柱頭の一例として、此寺の内部の夫を掲げておく。此種の柱頭は其形が特
別で、他時代のと全く形式を異にしてゐるから、我國でいへば雲料や雲肘木の如く、一度見れば忘
れる事はない。

次に其附近の古の競馬場、現今は美しい廣場になつてゐるが、其中央に立てるオベリスクを見
した。古埃及帝國時代にあちこちに建てたものを、各國が勝手にもつて來て自分の國へ飾つておく
なんか甚だ以てけしからん。此種外國美術品の強奪は歐米各國の大都市に幾多の實例があり、十指
を屈した位では間に合はないが、英國倫敦の博物館内のエルジン・マーブル (Elgin Marble) を以て
壓巻となす。併し今は斯様な憤慨は他日に譲る事にして、次にソルタン・アーメッド寺 (Sultan
Ahmed) へ行つて見た。一名を青寺 (Blue Mosque) といふ (112—116)。割合に新しいものだが大き

* Mihrab. 回教寺の壁 (普通奥壁) に一ヶ所又は一ヶ所以上設けたる龕。此龕の前で回教徒は祈禱をするのであるが、其場合
は必ずメッカに向ふ事になる。故に例へば埃及に於いては龕は東壁に、印度に於いては西壁に設けるのである。常に最も美
しく裝飾をする。

聖・サージウス・アンド・パッカス寺内部柱頭の一例



(昭和十年十一月五日)

の例の通り多年受賣ですまして来たのだが、今日で負債を全部返納した様な氣持になり、大に安心する事ができた。寫眞でお馴染の暴夜文字をかけた大圓板は全部下ろしてあり、中央大圓蓋四隅の大隅弓には、六翼の天使だか何だか知らぬが、薄く何か見えてゐた。

くて頗る立派に見え鐘乳飾が隨所幅をきかしてゐる。出入口の上・柱頭・圓屋根の隅弓でも皆さうで、つまり裝飾といへばすべて鐘乳飾といつた有様で、非常な壯觀である。

次に聖・ソフキヤ(106・107)へ行つた。此年(昭和十一年)の初めから博物館になつたさうで、アブスの所全體に足場が架けてあつた。後世修補の部分***を剝がして、當初のモザイクをだすのださうな。亞米利加の探險隊の仕事だといふ。洵に羨しい次第である。どうも金と頭とがあれば何でもできると思はざるを得なかつた。實に大きくて立派で随分うれしかつた。これも亦他の多く

午後は聖・イレネ寺(S. Irene)(110)へ行つてみた。現今は軍事博物館にしてあり、どこもここも兵器が竝んでゐるだけで、内部はさっぱり駄目であつた。次に城壁・墓地(といってもスクタリの大墓地である)を一見してスレイマン寺(M. Suleimanieh)へ行つたが、寺の後に庭があり、そこにスレイマンの廟が建つてゐたので、實はよく見に来たと思つた。さうして一枚寫眞をとつておいた(111)。此日の見學はこれで終り、クックへよつて預けておいた旅券をとつてみたら、出國の手續は完全にできてゐた。案内人には金を拂つて解雇し、直に歸宿をしたら6.10で、もうすっかり夜になつてゐた。今日一日で一通みるものはみた。元來が東羅馬の建築を見に来たので、慾には限りがないが、先づ目的は達したつもりである。案内賃は随分高く、埃及の比ではない。おそろしい所である。イスタンブールの全景は、丁度開路の全景を高所がみると、特徴がある様に、海からだ東羅馬

* 鐘乳飾。Salacitic Work の譯。回教建築の軒・持送・柱頭・隅弓・天井等に賞用された一種の裝飾で、其用ひである場所により夫々 Salacitic Cornice, Salacitic Bracket, Salacitic Capital 等と呼んでゐる。鐘乳石が上から下がつてゐるといふ聯想から、斯様な名がついたものであらう。今ここで詳細に解説をしてゐる事はできないし、又其必要を認めないから省略しておくが、115は鐘乳柱頭を示し、116は鐘乳隅弓と鐘乳天井の一例である。

** 隅弓(ケウキユウ)。Pendentive の譯。例へば方形の平面の建物へ圓蓋を架けたとすると、四隅に三角形の部分ができる。つまり四角から圓に移るところが三角形になる(八角の平面でも同じ理窟である)。此三角の部分の名(116)。

*** Apse. 耶蘇會堂、禮拜堂の一端(普通東端なるも西端の事もあり、雙方の事もあり、又時に三方(トライアプス)の事もある)の奥の室。又は半圓屋根を架けた教會堂の後陣。

式の低い圓蓋に、背の高い光塔とで洵に格段な景色が展開する。その有様は大體口繪22・23で判るであらう。少し陰鬱な黒い心細い寫眞になつて了つたが、時間の關係で止むを得ずこの様なものになつたのである。

十一月六日 水曜・好晴

宿の帳場で目的地へ行く電車の番號をきいてみたら、單車で12號が聖ソフキヤの角へ行く、ソルタン・アーメッドといつてのり、歸りはガラタ・サライといへばよろしい。ガラタの塔へ行くには二連車ならどれでもよろしい。と教へてくれた。氣をつけて二連車を見てゐたら TUNEL といふ札を出してゐたから、乗込んでタネルといつて見たら、不思議な事に一度で通じた。好晴に乗じてガラタの塔へ登つてみた。ところが餘り早過ぎたせゐか一面に霧があつて下の方が見えず、寫眞をとる事もできず失敗をした。夫から教へられた通りに電車で聖・ソフキヤ(106・107)へ行つた。

天氣がいいので、朝の光りが中央の大圓蓋洞の周圍につけてある小窓からさし込み、ほんとうに美しかった。適當な所に腰を下ろし、圓屋根を仰ぎ視て何事も忘れて洵にゆっくりした氣分になつた、1時間ばかりゐて十二分の満足をして出た。電車は往路と反對の方を向いた二連車にのり、無事に宿の近くで下車した。

午後は少し散歩をして3.30歸宿をした。夕食のため下りた時再び明朝出發の時刻を尋ねたら、渡船は8.40に出てハイダアバシヤ迄25分ばかりかかる。汽車は9.40に出る。だから8.15に宿を出れば充分である。従て宿料は明朝ゆつくり拂へばよろしいといふ事になり、食後歸室して休憩をした。かくてイスタンブールの四夜は過ぎんとしつつかつのである。

十一月七日 木曜・好晴

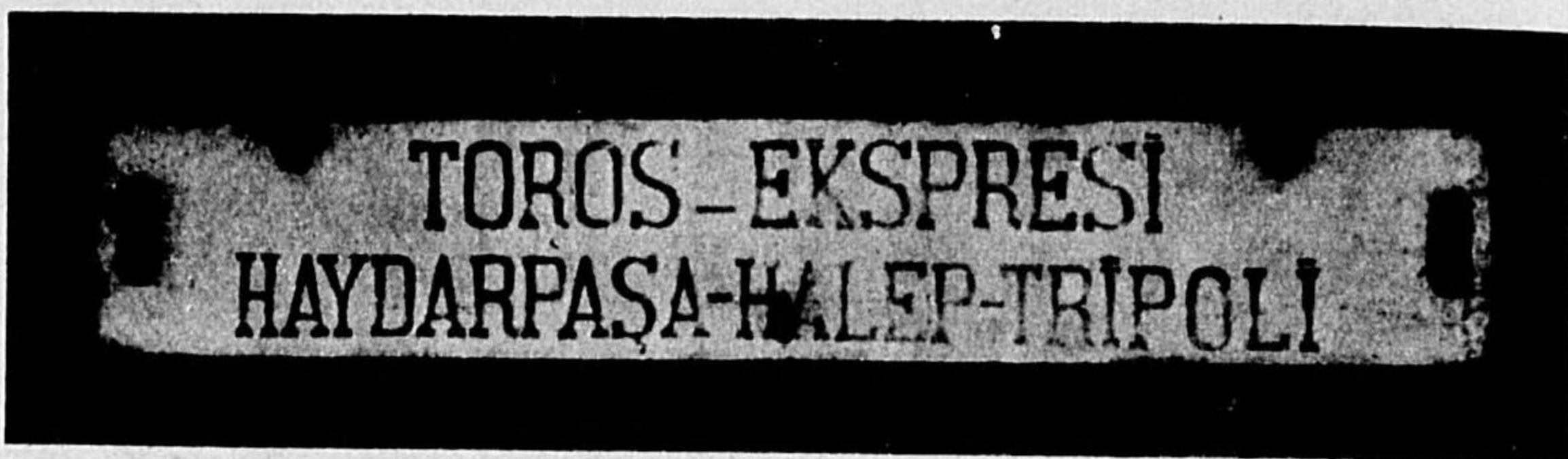
先日上陸した時迎に來たクツクの男が正8.0に來た。8.07發、渡船はガラタ橋の袂から出るので、タキシで出かけたのはつまらない位であつたが、これは仕方がなかつた。大勢の人が乗るので、船は大變な混雜であつた。これでは一人だと餘程困つたらうと思ふが、そこはクツクが世話をしたから少しもまごつかなかつた。上陸したのは亞細亞洲の一角である。即ち僅か25分で歐羅巴から亞細亞へ旅行したのである。少し歩いたらハイダアバシヤ驛があり、乗降場には既に汽車がゐて、其客車の一の横に一二三頁に示した様な札が掛けてあつた。白地へ赤ペンキで文字が書いてあつた。つまりアレップボウ經由トリポリ行の急行列車であるのである。汽車はいつ迄たつても出ないので、乗降場を歩いて見たら、私の乗つた寢臺車の横に眞鍮文字で YATAKII WAGON と書いてあるのを見付けた。「ヤタクリ車」はどうも變だ。クツクに何のことかときいてみたら寢臺車といふ意味ださ

うな。一字の違ひで YOTAKI WAGON であつたら、トリポリ迄幾日かかるか見當がつくまい。尙ほ又一字の違ひで GATAKI WAGON でなくて幸。若しさうであつたら一上一下で到底眠られなかつたらう。併し室は氣に入った。長椅子と短い腰掛とあり、勿論一人一室。先年ゼノアからパリ迄のつた時と同様で、大分いい氣持になる事ができた。

9.40 にでるべきのが 10.10 に出た。初めから 30 分後れてゐた。これは新興土耳其國の鐵道局が朝から居眠りをして遅刻したのではなくて、移民(どこへ移住するのかわからないが)の來るのを待ったのださうな。何分一週一度二日二晩かかつて亞細亞土耳其を突抜け、シリヤ國のトリポリ迄直通だから、この位の事は我慢すべきであらう。一度乗りそくなつたら最後、八日間待たなければ埒があかないのだから。

マルモラ海は實に美しかった、至極の上天氣で波は穏かだったから、獨り車窓からの眺を擅にしたが、これは東の間で、やがて海岸をはなれて山の方へ曲つてしまつた。併しながら一生に一度だからと思つて、絶えず窓から外を見つつ、一日中少しもあきずに旅行ができた。狭い田舎の路が凹凸で水溜がいくつもある所や、柿の木の様な葉が黄色くなつてゐるの等は、この邊が北緯 40 位だから、日本の秋によく似てゐた様な氣がした。

晝食の時、食堂車へ行つたら、丁度私の向ひに蟲のすかない顔をした男がゐた。東洋人である事は確からしい。どうも支那人ではないかと思つた。夫から電氣扇が回轉してゐるのには聊か驚かさ



急行列車の横に下げた札 (昭和十年十一月七日)

TOROS EKSPRESI とは、多分 TAURUS EXPRESS といふ事であらう。「トラス」とは亞細亞土耳其の南方の山脈の名だから、その方面行急行車に其名をとつてつけたのであらう。

HAYDARPAŞA=HAIDARPASHA, HALEP=ALEPPO,
TRIPOLI=TRIPOLI

れた。イスタンブールの宿では、毎夜蒸氣暖房をやつてゐたのに、僅か半日汽車で南下したばかりで電氣扇は極端から極端である。朝たつ時外套は鞆へしまひ、あひ服を一着に及んでゐたのに、イスタンブールの人は皆冬服に冬外套を着てゐた。發車の合圖にしても、ある驛では喇叭を吹き、ある驛ではカンカンと鐘を鳴らした。どうもあちこちに矛盾があるし餘程寸ものびてゐる様である。故ケマル・アタチュルク閣下が、腕に縊をかけてやつてこの調子だから、舊の土耳其國なんか随分おめでたかつたのだらう。

煉瓦を隅行に、上の方程前に出る様に積んで、鐘乳持送に代へた田舎の回教寺の光塔が樹木の間に見えてゐるに洵に面白かつた。勿論原始的の手法だが、埃及の田舎(頁七六)や支那の國で模した鐘乳飾に一派相通するものがあり、大に旅情を慰める事ができた。阿富汗やイラン・イラク等の諸國にはいくらかもあるだらうが、見ないのだから何ともいへない。

此急行車内の食事の高價な事は例ふるにもなく、飲んだ水の代迄とられた。尤も考へて見れば無理もないので、不毛の地を二日二夜に亙り、晝はひねもす夜は夜もすがら走りに走る汽車中で、饑しい思ひをしないですんだのだから、一食2ポンド(土耳其のポンド)とられても、不平等いつてはすまないだらう。

十一月八日 金 曜・曇

時計を見なかったから、確實には分らないが9.0と10.0との間にある大きな町の驛を通過した。光塔が三本ばかり隠見してゐたので、多分コニア(Konia)(地圖)だらうと思つたが、折柄停車してゐた貨車が邪魔になつて驛名が見えなかつた。11.50頃ウルキサラ(Urkisala)といふ驛へついた。海拔1468メートル(約4800尺)で附近の山脈皆頂上に雪があり、又地上にもあつた。白い山のうちには、丁度近江の伊吹山を見る様なものもあつた。

終日どんよりした天気で、時に黄色い葉をつけた楓の様な樹が見えたりして、秋らしい気分は充分であつた。夜なので其時は名が判らなかつたが、土耳其の國境驛へ着いた、税關の役人が來たので、荷物の檢閲を期待したところ、夫には及ばすとの事で、役人は車掌に紙を渡し、其紙を鞆に貼りつけて終りを告げた。至極簡單で大によろしい。

十一月九日 土 曜・不定

午前1.0頃ある驛に停車中、餘り騒しいので眼がさめたが、夫がアレッポー(Aleppo = Halep)(地圖)らしかつた。いい月で、月あかりで外をみたが、驛名は見えなかつた。7.0頃朝食のため食堂車へ行かうとしたら、列車給仕は食堂車はついてゐないといつたから、然らばトリポリ(地圖)へ着いてから食事かときいたら、さうだと答へた。

シリアの野原には、朝鮮人の小屋よりも、遙にひどい小屋をかけた遊牧民がある、これは少しばかり面白い光景である。9.30トリポリ驛即ち終點着。これは正に時間表通りで正確なる事我國の汽車の如くであつた。一昨朝出がけに30分後れたのは、48時間中に取かへしたものと見える。1.96の取返しは、いくら土耳其の汽車でも至極容易であらう。

下車したらクックと自稱する平服の男が出て來て切符を見せろといつたから、要心しながら見せたら傍の自動車を指して乗れといつた。早速乗込んだら、食堂車に向ひ合つてゐた蟲のすかない支那人らしい男が既に席の一つを占領し、自分のスーツ・ケースを二個共狭い車内へ持込み、其一つは私の席の前においてあつた。二つの物體が同時に同所をみたし得ない原則により、自然私のは車の後尾に結びつけねばならぬし、足の先には蟲のすかない支那人らしい男の鞆があつて何とも始末

にわるかった。而も此男頗る平然として、間の抜けた奴が今頃乗って来やがった。ざまを見ると言はん許りに嘯いてゐた。これは先づひがみだらうが、随分心臓の強い男もあるものだと思つた。併し袖摺り合ふも他生の縁といふ事もあるから、ましていくら蟲のすかない支那人らしい男でも、唯二人同車した以上、鞆のところは何とかしたが、物は言はなかつた。彼はハイファ(地圖は5)迄行くとの事で、ともかくもベイルート(地圖は5)迄は一所であつた。案ずるに此男は此邊の事情に通じてゐたらしい。如何となればトリポリに下車して随分早くやつたつもりなのに、すつと後れてしまつたからである。恐らく彼は下車するなり、いきなり車へ乗つて了つたのであらう。

汽車がトリポリに近づいてくると海岸を走るから、殊に午前中は景色がよろしいが、トリポリ・ベイルート間は、殆んど終始海岸の道路を行く。大きな峠をこす。道路は大部分舗装してある。地中海東岸の旅は初めてである。例の男が海岸に近い方の座席を占領してゐるので困つたが、成るべく其男の顔を見ない様にして海を眺めてゐるうちに、ベイルートの町に入り、車はクックの店の前に停つたので、私は下車したら、車はその男を乗せたままどこかへ走り去つてしまつた。

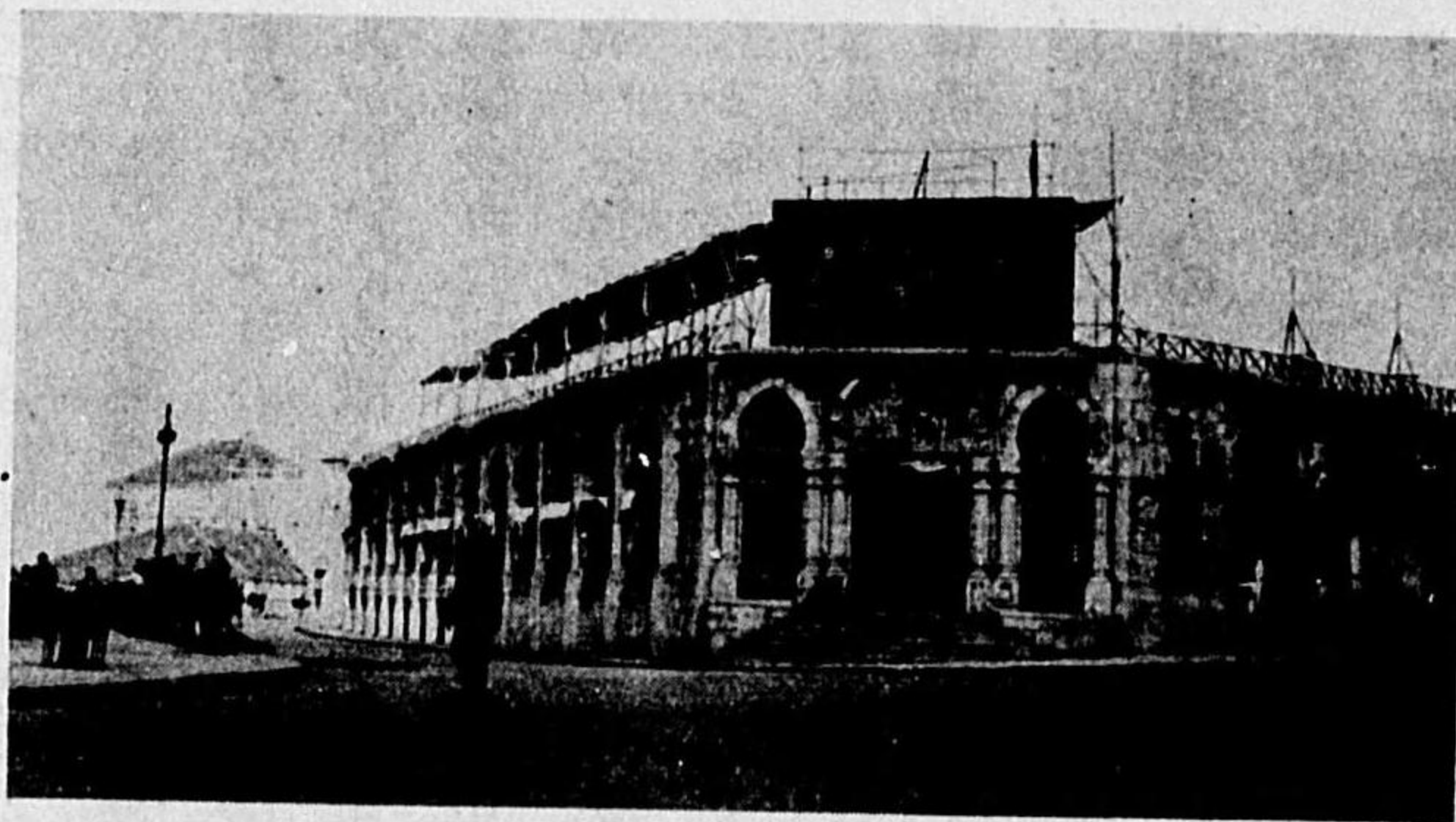
既に通知が来てゐたと見え、クックでは係員がよく知つてゐて、頗る愛想よく應對をした。晝食はメトロポール・ホテルでする事、2.0にバールベック(地圖は5)行の車を差向けるから、ホテルで待つてゐてくれ。宿はバールベックのもダマスカスのも決め、前者ではバルミラ・ホテル、後者ではオ

マイアド・ホテル、さうして兩方共風呂附の室にした。總てで英貨5ポンドと土貨30ピアスタですんだ。序に次の方程式に示す様な兩替をした。英貨と土貨とを左の通シリア貨に替へたのである。

£4 (英) + 250 piastres (土) = 235 piastres (シリア)。

しかしこの換算額は丁度いいのか、少ないのか(多ことはめつた)、全然見當がつかないが、クックだから猶太人の兩替店よりは確かであらうと思ふだけで、全くのあてがい扶持の先方任せ、正に儲けられ放題といった形であつた。

メトロポール・ホテルへはクックの店から車で送つてくれた。遂に朝食ができなかつたせゐもあらうが、晝食は充分満足した。午後2.0の約は美事に守られなかつた。遂に辛抱しきれなくなつたので、帳場の番頭にクックへ電話をかけて車を催促してくれる様に頼んでゐた最中、約30分後れて如何にも生意氣らしい運轉手が、頗る高級な車をも



ベイルートの町一景 (昭和十年十一月九日)

Beirut とも Beyrout ともかく、地中海の東岸にある。シリアに於ける重要なる商都で、氣候溫和、冬でもいろいろの花が咲くとある。夏は風があつて涼しいが、八九月頃は風が餘り吹かないので随分あつた。十月十一月は最も氣候がよろしいさうだ。シリアの海岸に於ける最も衛生設備の行届いた町といふ。

って来た。早速出かけたところ、町の目貫のあたりを通って場末の妙な所へ車を停め、少し待ってくれといって運轉手はとある露地に消滅して了った、又ここで20分待たされた後、やっと出て来て漸くベイルトを後にした。運轉手は自分の家へよって何かもって来たらしい。人を舐てけしからんが、いくら舐められても對策なきを如何にせん。唯彼の意に任せるのみ。斯くして出發は正に1時間後れた。出ると間もなく山にかかった。峠から海の方を見下ろしたら、大に曇って虹が出てゐた。ベイルトの町にかかれる燦然たる虹霓を見たのも、亦一記念となすに足りよう。

レバノン山脈を越え、谷をいやといふ程北へ走り、氣がついてみたら南西の方は美しく晴れてゐたが、前方は大曇りであつた。暫くして遂に日は暮れ、眞つ暗な茫漠たる途を一目散に走つた。運轉手曰く、此邊野盜群をなして旅人を襲ひ、被害續出するので、先年漸く巡查派出所に毛の生へた様なものができてから、安全の度が幾分増してきたと。眞偽の程は受合はれないが、どうせこんな暗黒な人の子一人通つてゐない途で、生殺與奪の權を運轉手が握つてゐるのだから、こんな所で人殺しをして有金全部失禮して車で逃げれば相當の収入は得られよう。だからどうとも勝手にしろと思つて乗つてゐたら、^{5.25}になつて車はパルミラ・ホテルの玄關に停つた。

階上の往來(といつても殆んど人通りはな
く静かなることの上なし)に面した大きな室に案内をしたのはいいが、ダブルの室で不景氣なストーブが一つおいてあつた。泊客なんか一人もない様で、まことにおちついてゐた。少し

寒いので風呂に入らうと思つたが、湯なんかまるで沸いてゐない。給仕を呼んで取敢えずストーブを焚かした。電燈は薄くらく、寢臺の枕元にも電燈なく、細い貧相な蠟燭が置いてある始末。いくらか室が暖くなつてきたので、紅茶を取よせて先づ人心地がついた。遂に食前の入浴を思ひ切り、食事を先にし、其間に湯を沸しておくといふ事になつた。

何にしる客は一人きりなのだから、食堂へ出てみてもやはり私一人。とにかく一人のために電燈も相當につけ、給仕人もついたのでから少しばかり得意であつた。歸室して湯をつくり、一度入つてみたが寒いので、直に出てストーブの薪をもつて來いと命じたら、おとなしく命の通りもつてきて焚つけ、湯もぢきにあつくなると言つて出ていった。此度のはいくらかいいのもう一度入り、出てストーブを盛に焚き暖をとつた。二日二晩汽車でゆられ、下りて復た自動車へのり、パールベック迄來てこの始末、洵に恐縮せざるを得なかつた。大體この宿屋は其廣告に……most exclusive and Up-to-date hotel with an unsurpassed experience of half a century……electricity……cuisine and service unrivalled……とある。いくらほんやりでもこの通り間違ひなしとは思はないが、例へ泊客がないにしても、今夜の有様では餘りアップ・ツー・デートでもない様だし、サービス・アンライバルドは反對に皮肉にしか取れない。

十一月十日 日曜・好晴

前夜は月がよかったので安心をしてゐたが、朝6.0には大變な曇り方で、雨雲が浮動してゐた。暫くたつて絶望とは思つたが、窓掛をあけてみたら、眼の前に大殿堂の柱が六本行列をしてゐた。昨夕運轉手に宿から廢墟迄の距離をきいた時、彼は車で15分位かかるといった。これは正に一里位のところと推定したので、列底歩いてゐては駄目ときめたが、眼前にあるのを見て、一時は其實在を疑つたが、やがてはつきりと確かにあれが目的物だといふ事を認識したと同時に、あの生意氣な氣障な運轉手が愈よゝやになつた。此も亦永年に互り、實物を見學する事をせず、例により例の如く書物の受賣を續けて來たパールベックの大殿堂は正に眼の前にあるのである。見る機會のないものとあきらめてゐたものが、正に眼の前にあるのである。ホテルの廣告の中に Situated in very quiet surroundings with a magnificent view directly opposite the great Temples of Jupiter and Bacchus. とありたり、……and commands a marvellous view of the magnificent Ruins of the Temples of Balbeck. とあるのは、正にそのなほとある(第一〇六頁上圖)。

起きたときの大曇の空は漸く有望となり、遂に太陽が出た。7.0に二階の廣間、即私の室を出たところで、窓から6本の列柱を眺めながらポロポロの麵麩を齧つた。こんな近い所なら獨りで行けると思つて階段を下りたら、下の廣間に土耳其帽を冠つた男がゐた。此は案内人であつた。多分宿から

掠鳥の引懸つた事を通知したので、彼はここで待機してゐたものと推定をした。彼の料金は一日3半日1/2ポンド(シリアの)ださうだ。勿論午前中ですますつもりで半日の約束で出かけた。大殿堂には2時間ばかり居て、あちこちを随分歩いた。*dodecastyle portico も hexagonal court も總て圖版で見えてゐたとほりで、勿論當然ではあるが、愉快此上なかつた。但し想像と大違ひであつたのは、其一廓に破片が一ぱいに落ちてゐた事であつた。綺麗に掃き清められ、草一本生へてゐない廣場ではなかつた。だからこんな混雑してゐるのかと思はされた。其隣のバツカスの殿堂も亦、豫てからみてゐた圖を想起して、津津として湧いて來る興味に浸り、十二分の効果を收めて外へ出た。後者の内部の柱の「CETTE COLONNE A ETE RECONSTRUITE」EN 1934 と二行に記てあつた。シアリは佛の委任統治國だからであらうが、佛人の手により昭和九年の修理を経てゐる(124—127)。次に謂はゆるビーナス堂へ行つた。柱と柱との間の軒が凹入してゐるから、外觀は大分に變つて見える。大回教寺遺址を見、序だからいくらか拂つて大殿堂の復原模型をも見た。こんな事をしてゐたうちに運轉手も來合はせ(どうやら互にしめ)、いろいろ申出たのを一蹴したところ、彼は職業的案内人の下劣なる根性を其儘卒直に露出し、そこいら中に鳴渡る様な大聲を出し、自分ができるだけ

* ドデカスタイル。柱が12本立つてゐるのをいふ。此の12本の立てる大入口(ホルチコ)は、今でもはつきり残つて居り、例へ下部だけではあるが柱も其數だけは數へることができる。

努力した事を吹聴に及び、大概の人は大殿堂内に1時間位しか居ないのに、2時間もゐたのは長過ぎたとか、當然すべき義務を果したのをさも特別の奉仕をした如くに述べた。私としてもこんな田舎を歩くのは初めてではなし、こんな男に馬鹿にされたり恐喝されたりしてたまるものか。憚ながら埃及を再度歩いて我利我利亡者共を相手とし、相當に修行をつんでゐる。一つ大にたんかを切つてやらうと思つたが、どうも曩に告白した通り、生得外國語はうまく行かないし、下手にやり出しては反て失敗する虞が多分にあるので、遙に賢い方法をと、何時間居てもそれは我輩の勝手ではないかと簡単に應酬して横を向いて了つた。

次に大して氣は進まなかつたが、まあ序だから地下墓を見に行つた。そのうちに12時近くになつたが、あと45分で全部見られるといふので直に引返して泉(Ras el-Ain)を見る事にした。實に清冽な水が湧出してゐるが、これはアンチ・レバノンから流れてきて、ここから湧き出してゐるのだといふ。東大寺閼伽井屋の水が若狭から來たり、四天王寺金堂内の井水が龜の井に出てゐると傳へると、同じ調子かどうか知らぬが、とにかく美しい水である。ただ夫だけのことで他に何の感興も起らなかつた。

夫から石切場なるものを見に行つた。大き15尺×16尺×66尺の大石があつたが、これは石切場かどうか私には判らなかつた。併し書物にさうかいてあるから間違はなからう。さうしてここから登山(といつても前から生意氣で氣障な運轉手の車にのつてゐたまま)してバールベックの町の全景を見た。これは實に満點で、よく登つた事だと思つた(117)。朝起きた時の大曇りで半泣きになつたのを取返すには充分過ぎる位であつた。

(昭和十六年四月二十二日稿)

* レバノン山の東にある山脈をいふ。Anti Lebanon.

いふ迄もなくバールベックの町は地中海の東岸にあり、トリボリの南90キロメートル、即約22里半。この邊一體に小丘起伏してゐるが、其東方海岸から約30キロメートルに、南西から東北にかけてレバノン山脈が走つてゐる。Jebel Libnan と云ふ。其レバノン山脈が大體平行して、また其位距つてアンチ・レバノン山脈(Jebel esh-Sherki = Eastern Mountains = Anti Libanus)がある。このレバノン及びアンチレバノン山脈の間の平地に、後者の西麓に近くバールベックの町がある。希臘人はヘリオポリス(Heliopolis(太陽の都))といつた。トリボリとバールベックとは、ざつと正三角をなしてゐるが、其正三角形の一邊は眞直にして約37キロメートルある。

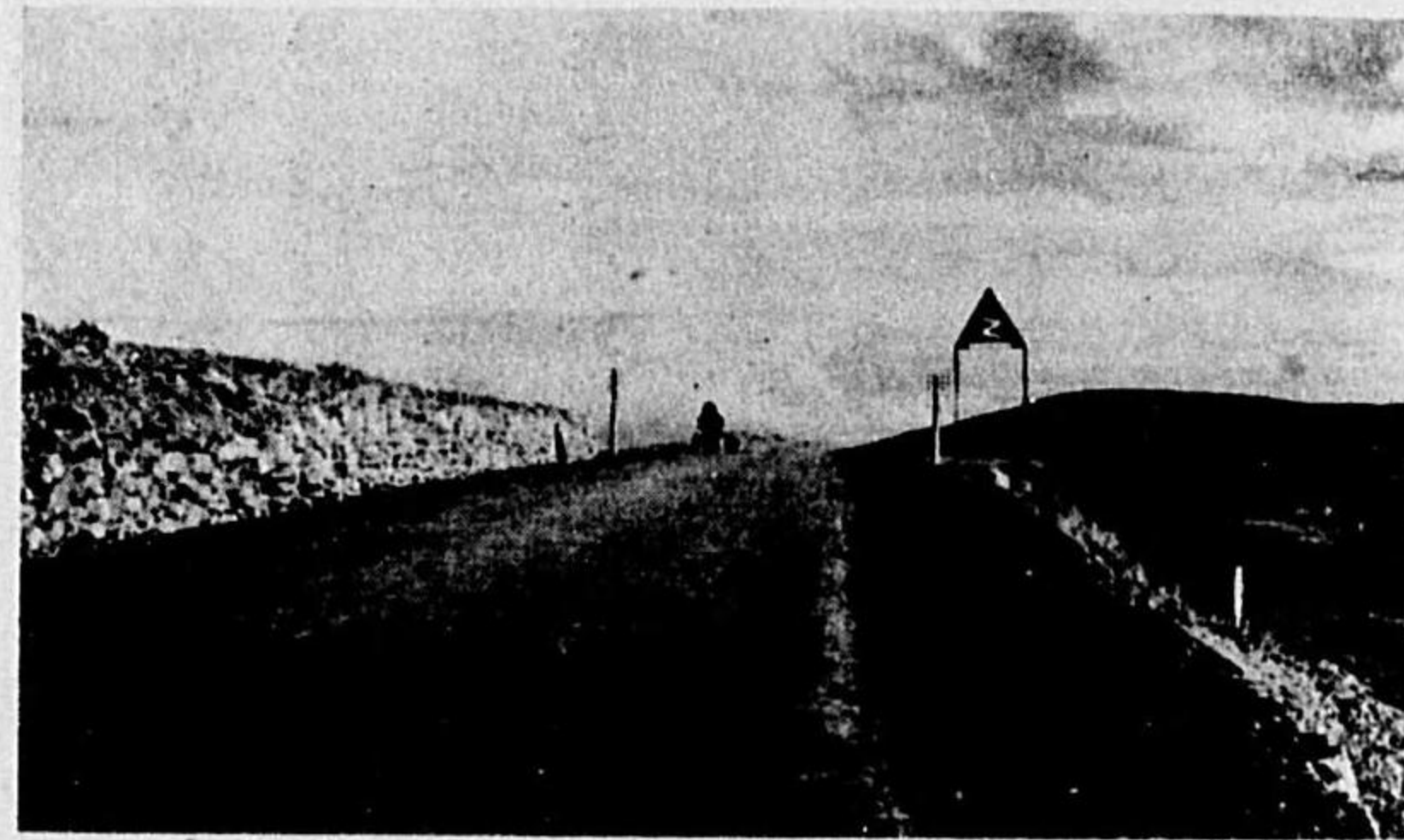
亞細亞土耳其のハイドラバッドからシリアに入りてから、アレクサンドリア、ハマ等の大驛を通り、ホムス(Homs) (地圖上(ハムス)に分れ、一はバールベック、ダマスを經てバレスタインのエルサレムに通じ、一は地中海の沿岸なるトリボリ(Tripolis, Tarabulus)に達する。前者は更にラクヤ(Raqyah)附近で二分し、其一はバールベックに通じてゐる。だから汽車でばかり旅行をしようと思へば、分岐點なるホムスでトリボリ行の汽車を棄て、バールベック行の乗りかへ、バールベック大殿堂の見學を終り、ここからダマスの汽車にのればよろしいので、さうすれば高い自動車賃を拂はずとも、大分節約し得る目的は達せられるであらう。併しさうするには汽車の連絡が非常にわるく、反つて日が餘計にかかたり、宿屋に困つたりするので、誰人もさうはしないらしい。

汽車にすれば兩山脈の間を通過するのだから、やはり車窓の左右に兩山脈が見えることは見えるが、用事がなくばバールベックへよる必要なく、従つてレバノン山脈を越す事はない。實際レバノン越をした時に、地中海を見下ろしたところの絶景は、今となつては全く楽しい思ひ出である。今は陰雨暗澹戰雲漠漠としてゐるから、この邊の旅行は絶望であらうが、他日暗雲一掃旭日冲天の時機に、讀者諸君が一遊を試みられるならば、私の通つた路をお勧めする。

坡西土から坡西土へ

(歐洲の一部及び西亞旅行記)

(第六回)



ゲマス街道 (昭和十年十一月九日)

パールベックを出發して、ダマスカスの町へ入らうとする少し手前、どこまでも立派な舗装した幅の廣い道路が續いてゐたので、路傍に車を止め、下りて記念に一枚寫しておいた。

十一月十日の続き。

歸宿したら正に0.45で、これにうそはなかった。漸く際どい時に見る事ができたパールベックの大殿堂は、西洋の建築史の書物で読んでいただけでは、事實隔靴搔痒で、先づ片鱗位しか判らない。廣い世界には小生と同じく、一生受賣講義ですましてゐる人も相當にあらう。従つて一方には其受賣講義をきいてゐる人の數は可なり多からう。洵に氣のどくな次第である。かく申す小生の受賣講義をきかされた人も随分あるが、さてともかくも一見しただけで、いくらか自信を以て講壇に立ち得る様になつたら、免職になつて終止符が印されて了つた。

最初の約束で半日¹/₂ポンドだから、丁度2ポンドやったら、定めて禮の一つもいふだらうと思つたところ、随分働いて一日分の仕事をしたから3ポンドくれといった。甚だ以てけしからんから、「汝は強慾過るぞ」と、宿屋の階下の廣間で呶鳴りつけてやったら、おとなしく退却した。この位の簡単なことなら、いくら小生でもできるのである。斯様にして撃退の後直に晝食をして、後2.0ダマスカスに向つて車でホテルを出た。その車はベイルートから來た生意氣で氣障な運轉手が操縦して行つたのである。

霜枯時のせめか、前にも書いた様に、バルミラ・ホテルは最新式でもなければ客あしらひが無類でも無雙でもなかったが、田舎宿で朴訥な點があり、食堂兼部屋給仕は何か命ずると二つ返事で直

に實行した。だから風呂の湯はぬるくて室は寒かつたけれども、可なり満足をした。出發の時宿の番頭と此給仕とは、車寄迄見送つた。車のある所迄見送りに宿の人が來たのは、アスワンのグランド・ホテルの番頭と此ホテルとだけであつた。慾張り過ると呶鳴りつけた土耳其帽の案内人迄見送りに出て來た。不思議な男だと思ふ。

*

*

*

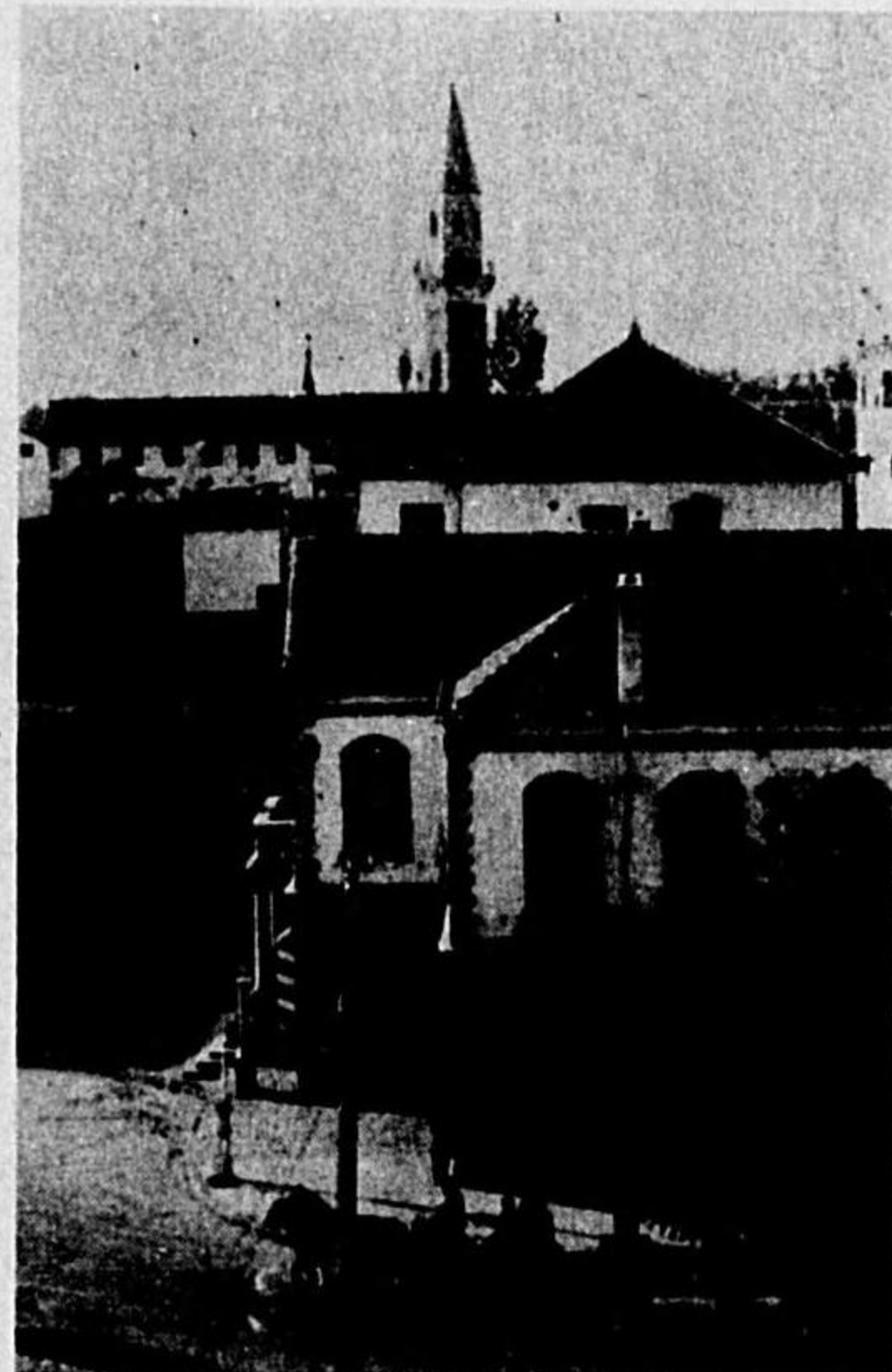
*

車は坦坦たる道路を快走した。運轉手の悪口は二三度書いた通りで、すきではないが、喋る事と運轉は巧みである。天氣は上等の好晴で暖く、運轉手はいろいろの説明をしながら、快走させるから、遊行氣分を満喫しながら内におさまつてゐた。ところが途中で前後に通行人のないのを見ずまして車を路傍に停め、そろそろ談判を始めだした。つまりダマスカス滞在の二日間自分に案内をさせろといふのである。どうせただ引返してもつまらないから、少し稼いでやらうと考へたに違ひない、談判をする機會がなかつたので、往來で始めたのだらうから、多少恕すべき點もあるが、つまり昔でいへば東海道の雲助とその揆を一にするものである。氣障な運轉手に二日間引張り廻されてはたまらない。いくら運轉は巧みでも、どうも我國に於ける車夫の案内と同じであらうから、彼に言ふだけ言はしておいて、奥の手をだしてとにかくダマスカス迄行くと、成るべく先方の顔を睨ながらいったら至極從順に走り出した。午後4.30、つまりバルミラ・ホテルを出てから2¹/₂時間で、ダマ

スカス市のオマイアド・ホテルの玄関に無事到着した。

下車すると同時に、運轉手はまた連りに二日間の案内を自分にさせてくれといった。宿へつけばこつちのものだ。飼犬が主人の家で強いのに似てゐるやうにも思はれるが、どうしても彼に命ずる氣になれなかつたから、其要求に應じなかつた。夫から次の様な問答が始まつた。「13日の朝の出發は何時か」「なせそんなことをきくのか」（ペイルートのクックの店では、十三日の朝、7時に宿へ車を迎へよこすといつたから）「クックでは自分

オマイアド・ホテルの窓からの眺め（昭和十年十一月十日）



近景には明治年間に東京あたりでよく見受けた、謂はゆる西洋館・異人館の様な頗る古風な二階建があるのも少しばかり面白いが、遠景の塔が氣に入つた。元より大したものではないけれども露臺のある八角塔で、回教寺の光塔らしかつた。

直接に時間をきく様にとの事であつたから「併し別の運轉手が車をもつて来る筈ではないか」「いや、多分私が行く事になるだらう」と。これで總てがよめた。彼は二日間ダマスへ滞在してゐる間に、夫を有効に費さうと考へたのであつた。さうならさうで事情を打明けて頼めば、こちらも亦讓歩して氣障で生意氣位のこととは我慢したかも知れないのに、率直に言はないのはいけない。遂に彼は「とにかく明朝來てみる」といつたから、私は「いらぬ」とはつきり申渡した。斯様にして完

全に撃退をした。案内された室は33號で、往來に面した景色のよろしい室であつた。寫眞屋をきいて直にイスタンブールとバールベックとで寫したフィルムを現像にもつて行つた。宿の玄関を出て右へ三つ目の店。私の室の窓から少しばかり遠方だが鐘乳持送を持つた露臺のある八角塔がよく見え

十一月十一日 月曜・好晴

た。多分回教寺だらうが判然しない。遂にダマスカスへ來たのである。

テベリヤ邑を出立し・東北五十英里餘に・ダマスコといふ大都あり・既に此府に近ければ幽香時來て衣を襲ひ・忽ち精神を爽快せり・怪み四方を眺むれば・西北レバノン山脈の一派沃野を繞して・嵐光蔚然聳ゆあり・南方遙に望むれば・曠野千里アラビアの沙漠に連り際涯なく・駱駝に騎りし隊商は・煙霧の間に縹渺と・船の如くに見ゆるのみ一步一步に芳氣増し・衣裾盡く香はしく・忽ち至大の花園あり・一望紅白野に充て雲影花光と相映し・異卉秀葩遂一に・之を名辨すべからず・大池に噴水佳亭あり茶菓を齎きて客を待つ・東西洋の旅人は・これを此世の樂園と・假稱するも宜なりき

(註略)

花園を通り市に入れば

東洋一般の風として

案外街衢は汚穢なり

されども此國の首府なれば・隊商四方より來集し・通商甚熾にて・人口十有五萬あり
富家豪商又多く・家屋の外粗なれども・内部は甚だ清潔に・頗る裝飾る風ありて
華麗の建築見るに足る

といふ記事がある。書き起しのテベリヤ邑とあるのは、チベリアス湖即ちガリリー湖 (Galilee) 湖
畔のチベリアス (Tiberias (Tubariya)) の事。其人口は昭和十年の案内記に 350,000 とある。併し
ダマスカス市に近く、香氣の高い花園があるといふのは、何を指してゐるのか、私の見た案内記の
うちに記してないので判然しない。町の有様を詐らずに、東洋一般にさうだが街衢は甚だ汚らしい
とかいたのは、どうも事實だから仕方がないが、これは昔の事で、今は中美しく立派である。

先づ第一にオマイアド・モスク (131—134) へ行つてみた。いふ迄もなくシリアに於ける回教建築
としては、此が代表的である。其以前にも相當に歴史はあるが後、379年(仁徳天皇)羅馬皇帝シオドシ
アス (Theodosius) が耶蘇會堂とした、さうして後705年(慶雲)回教徒が再建して回教寺としたもの
で、^R120×^R42の面積を占めた廣大な建築であるが、惜しい事に何度も火災に遇ひ、最後に1893年(明治
六)の大火で大損害を蒙り、殆んど手の付け様もない位になったといふ。併し尙ほ大庭周圍の列拱
の柱には當時を偲び得るものが残つてゐる。

次に古宮殿といふ建物を見學した。ヘーレムだといふ立派な室の迫持の内輪が片蓋柱に接續する

あたり、^{***}即迫出層に鐘乳飾が用ひてあつたり、風呂場の天井に當る圓屋根に圓い孔が澤山あいてあ
たり、随分面白かつた。イスタンブールのは斷つて行かなかつたが、どうせこれに似たものであら
う。ソルタンの生活等といふものは昔しからどうせ贅澤でだらしがなかに決まつてゐたから。「And
Sultan after Sultan with His Pomp, Abode his destined Hour and went his Way.」といふ句があ
る。うまくできてゐると思ふ。これはどうもこのあたりのソルタンでないとびたりと來ない。

バザーといふものに私は興味をもつてゐないから、見度くなかつたが、通りみちだといふのでそ
こを抜けて Mg. es-Sunaniye といふのをみた。スナニエ寺といふのだらう。小さい寺だが聖龕のと
ころが少しばかり面白かつた。上部の半圓天井になつてゐるところのモザイクがどう見ても波線を
してゐる様で(第一四三頁上圖)、開路市所在エル・ムアイアドのよりも、一層左様の感があるのである。その
光塔は綠色で、此日初めて此上から勤行時報係(ムエッチン (Muezzin)) が大きな聲で呟鳴つてゐる

* Harem, 東洋殊に回教國の婦人部屋。

** Intrados, 迫持の内弧の面。迫持はある大の石を互に迫り合ふ様にしてつくつてある。だから夫が圓形であらうが、
橢圓形乃至尖つてゐるようが、常に外側と内側とある。夫夫 Extrados, Intrados (外輪、内輪)といふ。

*** Pilaster, 壁に上つてゐる水平断面の四角な柱。「カタフカ」とも「カタフタマシラ」ともいふ。

**** Springing course, 拱基。起拱層。ここから拱になるといふところ、つまり迫持の最下部にあたる所。

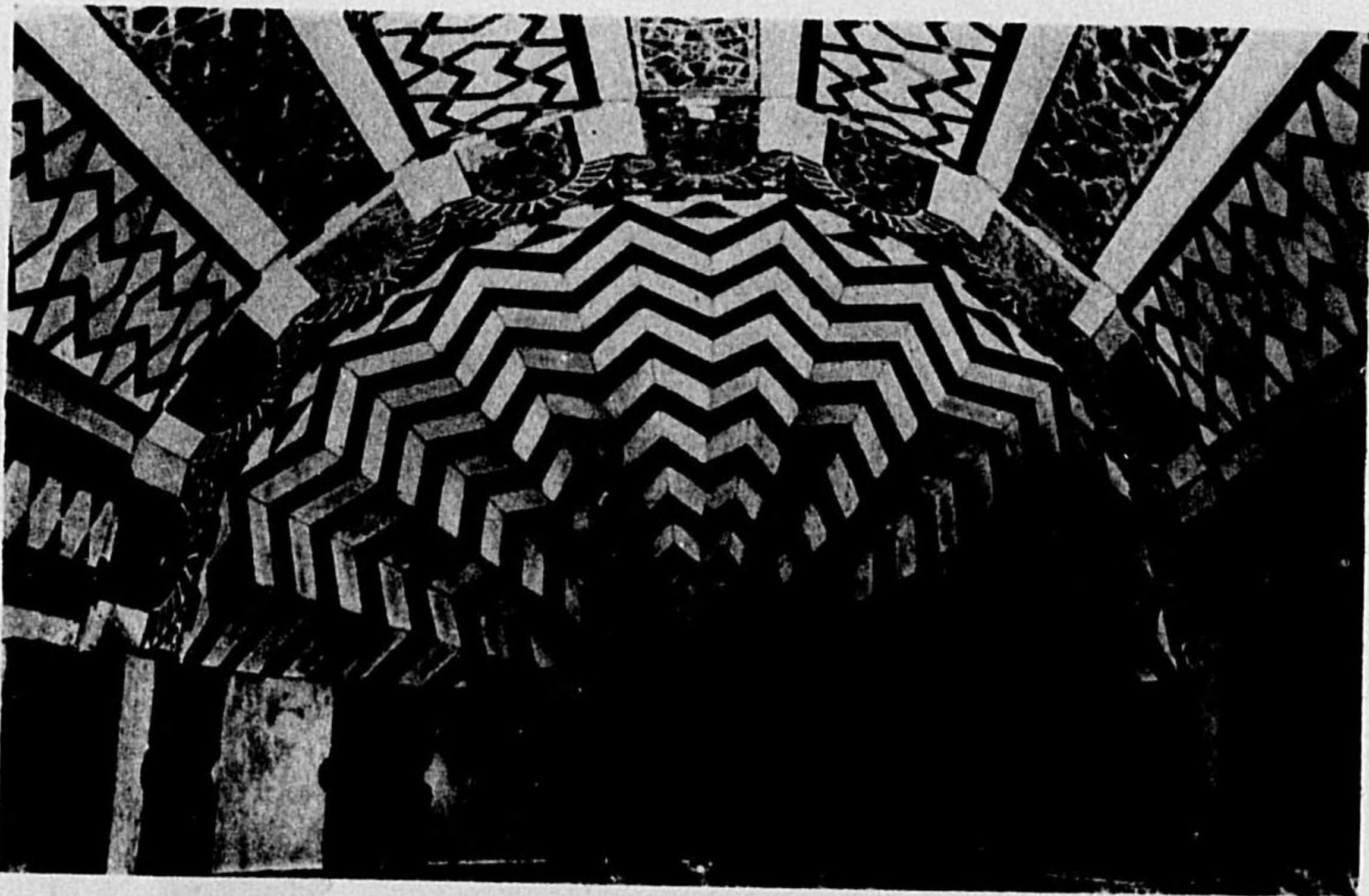
***** Minaret (ミナレット)。回教寺院(モスク)に附屬してゐる細長い塔で、其上の露臺から勤行時報係が大聲をだして、祈禱
の始りを知らせる。暴夜語で Minaret といふ。多くの我國の旅行家は、尖つた高塔だものだから「尖塔」と譯してゐる様
だが、「セントアップ」といふと我我はロシク式耶蘇會堂の尖つた塔、即 Spire, Steeple を指すのである。(Minar = Light house,
nār = shine)。

のをきいた。ここからソルタン・サラヂン十二世の墓と稱するものを見に行った。墓標の小口に葡萄唐草が現はれてゐるのが面白かったが、古いか新しいか判断ができなかった。次に町の全景を見るべく電車への上り大分行ったが、逆光線であまり見え、晝食のため歸宿。

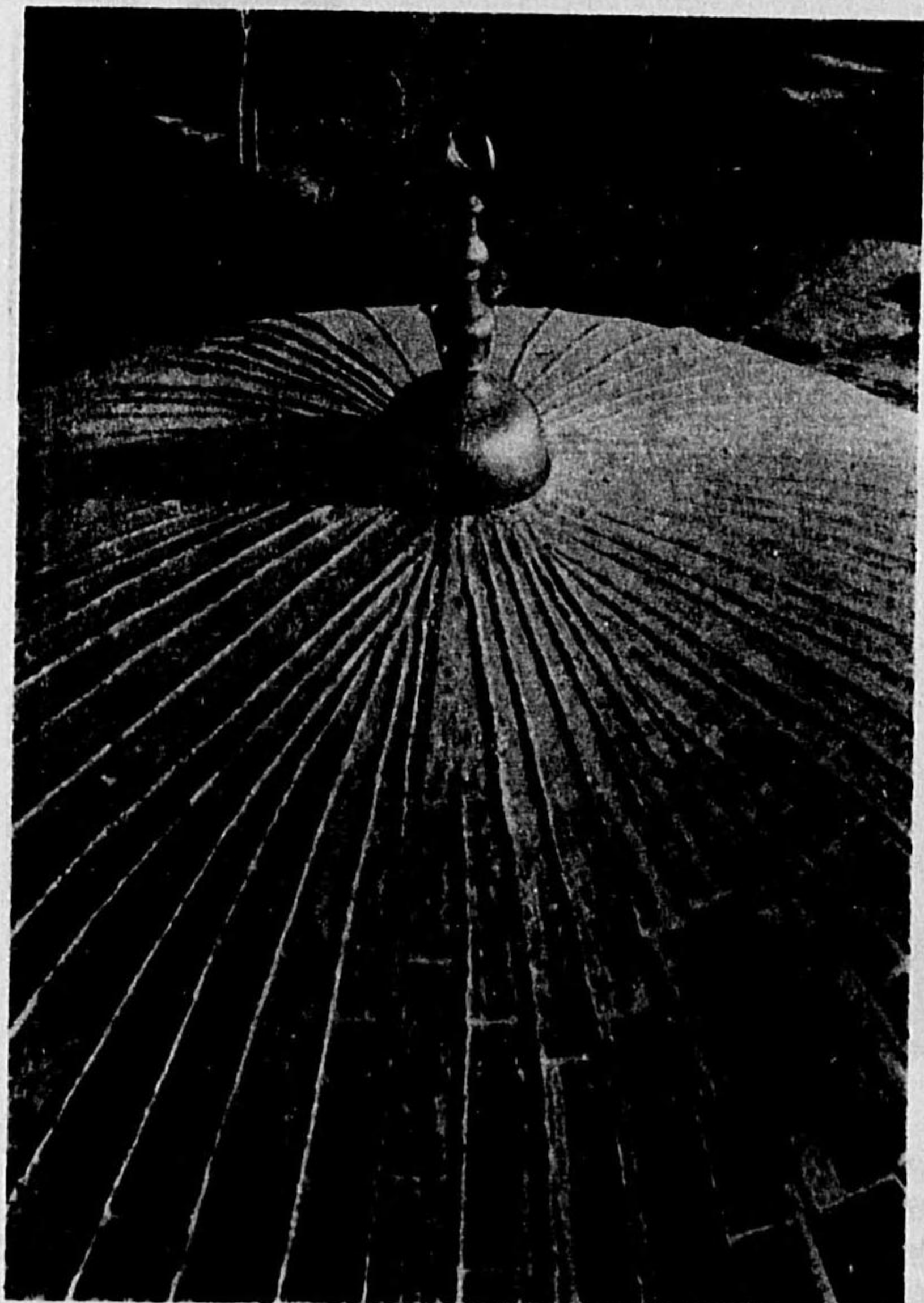
午後はソルタン・サリム寺 (Sultan Salim) (128—130) へ行ったが、内部は禁制ださうで入ることができなかった。仕方がないから光塔へ昇り、町の全景を見たり寫眞をとったりした(口繪24)。次にあちらこちらを見て市の地圖を買って歸った。本日見學17箇所。現像の出來た寫眞は切らせずにとつて来て洗ひ直した。今夜も昨夜と同じく休戦記念日ださうで、宿の窓から市役所か何か美しく電飾をしてゐた。夜景の寫眞をとり、頗る上等に寫つたが、ひるとつた全景と二重寫しをやつて美事失敗。遺憾ながら圖示ができない。

十一月十二日 火曜・好晴

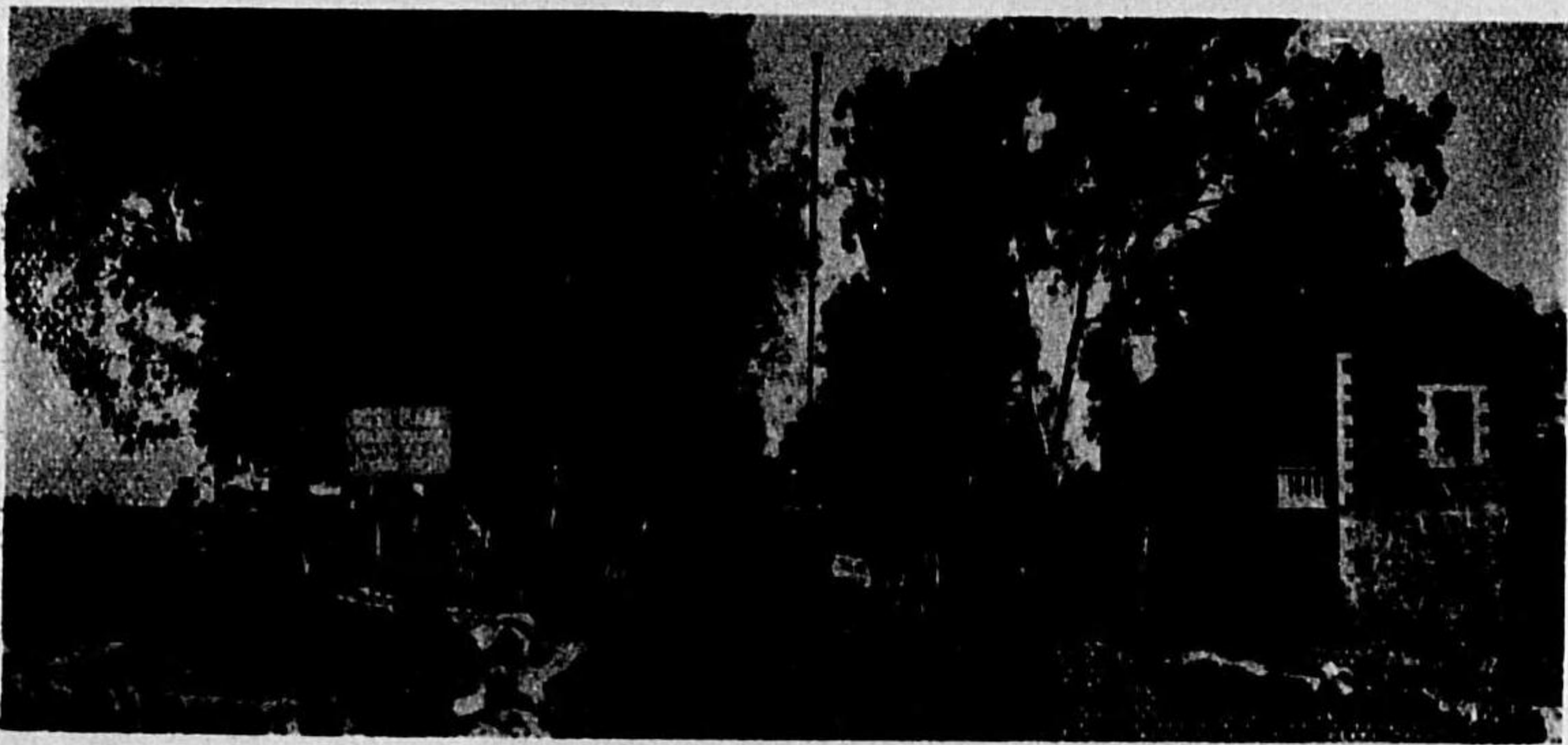
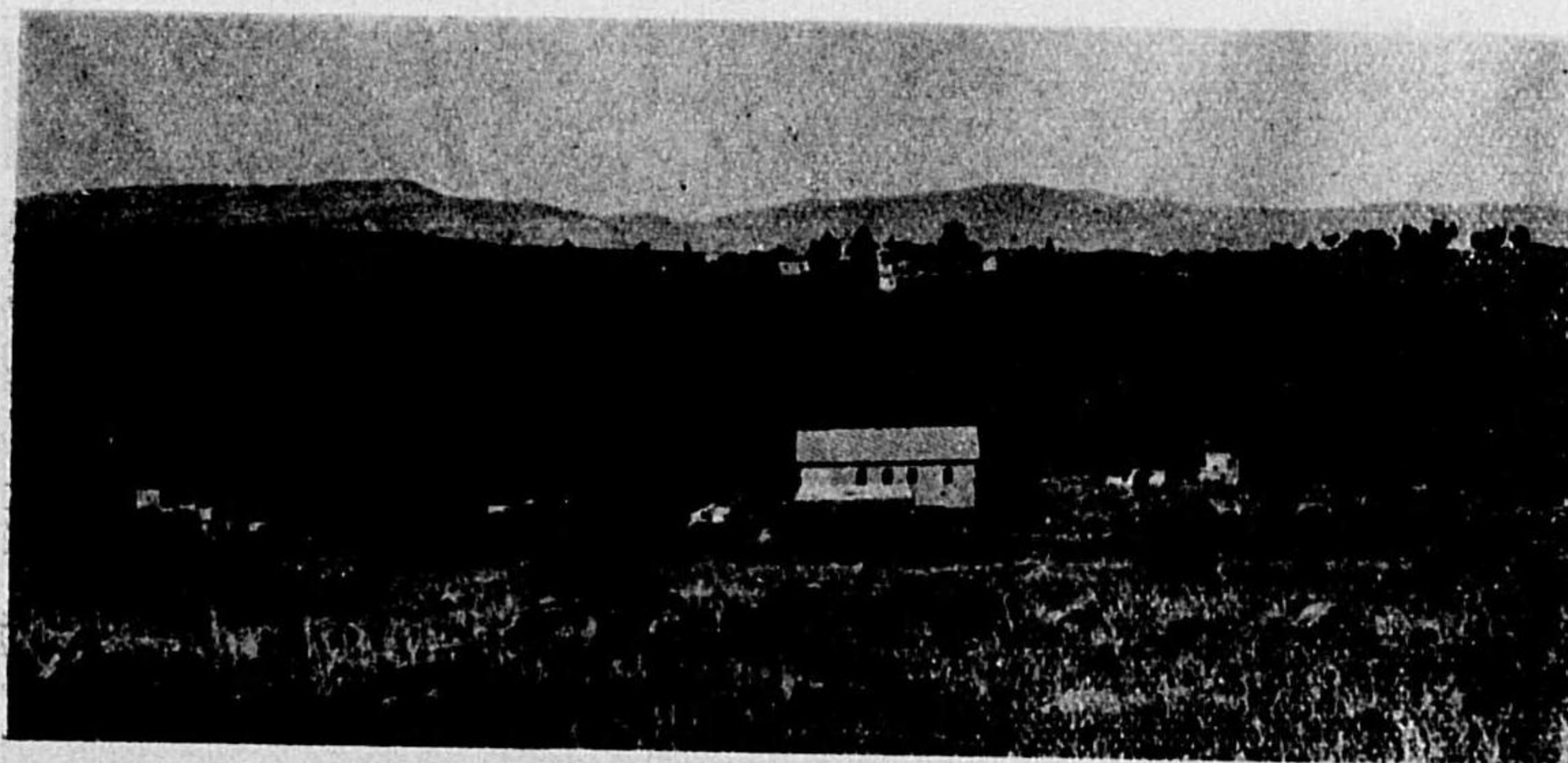
此朝は銀行へ三度足を運んだ。昨日と一昨日休戦記念日で休みであつたさうで、一ぱいの人で随分待たされた。而も英貨一ポンドに就きシリア貨はいくらに當るか、此日の相場を電話でベイルトへ問合せるとの事であつた。8.30に行つたら9.0からいふので9.10に再び行つたところ、右の始末で11.30に出直し漸く目的を達した。此間にソルタン・サリム寺とオマイアド・モスクと再度の見學をした。



歐洲の一部及び西亞旅行記



上、ダマスカス市エス・スナニエ寺聖龕半圓蓋見上 (昭和十年十一月十一日)
下、同 ソルタン・サリム寺の圓蓋 (昭和十年十一月十一日)
上圖は扇子をひろげた様に見えるが、實は凸凹もなく滑かな半圓蓋で甚だ美しい。下圖は主として圓蓋頂上の飾 (Finial) を見せたもの。回教建築の頂上飾はいつも大概全體が「りん」の様な形をして、最上部には新月形がつけてある。餘り誰も氣をつけない様だが、こうすると少し面白い寫眞になる。



シリアとパレスティンとの國境風景三種（昭和十年十一月十三日）

上圖はシリア國境の建物を東方から見たところで、ここでは單に旅券を検閲しただけ。此建物の向って左に出て右の方へ通りぬけ、更に左に曲り、メロム湖からガリリー湖に流入する濁った小川を渡り（JACOB といふ橋が架けてある。其橋上から上流に向ってとった寫眞が中圖）、さうして遂にパレスティンの税關で寫眞を出された上、荷物の検査があった（下圖）。

午後はファチマ（マホメットのひとり娘）の墓といふのを見に行つたが、これは割合につまらなかつた。併し其邊の光塔の上から、回教墓地を見たら、それは實に壯觀であつた。（口繪25）。これだけで觀光を打切る事にしたところ、案内人はそろそろ心附の請求を始めた。うるさいのでいやになつたから、いい加減にやつて解雇した。

十一月十三日 火曜・好晴

オマイアド・ホテルの食堂の給仕人は黒ん坊である。多分亞弗利加から輸入した煮黒であらう。此朝私が出發する事を知つてゐて、朝食の時如何にも心附が欲しいといふ様な態度が實に露骨極り、うんざりしたので遂に一文もやらなかつた。歐羅巴ではポーランドの下級船員だの、亞弗利加の煮黒だの、どうも人の顔さへ見れば金をほしがるのでいやになる。後の話したが獨船ローテンフェルスの給仕人は感心で、船が孟買へついて上陸する時、やつと探して心附をやつた位であつた。

7.0に車が來たとの知らせに、約束が精確に實行されたのを喜んで下りて行つたら、ベイルートから來た例の運轉手がゐた。乗つて出かけてから、何故初めからほんとの事を言はなかつたのかと尋ねたら、クックからの返事待つてゐたといつた。これは一應無理のない答だが、後にパレスティン國に入る時、彼は内懐から旅券を出したのでみると、初めからエルサレム迄行く事になつてゐたの

は明らかであると思ふ。

このままダマスを去るのは大分惜しいのである。ダマスからは毎週火曜と金曜とにバグダッドへ豪華な車が出て、夫夫翌日目的地へ着き、今度はバグダッドから月と木とにでて其翌日にダマスへ着するので、當時はこうであつたから、少し都合さへすれば、少なくともバグダッドだけは樂に見學ができたのであつた。併しよくよく縁がなかつたのか、あきらめざるを得なかつた。斯くして機會をビルマや泰と同じく、永久に失つて了つたのである。

天氣はよし暖かし、運轉手の腕は確かだから安心して乗つてゐた。8.50* シリアの國境へ着いたが、ここでは旅券を見ただけ。 Jordandan 川の上流を渡り、9.15 パレスタインの税關があつた。寫眞(身自)を持ってゐるかといつたので、かねて用意してゐた半身の手札判を出したら、先方へとつて了ひ、旅券へ Photo produced とかいて返してよこした。寫眞をとられたのはここだけであつた。荷物の檢閲も滞無く済み、ヤツファとエルサレムとの分れ道に來たのが11.50。午後1.02 になつて右手にエルサレムの町が見え、1.18 に同市のホテル・ファスト (Hotel Fast) へ着いた。ダマスを出てから6時間18分かつた。

* 昭和16年5月19日の新聞紙は、シリヤとパレスタインの國境は閉鎖されたと報じた。してみると一四四頁に掲げた様な兩國國境の寫眞は當分とれまい。さうだとするとこれでも今となつては珍物に屬するであらう。

二階の75號といふ風呂附の室をとつた。疲勞を休めるためとフィルムの灰棒を洗ひ落す爲、風呂附の室が絶対に必要である。晝食をすましてから、明日名勝舊跡觀光につき、案内人と車とを用意する様帳場へ頼んで、地圖を買つて獨りで外出をした。つまり町の様子を一通り見ると、博物館の所在を確めておかうと思つたからである。そこで先づダマスカス・ゲートから城壁内に入った。此門は地圖で直に判つたからである。さうして少し歩いて右へ曲り、一回轉して元の門へ出るつもりの所、城内は狭い通りが迷路の如く通じて居て、直に迷ひ子になつて了つた。こんな狭い町になつてくると、どこの地圖にも出てゐない。仕方なしに警滅法に歩いてみたけれども、どうしても埒があかず、百計盡きたが未だ時は早いから、何とかなりさうである。困つてゐる様子をたちのよくない男にでも感付かれると事が面倒だから、歩度を緩めず大脇に歩いたら、幸な事にヤツファ・ゲートへ出た。城外に出ればもう安心だが、扱て私の宿屋はどこか判らない。併しこれも凡その見當をつけて歩き、不圖遠方を見たら、遙か行く手に宿の看板が見えてやと助かつた。帳場に大型で美しい繪葉書を賣つてゐたので、買ひ込んで夜はあちこちへ端書を認めた。夜フィルム三本現像に持つて行つた。

十一月十四日 木 曜・好晴

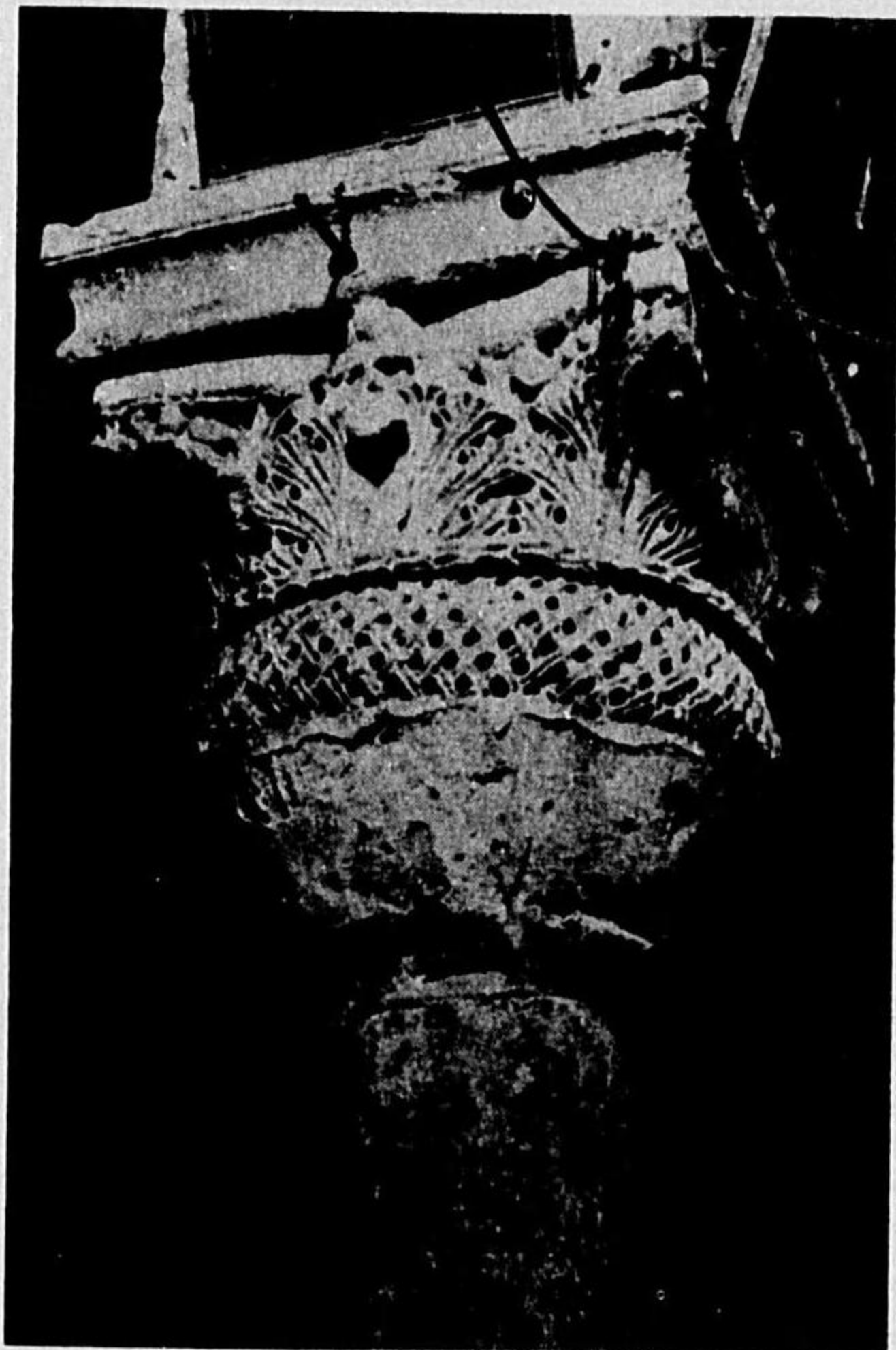
エサルレムは海拔800米だといふ、そのせぬか昨夜^{0.30}頃寒いので眼がさめ、毛布の上に外套をかけたり、チヨッキを着たり、いろいろして暖くなった、気分も少しわるく、困ったが食堂へ出て朝食をした。食慾は大してなし腹工合も面白くないが、どうにかなりさうなので^{7.45}に階段を下りたら案内人がそこに待ってゐた。いふ迄もなく此邊は耶蘇の本場である。だから聖書をよく讀んでゐたら、昨日あたりでも随分面白かつたらうと思ふ。ジョルダン川の上流を渡つたり、ガリリー湖畔を通つたり、ナザレスの町をぬけたり、いろいろしたがどうも門外漢には判然と頭に入らない。今日もやはり其調子である。そこでともかくも先づ第一にチャーチ・オブ・ザ・ホーリー・セバルカア (Church of the Holy Sepulchre) (口繪27左方)へ行って見た。ここには耶蘇^{*}の墓がある。その墓へ參詣したのである。

耶蘇教徒にとつては有難い神聖なる場所であらう。私は異教徒ではあるが、偉大なる救世主の墓に對して敬意を表してからそこいらを見學した。つまり初期耶蘇教建築の一例として觀たのである。此會堂は耶蘇の墓の上にコンスタンチン帝が最初に建立したもので、サラセン人や波斯人が毀損したり、十字軍で再建したり、いろいろな目に遇つてゐるが、先づ第十二世紀頃からのものが残つて

* 昭和16年5月6日發行のある大新聞紙に、私の旅行談を載せてあつたが、そのうちに「……自動車道路はペイルートからキリストの墓があるレバノン山の嶺を巡つて云云」といふ文句があつた。此は記者の聞き違ひで、私はそんな事は言はなかつた。此機會にその由を斷つておく。

東羅馬式柱頭

(昭和十年十一月十四日)



チャーチ・オブ・ザ・ホーリー・セバルカアル於ける柱頭の一。

ゐるらしいとの事である。入口を入ると左手に圓室があり、其中央に近年再興の墓がある。圓室の上部には圓蓋 (Dome) が架けてあるが、建築史の方では、こゝにいふ圓形の會堂を Round Church とらつてゐる。即ち圓堂であるが、英獨等にある圓堂は、これを原としてゐるので可なり有名である。併しながら圓蓋は後方にある東羅馬風のものが遙に古調を帯びてゐる。

此所を辭して普通旅客のする通り、猶太人の慟哭壁を一見した。號泣してゐる人人は眞面目かも知れないが、壁其物に興味はなし、泣いてゐるのは少しばかり馬鹿氣でゐて、正氣の沙汰とも思はれない。だから此所はただ通抜けた位にしておいて、第一の目的たるオマール寺 (Mosque of Omar = The Dome of the Rock = Kubbet es-Sakhra) を見に行った (136—140)。

觀覽時間は午前^{7.30}から四時間に限られてゐる。入場券200ミリムで A Brief Guide to Al-Haram

Al-Sharif と題した菊版より少し大きい冊子をくれる。その裏表紙の左上に切符がついてゐて、郵便切手を切りはなす様に孔があいてゐる。そこからやぶいて切符だけを取り、冊子は返してくれるから、夫を讀みながら歩けばよろしいので、これはうまい方法である。こんなのは日本でもやってみてはどうか、差向き奈良市及び其郊外の寺あたりでは間に合ふだらう。此小冊子の開卷第一(ついで3頁だが)に

「エル・ハラム・エル・シャリフとは尊嚴なる聖域の意味である」
とある。『萬國名所圖繪』には

又オーマルの宮殿は、回教王の堂にして、前に掲げし神殿の、跡にありて金銀や
珠玉を以て修飾す、近年迄は他宗者の、出入するを禁じたり

とあるが、「オーマル之堂」として此圖を掲げ、其上に英文で THE MOSQUE OF OMAR AND THE HARAM AREA とあるから、これを指したに違ひない。さうすると金銀珠玉を以て修飾すとやったのは、單に形容に過ぎない上に、よく知らずに解説したのであらう。第一「オーマルの宮殿は回教王の堂にして」といふのが少判りかねる。

此境内は記した通りやかましいところで、回教徒でない限り午前11時に全部追ひ出されて了ふのであるが、これはさう古くからの規定ではないらしい。といふのは明治三十九年發行の山田寅之助

氏著『埃及聖地旅行談』に

……エルサレムで最も興味の深い處は昔の神殿の跡である。……ユダヤ教の中心となつたこの聖所も今は異教徒の手に歸し、神殿跡には「モスクオブオーマル」と稱する回教の堂宇が建立されてゐる、其境内をハラムと云ふてマホメット教徒に取つてはメッカのアーバに次ぐべき聖處である、……マホメット教徒の外はこの境内に入るを許さない、政府の認可を経ればキリスト教徒でも入る事が出来るとの事である。私が知らずになんぞ境内に進んで往つたところが、門番らしき人に遮ぎられた、何事かを云ふたけれども一切私には了解が出来なかつたが、遮ぎられたからには其意を察する事が出来た、けれども斯る聖所を見ずに歸るのも残念なれば、其門を去つて他の門へ行つた、其處にも番人が居ならんと思ふたが幸に居なかつたので通る事が出来た、……這入つて見たが中々廣々とした處である、……

ハラムの構内の西南隅に更に一つの堂宇がある、その名をアクサと云ふて居る、昔ジヨステニアン帝が處女マリヤの爲に建立したものだ、其後屢次建換へられて、今は矢張マホメット教徒の手に歸して居る。

とある。これで見ると現在の様に一定の料金を拂つて差支のない時間に見學ができる様な設備にはなつてなゐなかつたものと見える。夫にしても此書の著者は最初にどの門から境内に入ったのか。案内者もなしによく一人で辿りつけたものである。或は地圖を見ながらダマスカス門あたりから市内に入つて行つたのかも知れない。

境内の廣袤は大體 145,000^{sq} ありといふ。さうして主要なる建築が二棟と、其他に小さいものが多数あるが、其二棟の一は「ドーム・オブ・ザ・ロック」で、他は「エル・アクサ寺」(Mosque of

* 昔の神殿に就いてはファーガソンの THE TEMPLES OF THE JEWS と詳し。

al-Aqsa)である。前者は中央の高地に建ち、後者は南方に前者に面して建つ。何れも回教徒にとりては神聖此上のないもので、多くの傳説もある様であるが、建築史上ではこれをシリア式回教建築の一例として取扱つてゐるのである。

モスク・オブ・オマー即ちザ・ドーム・オブ・ザ・ロックとは136—140に見る様な建物で、正八角形(直徑一七尺の圓形に内接してゐると云)の上に圓蓋胴付の大圓蓋が上つてゐるから、形は格段だが大してよろしいとは思へない。此建物は大きな岩の上、即ち内陣に大岩を取込んで建ててゐるので、傳説によるとマホメットが此大岩の上から昇天したといふのである。夫で此建物は此岩を神聖視して祀るために建てたので、初めから回教寺でもなければ、オマール(第七世紀前半頃のカリフ)が建てたものでもない。大體はアブデル・メリック (Abd-el-Melik, Abdul-Malek ibn Marwan) の建造にかかり、上の圓蓋は1022年(治安二年平安中期)ハケム (Caliph Hakem) の再建に係るといふ。外部には美しい藥引裝飾瓦が取つてあるが、これは西紀1561年(永祿四年室町末)にスレイマン (Sulaiman the Magnificent) の仕事ださうな。だから外から見たところは随分美しい。内部は中央の大岩のある内陣と中陣と外陣に分れて居り、モザイク等に古い所もあるが、大部分手が入り、割合に新しい感がある。大岩の圍ひに聖龕が三つもあり、又南側の壁にもある。

此建物の東側に近く小さい同じ様な形のものがある。「ダビッドの法廷」(Tribunal of David (Mah

Kamat Daud) とか「鎖の圓蓋」(Dome of the Chain (Qubbat al-Sisileh) (Kubbat es-Sisileh)) とかいふ名がついてゐる(140)。つまり不思議な鎖で裁判がきまつたといふ傳説から、こんな名がついたのである。其鎖といふのはソロモン王の時代には天からここへ下がつてゐた。甲乙相争ひ各自説を固守して譲らない時、鎖を握つたものは正しい證を得、然らざるものは虚言者として罰せられたといふのである。建築の時代は略主堂と同じく、東羅式柱が用ひてあるが、これも亦主堂同様他の建築のを借用したと考へられる。ここにも聖龕が一つあり、全體は割合に美しくできてゐる。

「ダビッドの法廷」の反対側、即「岩の圓蓋」の西に、小規模だが割合に背の高い噴水がある。「カイト・ベイの噴水」(Sabil) といふ。西紀1445年(文安二年室町初期)にカイト・ベイ (Qait Bay, Khaib Bey) の建築にかかる。143—145でみるが如き埃及式回教建築で、開路市に隣れる「カリフの墓地」へ行けば、斯様な圓蓋を持った廟建築の多数がある事は、既に上編に於いて述べた通りである(十月十二日の分参照)。

エルアクサ寺 (141—142) は、回教徒はメッカに亞ぐ神聖な寺として尊敬してゐるといふ。實は西紀536(宣化天紀元年)にジャスチニアン帝の建立による聖母マリアを祭つた會堂であつた。であるから内部に入ると謂はゆる「バシリカ會堂」(Basilican Churches) と同じもので、其建立の年代からいへば伊

* メソポタミアのソルマン Soljman II (1496—9/5 1566). "the magnificent." The greatest of Othmann sultans. (FUNK & WAGNALL'S S. D.)